
B・E

小室 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B・E

【Nコード】

N3699R

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

17歳の沢あかりの、二人暮らしだった母親が亡くなると、母親が愛人をしていた金持ちの一族から迎えが来た。遺言だからしょうがなく、天涯孤独のあかりの身元を引き取るというのだ。ただし、住み込みの女中として。

一人きりの生活に不安を抱いていたあかりは、学校にも行かせてもらえるというので、喜んで住み込みの女中とし

て、

その家に行く。

しかし、通わせてもらった学院には、同じ年のその家の天才御曹司、
樹と、

同じく大金持ちで樹の幼馴染4人が学院に君臨していた。

何をしていても楽しそうではない樹の様子から、

その5人の仲間は「B・E（Beaux Ennui美しい憂鬱）」
と呼ばれており、家柄も一流、学力もトップの彼らは、生徒の誰か
らも一目置かれていた。

そのリーダー的な存在の樹の家にいるというやっかみもあり、
馴染めない金持ち学校で、庶民で愛人の娘だというあかりは、苛め
にあってしまふ。

あかりの学園生活はどうなっていくのか。

エンディングの方向性として、

R15を追加させて頂きました（H23・10・2）

変なやつ

一之瀬樹は、飾りの学生カバンを脇に抱えて、かなり授業に遅れている午前遅い時間にも関わらず、別に慌てる風でもなく、ゆっくりと学院への道を歩いていた。

樹が歩くと、通り過ぎる女達が年齢関係なく、皆振り返る。

そのすらりとした長身に、この辺りでは知らないものがない有名校の高等部の制服のブレザー。

成績も家柄も一流でなければ、入る事の出来ない幼稚舎から大学までの私立一貫校である。

樹の顔の表情は、何事にも関心が沸かないような無表情だったが、その顔立ちは際立っていた。やはり4分の1入っている、フランス人の祖母の血がなせる業なのか。

陽に透けるとブロンドにも見えるようなさらさらの茶色の髪、長めの前髪が、切れ長の茶色がかった目につるさそうにかかっている。

白い肌が高く通った鼻筋、唇は血の色を透かして赤い。まるで美しい一枚の絵から抜け出て来たようだった。

遠目でも女なら誰でもが、見惚れて立ち止まってしまふほどの。

「ねえねえ、あの男の子、一之瀬財閥の御曹司でしょう？」

今日はなんで歩いてるのかしら。いつも外車の送迎なのに「

学院の近くで商売をやっている店の女将たちが、樹いっきを見て噂いっきをしている。

「天才だから、時々風変わりなことをするんじゃない？」

だって、教科書でもなんでも、一回見ると頭に入っちゃうっていうんでしょ？

言葉も6カ国語ぺらぺらで、まだ高校2年なのに親の仕事を手伝ってるって話よ。

凄いわよねー、その上あんなに美形なんだもの」

「神様は公平だなんて言うけど、どこが公平よって感じよね」

「全部の才能も美も権力も、あの子にあげちゃってるんじゃない？」

樹いっきは感情のない視線を、その女達に投げた。

何かを感じたのか、女達は途端黙ってしまふ。

確かにこの世には公平なんて無いんだろうよ。

樹いっきは心の中で呟く。

親にはもう学院に通う必要は無いと言われている。

授業から学ぶことは、今の樹いっきにはもう何も無い。

大学に行ったとしても同じだ。

人に教わる必要がないのだ。

教科書でも参考書でも、辞典でもなんでも、

一回読めば全て一言一句違わず、頭の中に入ってしまう。

語学の音の教材などもそうだった。

一回見たり聞いたりしたことは、決して忘れない。

天才と言えば聞こえはいいが、樹いっきと面と向かった相手には、気持ち悪いと思われる事の方が多い。

人に何を言われるのにも、もう関心は無かった。

学院自体にも何の思い入れもないし、

学院の方も樹いつきに対しては、何の行動の束縛もしていなかった。

ただ樹いつきは、多額の寄付をしてくれる大口の大得意の親を持つ天才。いてくれるだけで、学院に収入と良い評判をもたらす存在。

樹いつきがまだ学院に通っているのは、

四人の幼馴染がいるからだけだと言っても過言ではなかった。

樹いつきは、他の何にも何の思いも抱かなかつたが、

幼馴染たちには、同じような境遇と育ちという怠惰な居心地の良さがあつた。

樹いつきは、感情のない視線を女たちから戻して、

学院に向かうべく、前を向いた。

ふと、少し離れた街路樹の下で、

赤いスカートを履いている、小さい少女が泣いているのが見えた。

辺りに親はいないのか。

樹いつきは辺りに目をやるけれど、

やはり興味も何の感情もわかなくて、また歩き出した。

不意に、横断歩道を走って渡って来た女がいた。

いかにも安物の生地 of 紺のワンピースを着ていて、肩までの黒い髪を、無造作にポニーテールにしていた。

「どうしたの？何で泣いているの？おねえちゃんに言ってみて」
息を弾ませて、そのポニーテールは少女に声をかけている。

「風船がね」

少女は涙で濡れた指で、街路樹の上を指す。

樹も近づいて行きながら、
少女の指した方を見上げた。

緑の葉を茂らせている街路樹の枝に、
黄色い風船が引っかかっているのだった。

「よし！まかせて！」

そのポニーテールは言うつと、
街路樹の太い幹に手と足をかける。

そして、スカートなのも気にせず、
まるで猿のように木に登っていった。

すげー女。

樹が少し呆れて、

でも歩く足を止めずに、その街路樹の下を通り過ぎようとすると、「きゃー」

短い悲鳴が木の上から聞こえて、樹は上を見上げた。

黄色い風船を片手に、もう片方の手でようやく枝にしがみついて、そのポニーテールの女は、空中に足をぶらぶらさせていた。

見たくなくても、その安っぽい青いワンピースの中が見えてしまう。

思ったよりも、すらりとした綺麗な足だった。

可憐な白い小さい下着も見えてしまう。

樹は、慌てて視線を下に逸らす。

その間に女は木から下りてきて、少女に風船を渡した。

「ありがとう！おねいちゃん！」

涙を浮かべたまま少女は笑顔になると、風船をしっかりと持って、どこかへ走っていった。

少女を見送ると、ポニーテールは樹を振り返る。

そして、樹の腕を軽くはたいた。

「ドンマイ！　なんか変なもの見せちゃったけど、きつと、この後いいことあるから。」

嫌な事があった後は、必ず良い事があるもんだしね！」

ポニーテールの女は明るく言うと、にっこりと笑った。樹の心臓が、小さく音を立てる。

それは無邪気で、ほっとさせるような笑顔。

女の顔のつくり自体は平凡で、

丸顔にくりくりと動く丸い目、両端が上に向いている唇くらいしか、なんの特徴もないのだけれど、その笑顔には、今まで誰の笑顔にも見たことがないような、何とも言えない魅力があった。

久々に、自分の感情が少し動いたことに、

樹いつきは自分で驚きながら、

自分の前から去っていく、ポニーテールを見ていた。

「きゃー、なんて綺麗な男の子！」

離れて行きながらも、大きく嬉しそうに言っているのが聞こえてくる。

「何だ、あの女。変なやつ。」

スカートの中、見られて平気な上に、

俺にドンマイって何だよ

樹いつきは小さく笑って呟いた。

そう言えば今みたいに笑ったのは、

いつ振りくらいだろう。

樹いつきは思つて、もう一度、

口の端に笑みを浮かべて、歩き出した。

ブリキの弁当箱

「いくら、叔父様の遺言でも、普段私たちが仕事で海外に在住して、空けている事の方が多い日本の屋敷に、その愛人だった女の娘を、例え女中としてでも、住まわせるのは気がすすみませんわ」

日本人とフランス人のハーフの、
樹いっきにそっくりの美しい妻の志保が言う。

「叔父の愛人と言っても、その娘は叔父とは血が繋がっていない。他の男の子供だ。」

叔父の子供は、その愛人は流産してしまっている。だから、相続面でもなんら支障はないんだ。

例え、一之瀬一族の変わり者で疎まれていた叔父でも、遺言だけは、叶えてやりたい。それが供養だ」

一之瀬克己は、妻に答えた。

「それにまだ17歳だというのに、天涯孤独で身よりもいないなんて、気の毒な話じゃないか」

二人はフォーマルな衣服に身を包み、

大きい高級外車の後部座席に座っている。

場所はニューヨーク。

仕事先のパーティに出かけるところだった。

一之瀬一族の色々な業種に渡る巨大な企業は、

この不景気でもますます順調だった。

「私が心配しているのは」

志保が言う。

「日本に残っている樹が、

叔父様の二の舞になるのではないか、ということなのです」

克己は一瞬あつげにとられて、

そして次の瞬間笑った。

「あの樹に、もしそんな事が起こるとしたら、

それこそ奇跡だな。

天才と言われるほど優秀で、何でも器用にこなし、

身体能力だつて、誰よりも優れている。

その資質が計り知れない樹は、

一之瀬一族からしてみれば、理想の長たる後継者だが、

あの岩のような動じなさ、氷のような無感情さは、

時々、わが息子でも恐れる時がある。

そんな樹が、

庶民の身寄りのない平凡な少女に心を動かされるなんて、

想像も出来ないがね」

ばっさりと言いつつ切られて、志保もそう思い直すのだが。

「それに、樹の婚約者はもう決まっています、

樹の承諾済みだろう」

確かに、恋愛などに全く興味のない樹は、

すでに幼いころから、政略結婚を了承している。

まだ正式に婚約はしていないが、相手も決まっていた。

でも、どこかしら、女の勘なのか、母の洞察なのか、

まだ会ってもいないその少女に、志保は何かを感じるのだった。

ピピピピ。

目覚ましの電子音が鳴る。

あかりはベッドの中から手を伸ばし、目覚ましを止めた。
時計の針は、早朝の4時半。
今日から、新しい生活の始まりだ。

ベッドから飛び降りると、与えられた小さな部屋についているバスルームに行く。

まだ薄暗い洗面所の明かりをつけて、歯を磨き、顔を洗った。

肩までの髪をとかし、ざっとポニーテールに結ぶ。

自分の顔を鏡に映して、左右から眺めてみる。

丸いくるくると良く動く黒い瞳、

低いけど顔のバランス的には丁度いい小さい鼻、

笑っていないなくても両端がくいつと上に上がっている、

血色の良いピンクの唇。

鏡に、あかりはにっこりと微笑んだ。

洗面所から元気良く出て、

パジャマから、支給されている使用人の制服に着替えた。

部屋に置いてある小さな仏壇に、
両手を合わせる。

「あかり、今日も元気です！頑張ります！」
母親の位牌に手を合わせ、
あかりは部屋を飛び出していった。

あまり早朝から、屋敷の主人の部屋の周りで物音を立てるのはまづ
いので、

あかりは調理場の掃除から始めた。
この屋敷のお抱えのコックが出勤する前に、
調理場の掃除をしまおうと思っていた。

ガス台やバーナーを磨き、オーブンを磨き、
洗い場のステンを磨いて、
床を綺麗にモップをかけた。
すべてを二時間ほどかけてやり、
調理場がぴかぴかになった頃、
昨日紹介されていた、長年勤めているという、
初老の女中頭の波乃が、
やはりあかりと同じ紺の使用人の制服を着てやって来た。

「あらまあ、随分早いこと！」
波乃が驚きの声を上げる。

「新入りですから！それに恐れ多くも、学校まで行かせて貰えるん
だから、

他の人の倍は働かないと。よろしく願います。」
あかりが明るく言うと、波乃もつられて笑顔になる。

この大財閥、一之瀬家の親戚の愛人の娘だと聞いて、
どんなすれた子なのかと思っていたら。

波乃は、あかりが掃除してぴかぴかになっている調理場を見回しながら、
ある意味、自分の期待が大きく裏切られてほつとした。
これから一緒に働かなければならないのだから。

あかりは今時の若い子には珍しく、
仕事への意欲も盛んで、とても気が利いた。
玄関ホールの清掃、窓拭き、トイレ掃除、お風呂掃除、
何でも嫌がらずにこなして行く。
そして、仕事が丁寧な割りに手早かった。
女中として、素晴らしい逸材だ。
波乃は感心していた。

「おぼっちゃまの樹様は、
朝食にはミルクだけ入れたコーヒーと、
マフィンにブルーベリーを添えたものを、毎日召し上がっている
の。

リビングに運んでテーブルの上に並べたら、
あなたは部屋から下がっていいから。そして、従業員の食堂で朝
食を食べて、

学院に向かいなさい」

後からやって来た他の女中らと合流し、

一通りの屋敷の清掃が終わると、波乃に言われてあかりは頷く。

「あのー、学院って高校ですよね？」

リビングへと案内をしてくれている波乃に、

この屋敷の主である子息の朝食をワゴンで運びながら、

あかりは波乃に聞いた。

「そうよ、って言っても普通の学校じゃないけれど。」

東城学院っていう、お金持ちで優秀な人達が行く私立の名門校よ」

波乃が言うのにあかりは驚いて、

「私お金持ちでもないし、優秀かっていったら、

どっちかっていうとそうでない方に傾いていますけど、

大丈夫でしょうか」

まん丸に目を見開いて言う。

「ご子息が通っている学校だから、

あまりその辺考えずに、同じ学校を手配したんじゃないかしら」

あかりはぼっかり口を開けたまま、大きく頷いた。

「そうなんですか。ついていけるか、ちよつと心配ですけど」

そして、いつもの笑顔になって、

「でも、勉強させてもらえるんだから、

どんな学校でも、私は自分出来る事を精一杯やります」

明るく言って、ワゴンを元気良く押した。

やがてリビングについて、扉を開けて中へ入る。

広い贅沢な造りの部屋。

明るい朝日が差し込む大きな窓には、

美しいレースのカーテンがかかっている。

高級そうな毛足の長いふかふかの絨毯が敷き詰められている床、

中央のテーブルの上には、大きい花瓶に美しい花がいけてあった。

「ここにお住まいなのは、おぼっちゃまだけなんですか？」

あかりがワゴンから、焼きたてのマフィンのお皿とコーヒーポットを取って、

テーブルの上に並べながら聞く。

「そうよ、ご両親はほとんどお仕事の関係でアメリカにいらっしやるから」

あかりは頷いた。

「きつと、お寂しいでしょうね」

「寂しそうにしてらしたのは、見たことないけれどね」

波乃はなんていうことなく言う。

「そんなはずはないんじゃないでしょうか？」

あかりが言うと、波乃は小さく肩をすくめた。

あかりは不思議に思ったけれど、

でもそれ以上深くは聞かず、黙って子息の朝食を並べた。

食器を全部並べ終えた頃、リビングの扉が開いた。

そして、学院の制服の深い緑のブレザー（いっせき）を着た樹が、リビングの中に入ってくる。

すらりと高い背、茶色のさらさらの髪、髪と同じ色の切れ長の瞳。

無表情な美しい顔。

あかりは波乃が頭を下げたのを見て、自分も慌てて頭を下げながら、あれ？どっかで見たことある人だなと、考えていた。

そして、ああ！と思いつく。

何日前、女の子の風船を木から取ってあげた時に、
気の毒にも見たくもなかったであろう、

あかりのパンツを見せられた、あの美しい男の子だ。

あの素晴らしく美しい男の子が、
これから私がお仕えする、おぼっちゃまだったの！

波乃があかりを見る。

「樹様、旦那様と奥様からお聞きかと思いますが、
この度、新しく住み込みでこちらに仕える沢あかりです。
働きながら、樹様と同じ学院に、

通学させて頂く事になっております」

波乃が言っていると、樹はテーブルの椅子に腰をかけて、
置かれていた経済新聞を手に取りながら、ちらりとあかりの方を見
た。

あかりは笑顔を浮かべて、ぺこりと樹にお辞儀をする。
樹は新聞に目を戻して、

そして、もう一度目を上げて女中姿のあかりを見た。

あの独特な人懐こいような笑顔。
どこかで。

そして、木の上の青いワンピースと、すらりとした足、
白い可憐な下着がフラッシュのように蘇って、
樹は目を見開く。

あの猿女が、大叔父の妾の娘とは。

「精一杯勤めさせて頂きます。よろしくお願ひします」
あかりが言つと、樹は小さく頷いて、

新聞に目を戻した。

愛人の娘は、大叔父とは血がつながっていないと聞いているし、その上、一人きりの肉親の母親を病気で亡くし、天涯孤独だと聞いていた。

さぞかし、どんなに暗くていじけている娘かと思っていたら、そんな様子など、ちっとも思わせないような、予想外のその明るさに、樹は戸惑っていた。

「それでは、お先に失礼いたします」

あかりが波乃に言っているのが聞こえた。

樹は、あかりがリビングから出て行く後姿を、新聞から目を上げて、じつと見ていた。

あかりは、従業員の食堂に向かった。

贅沢なことに、従業員の朝食は、簡単なバイキング方式になっていて、数種類の出来立てのおかずが、並んでいた。

あかりはハムエッグと納豆、ほうれん草と油揚げの味噌汁と、白いご飯をトレイに取って、テーブルについて、両手を合わせて頂く。

食事は数人での交代制なので、

同じテーブルに、何人かの同じ使用人が食事をするためにいるのだけれど、しばらくして、そこにいる皆の視線が自分に集まっている事に気がついて、
あかりは箸を持つ手を止めた。

「あの？」

周りに不思議そうに声をかけると、
あかりをじつと見ていた全員がはっとして、
照れて笑った。

中の一人が口を開く。

「いやー、あんまりにも美味しそうに食べてるから。

思わず見とれちゃったよ」

あかりはそれを聞いて満面の笑みを浮かべると、

「ハムエッグと納豆って、最強の朝ごはんのおかずだと思いませんか？

もう私、朝から最高に幸せで！」

大げさではなく、あかりが心から言つと、
他の使用人たちも、つられて笑った。

「私、ハムエッグ食べなくなっちゃった」

立ち上がっておかずを取りに行く者がいる。

あかりは口の両端に笑みを浮かべて、また美味しそうにご飯を食べ始めた。

食堂からの帰りに調理場に寄ってコックを呼び、
あるお願いをする。

あかりが今朝、調理場を綺麗に掃除してくれていた事を知っていた
コックは、

快くあかりに、少々の食材の利用と、調理器具の使用を許してくれた。

あかりは冷蔵庫を失礼して開けると、中を見回す。

ピーマンとニンジンを手にとると、

それを手早に千切りにして、フライパンでごま油と塩で炒めた。次に、ベーコンの塊を失敬すると、数枚薄く切り取って、またそれをフライパンで炒めて、焼けた後にざつと醤油を回す。辺りに、肉と醤油の焼けた香ばしい匂いが広がった。

あかりは持参した、今時珍しい古いブリキの弁当箱の蓋を開けると、ジャーから白いご飯をつめて、その上に炒めたピーマンとにんじんを敷き詰め、

その緑とオレンジの上に、香ばしく焼けたベーコンを並べて乗せた。様子を見ていたコックは、

「手早いし、美味そうだ。その年季の入ったレトロな弁当箱が、

余計に美味そうに見せてるな」

コックが言うのに、

「これ、私のお母さんのお下がりなの。お母さんも高校生のころ、

このお弁当箱を持って学校に行っていたんですって」

嬉しそうにあかりが答えるのを、コックは目を細めて笑顔で聞いた。

「お昼ご飯まで、どうも有難うございます！」

あかりはぺこりとお辞儀をして、

唇の両端を上げた、その独特な笑顔でお礼を言った。

急いで自分の部屋に戻り、

やはり支給されている学校の制服に、女中の制服から着替える。

さっき会った子息と同じ色、下がスカートというだけで、同じデザインのブレザーの上着。

「何だか、ちょっと身分違いだよなあ」

あかりは鏡を見て眩きながら、

「ま、一生懸命、仕事して体で返していけばいいか」

あつげらかんと、自分なりの解決策を見つけると、

あかりは口の両端を上げて、部屋から出て行き、

学院に向かったのだった。

周りを引き込む笑み

学院の高等部2年A組のクラスへの編入の挨拶をして、その後の授業を普通に受けていると、

教師の目の届かない昼休み、複数の女子生徒に、

あかりは、人目のない校舎の裏側に連れて行かれ囲まれた。

「あなた、妾の娘なんですってね」

髪をカールして、薄くお化粧して、

ネールして、ピアスして、綺麗にしているお嬢様達。

「妾の娘っただけじゃ説明不足だから、ちゃんと補足すると、

私の母親が好きになった人が、たまたまお金持ちの一族の一人で、運悪く、その人は既婚者だったっていうことよ」

あかりは建物の壁に背中を押し付けて、

自分を囲んでいる女子達を見て言った。

「盗人の娘のくせに、開き直るなんていい度胸ね」

一人が言う。

「別に相手の方のご家庭には、何の悪い影響もない間に、

母親はその方と別れたわ。私はその方とは血のつながりもない、

関係のない娘だしね。何を盗んだわけでもないわ」

多数に囲まれても動じないあかりを、苦々しく見ながら、

その内の一人が続ける。

「あなた、B・Eのリーダー、樹^{いっつき}様の家の、女中だって話じゃない。

こうやって対等に私たちと口をきくのも、おかしい話よね」

一人の女子が言うのに、

「B・E?」

あかりが眉をしかめると、

「Beaux Ennuie^{ポウ アンニユイ}っていう、この学院のアイドルよ。

美形で家柄も良くて、成績もトップレベルの、

一之瀬^{いちのせ}樹^{いっせき}様をはじめ、あと四人の樹^{いっせき}様の幼馴染、

西門^{さいもんじ}寺^{ゆきまる}雪丸^{ゆきまる}さま、北条^{ほつじょう}明^{あきひと}人^{ひと}さま、

檜^{ひやま}山^{かおる}薫^{かおる}さま、成瀬^{なるせ}愛^{あい}良^らさまを、

この学院では、そう呼んでいるの」

うつとりと頬を染めて言う女子生徒を、あかりは真っ直ぐ見る。

「そう。それで、一之瀬家の女中の私に何か用かしら?」

ますます冷静なあかりの言葉に、かちんと来たのか、

「あんた、うざいのよ」

言って、隠し持っていたバケツの水をあかりの頭からかけた。

頭から冷たい水を浴びて、

あかりの体は新しい制服ごと、ずぶ濡れになる。

あかりは髪から流れる冷たい水の間から、

まだ真っ直ぐな視線を、自分を囲む女子生徒たちに向けると、

「気が済んだ?」

冷静に言った。

「済まないわね。でも、今日はこれで勘弁してあげるわ」

女子たちのリーダー格、腰までの綺麗にカールした長い髪、

勝気な感じだけど、美しい顔、

唇のわきのほくろが、色つぱく印象的な女子生徒が言った。

「どうして、私にこだわるわけ?」

あかりが冷静に、そのリーダーの女子生徒に聞く。

「あんたみたいな平凡な庶民が、
樹様と同じ屋敷にいるってだけで、
むかつくからよ」

その言葉を聞いて、

あかりの表情が不意に明るくなる。

「ああ、あなたぼっちゃまを好きなのね！」

リーダー格の女子生徒は、一瞬頬を赤らめて、

あかりを突き飛ばした。

くるりとあかりに背を向けて、吐き捨てるように言う。

「樹様に憧れない女子なんて、この学院にはいないわ。」

あなた、本当にむかつくわね。明日から毎日苛めてあげるから、
楽しみにしとくといいわ」

「ちよつと待つてよ。私を突き飛ばした人。」

私の名前は、沢あかり。あなたも名前くらい名乗ったら？

どうやら明日から、毎日顔を合わせそうだし？」

あかりは突き飛ばされて地面に転んだ体を起こして、

去っていくこうとするリーダー格の女子生徒に言う。

一瞬立ち止まって、

にらみ付けるようにあかりを振り返ると、

「藤堂麻里、あなたと同じクラスよ。明日から本当に楽しみね」

意地悪な笑みを浮かべて言うと、

きびすを返して取り巻きと一緒に去って行った。

「しよっぱなから、やってくれるわ」

お金持ちばかりの生徒の中に、

貧乏な庶民育ちの自分が、馴染めるとは到底思っていなかったけれど、

あかりは、心の中で呟く。

「ま、墨汁とかじゃなくて良かった」

すれ違う他の生徒たちの失笑を気にせずに、

あかりはずぶ濡れのまま教室に戻って、ハンドタオルで制服をぬぐうと、

持ってきた弁当を持って、少しでも制服を乾かすために、もう一度校舎の外に出ると、日当たりのいい場所を探した。

少し校庭から外れた場所に、

周りを背の高い木々に囲まれて、

日当たり抜群の芝生が綺麗な、そしてひと気のない、

小さい中庭のような場所を見つけて、あかりはにっこりとする。

明日からここで毎日お弁当を食べることにしようと、あかりは思った。

この学院では、自分には友達は出来そうにもないし、

学校は勉強をしに来るところだと割り切れば、

一人きりでも、別に何の支障もない。

どうせ放課後はまっすぐ屋敷に戻って、午後の仕事が待っているのだし。

他人の気配に、

あかりからは見えない場所でごろりと横になり、
経済専門書を読みながら、うとうととしていた樹いっきが、
目を開けた。

そして目の上に乗せていた専門書をどかして、
その気配がした方を見る。

樹いっきは、

頭から制服ごと、びっしりと濡れそぼっているあかりが、
少し離れたところで、芝生の上に座っているのに気がついた。

「どうやら、明日からは教科書とかの他に、

着替えとかも持参しなきゃならないわね」

あかりが独り言を言う。

「でも、どうせお嬢様の苛めなんてたかが知れてるわよ。

私はもつと修羅場くぐってきてるのよ！

貧乏な庶民育ちの、天涯孤独をなめるな！」

あかりは元気にこぶしを空に上げて大声で言つと、
濡れている上着を脱いで、日当たりのいい芝生に広げた。

苛め？

樹いっきはあかりが濡れている訳を知って、

この学院の女子達ならやりかねないと思った。

ぬるい同族意識で幼稚舎から一緒のやつらには、

あかりみたいな異分子には、拒否反応を起こすんだらう。

ああいう温室育ちも、女ともなれば陰険だ。
強気な雑草もいつまでもつやら。

樹いっきは思いながら、あかりに分からないように起き上がると、
その場を去ろうとする。

自分で持参してきた弁当を、あかりが食べ始めたのを横目に見て、
ふと、樹いっきは足を止めた。

「醤油ベーコン、最強!!!」
今時目にしないような古ぼけた弁当箱から、あかりは一口頬張ると、
天を仰いで、とろけるように幸せそうな笑みを浮かべて言う。
まるで自分がたった今陰険な苛めにあい、
全身びしょ濡れになった事など、無かったかのような、
幸せな笑み。

どうして「いっきは、
こんなに幸せそうに笑えるんだらう。

樹いっきは思う。

あかりの境遇だけを考えてみても、決して幸せだとは思えない。

一人きりの身内の母親を病気で亡くし、
まだ17歳だというのに、天涯孤独の身で、
その上、母親が愛人をしていた人物の、親戚の家の女中として、
住み込みで働かされている。
学校に通わさせて貰ってはいるものの、
こうして初日から苛めに合っているというのに。

樹は、^{いっき}あかりの周りを引き込むような、
その独特な微笑みに見入った。
しばらくして、はっとする。

あかりに見とれた自分に愕然として、あかりから目をそらすと、
樹は^{いっき}早足に、その場を去った。

鼓動の言い訳

昼休み。

あかりは教室のゴミ箱から、捨てられていた自分の教科書を拾って、ばたばたとほこりをはたく。科学の教科書の表と背表紙に、マジックでぐりぐりと落書きがしてある。

ちらりと藤堂麻里を見ると、にんまりとこちらを見ていた。

「お嬢様は詰めが甘いわ。中身には落書きしないんだからあかりは肩をすくめて、その教科書をばらばらとめくって呟いた。

この学院に編入して、4日目。

昨日は上履きが落書きされて、トイレの便器の中に突っ込まれていた。

「昨日は、下校しようとしたら靴が隠されていて、靴下の足で屋敷に帰ったし、その前はあかりの筆記用具の全ての先っぽに、死んだ蠅が刺さっていたりした。

「でも、初日の水が一番答えたかもね」

あかりは肩をすくめて、持参してきたいつもの弁当箱を持つと、廊下に出た。

「今日は雨が」

廊下の窓から外を眺めて、あかりは呟く。

いつもの、あかりのお昼休みパラダイスの芝生の場所も、雨の日はどうしようもない。

あかりは、今日はどこで弁当を食べようかと、しばらく窓から外の雨を眺めて、立ち尽くしていた。

樹は図書室から出て、ふと目を上げると、

廊下で窓の外を眺めて佇んでいる、あかりの姿が目に入った。

あかりの手には、いつもの弁当の包みらしきものがある。

樹は、足を止めた。

今日のあかりの横顔には、あの笑みは無い。

足元を見ると、あかりのまだ新しいはずの上履きは、マジックで落書きがされていて、もうすでに薄汚れていた。それもきつと、他の生徒のあかり苛めのひとつなのだろう。

あかりの見ている窓の外へ、樹も目を向ける。

雨。

そして、あかりが弁当をあのかの芝生の場所で食べていたのを思い出して、

今日は天気の良いで行けないのだろうと思った。

あかりから目を離して、いつものメンバーのたむろしている部屋へ

行こうと、

樹は体の向きを変えて階段を上りかけ、またなんとなく足を止めた。振り返る。

あかりはまだ、窓の外を見ていた。

窓に流れる雨のしずくが、あかりの頬に影を映している。

お母さんが死んだ日も、こんな雨の日だった。

あかりは雨を見つめる。

二ヶ月前、末期の癌。

まだ37歳だった若い母親の病気の進行は早く、病気が分かってから、あっという間に死んでしまった。

あかりと良く似た風貌で、

笑顔がやはり魅力的な母親だった。

お互いにお互いの似ている笑顔を見れば、

一瞬で嫌なことも辛いことも、忘れてしまった。

母娘おやめというよりは、同志のような仲だった。

お互いに寄りかかるのではなく、支えあって生きてきた。

働きづくめの母親を助けて、幼いころからあかりは家事でも何でも

こなしたし、

そのおかげで、今のあかりの優秀な女中の仕事ぶりがあるのだ。

父親を幼いころに亡くした母親との毎日は、

貧乏でそれこそ爪に火をともしような暮らしだったけれど、

一人きりではないということが、それだけでどんなに素晴らしい事だったのか、

今あかりは思い知らされていた。

元気だった頃の母親を愛してくれた、

今はやはりもう亡くなったと聞いている、

奇特なお金持ちの旦那さまのおかげで、

こうして衣食住と仕事を与えられて、学校まで通わさせて貰っている。

とても幸運だと思うし、

あかりはその自分の幸運を、神様に感謝していた。

だけど、時々、

無性に母親が恋しい時もある。

こうした雨の日などは特に。

あかりの瞳から、ぼろりと涙が流れた。

でも、あかりは信じている。

また必ず会える。

あかりがこの命を生き切つて寿命が来たとき、
きつとお母さんは私を迎えに来てくれる。

その時に、どんな風にあかりが自分の人生を生き抜いたのか、
若くして死んでしまった母親の分までも、たくさんの人生経験をし
て、

母親が面白がったり、感心したり、
喜ぶような土産話が出来るように、頑張つて生き抜いてやるんだ。

あかりは手の甲で涙を拭くと、窓の外の雨を見てにっこりと笑った。

あかりの横顔の頬に、雨の影ではない透明なしずくが流れたのを見
て、
樹いっせは思った。

やはり、苛めが辛いのだろうか。

しかし、次の瞬間、

あかりは手の甲で涙をぬぐうと、窓に向かってにっこりと笑った。
あのいつもの魅力的な笑顔。

樹の心臓が、ドキリと音を立てる。

自分の心臓のその鼓動の言い訳を、慌てて樹は、心の中で呟いた。

泣いたり笑ったり、忙しい奴だ。

気がつくと、樹は上りかけた階段を下りていた。そして、自分でもそんな事をしているのが信じられない思いで、あかりに近づいていく。

「おい、女中」

樹はあかりに声をかける。

窓の外から声のする方に振り向いて、あかりはびっくりして声を上げた。

「おぼっちゃま！」

樹が、あかりの呼び声にげんなりする。

「その呼び方はやめる。具合が悪くなる」

「あ、申し訳ありません。樹様」

あかりは慌てて言い直す。

そして、樹を見上げて、

「何かご用事ですか？」

口の両端を上げる、あかりのあの独特な笑みで訊いた。

樹は、いつも何にも動じなかった自分の心に、
今までに感じたことのない、かすかなざわめきが起きているのを、
自分でもいぶかしく思っていた。
一体、何なんだろう。これは。

「別に用は無いが、お前その弁当をどこで食べるか、
迷ってるんじゃないかと思ってな。外は雨だし」
樹が、ぶっきらぼうに窓の外を見て言う。

「はあ」
あかりは樹が、何故自分が外で弁当を食べているのを、
知っているのだろうかと思議に思いながら頷く。

「来いよ。お前の上履きに、
落書きするような連中がいる教室で食べるよりは、
ましな場所がある」

樹はあかりに言うのと、さっさと背中を向けて歩き始めた。
あかりを振り返りもしないで、階段を上がりはじめ。

樹とすれ違う他の生徒は、
皆、樹を振り返っていた。
確かに、樹はすらりと背も高く美しいせいで、
かなり目立っている。

あかりは自分の落書きだらけの上履きを見下ろすと、
もう姿が見えなくなりつつある樹の後を追って、
急いで階段を上り始めた。

後を追っていくと、三階の校舎の端の部屋の扉を開けて、
樹は中に入っていった。

あかりが追いかけてその部屋の扉の前に立つと、
金のプレートがかかっている。

「Beaux Ennuis」

ただそれだけ刻まれているプレートだった。

「おぼつちやまとおぼつちやまの幼馴染のお友達を、

B・Eって、学院の皆が呼んでるって、

確か前に藤堂麻里の取り巻きが言ってたっけ」

何だか入りづらくて、扉の前に佇んでいると、

中から扉が開いて、樹があかりを見た。

「廊下で弁当を食べるのか？」

表情のない美しい顔で言われて、

「お、お邪魔します」

あかりは、背の高い樹の背中に隠れるようにして、

後から、部屋の中に入って行った。

明るくて広い部屋。

大きな窓にはレースのカーテン。

床には高級そうな絨毯が敷き詰められ、

パステルカラーの上品なソファセットが二組、オットマンつきで置

かれています。

美しいクリスタルの大きなテーブルの上には、綺麗な花が生けられていた。

壁にはオーディオの機械がとりつけられ、そこから優雅なクラシックの音楽が流れている。

まるで学校の一室ではなく、誰かお金持ちの家のリビングのようだ。

部屋の中には、樹の他に、

同じ学院の制服を着ている男女四人がいた。

それぞれ、くつろいだ感じで部屋のソファに座っている。

クリスタルのテーブルには、昼食のケータリングと思われるクラブサンドのお皿と、

フルーツの盛り合わせ、コーヒーの入ったカップなどが置かれていた。

ソファセットに腰掛ける四人の男女の誰もが、

樹を見ると、手を上げ、声をかけて挨拶をした。

「よう、樹」

しかし、樹の後ろから入ってきたあかりの姿を見て、

四人とも、ぎよっとして固まった。

「樹が、女を連れて来た！」

短い黒い髪をつんつんと立てて、

まるでハリネズミのようなヘアスタイルをしていて、

耳には輪のピアス、青いカラーコンタクトをしている今時の美形な

男子が、

叫ぶように言う。

あかりが樹いっせきの後ろから出て全身を現すと、
四人が揃そろって、悲鳴ひなじみたうめき声を上げた。

「樹いっせきが女連れで現れるってのは、

天変地異てんぺんぢいが起こる前触さきずかれ？」

腰までのストレートの真まつ直ちぐな黒い髪、

白い肌くに黒い瞳こころと可憐こゝろな赤い唇。

大和撫子やまとなでこを生きた人間で再現さいげんしたかのような、

古風こふうな美少女みせうじよが呆然ぼうぜんと言う。

「樹いっせき、あなた、

インフルエンザにかかつて、タミフルでも飲んだ？

だからわけ分からない行動こうどうを起こしているとか？」

耳みみを出した短いボーイッシュなヘアスタイル、

二重にじゅうのきりつとした目が強い印象いんげんを与える、

これまた違うタイプの美少女みせうじよが、

樹いっせきに近寄ちかって、その額ぬかに手を当てて言った。

もう一人の男子おとこはあかりの側に駆け寄よってきて、

「初めまして！君きみ、樹いっせきの彼女かのじよなんでしょう？じゃなきゃ、

樹いっせきが、誰たれか女の子おんなこをこの部屋へやに連れて来るわけないんだから。

まあ、それにしてはなんか、地味ぢみな子こだとは思おもうけど」

肩かたまでのボブぼのような髪型かみかた、くりくりと丸い目、

女の子おんなこのような優しい顔かほをしている綺麗な男子おとこが、

あかりの手てを両手りょうてで持って、あかりの顔かほを覗のぞき見た。

「そんなんじゃない」

樹いっせきが一言いちごん、四人よにんに向むかかってぱっさりと言う。

その後、あかりが続けた。

「女中です」

あかりは自分の手を持っている、その優しい顔をしている男子に、にっこりと笑って答える。

そして、他の人達にも目を向けてあかりは言った。

「私、住み込みで働かせてもらっている、

樹様のお屋敷の女中です。沢あかりと申します」

言って、あかりはぺこりとお辞儀をした。

あかりの手を持っていた男子は一瞬固まった後、

「やっぱり。樹の彼女なわけなかったか」

がっかりしたようにあかりの手を離し、ソファの方へ戻っていった。

しばし、部屋の中に沈黙が流れる。

「前に樹が言っていた人ね。

亡くなった樹の大叔父さまの」

ショートヘアの女子が、思い出したように言っ

て、続きの言葉はあえて止めたのに、

樹が頷いた。

「クラスメートに苛められてるらしくて、

弁当食べる場所がないらしいから、連れて来たんだ。

ここで食べさせてやってもいいか？」

樹が言くと、四人は顔を見合わせて、

「樹いっけがそう思おもって連れて来たんなら、
誰も何も言ういうことは無いわよ」

シヨートへアーの女子むすめが言った。

「初はめまして、私たち皆みな、樹いっけの幼こ馴染なじなの。

幼稚舎ちよいしやから一緒いっしょなのよ。私わたしの名前なまえは檜山ひやま薰かおる。よろしく」

大手都市銀行おおいしやの頭取かみどりを父親ちちに持つ薰かおるが、あかりに言いって微笑えいごむ。

「よろしく願ねがいします」

あかりは頭かみを下くだげた。

「私わたしは、成瀬なるせ愛良あいり。よろしくね」

腰こしまでのストレートすていとの黒髪くろかみが美しい、

大和撫子おほなむすこな女子むすめもあかりを見みて言う。

愛良あいりの父親ちちは、名なを聞きけば知らない者ものはいない政界せいがいの人物じんぶつだった。

「俺おれの名前なまえは、東城とうじやう明人めいじん。」

よろしくね」

短い黒い髪かみをつんつんと立てて、

耳みみには輪りんのピアスぴあす、青あおいカラーコンタクトこんたくとをしている今時いまときの美形みけいな

男子おとこは、

この学院がくいんの理事長りじ事長ちやうの子息こしきである。

「僕おれの名前なまえは、西門さいもん寺雪丸てらゆきまる。」

よろしくね」

女性おんなのような優雅えいあな男子おとこだったけれど、彼の父親ちちは警視総監けいしそうかんを勤とめていた。

「座まって食べるといい」

樹いっけがあかりに、皆みながいるソファそふあの方かたを見みて言う。

あかりは「はい」と返事をして、遠慮をしながらもソファの方へと近寄って行った。

あかりはソファの端っこに座って、クリスタルのテーブルの上に、持参してきた弁当の包みを広げる。

樹^{いつき}も、ソファのあかりの隣に腰掛けて、脇に置いてあった、小さいノートパソコンの蓋を、組んだ足の膝の上であけた。

あかりが開いた包みの中から、

古ぼけたブリキの弁当箱が出てきたのを見て、樹^{いつき}以外の四人が、顔を見合わせる。

目の前にあるクラブサンドを手に持ちながら、四人とも何気ない風を装って、あかりとその弁当を見ていた。

あかりは弁当の蓋を開けると、箸を手に持って、両手を合わせた。「頂きます」

白いご飯の上にキャベツの千切りと、ハムと半熟の目玉焼きが乗っている。

ケチャップとウスターソースとを合わせたものが、上からかけてあるシンプルな弁当だった。

あかりは、一口弁当を頬張る。

途端、前に樹いつきが見とれた、

あのあかり独特の笑顔を浮かべて、

あかりは大きく頷いた。

「やばい、醤油焦がしベーコンと張るわ、ベーコンエッグ弁当」
目をつぶってもぐもぐと口を動かしながら、
天を仰いで小さく呟く。

まるで他の人間がまわりにいるのを忘れているかのような、
そのあまりにも無邪気で、美味しそうに食べるあかりの様子に、
パソコンの画面を見ている樹いつき以外の四人は、
見入ってしまった。

一体、食べ物なんて物を、

ここまで美味しそうに食べた事が、自分にあっただろうか。

あかりの美味しそうな食べ方は、

四人にとって、そんな根本的な疑問を、

自分に投げてしまうほどのものだった。

手に持つ一流ホテルからのケータリングの、
クラブサンドが、急に味気なく思えてしまう。

ノートパソコンから目を上げて、

自分以外が全てあかりが弁当を食べているのに、

見入っているのに気がつくくと、
樹は、小さく笑った。

「一口、頂戴」

ふと、雪丸があかりににじり寄る。

「私にも！」

愛良が言った。

「ブリキのお弁当箱なんて、

古い小説か映画の中でしか見たことないわ。

なんか他の弁当箱と、味が違っていて話よね。どんな味なのかしら」
薫もあかりに、にじり寄って言う。

「俺、冷たい飯って食ったことないけど、

それほど美味いものなのか？そんな笑顔になれるほど」
明人が、疑い深い声で言いながらも、

やはりあかりに寄って来て、弁当を覗き込んでいる。

あかりは自分に詰め寄る、

四人の樹の幼馴染を見回してのけぞりながら、

「た、食べます？」

一口食べた弁当箱を、四人に差し出した。

まるで獲物に群がるハイエナ集団のように、

四人はあかりから弁当箱を奪うと、四人で交互に食べ始めた。

「変わった味だけど」

愛良が言う。

「なんか、懐かしいような」

薫も言った。

「冷たい飯って、そんなに不味くはないんだな」

明人が言いながら食べるのに、

「ちよつと明人、半熟の黄身全部食べないでよ！」

雪丸が唇を尖らせて言った。

セレブな樹の幼馴染達が、

群がるようにして、

自分の貧相な弁当を食べているのを唾然として見ながら、

あかりは隣に座って、パソコンを膝に乗せている樹に目を移す。

樹は、俯いて笑っていた。

そして、あかりの視線に気がつくと、

「俺も、こいつらのこんな姿見たことがない。

よっぼど、お前の弁当が美味そうに見えたんだろっな」

愉快そうに言った。

「樹、あんたが声を出して笑うなんて！」

ふと、弁当争奪戦をしていた薫が、

樹を見て、大声で驚いたように言う。

その薫の声に、他の三人の幼馴染も樹を見た。

あかりは樹が笑っている様子と、

幼馴染たちの様子を見比べて、首を傾げた。

笑っていることの、何をそんなに騒いでいるのだろう。

「長い付き合いだけど、
こんなに楽しそうに笑ってる樹は、
あんまり見たことがないかも」
明人が言う。

あかりは明人の言葉に驚いて、樹を見た。
そんなに笑わない人だったのか。

「あー、お前ら、超笑える」
樹が言っいっきて、まだ笑いっきい続けているのに、
幼馴染の四人は顔を見合わせた。

そして、四人がじつと、
何か言いたげにあかりを見るのに、
あかりはたじたじとするのだった。

最強の特技

お昼休みの終了も、もうすぐ。

自分の弁当を結局、全て樹の幼馴染達に、
食べつくされてしまったあかりは、

代わりに貰った、ケータリングのクラブサンドをほお張りながら、
樹を見て言った。

「高級な味がします！！」

無邪気に嬉しそうに言いながら、クラブサンドを食べるあかりを見て
樹はまた小さく笑った。

幼馴染達は、そうだったっけかと、
そんなあかりを見て、またクラブサンドを、
食べなおしてみたりしている。

「一つ、聞いていいか」

樹が、ノートパソコンを閉めて、
ふと、あかりに言う。

あかりが樹を見た。

「どうぞ、何でもおっしゃって下さい？」

「じゃあ、遠慮なしに訊かせて貰うが」
樹が、あかりを見て続けた。

「お前の境遇、環境、育ち、全て俺は知っている。

今クラスで苛めにあってるのもだ」

樹は、真っ直ぐあかりを見て言った。

「なのに、どうしてお前は

いつも、そんなに嬉しそうに笑えるんだ？」

真剣に疑問に思っているのが、

ひしひしと伝わって来る樹の言葉に、

あかりは目を伏せて、ふっと笑った。

もう一度目を上げると、樹を見て言う。

「樹さまは、何か特技みたいなものってあります？」

あかりが樹に訊く。

樹はあかりを見たまま、答えずにいると、

代わりにつんつんヘアアの明人が口を開いた。

「樹は、天才なんだ。教科書でも参考書でも、

辞書でもなんでも一回見れば頭に入ってしまう。だから、学院の

先生らも、

樹に教える事は何もないのさ。もちろん、学院での成績も、

樹が常にトップだし」

「二位から五位までは、私たちだけど、

この学院のトップは樹にしか取れないわ」

薫が肩をすくめて言う。

「そうなんですか！それは凄いですね！

って、トップの成績五位まで、

ここにいらっしやる方で占めてるってのも、凄いですけど！」

あかりが感心して言う。

樹以外が肩をすくめた。

「きつと、樹さまのような特殊な方ってのは」
あかりがにつこり笑って、樹を見る。

「世界のたくさんの人たちのために、
何かお役目があるから、そんな凄い力を持たされて、
この世に遣わされてるんです」
清々しく言いきるあかりを、樹は驚いて見た。

妬まれたり、羨まれたり、
気持ち悪がられたりした、この他人と違う能力を、
樹は、そんな風に考えたことも、
言われた事も、一回も無かった。

「でも、私にもあるんですよ。樹さまに負けない特技」
あかりはますます笑顔になって、樹と周りの皆を見る。

「樹に負けない特技？」
愛良が驚いたように、あかりを見て言った。

「そりゃ、私のは、樹さまの特技みたいに、
世の中の人のために役立つようなものではないですけど」
あかりは口の両端を上げて、肩をすくめる。

「私の特技は、どんなに辛いことや悲しいことがあったとしても、
何かひとつ、嬉しいことがあれば、
全部帳消しに出来ちゃうってことなんです。
そりゃ、人間は生身の体だから、
生きていれば日々色々あるけど、

でも一日の最後にその日を思い返してみても、何か一つでも嬉しいことが思い出せれば、それでその一日は嬉しい日になるんです。自分で作ったお弁当が美味しかったとか、お天気が最高に良い中お散歩出来たとか、誰かに親切にしたら有難うって言われたとか、些細なことでも何か一つ、いい事が見つけられれば、その日は本当にいい日だったって、私には心から思えるんです」

あかりが明るく言うのを、樹いっせを始め五人が黙って聞いている。そんな五人を見回して、あかりはあの独特な微笑を浮かべた。

「お母さんにはよく、人間として生きていく強さという意味では、この世のどんな優れた才能や特技を持つ誰よりも、あんたが最強だ」

って言われました。私もそうかもしれないと思います」

あかりは言うつと、時計を見てはつとして立ち上がった。

「いけない！午後の授業に遅れちゃう。それじゃあ、失礼します。

サンドイッチ、ご馳走様でした！」

あかりは明るく言うつとぺこりと頭を下げ、空になった弁当の包みを持って、

B・Eの部屋から走り出て行った。

あかりの出て行った後の部屋で、しばらく5人は黙っている。

成績もトップクラス、家柄もトップクラスのこの5人は、

授業の出席もテストの点数に影響がなければ、

樹いっせを始め、ほとんどが自己責任において自由出席扱いになっている。だから、あかりのように慌てて午後の授業に出る必要な無かったせ

いもあつたが、

皆して、動かないで黙っているのは、そのせいばかりでもなかった。

「ある意味、樹いつきよりも最強な特技を持つてるってか」

明人が呟いて、大きく笑った。

「大したもんだ、あいつ」

「何か、感動しちゃった」

愛良が言う。

「あの子、樹いつきの大叔父さまの愛人の子でしょう？

確か、お母さんって方は亡くなってるから、樹いつきの家に住み込みで、働いきに來てるのよね？」

愛良に樹いつきが頷く。

「大変な目に合ってるのに、あんな風に言えるなんて
愛良はため息をついた。

「ねえ、あの子もB・Eに誘いましょよ」

ショートヘアの薫が、快活な感じで言う。

「つても、もう樹いつきはEnnuiじゃなさそうだけど」

薫はにんまりと笑って樹いつきを見た。

「どういう意味だ？」

樹いつきが無表情に言うのに、薫はとぼける。

「僕もあの子好きだな。一緒に遊んだら楽しそう」

雪丸も両手を胸の前で合わせて言う。

樹いつきが雪丸を、じつと見た。

「す、好きだって言ったって、そういう意味じゃないよ？」

雪丸がびっくりして、樹いつきに言うと、

樹いつきは無表情に、雪丸から目を離れた。

雪丸と薫、愛良と明人が四人で目配せをする。
四人は顔を見合わせて小さく笑った。

厨房にて

夜の一通りの女中の仕事が終わって、従業員達の夕食も終わったあと、あかりは一人で調理場に残っている。

夜の8時過ぎ。

あかりの朝はかなり早いので、寝るのも早いだけけれど、いつも夜9時過ぎまでは、厨房で次の朝の朝食の仕込などの仕事を、率先してコックから貰って、一人で働いていた。学校に行かせて貰って、お給料まで貰うのでは、少しでも多く他の人より働かなければとの、あかりの誠意だった。

まだあかりがこの屋敷に来てから一週間も経っていないけれど、一之瀬家の使用人の間には、あかりの来た当初のワイドショー的な事情よりも、本人の真面目さ、明るさ、仕事もよく出来て、その上、誠実だという評判の方が大きくなっていった。あかりを嫌うものは、一之瀬家の使用人には一人もいない。

あかりは、厨房の調理台の脇で椅子に腰をかけて、調理台に置いた英語の単語帖を眺めて暗記しながら、ジャガイモの皮をナイフでむいていた。

ふと、厨房の入り口に人の気配がして、
あかりは目を上げた。

厨房の入り口に、ジーンズに白いシャツ姿の樹が立っていて、
あかりを見ていた。

「ぼっちゃま・じゃなくて、樹さま」
あかりはにっこり笑う。

「どうなさったんですか？何か御用でしょうか」

タオルで濡れた手を拭きながら、あかりが立ち上がるうたとすると、
樹が厨房の中に入ってきた。

学校の制服しか見慣れていないせいか、
私服の樹は大人っぽく見える。

「まだ仕事をしているのか？もう時間外だろう」

あかりの近くにやってくる、
調理台に乗っている英単語帳と、むいているジャガイモの両方を見

て、
樹が言う。

「樹さま、これは私が自分で勝手にやっただけですから。
決してコックさんに頼まれたとかじゃないですからね。

だって、住ませてもらって食べさせてもらって、
その上、学校まで行かせてもらっている女中なんて、

私他に、きつとこの世にはいないと思います。

だから、せめてもの恩返し残業というか「
あかりは、あの笑顔で樹を見る。

樹は自分の胸の鼓動に一瞬目を伏せて、
そして小さく息を吐くと、またあかりに目を戻した。

調理台に寄りかかり、樹はあかりを見る。

「今日、学院でお前が言っていた、いつも、一日の終わりに嬉しいことを思い浮かべるってやつ。今日はどんな嬉しい事があった？」

あかりは意外な樹の言葉に驚きながらも、

「そうですね」

でもっこりとあごに手を当てて考えた。

「今日はたくさんありますよ。だから、とても良い日でした」
あかりは樹を見て続ける。

「まず一つは、樹さまの幼馴染の方々に会えたこと！

私あの学院に通うようになってから、

あんな風にちゃんと私とお話して下さった人って、

あそこの生徒さんではいなかったもんですから、

それが例え、樹さまのおかげだけでも、

とっても嬉しかったです」

そのあかりの言葉に、

慣れない学院に通うあかりを、

最初からもつと自分がフォローしてやっていればと後悔した。

そして、そんな風に誰かのために後悔の念を抱く自分に苦笑する。

今までには、決して無かった事だ。

「二つ目は、私の作ったお弁当を、樹さまの幼馴染の方々が、

美味しそうに食べて下さったこと。例え、忙しい朝の5分で作っ

たといえ、

やっぱり自分で食べるものだから、

少しでも美味しく作ろうと自分なりに、一生懸命工夫しているんですね。

だからそんなお弁当を、他の人が食べても喜んでくれるってのは、本当に嬉しいものなんです」

あかりは言った。

樹は、目に小さく笑みを浮かべてあかりを見ている。

「そして、最後にもう一つ。

こうして、今、樹さまが厨房にまで来て、

私を気にかけて下さっていること」

あかりは言つと、樹の目を真つ直ぐに見上げた。

「嬉しいです。有難うございます」

言つて、あかりは樹に頭を下げた。

そして、あかりは俯いたまま続ける。

「私の死んだ母親は、

樹さまの大叔父さまの愛人だったというのは、

事実です。そのお優しい大叔父様のご遺言だからと、

仕方なく私を受け入れて下さったのも、重々承知です。

本当なら、憎まれて蔑まされてもしょうがないのに、

樹さまは、こうして私を気にかけてくださいます。

今日のお昼だって、私の弁当を食べる場所なんてものを、

気にして下さった上に、幼馴染の皆さんにも会わせて頂いて」

樹を見上げるあかりの目に、薄っすら涙が浮かんでいる。

「本当に嬉しかったです」

でも、顔は満面のあの笑顔だった。

涙が浮いているあかりの笑顔は、またなんとも言えない魅力があった。

樹は、自分の胸に近づいて自分を見上げているあかりを、抱きしめたくなる衝動を覚えて、自分に驚いた。

「私は樹さまに、

この身に余るご恩をこれからどうお返ししていこうかと、本当に途方にくれています。

ですから、どうか私に出来る事があつたら、
どんな事でもおつしやってください。お願いいたします」
あかりは言つて、樹にもう一度、
頭を深く下げた。

「なら」

樹が、ふと口を開く。

「お前が欲しいって言つたら？」

あかりは、ぽかんと樹を見上げる。

さらさらとした綺麗な茶色の前髪がかかる同じ色の瞳、
白い肌に赤い唇。

美しいけれど、表情のない樹の顔が、
あかりをじつと見下ろしている。

あかりは笑顔に戻つて、

「樹さま。」

私は一之瀬家の女中で、とつくに樹さまの物ですよ？」

あかりは明るく、樹に言つた。

そんなあかりを見て、樹は目を伏せた。

そして、口の端にその笑みを浮かべたまま言つた。

「そつだつたな」

「お休み」

あかりに声をかけ、

樹は厨房から出て行つた。

「お休みなさいませ」
あかりも元気に、樹いつきの背中に声をかける。

あかりに出会い、
そして、あかりが屋敷に来てから、
それまではまるで静かな水面のように動じなかったこの心が、
ざわめいてしょうがない。

樹いつきは部屋に戻りながら、
でも、不思議とそんな思いが、
嫌ではない事に気がついていた。

あかりは調理場から出て行く樹いつきの背中を見送りながら、
何か今の会話の中に、違和感があった気がして、
首を傾げる。
しばし首を横にしたまま考えても、
あかりにはそれが何なのか分からなかった。

打たれ強いポジティブさは、時に鈍さへと繋がる。
あかりのように、日々を前向きにだけ生きていると、
それが顕著けんちやくになるのだった。

「樹いしさまつて、無愛想に見えて、
実は優しい方なんだわ。女中の私をあんなに気にかけて下さって。
理想のご主人様だわ」
あかりはにっこり笑って、またじゃがいもの皮むきに戻ったのだっ
た。

興味深い変化

朝の仕事を終え、自分の部屋で学院の制服に着替えると、あかりはカバンと弁当の入った手提げを持って、屋敷の従業員用の通用口から外へ出た。

学院までは徒歩と電車で片道40分はかかる。他のお金持ちの生徒はほとんどが、高級自家用車の送り迎えだった。

「地下鉄の定期券まで頂いてるんだものなー。」

「ただけ恵まれてる女中だったの。」

あかりは黒髪のポニーテールを揺らしながら、早足で一之瀬の屋敷の門を出る。

「あかり」

ふと自分の名前を呼ぶ声が出て、あかりは屋敷の門を振り返った。

制服姿の樹が、カバンを持ち、門に寄りかかって立っている。

「あれ、樹さま。お車じゃなかったんですか？」

「最近歩いて学院に行ってる。車は飽きた。」

樹はあかりの側に来ると、あかりが歩き出すのを待った。

「もしかして、ご一緒して下さるとか？」

あかりが驚いて樹を見上げると、樹はあかりを見ずに、小さく頷いた。

「一人で歩くのも、お前と一緒に歩くのも同じだしな」

あかりは目をぱちくりとして、そして笑顔になった。

「樹さまみたいな素敵なお方と、」

一緒に並んで歩けるなんて」
無邪気に喜んで、あかりは樹を見上げる。
樹はあかりの嬉しそうな笑顔を見ると、
つられて小さく笑った。

あかりは樹と並んで歩きながら、
通り過ぎる女性の目という目が、
全て樹に向いているのに、改めて驚いた。
「私は単なる樹さまのお家の女中なのに、
通り過ぎる女の人々が皆、私を羨ましそうに見るのが、
何か申し訳ない感じですよ。」

この背中に、『女中』っていうびらでも貼っておきたいくらい」
あかりが大げさにジェスチャーをしようのを、
樹は黙って見ていた。
でも、その目はいつもの無表情よりもずっと緩んでいる。

地下鉄に乗ると、朝の通学の時間帯の電車の中は、
他の学校の生徒達も乗り合わせていて、ぎゅうぎゅうの満員だった。
樹が壁に手をつけて、
自分の胸の中のスペースにあかりを立たせる。

さらさらの茶色の髪、長めの前髪を煩そうに手で弾くと、
憂いを含んだ茶色い瞳が覗く、美しい顔。
すらりとした長身に、この辺では知らない人のいないエリート校、
東城学院の制服のブレザーがよく似合い、
まるでモデルのようだ。

あかりの顔の位置は身長之差で、樹の胸の丁度真ん中だった。

上を向くと、すぐ近くに樹いつきの美しい顔がある。
息遣いがはつきり分かるほどの近さに、
さすがのあかりも、どきりとした。

樹いつきが壁に手を当てて、

この朝のラッシュから自分を守ってくれているのに恐縮しながら、
あかりはふとあたりを見回して、ぎょっとした。

女子の視線が怖い。

「あんたより私の方が絶対可愛いのに！」

「なんで、あんたみたいな貧相が、

その美形の男子の胸の中にいるのよ！」

と、視線達が絶叫している。

誤解も甚はなはだしいので、あかりも周りの視線に対して、

「単なる女中です」的な視線を投げてみる。

がんつけたと思われて、逆に猛烈に睨み返された。

あかりはさすがのごと視線の合戦に負けると、

樹いつきの胸の中で俯いた。

「あかり、どうした？」

そんなあかりの様子に気がついたのか、

樹いつきが、あかりを覗き込むように声をかけてくる。

「な、何でもありません」

慌てて言いながら、まるで恋人同士のようにも見えるその樹いつきの仕草に、

あかりは電車を降りるまで顔を上げて辺りを見るのは、絶対にやめようと思っていた。

地下鉄を降りる時、さりげなく樹はあかりの肩に手を回して、人ごみに紛れないよう誘導してくれる。

樹さまは、本当に優しい人。

無愛想で無表情に見えるのは、外見だけなのだ。
自分の主人の素晴らしさに、あかりは感心していた。

樹は、自分の中に興味深い変化を見つけていた。

あかりに触れると、触れたところから、
かすかな電流のようなものが、自分に流れ込んで来るのだ。
それは胸に届いて、小さな疼きをもたらした。

一体、この不思議な現象は何なんだろう。
他の人間に触った時には起きた事もない。
こんな事は、物の本にもなかった。

さりげなくあかりの肩に腕を回して触れると、
指先から、その切なさは流れてこんでくる。

そのちりちりとした痛みにも似た感覚が胸に宿るのに、
樹はそれが何なのか見極めたくて、
またあかりに触れたくなるのだった。

学院に着く。

下駄箱の場所が違うので、
樹いつきと別れ、自分の下駄箱を開けて、
あかりは絶句した。

「パワーアップしてるよ、私の上履きのいじられ具合」

落書きされ、便器に落とされ、
それでも何とか履けるくらいだった上履きが、
今日は、ナイフみたいなもので、
ずたずたに引き裂かれていた。

あかりはかつて上履きだったそのゴミを掴むと、
近くにあったゴミ箱に入れる。
そして、何事もなかったように、
靴下で校舎に上がって行った。

「あかり？」

あかりを待っていたらしい樹いつきが、
靴下くつさのあかりを、不思議そうに見る。

あかりはにっこり笑って、

「大丈夫です」

明るく言くと、樹いつきは目を細めた。

「今度は何をやられた？」

樹いつきに、あかりは軽く言う。

「大したことじゃありません。」

ただ、上履じゆんきが履はけなくなっただけです」

そんなあかりに、樹いつきは、

「ちよつと待つてろ」

あかりに言うつと、走はって近くの階段かいたんを上あがって行いった。

啞然おぼろとして、あかりは樹いつきの去いっていくのを見みている。

B・Eの部屋へやには、

朝あ早い時間じかんながら、愛良あいりやうがいた。

バイオリンの音ねが聞きこえていたので、樹いつきに分わかったのだ。

愛良あいりやうは早朝はやあさの時間じかん、このB・Eの部屋へやで、

バイオリンの練習れんしゆをするのが好きすきだった。

「愛良」

樹いつきが扉かを開ひけて、声こゑをかけると、

愛良あいりやうはバイオリンを弾ひく手を止とめた。

腰こしまでの黒くろい美しい髪かみが揺ゆれる。

「珍しいわね、樹いつき。あなたがこの早い時間じかんに、

学院がくえんに現あれるなんて！」

愛良あいりやうが心底こころ驚おどいて、言いった。

「お前おまえ、余分あまな上履じゆんきあるよな」

樹いつきが言うつのに、愛良あいりやうは頷うなずく。

「去年こぞのだったら、作品さくひんとして残のこしてあるけど？」

「俺おれに貸かしてくれないか？」

樹いつきの言葉ことばに、愛良あいりやうは首くびを傾かげる。

「そんなもの、何に使うの」

「あかりの上履きがいたずらされて、

履けないらしい」

樹が愛良を見て言った。

愛良は、バイオリンをテーブルの上に置いた。

「樹に、願い事をされたのは初めてだわ」

そして、愛良は部屋の隅に置いてある棚の扉を開けると、

ハートのモチーフと、愛良の名前が、

スワロフスキーで描かれ飾ってある、キラキラの上履きを取り出す。

「気に入ってたけど、あかりちゃんに上げるならいいわよ」

愛良は言って、自分でスワロフスキーで飾った上履きを、

樹に渡した。

「悪いな」

樹が言うのに、愛良は快く頷く。

昇降口であかりが所在無さげに佇んでいると、

樹が戻ってきて、愛良に貰った上履きを差し出す。

「とりあえず、今日はこれ履いておけ」

きらきらと綺麗に光っている上履きを受け取り、

「可愛い上履き。愛良さんですね。いいんですか？」

愛良の名前が入っているのを見て、あかりが樹に言う。

樹は頷いた。

「じゃ、今日一日お借りします」

あかりは遠慮せずとその上履きを履いて、教室に向かうと、樹も自分の後をついてくるのに、あかりは首を傾げた。

「樹さまの教室も、こっちの方なんですか？」

「2年になってから、一回も授業には出たことはないんだが」
樹は、あかりの教室2年A組の戸に手をかけて開けると、

「俺とあかりは、一応同じクラスってことになっているんだ」
自分が先に教室の中へ入って行った。

「はい？」

あかりはびっくりして立ち止まって、
そして、慌てて樹の後から教室に入って行った。

怖い微笑み

樹が教室の中に入って来たのに気がつくと、中にいた生徒全員が動きを止めて、樹を見た。そして次の瞬間、ざわざわと騒ぎ出す。

「うそ！B・Eの樹さまよ！」
女子生徒が嬌声を上げる。

「授業お受けになるのかしら」
特に、藤堂麻里をはじめ、取り巻きたちが顔を赤らめ、大騒ぎしている。

樹は近くにいた男子生徒に声をかける。

「俺の席、どこだか分かる？」
聞かれた男子生徒もどきまぎして落ち着かない様子で、ずっと主の現れなかった教室の後ろの方の席を指差した。
樹は礼を言つと、その席に向かった。

あかりの席は教室の前の方だ。
樹が同じクラスだったというのも衝撃だけれど、樹がいるだけで、教室の雰囲気がるで違うものになったのに、あかりは驚いていた。まるで教室の中にいる全員が、蛇に睨まれた蛙のような緊張感に包まれている。

女子だけはその緊張の中でも、樹を振り返ることはやめずに、ちらりと樹を見ては、頬を染めてお互いを突付き合っていた。

藤堂麻里もご多分にもれず、

樹を振り返りじつと見つめている。
多分自分の上履きを切り刻んだ首謀者である麻里を、
あかりはあまり好きになれなかったけれど、
でも、その頬を染めて樹を見つめる様子は、
いじらしくも見えた。

本当に、樹さまを好きなんだな。
あかりは麻里の視線を追って、樹を振り返る。
真っ直ぐに自分を見ている樹と目が合って、
あかりはどきりとした。
なんだか慌てて視線を外し、あかりは前を向く。

途中で麻里とも目が合った。
あかりの足元を見て、愛良の名前の入っている上履きを見ると、
睨んでくる。
あかりは麻里から視線を外して俯いて、黒板に向き合った。

樹がいるせいで、
授業をしている教師まで、緊張しているのが伝わってくる午前の4
時間が終わり、
なんだかあかりはどっと疲れてしまった。

樹の存在というものが、
この学院にとって、どういふものなのかが良く分かるような体感だ
った。

四時間目が終わる時に、樹いっぎが教師に向かって手を上げた。

「この教科書を販売している出版社は、
文章の添削技術が粗悪だと以前指摘して、

使用する教科書を変えるか、この出版社を指導するか、

どちらかにしたほうがいいと申し上げましたが、

まだ改善されていないようですね」

と、樹いっぎが冷ややかに、でも強く言い放ち、

教科書のミスプリントを指摘した時には、

学校側に伝えると言って、教師は逃げるように教室を出て行ってしまふ始末。

あかりは机の上につ伏して、大きくため息をついた。

息がつまるというのは、こういうことだったのかと、

授業が終わって、改めて感じたのだった。

同じ17歳でも、こんなにも存在感というものが違う人というのが、
存在するんだ。

あかりは改めて樹いっぎを、凄い人なのだと感じた。

自分の楽観的な性分と、

樹いっぎの天才的な能力を、

同じような特技だと、この間一緒にしたように言ったことへの罰が、
いつか当たるかもしれないと、あかりは思った。

ふとまた教室の中がざわめく。

あかりは教室の中を見回すと、廊下へ続く教室の扉を見ているのが
分かった。

そこに中を覗いている四人の姿がある。

「愛良さま、薫さま、明人さま、雪丸さま」
あかりが呟くと、

「B・Eの皆様だわ！」
生徒の中から声が上がった。

廊下にいる四人が、樹いつきとあかりに小さく手を振っている。
あかりは椅子に座ったまま、ぺこりと頭を下げた。

ガタン、と椅子を引く大きい音がして、
あかりは音のした方、樹いつきを見た。

樹いつきがカバンを手に持って、
ある机に近づいていく。

あかりはどうしたのだろうか、樹いつきを目で追った。

藤堂麻里の机だった。

麻里が突然の事に、頬を真っ赤に染め、
自分の目の前に立った樹いつきを見上げている。

樹いつきは麻里の机に片手をついて、
麻里の顔に自分の顔を寄せると、

「もう、うちの女中をあんまり苛めないでくれる？」
麻里の目を覗き込むように見て言った。

麻里は絶句した。

「教室の後ろから見てれば分かるから。君でしょっ？」
樹いつきが確信を持って言うのに、

麻里が青ざめて、顔を伏せる。
樹いつきは麻里のあごに指を当てて、

伏せたその顔を自分に向かせた。
そしてもう一度視線を合わせる。

「よろしくお願いするね」

言うと、樹は、にっこりと麻里に笑った。

樹の美しい微笑みに、

様子を見守っていた周りの生徒たちから、ため息がこぼれる。

廊下で樹を見ていた幼馴染たちは、

樹のその笑顔を見て、口々に呟いていた。

「樹が珍しく授業に出ているって聞いたから来てみれば、

こつこついうことなのね」

薫が言った。

「ある意味、あれは怖い。普段笑わない樹のあの微笑みは、
怒鳴られるより怖いぞ」

明人が面白そうに自分の肩を抱いて、

ぶるぶる震える仕草を言う。

「樹に憧れてた口だったら、あの子相当ダメージでかいね」

雪丸も言い、

「あの子があかりちゃん苛めてたなら、自業自得でしょ」

愛良が言った。

「あかりちゃん、今日のお弁当は何ー？」

廊下の四人が声を揃えるように、あかりに廊下から叫ぶ。

樹があかりの席まで来ると、廊下の幼馴染を振り返った。

「ちやつかり今日もお前の弁当食べる気ているな、あいつら。でも、やつらはお前の為の代わりの食い物は、何か用意してると思うから」
樹はあかりを見て言った。

今日もB・Eの部屋で、
お昼休みを過ごさせて貰えるのだろうか。

樹があかりの肩を押して、
幼馴染たちの方へと歩いて行く間に、
あかりは麻里を見た。

今日は取り巻きもいない。席に座って一人で俯いて、
肩を震わせていた。

前に、お母さんは言った。
「意地悪をする人は、自分が幸せじゃないから、
他人に意地悪をするの。
幸せな人は、他の人に意地悪をしたりしないわ」

今の麻里の姿は、
確かに、可哀想で不幸せに見えて、
あかりの胸が痛んだ。

パーティ・パーティ

B・Eの部屋。

また樹いっきは、ソファであかりの隣に座って、膝に乗せたノートパソコンに目をやり、慣れた手つきでキーを打っていた。

「樹いっきさま、お昼まで、いつもお勉強なんですか？」

あかりがパソコンの画面をちらりと見て、樹いっきに言つと、「両親の仕事のちょっとした手伝いだ。」

新しい取引商品の、引き合いの見積書の見比べをまとめている樹いっきは画面を見たまま、答えた。

あかりは言葉の意味が理解できずにいたけれど、「そうですね」でも感心したように頷いた。

あかりの今日の海苔弁当も、すっかり、樹いっきの幼馴染に食べられてしまって、代わりにあかりは、彼らが一流のイタリアンレストランに注文し配達された、ピザをご馳走になっていた。

「僕、ちくわの天ぷらって初めて食べた。美味しいもんだね」雪丸が口をもぐもぐとしながら言う。

「かつお節ってだしを取るだけでなくて、

そのままでも食べられるのね。ご飯と一緒に食べたのは初めてだ
けど、

素朴な味わいな中に、旨味があるわ。」
愛良が言った。

あかりは苦笑しながら、自分のブリキの弁当箱が、
あつという間に、空になっていくのを見ていた。

あかりは隣に座る樹を見る。

本当にこの人は、屋敷にいる時もそうだけれど、
あまり食べない人だなと、思う。

あかりは樹に、にじり寄ると、

片手に自分の食べかけのピザを一切れ持ったまま、
違うピザの乗っている皿をもう片方の手に取り、樹に差出した。

「樹さま、ちゃんと食べて下さい。」

体に毒ですよ？」

樹が、パソコンの画面から目を離して、

あかりを見た。

考えるように、樹は少し首を傾げて、

「なら、こっちがいい」

あかりの食べかけのピザを、あかりの手から取り上げると、

それを片手に持って噛り、またパソコンの画面に目を戻した。

あかりは呆気に取られる。

樹の四人の幼馴染達の視線に気がついて、

あかりは我に返ると、頬を赤く染めた。

そして、自分が樹に渡そうと持っている皿のピザを見て、

「あつ、分かった。分かりました。樹さま、こっちよりも、

私が食べていた方のピザの方が、サラミが多く乗っていたから、

そっちがよろしかったのですよね？」

あかりが思いついたとばかりに、樹いっきに話しかけると、樹はパソコンの画面を見たまま、あかりを無視した。

話しかけたのを無視されて、

あかりは唇を軽く噛んで、樹いっきを見ている。

でも一向に、答えてくれる気配はない。

しょうがないので、あかりは皿の上のピザを手に取ると、齧かじって食べ始めた。

四人の幼馴染は、その様子を見て小さく笑った。

樹いっきの岩のような動じなさ、氷のような冷静さは、

自分を守るための盾なのだ。

そんな事は、幼いころからずっと一緒の幼馴染の自分たちには、重々わかつている。

樹いっきは、その非凡なる才能を持ちながらも、

日本経済を背負うような大財閥の跡取りに生まれ、

その身に重大なる責任を負っている。

心や感情など消しさってしまって生きた方が、

その環境の中では、きっと楽なのだろう。

己の無意識の自己防衛による、生き方の選択だったのだ。

でも、今、

あかりに出会ってしまって、

樹いつきのその完璧だった人生の齒車いしぐるまが狂い始めている。
きつと岩のような動じなさ、氷のような感じなさも、
今までのようにはいかないだろう。
あかりに執着しつじゆうしはじめている樹を、
幼馴染たちは見ていて、そう思うのだった。

「ねえ、今度の連休、うちの別荘べつしやうに遊びに来ない？
シヨートヘアーの薫かほが言う。

「パーティもあるし」

薫かほが両手を肩の上うへに上げて言う。

「パーティ、パーティ」

愛良あいりやが楽しそうに言う。

「またあれだろう？慈善じぜんダンスパーティで、

どれだけ寄付を取れるかって、お前の従姉妹と競うやつだろう？」

明人あきひとが嫌そうに言う。

「あら、あれっつれっつきとした人助けよ？」

お金持ちの老紳士らうしんし、老淑女らうしゆふのダンスのお相手をして楽しませて上げて、

その上、慈善じぜんの寄付も募れるっていう優れものじゃない」

薫かほがあっけらかんと言うのに、明人あきひとがげんなりとしたうめき声を上げた。

「僕は付き合ってもいいよ。別に別にご婦人は嫌いじゃないし」

ボブぼぶのようなヘアスタイルの雪丸ゆきまるが言う。

「雪丸は年上の女性に受けがいいもんね。寄付だけじゃなくて、

お小遣いもたくさん貰ってるらしいじゃない？」

愛良が言って、

「まあ、私も年上の紳士は嫌いじゃないし、

ちやほやされるのは悪い気がしないから、行ってあげるわよ」

長い黒髪に手を当てながら言った。

「明人は？」

薫が明人を見て言う。

「分かったよ、行かなかったらぐちぐちと一生言われるから付き合
うよ」

明人はため息をついて言った。

そして、薫が樹を上目遣いで見る。

「樹、またどうしても駄目？」

「こんだけ完璧なルックスのあなたが来てくれれば、

募金勝負、はなから目処がつくんだけど」

樹は長い茶色の前髪が目にかかるのも構わず、

案の定、パソコンの画面から目を上げなかった。

薫はぶーっと樹の無表情を見て、

まあこの冷血人間が、慈善にしるダンスパーティーなど出るわけもな
いのは、

例年通り重々承知だと思いつつ、

でも、ふと去年と違う事があったじゃないかと気がついて、

薫はほくそえんだ。

「あかりちゃん、今年はおなたも参加してくれると嬉しいな」

薫が満面の笑みで、ピザを食べているあかりに言う。

「楽しいわよ、高原の高級別荘地での休日。

着飾って参加する、夜のダンスパーティーも楽しいわ。

一流の生の楽団の演奏する曲も素晴らしいわよ？」

あかりは薫に声をかけられて、その言葉の内容を想像すると、
憧れるような笑みを浮かべて、

「薫さま、お気持ちはとても嬉しいのですが、私は女中ですし、仕事がありますから。」

大体、ダンスパーティーに出るような服も持っていないし、予想通りのあかりの言葉に、薫は声を大きくして、

「あらー、残念だったわ。ドレスなんていくらでも貸して上げるから、」

あかりちゃんの可愛いドレス姿が見られるかと思つたのに「樹のキーを叩く指のスピードが、急に落ちたのを横目で見て、薫はにやりとする。」

「あかりちゃんにも慈善ダンスパーティーに参加してもらつたら、歓迎会も兼ねて、B・Eの男子達とあかりちゃんにも踊りを楽しんで貰えるのになあ」

ほとんど最後のフレーズは、誰に聞かせるのかしらじらしいくらい、薫は樹に向かつて、言っていた。

そして、駄目押し。「樹とあかりちゃんが、手を取り合つてダンスしているところなんて、見てみたかつたなー」

いい終わると、どうだとはかりに薫は樹を見る。今は完全に、樹のキーを打つ手は止まっていた。

「本当に残念なんですけど」

あかりが残念そうに微笑みながら言うのを、樹が遮った。

「分かった。今年は俺も参加してやってもいい」

薫以外の幼馴染の三人が、ぎよつとして樹を振り返る。

「あかり、お前は俺の世話係で、薫の別荘に一緒について来い」パソコンから顔を上げると、

その無表情な美しい顔で、樹はあかりに言った。

あかりはぼかんとして、樹を見ている。

話は終わったとばかりに、

樹はさつさとパソコンの画面に目をした。
薫は脇でガッツポーズを取る。

「ドレスの心配はしないでね。うちにあるドレスはどれも一級品だし、

私の趣味も天下一品だから。あー、色んな意味で楽しみはしゃぐ薫の言葉に、あかりは苦笑いをしながら、わけも分からず、曖昧に頷くだけだった。

甘くやさしいミルクの味

あかりは冷蔵庫を開けて中を覗いた。

「上手く出来てるかなあ」

冷やしてあるステンレスの流し型を取り出して、
所々みかんのオレンジを見せながら、

綺麗に固まっている白いミルク寒天を見て、

あかりはにっこりと笑った。

午後九時。

今日の仕事が終わった後、一人の厨房だった。

女中頭の波乃の言葉が蘇る。

「いつも樹さまは、夕食は書斎でお仕事をなさりながら、

一人で召し上がってるの」

あかりは学院での昼間の樹の様子を思い出して、

あまりにも殺伐としている食事に心が痛んだ。

いくら超人でも、まだ17歳。

私がそうだったように、きっと一人が寂しい時だってあるに違いない。

あかりは思いながら、寒天の入っている型を、

用意していたお湯にさっとつけて取り出しやすくすると、

まな板の上に逆さにしてあけて、包丁で食べやすい大きさに切った。

残った分は、明日の使用人たちのおやつにしてもいいと思いつながら、あかりは、切った寒天をクリスタルの綺麗な皿に数切れ乗せて、フォークを添える。

寒天の白はミルクの白だ。

中に所々オレンジに見えるのは、缶詰のみかんを入れてある。

あかりの母親がまだ生きていた頃、テスト勉強などをしてしているあかりに、疲れ取りといって、よくこの甘い寒天のおやつを作ってくれたものだった。

「このおやつに合うのは緑茶だけど、樹さまのイメージからして、緑茶ってのは無いだろうなあ」

ダージリンの茶葉をポットに入れて、沸騰してから少し経っている適温のお湯を注ぐと、あかりはカップと共に寒天の夜食をトレイに乗せて、樹の書斎へと向かった。

書斎の重厚な扉をノックする。

夜の早い時間ではないとはいえ、まだ樹ならば仕事をしているはずだ。

「はい」

案の定、中から樹の返事が聞こえ、あかりは扉を開けた。

パソコンの画面の前に座る樹の姿が、目に入る。あかりの方をちらりと見て画面に目を戻して、樹は部屋の中に入って来たのが誰だかわかると、

もう一度あかりに目を戻した。

「お邪魔いたします、樹さま」

あかりはあの独特の笑顔で笑って、
トレイを持って樹のデスクに近づいた。

「少し休憩なされたら、どうぞでしょう。」

あかりの手作りのおやつをお持ちしました」

樹はキーを打つ手を止めて、近寄ってきた女中服のあかりを見る。
「手作り？」

「ええ、つていつても、とっても簡単なおやつですけれど」

あかりは答えながら、樹の前に白い寒天の乗ったクリスタルの皿と、
紅茶のカップを置く。

ポットから紅茶をカップに注ぎながら、

「私のお母さんが良く作ってくれたんです。」

甘いものは頭の疲れに良く効くからって。

テスト勉強なんかしてる時に」

樹を見て言う。

「それに、寒天ですから消化にもいいので、

今の時間召し上がっても大丈夫だと思います」

あかりは、樹がフォークを手に取るのを待っている。

樹は、自分の前に置かれたクリスタルの皿を見て、

あかりが自分を見ているのを感じると、

皿の上のフォークを手に取った。

白い寒天を一口大に切って、口に運ぶ。

「どつですか？」

あかりは、口を動かしている樹を、
かがんで覗き込むようにして訊く。

樹は口の中に、

甘く優しくひろがるミルク味の物を飲み込んで、
俯いたまま、無表情だったけれど、
小さく言った。

「美味しい」

そして、もう一欠けらを口に運ぶ。

あかりはそんな樹を見て、満面の笑みになると、

「そうですか？良かった」

言って、樹の背中を軽く撫でた。

あかりの中に、樹に対する温かい気持ちが生える。

これはかつて、お母さんが自分に対して、

抱いてくれていた愛情のようなものなのだろうか。

守ってあげたいような、なんとも言えない感情。

樹が寒天を食べる手を止めて、あかりを見る。

そして、馴れ馴れしく樹背中に触っていた自分に気がつき、
あかりは焦って、頭を下げた。

「あ、申し訳ありません。私がこの寒天を食べている時に、
母親が良くやってくれていた仕草だったもので、思わず」

そんなあかりを見ると、樹は何も言わず、

また寒天を一口、口に入れた。

「樹さま、寂しくないですか？」

ふと、あかりが言う。

「何が？」

樹が、感情の無い声で言う。

「ご両親と離れて、暮らしていらっしやって
あかりは言った。

「別に」

樹が即答するのに、

「そんな筈はありません。お寂しいはずなんです。

それをごまかそうとされているから、樹様は、

普段、笑われないんです」

あかりは少し強い口調で言う。

樹はフォークを皿に置くと、

あかりを見た。

「どうして、そんな事がお前に分かる」

樹の、冷たい表情。

「私の親はこの世のどこにも、もういません。

だから、諦めがつきます」

あかりは、樹の冷たい表情にも答えず、

樹の瞳を覗いて言った。

「でも、樹さまのご両親は、まだご健在なのにもかかわらず、

こうしていつもお一人でお食事なさっているなんて、

寂しいじゃないですか。

というか、お寂しいはずなんです」

あかりの言葉に、

樹の脳裏に、
フラッシュのようにある光景が浮かぶ。

「お母様！」

幼い樹が叫んでいる。

「お母様じゃない、副社長と呼びなさい！」

仕事で去っていく若いころの母親にすぎる自分の姿。

別のフラッシュ。

「どうしてですか！」

涙が溢れる目を父親に向けて、また幼い樹が叫んでいる。

「ゆくゆくは人の上に立つものが、簡単に感情を表に出すな。

見苦しい」

言い捨てられるように吐かれた言葉は、

今でも、樹の胸に突き刺さっていた。

断片の記憶。

今では、どうしてそういう事になったのかも、
分からないほど前の記憶。

脳裏に浮かんだ忘れたい記憶を、頭を振って思い切ると、
樹は、あかりを睨むように見て言った。

「お前は、本当に煩わしい。
どうして、俺の前に現われたんだ」

「申し訳ありません！」
あかりは、はっとして言い頭を下げる。

夜にこうしておやつなんてものを運んできて、
仕事の邪魔をしてしまった上に、
親御さんについてまで、調子に乗って言ったから、
樹が怒っているのだと、あかりは思ったのだった。

「すぐに出て行きますから」
あかりはというと、トレイを持って部屋から出ようと、
小走りになる。

樹が、デスクから立ち上がり、
あかりを追った。
そして、あかりの手を掴む。

あかりは驚いて、樹いつきを振り返る。

「本当にお前は、煩わしい」

言いながら、樹いつきはあかりの手を引くと、自分の胸の中にあかりを抱いた。

「それでも」

樹いつきは呟くように言う。

「俺は、お前が欲しい」

樹いつきの力強い腕に抱きしめられ、

あかりは驚いて言葉を失いながら、

樹いつきの広い胸に顔を押し当て、

されるがままに身動きができずにいた。

一体、これはどういう事なんだろう。

樹いつきはしばらく、あかりを自分の胸に抱いた後、

あかりを離れた。

「俺はどこかおかしいのかもしれない」

あかりから顔をそむけて、

樹いつきはデスクに戻ると、パソコンの前に戻った。

「明日の午後、薫の別荘に向かう。用意をしておけ」
言ったきり、樹いつきは俯いて、顔を上げなかった。

あかりはしばらくして、

ようやく口を開けるようになって、

「かしくまりました」

胸の動揺を抑えて青ざめながら言つと、
樹いつきの部屋から出たのだった。

凶星とおせっかい

あかりはトレイを胸に抱えて樹いつきの部屋から出ると、廊下を小走りに自分の部屋へ向かう。

樹いつきに掴まえられた手首が痛む。

そして、自分を抱く樹いつきの腕の強さを思い出して、あかりは息が詰まった。

そして、ふと立ち止まる。

樹いつきがどうしてこんな事をしたのか、考えて思い当たったのだ。

凶星だからだ。

あかりが寂しいだろうと言った事が凶星だったせいで、否定できない腹立ちに、樹いつきはあかりに当たって、自分の心をこまかしたのだ。

自分にも覚えがある。

本当に寂しいとき、人に寂しいだろうと言われると腹が立つものだ。何故なら、大体が寂しい人間に「寂しいでしょう」と聞いてくるのは、寂しくない人間だ。

「私は違うんですよ、樹いつきさま。

私は自分なりに、どうしようもなかった寂しさを、
乗り越えたんです」
あかりは呟くと、笑顔に戻った。

今度、樹いっぎの寂しさを紛らわせてあげようと思う時には、
何も言わずにただ傍にいてあげようと、あかりは無邪気に思っただ
った。

樹いっぎはパソコンの画面から眼を上げると、
あかりが置いて行ったクリスタルの皿を見た。
そこにはもう一切れ、白い甘い寒天が残っている。

樹いっぎは残りの一切れもフォークで口に運ぶと、
ほろほろと口の中で溶けるその甘さを味わった。
今まで食べたことのない素朴な味だった。

あかりを見ると、いつも自分の心はざわめいてしまう。
そして今夜のあかりは、その上、樹いっぎを苛立たせもしていた。

樹いっぎの心情をいかにも知っているかのように話すあかりに、
とてもイラついた。

今までこんな風に自分の心の中に、

ずかずかと入り込んでこようとしたものはいなかったし、
そんなずうずうしさは、とてつもなく煩わしくて、
疎ましかった。

それでも、邪険にした自分の元からあかりが去ろうとすると、
追いかけたくなる衝動に駆られる。

「俺は一体、どうしたっていうんだ」

あかりを胸に抱いた時の、胸の痛みが忘れられない。

今まで指先や腕からだった切なさ、あかりを胸に抱いた事で、
直接心を襲っていた。

樹は片手を自分の胸に当てて、

美しい無表情の顔を俯け、

パソコンの画面の前でじっと考え込んでいた。

次の日の午後、二人は一之瀬家の車で、
招待されている薫の別荘に向かっていた。

車の中、ずっと樹は窓の外を見ている。

樹は、白いシャツにシンプルな黒いジャケット、

グレーのパンツという姿だった。

茶色のさらさらの髪、

茶色い瞳に白い肌、赤い唇という美しい容貌もあって、学校の制服と違う装いになると、ますます樹は大人びる。

そして、樹を見慣れているあかりでさえ、

思わず見とれてしまうほど、樹は魅力的だった。

あかりは女中姿のまま、

二泊の旅行の自分の支度が入っているカバンを膝の上に乗せ、

車が大きいかから離れているとはいえ、

居心地が悪そうに樹の隣に座っていた。

昨夜以来、樹は話をするどころか、

あかりを見ようともしなかった。

どれだけ怒らせてしまったのだろうと、あかりは柄にもなく少し気落ちしていた。

自分が良かれと思ってやったことが、相手にとって違う時もあると、母親に言われた事を思い出したせいもあった。

やっぱり、おせっかいだったのかなあ。

あかりは昨夜の樹に怒られた時の様子を思い出して、窓の外をじつと眺める樹から目を戻すと、自分のカバンに目を落として、

小さくため息をついた。

樹いつきに抱きしめられた事の不思議さも頭に浮かぶのだけれど、
でも、それよりもやはりこうして目も合わして貰えないということ
は、
樹いつきは、自分に対して相当怒っているのだらうと、
あかりは思うのだった。

車はやがて都心から郊外に向かい、緑の多い別荘地に入り止まった。
樹いつきが車から降りるのを見て、
あかりも慌ててドアを開けて車の外に出る。
運転手はあかり達が車から降りたのを確認すると、車を発進させた。

樹いつきはあかりを振り向きもせずに、
建物の方へと歩き出している。

あかりはその大きな建物を見上げた。
白い壁の建物。遠目でも、大きなガラス窓の向こうには、
眩しい光を放っているシャンデリアが見える。
「別荘つて。これ相当大きなお屋敷よね？」
あかりはあんぐりと口を開けて呟いた。

鬱蒼とした高原の木々に囲まれている敷地内は、
午後も日暮れに近づいてほの暗い。
それを外灯が、柔らかいオレンジ色の光で照らしていた。

敷き詰められた白い美しい石と茶褐色のレンガが、屋敷の玄関までの道を印している。

石の両脇には手入れをされた色とりどりの花が植えられていた。樹の背中を追って歩きながら、

あかりは辺りを見回して感心していた。

「さすが、大手都市銀行の頭取のご令嬢、薫さまの別荘だわ」

樹が建物の入り口に着くと、待ち構えていた使用人が扉を開けた。中から眩しい明かりが流れ出してくる。

あかりは樹の後から扉の中に入ると、

薫がこちらに向かつて走ってくるのを見つけた。

学院の制服姿と違って、

上品なデザインの裾の長い緑色のワンピースを着ている。

そのドレスとも呼べるワンピースの優雅なデザインは、

薫のショートヘアのボーイッシュさを打ち消していた。

「いらっしゃーい！ああもう、樹がここに来てくれるなんて、何年ぶり？」

薫が樹に軽く抱きつきながら、嬉しそうに言う。

樹は何も言わずに、薫を見て小さく頷いて見せた。

樹の後ろからやって来たあかりにも気がつくくと、

薫はあかりにも駆け寄る。

「あかりちゃんもいらっしゃい！って、あなたどうして女中服なの？」

不思議そうに言う薫に、あかりはぷつと小さく笑って言った。

「学院の外では、私は一之瀬家の女中ですから」

殊勝に言うと、薫が唇を尖らせた。

「そりゃ、一之瀬家ではあかりちゃんも女中かもしれないけど、うちの別荘では同級生なのよ？樹、でしろう？」

あかりに言いながら、薫は樹を振り返る。

樹はさっさと玄関先から奥に歩いていくと、

開いている扉の中に入っていくところだった。

「って、ちよつと樹！もうあいつは」

薫は言うのと、あかりを振り返って、

「さ、あかりちゃんもこつちよ。取りあえず、泊まる部屋に案内するわね。」

今夜は明日の夜の慈善パーティのダンスの練習を、皆でしているの。

明日の昼間は森へピクニックに行きましょうね！楽しいわよ」

薫があかりの手を引っ張って、屋敷の奥へと導いていった。

あかりは薫の言葉に笑顔で頷きながらも、

とうとう一回も、自分を振り返らなかつた樹に、

また少し気分が落ちていくのを感じていた。

愚かな幻想

薫に案内された部屋。

パタリと音がして扉が閉まると、あかりは一人きりになった。

一之瀬家の女中服のまま、部屋の中を見回す。

天蓋つきのベッド、壁一面のクローゼット、
窓にかかる瀟洒なレースのカーテン、
鏡台までが備え付けられているゲストルーム。

女中の自分が泊めて貰うには、
かなり身分不相応な立派な部屋だった。

「クローゼットの中に、そんなにたくさんじゃないけど、
見繕った服が掛けてあるから、好きなものを着てね」
薫が明るく言っていたのを思い出す。
あかりはかばんを床に置くと、クローゼットに歩いて行った。
がこんと折りたたみ式の扉を開ける。

中にはぎっしりと、色とりどりのワンピースや、
ドレスと言ってもいいほどの豪華な服が掛かっていた。

いくつかハンガーを引っ張り出して、
あかりはその洋服を眺めた。

優雅なデザイン、美しい布地。
あかりのような貧乏育ちでも、

どれも相当な値だろうと、安易に予想が出来るようなものだった。

どう考えても、自分はこんな豪華な服を着る身分じゃない。
あかりは首を左右に振って、クローゼットから出した服を戻した。

第一、樹にも、この薫の別荘には、
樹の世話係としてついて来いと言われているのだ。
女中の服が妥当だと、あかりは思った。

あかりは荷物を置いて、着替えずに与えられた部屋を出る。
せめてこんなに贅沢な部屋に泊めて貰う見返りに、
この別荘の従業員達への手伝いが無いか、申し出るつもりだった。

デザインは違うけれど、やはり女中の制服に身を包んでいる女性を
廊下で見かける。

あかりは追いかけて行って、その背中に声をかけた。

「いつも通りのパーティダンスだから、
曲目はワルツとブルース、ルンバくらいかしらね」
薫が緑のワンピースの長い裾をひるがえして軽くステップを踏みな
がら、

嬉しそうに、声高に仲間と言う。

個人の別荘でありながら、100人は収容可能なボールルームになる広間に、
あかりを除くB・Eのメンバーが集まっていた。
床はピカピカに磨かれているフロアリング。
そこに映りこむ天井のシャンデリアが眩しい。

「いつもは俺達の中の誰かが、人気投票トップを争奪してたけど」
黒いジャケットを脱いでソファに腰掛け、

相変わらずつつんつんヘアの明人が、首のタイを緩めながら口を開く。
「今年は、どうせ樹だろう?」

明人は樹を振り返って言った。

珍しく今年は薫の別荘にやって来たというものの、
樹は、広間の入り口にある来客用のバーカウンターのスツールに腰
をかけ、

またノートパソコンを開いていた。

「ちょっと、樹。うちに来てまで仕事しないでよ」

薫がぶーつと膨れて言うのに、

「まあ、樹がここにこうしているだけでも、

不思議なくらいなんだから、薫、しょうがないわよ」

長い黒髪を揺らし、ふんわりとしたピンク色のスカートの裾を片手
でつまみながら、

ダンスのお辞儀の練習をしている愛良が言った。

「薫の従姉妹の招待客の中には、

樹のフィアンセも入ってるんでしょう?」

生まれながらに政略結婚っていう、今時、御伽噺みたいなフィア
ンセ」

ベージューのジャケットを、アイドルのように可愛らしく着こなして

いる雪丸が言う。

「まあね、本人達は同じような人種だから、お互いに気にもしてないし、

顔を合わせてても、口をきいているのを見たこともないけど」

薫は肩をすくめて言った。

「でも、僕、愛の無い結婚って嫌だなあ」

雪丸が肩までのボブヘアを揺らして首を振って、樹を振り返って言う。
う。

「樹はさあ、平気なの？」

樹はパソコンの画面から顔をあげず、雪丸の言葉に答えなかった。

「ましてや、今は樹にとって、

あたりちゃんっていう、気に入った子が出てきているのにさ」

雪丸が続けて言うと、樹のキーを打つ手が止まった。

「お、反応した」

明人が面白そうに、樹を見て言う。

樹はパソコンの画面から目を上げ幼馴染たちを見て、

大きくため息をつく。

「結婚なんてものは、家柄と事業の利益を合わせ考える、

いわば人生っていうチェスの一手みたいなものだ。

別にそういう相手に、情愛なんてものは求めていないし、

大体が、愛だの恋だのなんてものは、

もともとが人間の愚かな幻想なんじゃないのか？」

無表情な美しい顔で、ばつさりと言いつつ切った。

「出た、樹節！」

明人が樹を指差して小さく叫ぶ。

すかさず、愛良がピンクのスカートを翻して、芝居かかって言った。

「狂人と恋人、そして詩人は、全て想像力の塊とでも称すべきもの。

なんて感じの、シェイクスピアの劇中の台詞みたいね」
樹いつきに向いて続ける。

「確かに、樹いつきみたいなエリートな人生は、
誰でもが憧れる舞台の上のお芝居みたいなものだけど、
でも、あなたもやっぱり人間なのよね。最近、私はそう感じるわ」
にっこりと笑って、愛良は樹いつきを見て言った。

「何が言いたい？」

樹いつきは目を細めて、愛良を見る。

「大切な幼馴染の樹いつき、あなたがますます好きになりつつあるってこ
とよ。

「ここにいる四人ともね」

樹いつきは愛良の言葉の意味が分からないという風に、
小さく眉をしかめた。

ふと、薫が思い出したように言う。

「そういえば、あかりちゃんはどうしてるのかしらね。

もう部屋に案内してから大分経つのに、一向に来ないわね」

樹いつきは、パソコンの画面に目を戻しながらも、

薫の言葉に、ちらりと腕時計を見て、

二人して車を降りてから、一時間以上経っているのを知った。

あかりは、何をやっているんだ？

樹いつきの心中の言葉を聞いたかのように、

四人の幼馴染が小さく目配せして小さく微笑んでいたのを、
樹いつきは知らなかった。

焦り

「一之瀬家からの出向なんですか？」

デザインは違えど、同じ女中服の女性が驚いて言う。

「ええ、樹さま・おぼっちゃまの同伴で」

あかりは答えて、薫の家の女中に答えた。

「まあ、ご子息の専属？」

言って、なにやら意味深の目つきをする薫の家の女中に、

「いえ、今回だけです。それにうちのぼっちゃまは、

およそ女性に興味の無いタイプの方ですから、おつきで一緒にしても、

何の心配もありません」

あかりが言つと、その薫の家の女中は手を叩いて、

「ああ、聞いたことがあります。

一之瀬財閥のご子息は、感情を持たない氷のような人だつて」

そのあまりに遠慮の無い言い方に、あかりはちよつとむつとして、

「ぼっちゃまは、お育ちになった環境のせいだ、

ご自分の感情を抑えることが、上手になられただけだと思いますけれど」

あかりには珍しく、声を強くして言った。

しかし、相手の女中が鈍かったのか、そんなあかりの言葉をまるで気にせず、

「でも、丁度良かった。今夜と明日は、猫の手を借りたくらい忙しいです」

あかりを振り向いて、手を合わせる。

「どうか、お手伝いよろしくお願いします」

あかりは目を伏せると、

「こちらこそ、よろしくお願いします」

頭を下げた。

「複雑な仕事は、屋敷の中がお分かりにならないでしょうから、とにかく、明日のパーティで使うグラス類を磨いて頂ければ」

案内された部屋では、薫の家、檜山家の数人の使用人が、食器類やグラス類を忙しそうに揃えていた。

普段は使われていない部屋なのだろうか、テーブルが部屋いっぱい並べられ、

ワイングラスやタンブラーグラスなどが、その上にぎっしりと並べられていた。

「どれだけのお客様が来るのかしら」

あかりはそのグラスの量に驚いた。

「さすが、上流階級だわ」

あかりはグラスを磨くクロスを貰うと、グラスを磨き始めた。

磨かれたグラスをまとめて置いておくと、

端から使用人たちがトレイでどこかへ運んでいく。

そしてまだ磨かれていないグラスが、また運ばれてくるのだった。

しばらく無心でグラスを磨いていると、

もう一人、部屋の中でグラスを磨いている使用人がいる事に気がついて、

あかりは目を上げた。

白いシャツに黒いベスト、黒いパンツという使用人の格好をしていたが、

あかりと同じ年くらいのすらりと背の高い男の子が、

やはりグラスを磨いている。

その男の子が目を上げてあかりと目が合うと、あかりはぺこりと頭を下げた。

清潔感のある短い髪、優しそうな穏やかな顔で、その使用人の男の子は微笑んだ。

「君、制服違っけど檜山家の使用人じゃないよね？」
話しかけてくる。

あかりは頷いて、答えた。

「一之瀬家の女中です。おぼっちゃまのお供で、
今日から二泊で、こちらにお邪魔しております」

「そうなんだ。一之瀬家の人。明日のパーティの準備は忙しいから、
手伝いをして貰えると嬉しいよ。」

僕、白石亭しろいし とうていって言います。よろしく」

「沢あかりです。よろしくお願いします」

あかりも、もう一度頭を下げながら言った。

樹いつきは、薫にあかりの部屋の場所を聞くと、

ポールルームから出て、あかりの部屋へと歩いて行った。

一体、あかりは何をしているんだ。

薫に教えてもらった部屋の扉をノックする。

返事は無かった。
樹は扉を開けて、中を見回した。

ベッドの脇の絨毯の上に、あかりのかばんが置いてある。
でも、部屋の中にはあかりの姿は無かった。

樹は部屋から出ると、廊下を歩いて行き、
使用人の姿を探した。

あかりのことだから、檜山家の使用人に混ざって仕事をしている可能性がある。
その勤勉さは、一之瀬家の使用人の間では一目置かれていたと聞いていた。

しばらく廊下を歩くと、
明日の慈善パーティの支度なのだろう。
忙しく使用人たちが食器などを運んでいるのを見かけ、
樹は、足をそちらの方へ向けた。

一時間もグラスを磨いていると、大分目処がついてきたようで、段々と磨かなければならないグラスが減ってきていた。

強張った背中を伸ばして、あかりは手を休めた。

立ち仕事は慣れているというものの、慣れない場所のせいもあって、気疲れもする。

首を小さく回していると、あかりの前にジュースの入ったグラスが置かれた。

「疲れたでしょう。少し一息入れたら」

亨があかりの隣で、その優しい微笑を浮かべていた。

「あ、有難うございます。どうぞお気遣いなく」

あかりは亨にぺこりと頭を下げて、目の前のジュースのグラスを見た。

確かに喉は渴いている。

亨はあかりの脇で、同じジュースのグラスを口に運んだ。

あかりも少し躊躇した後、

「遠慮なく、頂きます」

グラスに手を伸ばして口に運んだ。

「知ってる？ここにあるグラス、高級なクリスタルのグラスで、

一個1万円するんだって」

亨が最初よりは数は減ったとはいえ、

まだ50は軽く並んでいる、さまざまな形のグラスを見て言う。

「一個、1万円！」

亨の言葉に、あかりはびつくりして、

もう一度しみじみとグラスを眺める。

「さっきまで何百個もありましたよね？」

私も100個くらい磨いたけれど。

って、あー、一個も割らなくて良かった。

何個も割っちゃったら、お給料いくらあっても足りないわ
あかりが言っと、亨は笑った。

「知ってる？こういうグラスって、凄く綺麗な音がするんだ
ふと亨が言う。

「音？」

あかりが聞き返すと、

亨が頷いて、傍らのワイングラスを一つ手に取る。

そして自分が飲んでいたジュースの、

コップの周りについた水滴を人差し指につけると、

その人差し指でグラスのふちを撫でた。

途端、透き通ったなんとも言えない美しい高音が響き渡る。

「ね、綺麗な音でしょう？グラスハープっていうんだと、

グラスが高級だと、なんだか音も高級な感じがするよね」

あかりは驚いて、

「凄いですね！グラスのふちでこんなに綺麗な音がするなんて
感心したように、背の高い亨を見上げて言った。

「グラスの大きさや、中に張る水の量で音程を調節して、

音楽も演奏出来るんだよ。僕、少し趣味で齧ってるんだ」

亨はあかりの顔の前にグラスを近づけて、

自分もかがむと、もう一度グラスのふちを撫でた。

再び、美しい音が鳴る。

「凄い、そういう楽器があるんですか。

一つ勉強になりました！」

あかりもにつこりと亨の顔を見て、

あの独特なあかりの笑顔で笑った。

使用人が出入りをしている部屋を、一つ一つ覗いて行く。
いくつ目かの部屋、テーブルがたくさん並べられている部屋に、
見慣れた自分の家の女中服を見つけて、
樹は足を止めた。
樹は足を止めた。

こちらに背中を向けているあかりの前には、たくさんのグラスが並んでいる。

どうやらずっとグラスを磨いていたらしい。

疲れたのだろうか、

あかりは手に磨き布を持ったまま、背中を伸ばして首を回した。

部屋の扉から、あかりに声をかけようとしていると、

薫の家の使用人の制服を着ている若い男が、

あかりにジュースのグラスを差し出して、話しかけている。

あかりはお礼を言っているのか、頭を下げて、

自分の前に置かれたジュースを手を取った。

使用人の男は、傍らのワイングラスを手に取り、

何やらまたあかりに話しかけた。
そして、あかりにグラスのふちを撫でて、音を鳴らして見せる。
にっこりとあの独特の笑みで、あかりは男を見上げている。
男が顔をあかりに近づけて、またグラスを鳴らす。
あかりも近づいてきた男の顔に、また笑ってみせている。

樹いつきの中に、今まで感じたことのない、
焦りに似た感情が湧き上がってきた。

胸に鈍い痛みを伴う焦り。

樹いつきは大きく歩いて部屋の中に入っていき、
あかりに近づくと、あかりの手を乱暴に掴んだ。

「樹いつきさま！」

あかりが驚いて振り向く。

「一体、何をしているんだ。皆待っている」

樹いつきは言いながら、あかりの隣にいる亨を目を細めて冷たく見る。
亨は樹いつきが誰だか分かると、
慌いっせてて樹いつきに深く礼をした。

「あ、あの私はここで、明日のパーティの準備のお手伝いを」
あかりが慌いっせてて言うのに、

「女中の仕事は一之瀬家だけでいい。薫の別荘にいる間は、
お前はB・Eの一人だ」

樹はあかりの目を見ると言った。

「え？」

あかりが戸惑っているのを無視すると、
樹はあかりの手を引いて、さっさと部屋の外へと歩き出した。

「あの、とても忙しいようなので、

私勝手にこちらでお手伝いをしてしまったのですけれど、

樹さまのご用事が何かございましたか？ 申し訳ありません。

急いでやりますので、申し付けて下さい」

強く手を握られ、引つ張られて小走りになりながら、あかりは言う。

ようやく樹が自分を見て、口をきいてくれたのは嬉しいのだけれど、
肝心の自分の仕事、樹の世話を忘れていたのを思い出して、
あかりはしまったと後悔していた。

樹は黙ったまま、あかりの手を引いて早足で歩いている。

「樹さま？」

樹は答えず、あかりのために用意された部屋までそのまま戻ると、
あかりを連れて扉を開けて部屋に入り、後ろ手に扉を閉めた。

「他の男に、へらへら笑うんじゃない」

樹が小さく言い捨てて、あかりの脇を通り過ぎる。

「？」

あかりは言われた意味が分からず、樹を見るだけだった。

樹はクローゼットに歩いていくと、
開けて中を見る。

「お前、踊れるのか？」

背中を向けつつも、今度ははっきりと樹があかりに対して言った。

「はい？」

あかりが質問を疑問で返すと、樹があかりを振り返った。

「お前も明日はパーティに出て踊るんだ。」

今夜中に薫や愛良に良く教わっておけ」

言いながらクローゼットを開けて、あかりに中を見せる。

「この中身は、俺が薫に頼んで用意しておいたものだ。靴も入っている。」

すぐにどれかに着替えて、ボールルームへ来い」

それだけぶっきらぼうに言うと、樹はあかりの前を通過して、部屋の出口に向かった。そして、振り返る。

「ここにいる間は、女中服は禁止だ」

樹は言うど、出て行った。

あかりはしばらく動けずに、そのままそこで立ち尽くす。

そして自分に問いかけるように口を開いた。

「私は樹さまの世話係で、ここに来たのよね？」

なのに、女中服禁止って」

あかりは樹が出て行った扉を見て、

困惑して呟いたのだった。

密かな喜び

あかりは小さく息を吐いて気持ち切り替えると、クローゼットに近づいて行った。

服を着替えて来いと、主人である樹いっきに言われれば、女中である自分は従わなければならない。

クローゼットを開けて、中に入っている服を改めて眺める。

綺麗なエメラルドグリーンエメラルドグリーンの服を見つけて、あかりは手に取ると、クローゼットの中からハンガーごと取り出した。

美しい長い裾のドレープ、上品でシックな細い袖のデザイン。

エメラルドグリーンは、死んだ母親の好きな色だった。

母親が夜の仕事のためにあつらえていたものに、丁度これに似たドレスがあった。

その夜の職場で、あかりが一之瀬家にお世話になるきっかけをくれた旦那様と、

母親が知り合ったのだ。

よく仕事に行く前に、

母親はこの色のドレスを着て、幼かったあかりとふざけて踊ったものだった。

狭い畳の部屋のちゃぶ台の脇で、その辺の物を全部回りに避けた小

さなスペース。

笑い転げながら、二人で手を取り合って踊った。

優雅な三拍子のワルツ、甘いリズムのルンバ、気取ったタンゴ。

そんな母親は若く美しく、あかりの憧れだった。

幸せだった時間。

「辛いと思う時にはね、

わざと幸せを数えるの。どんな小さなものでもいいから。

そうすると、元気が出るのよ」

おどけて踊りながら、母親はいつも言っていた。

まるで自分に言い聞かせるかのように。

思えば、母親の毎日は、

きっと楽しい事ばかりだったわけではないはずだ。

少し大人になった今のあかりには、それが理解できる。

普段は忘却という箱に収めているはずの母親との記憶が、

このエメラルドグリーンドレスをきっかけに、怒涛のようにあかりを襲った。

あの幸せだった時間を思い出してしまうと、

今の自分の孤独を、また身を切るような痛みと共に思い知らされてしまう。

あかりはクローゼットに片手をついて、感傷をやり過ぎそうと深呼吸をした。

「まず一個目、樹さまが口をきいてくれたこと。
二個目、こんなドレスを着れること。
三個目、お母さんに教わったダンスのステップが生きるかも。
たった今だけでも、三つも幸せがあるじゃない」

あかりは呟くと、誰に見せるわけでもない笑顔を作った。
にっこりと笑う。

「ほら、笑えた」
自分に言い聞かせるように小さく言う。
そして明るく続けた。

「仕事、仕事」
言いながら女中服を脱ぐと、
あかりは手に持ったエメラルドグリーンのドレスに、
着替え始めた。

ドレスを着終わると、自分の姿を鏡に映して見る。
思ったよりも似合っていると、自分でも思う。
そして自分の姿に、死んだ母親と被る面影を見つけて、
改めてあかりは驚いた。血というのは争えないものなのだと、
しみじみ思った。

あかりは自分の黒髪のポニーテールを解くと、母親がよくやっていたように、耳から上の髪の毛をゆるく結って、後は全てばさりとおろした。余計にあの日の母親に近づいたようで、あかりは少し嬉しくなっただけで微笑んだ。

シャンデリアの明かりが眩しい、ボールルーム。

ゆったりとしたワルツの曲が流れていて、明人と薫、雪丸と愛良がダンスの練習をしている。

「独創性のある振りはないから、基本重視だね」
薫が言うと、

「人気票を得るには、多少の見せ場は作らないと」
明人が言って、薫の腰を抱え音楽に合わせて仰向けにさせる。

薫もそれに臨機応変に答えて、床に頭が付きそうなくらいに体をしならせながら、

空いている方の手を上に上げてポーズをつけ、ドレスの裾がまとわりつく足を高く上げた。

お互いのポーズが美しく完璧に決まったのを確認すると、
「まあ、相手によっては好きにやって頂戴。」

ボールルームダンスは、男性のリード次第だしね」
薫は言って、明人の手を離して踊るのをやめた。

「樹、あなた踊りの練習はしないの？」

薫が樹に声をかける。

無視して、樹はパソコンから目を上げない。

小さくため息をついて薫は続けた。

「まあ、あなたなら別に練習の必要もないんでしょうけど。

ところで樹、あかりちゃんはいたの？」

あかりを探しに行つて戻つてきたと思つたら、

またずっとバーカウンターでパソコンに見入っている樹に、

薫は言った。

「ああ」

樹が画面から目を離さずに答える。

「どこにいたの？」

薫が続けて聞くと、

「おまえんちの使用人に混ざつて、仕事をしていた」

樹が答えた。

「あかりちゃんつてば！」

薫が声を上げると、愛良と雪丸も驚いて声を上げる。

「真面目なんだねえ」

雪丸が言つと、愛良は首を左右に振つた。

「もつと楽しいことを教えて上げなきゃ。17歳は二度と戻つてこないのに、

あんまりだわ」

ふと、ボールルームの扉が開く。

薫が振り向いて声を上げた。

「まあ、あかりちゃん！」
その薫の声に、部屋の中にいた残りの四人が一斉に扉の方を振り向いた。

女中服から、エメラルドグリーンのドレスに着替えたあかりが、心細げに扉を小さく開いて、中を覗き見ている。

薫があかりに駆け寄る。

「なんて可愛いの！」

あかりの手を引っ張って部屋の中に引き入れながら、薫は感嘆したように言った。

エメラルドグリーンのほっそりとしたデザインのドレス。

いつものポニーテールの黒い髪は、今日は下ろされていて、顔にかかる上の部分だけ、ゆったりと後ろで縛られている。肩よりも少し長い髪が、普段と違う雰囲気をあかりに与えつつ、ドレスの淡い緑があかりの顔をいつもよりも色白に見せて、上気している頬の赤さを可憐にしていた。

「あの、こういう格好は慣れていなくて」

あかりは言いながら、バーカウンターに座る樹を振り返り見る。

樹は、パソコンの画面から目を上げてあかりを見たまま、動けずにいた。

奇妙な衝撃が、ドレス姿のあかりを見た樹を襲っていた。

どこかで会ったような、見たような。

というより、ずっと知っていて探していたような物を、

ようやく見つけたというような衝撃。

今までの、あかりを見て感じていた胸の痛みはもう鈍さを超え、この時、貫くような痛みになって樹いっせきの胸を走っていた。

「ねえ、あかりちゃん。僕とダンス練習しようよ」

雪丸が無邪気にあかりに駆け寄って、その手を引く。

あかりは笑って頷きながら、雪丸に手を引かれるがままに部屋の真ん中へと歩いた。

樹いっせきがパソコンの蓋を閉め、

バーカウンターから立ち上がった。

そして、あかりの方へと歩いてくる。

「樹いっせき」

薫が驚いたように言って、樹いっせきを見た。

明人と愛良も、薫の声に樹いっせきを振り返る。

あかりの手を引いていた雪丸は、自分たちに近寄ってくる樹いっせきを見る
と、

足を止めて樹いっせきを見た。

「あかりには、俺が教える」

樹いっせきがぶっきらぼうに、雪丸に言う。

雪丸は驚いて樹いっせきを見て、

「そう」

そそくさとあかりから手を離すと、部屋の中央から後ずさって、薫達の方へと後ずさった。

あかりにダンスを教える。

自分で言い出したものの、

その自分の言動を信じられなくて、心の中で自分に呆れていた。

自分とあかりを見ている幼馴染に、

ちらりと樹は視線を走らせると、

咳払いをして、樹は仕方なく、あかりの手を取った。

「ダンスの基本の形のホールドは」

あかりに説明している間に、

面白そうにひそひそと話している幼馴染を目で牽制しながら、

どうして、こんな事になってしまったのだろうと、

樹は心の中で、自問自答をした。

けれど。

一生懸命に自分の言った通りに動かこうとしているあかりを、

ダンスの体勢で手を取りその腰を抱きながら、

自分の胸の中に見下ろして、

樹は、なんともいえない密かな喜びを感じると、

口の端で小さく微笑んだのだった。

ままならないもの

「樹いっしゅがにやけてるわよ」

薫が明人をつついて言う。

「うわっ、本当だ」

広い部屋の中央であかりと踊っている樹いっしゅを見て、

あかりを見下ろしながら、唇に小さく笑みを浮かべている樹いっしゅを見て、
明人がのけぞった。

「樹いっしゅはさ、

愛だの恋だのは人間が抱いている幻想だなんて、

ばっさり言っただけ、あれが恋じゃなくて何なんだろうっね」

雪丸が言う。

愛良も頷いてぼそりと言った。

「樹いっしゅの初恋かあ」

しばらく四人は黙って、

樹いっしゅとあかりがダンスの練習をしているのをじっと見た。

「何でも完璧にこなす、無表情のコンピューターみたいな樹いっしゅが、
恋に悶えるところ見れたら、なんか凄いよね」

にやりと雪丸が笑う。

「でも、ちょっと切ないかなあ。樹いっしゅには婚約者がいるわけだし、
あかりちゃんも、樹いっしゅの亡くなった大叔父さまの愛人の娘で、
女中なわけだし。どう考えても、先が無いというか」

薫がソファの背にひじをつけて、手のひらにあごを乗せる。

「それでもいいよ。好きな人が出来るってのは。

俺はまだ人を好きになったことないから、ちょっと羨ましいや」
明人が小さくため息をついて、樹いっしゅとあかりを見て言った。

「さあ、私たちも練習しましょう。」

明日の夜のダンスパーティを成功させるんだから」

薫が三人に声をかけると、それぞれがソファから立ち上がって、それぞれパートナーを組むと、樹達の側に行き、踊り始めた。

「あ、この歌は知ってます」

あかりが樹を見上げる。

「お母さんが好きで、良く聞いていました」

ロマンティックなワルツの曲に、あかりは耳を澄ませながら、樹のリードに従って、正確にステップを踏む。

「お前、どこかで習っていたのか？」

教える事をすんなりとこなしていくあかりに、樹は疑問が沸いて尋ねた。

基本のステップとはいえ、社交ダンスは一人ではなく、

二人で息を合わせて踊らなきゃいけない。

決して、簡単なダンスではなかった。

「良く、お母さんと踊っていました。その、夜仕事に行く前とか」

あかりは語尾は消え入るように言って、俯く。

樹は、即座にあかりが言った言外の事も全て理解すると、小さく頷いた。

大叔父とあかりの母親が知り合ったクラブの事だろう。

一流のクラブでは、

こういうダンスを踊るところもあると聞く。

樹の質問に動揺したせいか、
足がもつれてあかりが転びそうになる。

咄嗟に、樹があかりの腕を掴んで、
胸に抱きかかえてその体を支えた。

「すみません！」

あかりは謝りながら、樹の胸の中から樹を見上げ、
樹もあかりの目を見下ろして、二人の目が合った。

茶色い前髪がばさりとかかっている茶色の瞳、
フランス人とのクォーターだという、

白い肌いっきに赤い唇の美しい樹の顔が、

あかりの目を覗き込んでいる。

自分の体を抱える樹の力は頼もしい強さで、

あかりは胸がときめくのを感じた。

小さい頃から母親と二人暮らしで、

身近に男性がいなかったあかりには、

こうして異性を感じる出来事は目新しい。

しみじみ女と男の体の作りというのは違うものなのだ、

樹いっきに手を取られ踊っている間に、

思い知らされていた。

男の人って力が強い。

お兄さんとかがいたら、こういう感じなのかしら。

あかりは頬を赤く染めながら、心の中で呟いていた。

自分を見上げるあかりの頬が真っ赤に染まり、
少し潤んだ瞳になっているのを見て、
樹の胸に、また痛みが走る。

樹はあかりの体から手を離すと、

「少し休もう」

言って、バーカウンターの方へと歩いて行った。

「どっしたの？樹？」

踊っている薫が声をかける。

「いや、少し疲れただけだ。やりなれない事をするとなれる」
樹は言って、自分のノートパソコンの前のスツールに座った。

「じゃあ、あかりちゃん。今度は僕と踊ろう」

雪丸が無邪気に言って、あかりの手をとる。

「あ、はい。よろしくお願いします」

あかりは雪丸にぺこりと頭を下げた。

雪丸は樹をちらりと見て、

やはり樹が自分達を見ているのを知って、
小さく笑うと、あかりをリードし始めた。

樹はカウンターにひじをついて、
手のひらを自分の頬に当てて、雪丸と踊るあかりを見ていた。

何故、俺はあかりを見ると胸が痛むんだろう。

見た感じではあかりなど、平凡な女だ。

際立っているのは、あの独特ななんともいえない笑顔と、その勤勉さだけ。他には別になんていうこともないのに。

雪丸があかりにパートナーを変えたために、
少し休憩しようと、薫が樹の側にやって来る。

「そんなに睨まなくても、雪丸はあかりちゃんを取らないわよ」
薫は笑って樹の顔を覗き込んで、言った。
樹の隣のスツールに腰をかける。

「最近、自分で自分の気持ち分からない時がある」
樹が薫を見ずに、あかりを目で追ったまま言った。

「あら、自分の本当の心がすんなり分かる方が稀よ？」
薫の言葉に、樹は黙っている。

「それにね、他人の心ってのは、もっとままにならない。
樹にも、それって当てはまるのかしらね」

薫いっきが言って、樹いっきを見ると、
樹いっきは薫を黙もくって見て、またあかりに目を戻した。

「明日は晴れるといいわね」

薫が話題わだかまを変えるように、明るく言う。

「楽しい一日いちにちになりそう」

初めての欲求

「そうですね、こうしてこの部門の過去五年の収支報告と、関係資料を全て見てみると、売り上げの減少をごまかすために、多少、資料の数字を改ざんしている箇所が見受けられます。

そこを今度の会議でぶつけていけば、言い訳は出来ないでしょうね。

改ざんを認めさせた上で、今後の対処方法を問えばいいと思います」

樹は、パソコンの画面を見たまま、耳に当てた携帯電話に話している。

通話の相手は、ニューヨークにいる父親の克己だった。

深夜二時過ぎ。

薫に割り当てられたゲストルームのライティングデスクに一人座り、樹は、父親に頼まれていた仕事をしていた。

部屋の照明は落としてある。

ちかちかと目を指すようなモニターの明かりが、

樹の顔を青白く照らしていた。

「はい、来週の会議にはそちらに向かいます。分かりました。それでは」

樹は礼儀正しくも抑揚の無い声で答えると、通話を切った。

携帯の蓋を閉めてデスクの上に置き、
椅子の背にもたれて、樹はため息をついた。
まぶたに指を押し当て、しばらく目を閉じる。

薫の別荘に遊びに来ている幼馴染達とは、
夜の11時頃に、それぞれのゲストルームに別れていた。

明日は午前早くから、薫家の私有地の山に遊びに行くという。

「ピクニック」

樹は呟いて、また小さくため息をついた。

多分、今までの自分だったら、
今夜、ここにはいないだろう。

幼馴染達は好きだったけれど、一緒にはしゃいで騒ぐということは、
あまり好きじゃないし得意でも無かったから、
高等部に進んだあたりからは、こういうイベントの参加は遠慮して
いた。

だけど、何故俺は今ここにいるのか。

その理由があまりにも単純で笑ってしまふ。

あかりがいるからだ。

あかりがいると思うと、

今まで詰まらなく味気なく思っていたものでも、
本当にまた詰まらないのか、味気ないのか、
確かめたくなくなってしまっただ。

学院での時間も、屋敷での時間も、
あかりが来てから、樹いっせの中では彩りを変えている。
無味透明だった単なる過ぎていく時間に、
あかりの存在は、何らかの興味深さという色を持たせている。

樹いっせは、様々なあかりを見たかった。
屋敷と学院にいるだけではなく、色々なあかりの姿を。

自分の中に、こうしたプライベートにおいての、
欲求めいたものが湧き上がったのは、きっと初めてかもしれない。
17年の今までの生活を振り返って、
樹いっせは思っていた。

しかし、こういう痛みを伴う気持ちを何と呼ぶのか。
執着？独占欲？好奇心？

どっちにしる自分にとって未知の感情だ。
もしかしたら、一過性の感染のようなものかもしれない。
すぐに消えてなくなる感情ものなのかもしれない。

樹いっせはじつと一箇所を見て考えていたけれど、
考えて見つかるような答えはなさそうだと見極めると、
小さく頭を振って、考えるのをやめた。

頭を切り替える。

そしてちらちらと光るモニターの画面を見た。

もうそろそろ寝なければと思うのだけれど、

最近の樹いつきには、なかなか睡魔がやって来てくれない。

体は疲れていると感じるのに、

樹いつきは、ここところぐっすりと眠れたためしが無かった。

ただ起きているのも無駄だと思うので、

仕事をしてしまう。

どうせ、まだ今夜も眠れはしない。

もう少し仕事をするか。

樹いつきはマウスで、

パソコンの仕事のファイルをもう一度開いた。

まだ薄暗い早朝。

あかりは一之瀬家の女中服に着替えて、
薫の別荘の調理場にいる。

今日は、樹いしづとその幼馴染達は、
ピクニックに行くと言っていた。

ランチにバーベキューをするシェフは用意していると、薫は言っ
ていたけど、

あかり的にどうしても譲れない事がある。

「遠足って言えば、おにぎりよね！」

……ってピクニックって、遠足みたいなものよね？」

最後の方の言葉は、少し不安げになって、

誰もいない早朝の調理場で、あかりは呟く。

一人で首を傾げて見るけれど、まあいいかと、

気にするのをやめて、あかりはにっこりと笑った。

そして、薫の許しを得て使わせてもらっている、

調理場のガスコンロの火加減を見る。

炊飯器で炊いても良かったけれど、

少しでもあかりの知っている美味しいおにぎりを、

樹達いっせに食べて欲しくて、あかりは土鍋でご飯を炊いていた。

粘着質な糊状のものが、土鍋のふたの淵についてふつつつと
言っている。

だいぶ水気が無くなってきて、
ふたの下で起きている音も、段々乾いたものになっていた。

「そろそろかなあ」

あかりはふきんで熱い土鍋のふたを掴むと、
そっと開けてみる。

途端に白くて熱い水蒸気と、鼻をくすぐる炊けたお米独特の甘い香
りがして、

あかりはにつこりとあの微笑を浮かべた。

艶々と光って立っているお米。

粒がはつきりと自己主張している。

「あたしらは、とつても美味しいです」

あかりは、うんうんと土鍋に頷いて見せて、
ガスの火を止めた。

熱々の炊けたばかりの米を握るのは、素手では無理だ。

あかりはラップを広げて、その上にしゃもじでご飯をすくって乗せ
ると、

用意しておいたおにぎりの具を、その上に乗せた。

明太子、こぶ、しゃけ、梅干。

ふんわりと、崩れない程度に軽く握って、

荒塩を回りに振り掛ける。

「おにぎりを上手に握るコツはね」
母親の言葉が蘇った。

「すぐに食べるなら、少しきつめに握った方がいいの。
じゃないと、炊き立てのご飯は崩れやすいからね」
記憶の中の母親の言葉に、あかりは頷く。

「でも、時間が経ってから食べるなら、
そう、遠足のお弁当みたいだね」
楽しそうに言う母親。

あかりの遠足や運動会の弁当のおにぎりは、
二人一緒に、アパートの狭い台所で握ったものだった。
「ほんわかと、ふっくらと握らなきゃ駄目なの。
冷めるとご飯は固くなるでしょう？」

だから、後で食べる時はお米の粒の間に空気が入るように、
そつとそつと握るのよ。それが美味しさの秘訣なの」
鮮明に思い出せる母親の声。

あかりはいつも思う。
死んだ母親との思い出は、

いつも思い出す時は、まるで昨日の事のように鮮明に蘇る。

それはきつと、いつでもどこでも、
母親が、あかりを見ていてくれるせいなのだろうと思う。
あかりは、笑顔になりながらおにぎりを握り終えた。

これまた借りた重箱に、そのおにぎり達をつめながら思った。
あかりが作ったあの白い寒天のおやつを食べて、

「美味しい」と言ってくれた時のように、

このおにぎりを食べたなら、

樹は、^{いっき}また何か言葉をくれるだろうか。

あかりは、にっこりとあの笑顔を浮かべると、
重箱の蓋を閉めたのだった。

その体温

穏やかな風が、高原の木々の間を吹き抜けていく。
春まだ浅い時期なのに、陽だまりはぽかぽかと暖かく、
外で過ごすには素晴らしい日だった。

薫の家の所有地だという山の中腹、
広く開けた場所に、わざわざこしらえたという、
バーベキューのための建物と設備のある場所で、
幼馴染達のピクニックパーティは始まっていた。

向こうに見える屋根のあるバーベキュー台では、
薫が用意したというコック姿の使用人が、
牛肉や海鮮などの、豪華な串焼きの準備を始めている。

まだ昼食には少し早い時間。
奥に建つ建物の方へ、薫と明人、愛良と雪丸が行ったきり、
まだ戻ってこないのを不思議に思っ、あかりは樹いっきに訊いた。
「皆さん、どこにいらしたのでしょね」

備え付けられたテーブルとベンチではなく、
陽だまりの眩しい芝生の上に、樹いっきとあかりは広いシートを敷いて、
座っていた。
樹は、側の木の幹にもたれかかり、
部屋でプリントアウトしてきたらしい、分厚い書類の束を眺めてい
る。

「外乗そこのりに行くと言っていた」

ぼそりと、樹いっぎが書類から目を離さずに言う。

「そとのり？」

あかりはぼかんとして聞き返した。

「乗馬だ。ここには薫の家の管理する厩舎もあるんだ」
樹いっぎが答えた。

ほーっ、とあかりは感心する。

さすが、上流階級のご子息ご令嬢は違うわ。

あかりはポットに入れてきたダージリンの紅茶を、

ピクニックバスケットに入っているカップを取り出して注ぐと、
樹いっぎに差し出す。

指だけ伸ばして顔を上げず、樹いっぎはそのカップを受け取った。

風がそよそよと、樹いっぎとあかりの間を吹き流れる。

その匂いのすがすがしさに、あかりは目を細めた。

ふと遠くで、薫や愛良、明人と雪丸の声がしたかと思うと、
馬のいななきが聞こえて、あかりはそちらの方を見た。

黒い膝までのブーツに乗馬用の丸い帽子を被って、
それぞれ栗毛やあし毛の、立派な馬に乗っている四人の姿が見える。

「あかりちゃん！あなたも乗る？」

美しい栗毛の馬を歩かせて、薫がこちらへやって来て言った。

服装はシックなグレーのワンピースのまま、その足元をブーツに変え、

乗馬用の帽子を被っていた。

あかりはぶるぶると首を振って言う。

「飛んでもありません！馬なんて乗ったこともありませんし」

「そう」

少し残念そうに薫が言った。

「あかり、馬に乗りたいか？」

それまで一回も書類から顔を上げなかった樹が、

あかりを見て言った。

「乗れたら素晴らしいでしょうね」

雪丸や明人、愛良も馬を歩かせてこちらへ来るのを見て、

あかりは憧れるように言った。

樹は一瞬间をおいて、薫に言う。

「薫、ブーツと馬を貸してくれるか？」

薫は馬上から、

「もちろんだけど、樹あなたが馬に乗るの？」

驚いて言った。

「まあな」

樹はぼそりと言うと、持っていた書類を下に置き、

立ち上がって、薫達が馬と現れた建物の方へと早足で歩いて行った。

あかりはきよんとんとして、樹の後姿を眺めている。

薫と明人、愛良と雪丸は馬上で、

樹が戻って来るのを、それぞれの表情で待った。

あかりは四人を見て、

「樹さまは、普段はあまり皆様と一緒に馬に乗らないんですか？」
心に沸いた素直な疑問を口に出した。

「樹の乗馬の腕は誰よりも凄いいし、
中等部までは私たちと一緒に、外乗にも出かけたけど、
高等部に入ってから、樹はいつもあんな調子で」

薫は樹が置いていった書類を目で見た。

「ご両親の仕事の手伝いばかりして、このうちの別荘に来たのも、
もう何年かぶりなのよ」

「そうですか」

あかりは自分の脇に置かれている分厚い書類を見た。

樹さまは、本当にいつもお仕事をしている。

あまりに根を詰め過ぎていて、お疲れじゃないのかしら。

まあ、通常の高校生と違って、

もう人間としての根本の作りが違う天才だから、

ご両親が期待なさるのは、とっても良く分かるのだけれど。

あかりは心の中で呟いた。

やがて、樹が歩いて行った建物の影から、
一頭の馬が凄いい勢いで走り出してくる。

真っ黒な毛を艶々と輝かせている美しい馬。

その背の鞍には、乗馬ブーツに履き替えた樹が跨っていた。

片手に手綱を持って、片手に乗馬用の帽子を持っている。

樹自身は帽子を被ってはおらず、茶色い髪が風になびいていた。

あかりの側まで来ると、樹は馬の足を止めて、

持っていた帽子をあかりの側に、ポンと投げた。
あかりは自分の側に落ちた帽子を、なんとなく手に取るけれど、
どうしていいのか分からないように樹を見る。

「あかり、こっちへ来い」

樹は馬上から、片手をあかりの方に差し出すと、
頷いて見せた。

薫が明人と顔を合わせて小さく微笑む。

「あかりちゃん、樹が嫌だったら、

僕の馬と一緒に乗ってもいいんだよ？」

帽子の下でボブの髪型を揺らして、雪丸が面白そうにあかりに向か
つて言った。

樹がちらりと雪丸を見る。

「雪丸、樹を馬術競技で負かせた事のある人が、

そういう事を言うもんなんじゃない？」

愛良が面白そうに、雪丸と樹を見て言った。

雪丸は唇を尖らせた。

あかりは帽子を手に持ち、戸惑いながらも、
樹の馬に近寄っていく。

女中服は禁止されていたので、

クローゼットの中に見つけた、一番シンプルな紺のワンピース姿だ
った。

「帽子を被れ」

樹が言う。

あかりは言われるままに自分の頭に渡された帽子を被った。

樹は馬の上から、近寄ってきたあかりの腰に手を回す。

そしてぐいっと引き上げると、自分の前にあかりを座らせて、

馬に横向きに座るあかりの体を自分の胸に抱いた。

あかりはされるがままにするものの、
あまりに近い樹の体温におののいていた。
満員電車の中なんてもんじやない。
密着だ。

「あ、あの、樹さま」

あかりはどぎまぎして、樹の顔を見上げて何か言おうにも、
顔よりも、樹の胸の方が自分の目に近くて、
上手く訴えられない。

ボタンが二つ外れている上に、

あかりを抱いているせいではだけ気味になっている、

樹のシャツの胸元に恥ずかしくなったあかりは、

視線を下にそらした。

足元を見ると、馬の背は思った以上に高く、
宙に浮いている自分の両足はとても心細い。

樹は自分の手であかりの手をつかむと、
その手を自分の腰に回させた。

「しっかり、つかまってる」

樹の声が、

胸から直接あかりの耳に聞こえてくる。

樹の足が馬の腹を蹴って、

自分の体の下の馬の筋肉が躍動するのを感じると、

あかりは少し怖くなって、樹の体に回した腕に力を入れた。

「やつほー」

「行くわよー!」

「イェーイ」

「あの丘まで、クロスカントリーで競争だ!」

樹の黒馬を先頭に、5頭の馬が林の中を走り始める。

あかりは自分の耳の脇で唸る風の音と、体を揺らす振動が怖くて、しばらく樹の胸から、顔を上げる事が出来なかった。

やがて強い振動にも体が慣れてきて、あかりはそつと顔を上げる。

辺りの景色は、まるで矢のように後ろに流れて行った。あかりは目で必死に景色を追う。

細い小川を樹の馬が飛び越えると、続いて四頭の馬も飛び越える。

朽ちて倒れている木を飛び越えれば、次から次へと、幼馴染たちの馬も飛び越えた。

「凄い」

あかりは呟いて、瞬時に流れ去っていく景色に見とれた。まるで自分がロケットになったような気持ち。

やがて全速力で走る馬たちは、林が尽きた場所に来ると、急な丘を駆け上がり、切り立った崖の真上にやって来た。

樹の黒馬が息を切らして、

小さく足踏みをして足を止める。
樹は完璧に馬を乗りこなしていた。

「やっぱり、樹には敵わないわね」

薫もすぐ追いついて言う。

「いやん、小川でスカートに泥がはねちゃったわ」

愛良がぶつぶつ言いながら、薫の隣で止まった。

明人がゆっくりと崖に近づいてくる。

「こんな崖ぎりぎりまで全速力で走れるって、すげーよな」

「待つてよ！」

雪丸が息を切らしながら叫んで、一番最後に追いついた。

あかりは正面に広がる景色に、言葉を失っていた。

ドーーーーツという物凄い轟音と共に、

遠い対岸、正面の切り立った崖の上から、

白い水しぶきを上げて大量の水が流れ落ちている。

それは、あかりが今まで見たこともないような、大きな滝だった。

水が奈落に落ちていく途中に、

綺麗なアーチを描いている美しい虹がかかっていた。

「なんて美しいの」

あかりは口から掠れた声を絞り出した。

「いつここに来て、清々するわね」

薫も景色を見回して言う。

「久しぶりに来て、良かったでしょう？樹」

薫は樹を見て言った。
樹は答えずに、ちらりと薫を見ただけだった。

「私はもうもう、感激です！」
樹の代わりとばかりに、あかりがうつとりと声を上げる。
「あー、生きてて良かった」
声を裏返して感激して言うあかりに、
皆が明るく笑った。

いつもと変わらない無表情ながら、樹は一人、
違う事に、心の中で感嘆していた。

……人間の体温が、こんなにも温かいものだったとは。

樹は、自分の手と胸に伝わるあかりの体の温かさに、
密かに心動かされていた。

不思議な癒し

赤く燃えるグリルの炭の上に、肉汁が落ちるとジュツと音がして、香ばしい肉の焼ける香りと共に、白い煙が上がる。

薫が連れて来たコックが、慣れた手つきで、手際よく炭火の前で調理をしていた。

銀色の串に、肉や野菜が彩り良く刺されているものが、美味しそうに焼きあがった順に皿に並べてある。

あかりは肉の好みの焼き方を見分けて、その串を皿に取り運んだ。

「レアが明人さま、ミディアムレアが雪丸さま」
ぶつぶつと口の中で繰り返しながら、両手に慣れた手つきで皿を抱えている。

「薫さまと愛良さまがミディアムで、樹いっせさまがウエルダン」

あかりが大きい5枚の皿を、左右の手の指に器用に挟み、一度に運ぶと、薫が驚いたように言った。

「凄いあかりちゃん、それって技ね」

「こういう事は、結構自分でも得意なんです。勉強は駄目ですけど。」

私って、使用人としてはエリートなんですよ」
笑って、あかりは薫に言った。

乗馬を終え、幼馴染達がそれぞれ、備え付けのテーブルに腰掛けたり、

居心地のいい芝生の上に敷いたシートに座ったりしている合間を縫いながら、

あかりはまめに、彼らを給仕していた。

「あかりちゃん、今日は仕事なんてしないで、

僕とおしゃべりしようよ。ここに座ったら？」

雪丸が、忙しく動いているあかりに話しかけ、

長いすの自分の隣を手で示す。

「駄目ですよ。こんなに楽しい時間を過ごさせて頂いているんですもの。

せめてご奉仕しなきゃ。私はあくまでも一之瀬家の女中なんですから」

あかりが明るく言うつと、

「あかりちゃんは真面目なんだね」

雪丸は口を尖らせた。

樹は、木に寄りかかりながらシートの上に座り、

乗馬の間置いておいた書類をまた手に取っているけれど、

今は書類を見ているわけではなく、じつとあかりを目で追っていた。

馬上であかりを胸に抱いていた時のあの温もり。

抱いていた時は、人の体温はこんなに温かいのだと、

単純に心を動かされていたが、

でも思えば、あの熱いほどの体温は、

どこかで覚えがある。だからこそ、心があんなにも動いたのだ。

しかし、一体何の記憶なんだ。

確かに知っているはずなのに、思い出せない自分に、

樹は苛立っていた。

そして、そんな自分に驚く。
こんな事は、初めてだった。

あかりが現れるまで、

樹は、自分の世界を完璧にコントロールしていた。

他人と違う自分の天才的なスキルも、

己の感情も、他人との関わりも、

何もかもが、計算通りだったし、

また全ての事象は、

どんな情報も読むなり聞くなり一回知れば頭に入ってしまうという、
自分の特殊な能力による豊富な知識からの、既知の事だけで成り立
っていた。

ところが、あかりが自分の前に現れてからというもの、
理解不能、判定不能、想定不能な出来事が現れ始めた。

あかりに対する、この未だ己で命名出来ない、

自分の「欲求する感情」もそうだ。

そして、あかりの為に何かしてやりたいという「衝動」。

見返りが無い事が前提で、誰かのために何かをしようと思うなんて、
今までの人生には見当たらなかった。

あかりを抱いて、馬を駆けさせた自分を思い出して、
樹は苦笑した。

乗馬など、とつくの昔に興味を失っていたのに。
あかりが馬に乗りたいたいというだけで、乗せてやりたいというだけで、
自分は馬に乗ったのだ。

「樹さま、ウエルダンです」

自分の前に皿を運んできたあかりを見て、

樹は、じつとその目を覗き込んだ。

何かが見つかるともかもしれないと。

でも、首を傾げ、無邪気に自分の目を覗き返すあかりに、

樹は、とうとう目を伏せた。

詮索と無邪気とでは、無邪気が勝つ。

そんな事も初めて知った。

樹は、今得たばかりの新しい知識に小さく首を振ると、

あかりが差し出したウエルダンの皿を受け取った。

かといつて、あかりに対する、
自分の中に起こる全ての不可解な出来事は、決して不快なわけでは
なく、

ただ、漠然とした朝もやのような不安をもたらすのだった。

朝日に照らされれば、一瞬にして消える朝もやのような。

ただ、今の樹には、

その朝もやを消す朝日のようなものを、自分の中に見つけることが、
まだ出来ていないのだった。

「美味しいお肉もいいですけど」

皿を配り終えたあかりは、面子を見回して満面の笑みで言う。

「おにぎりも、外で食べると格別ですよ！」

ジャーンと自分でファンファーレを言いながら、

あかりは自分で握ってきた、おにぎりの入っている重箱を開けた。

「あかりちゃんのおにぎり！！！」

薫があかりの座る芝生のシートに駆け寄ってくる。

「学院のランチじゃないから、今日あかりちゃんのお弁当食べれるとは、

思ってもみなかったよ！」

明人もダツシユで駆け寄ってくる。

「あかりちゃんのお弁当、今までおにぎりって無かったもんね。」

楽しみだなあ。おにぎりって、手で握るからおにぎりっていうんでしょ？」

雪丸は明人をどついて、あかりの広げた重箱の側に座り込む。

「私、自分の知っている人が握ったおにぎり、食べるの初めてかも」
愛良がスカートの裾を手でゆったりとつまみながら、

四人の最後に、あかりが重箱を置いたシートの上に座った。

一つ一つが食べやすいようにラップに包まれているおにぎりに、
それぞれが手を出す。

絶妙な水加減と火加減で炊かれたお米の粒は、
時間が経っていても、陽の光を反射してつやつやと白く光っていた。

「ご飯が甘く感じる！」

薫が鮭のおにぎりを食べて、歓声を上げる。

「あー、なんか日本人って感じがするわ」

愛良がため息をつきながら言った。

「料亭なんかの仕出しって、どんなに上品に作ってあっても、

どこか機械的な感じがするけど、このおにぎりは、

あかりちゃんの純粋な気持ちの温かさを感じるよ」

明人が感心したように言うと、

「うんうん、なんかほっとする」

雪丸はすでに、二つ目に出しながら言った。

「樹さま、どつぞ」

あかりは樹にも重箱を差し出して、おにぎりを食べるように促す。

自分の動きを見つめられて、

どうしても、一つ手に取るまでは重箱を下げないつもりであかりに、

樹はゆっくりと手を伸ばすと、おにぎりをひとつとった。

手の中のおにぎりを見て、

ふと、フラッシュのように何かが蘇った気がした。

樹は瞬きをする。

しかし、その蘇ったと思った記憶は、

するりと忘却のひだの間に入り込んでしまった。

樹が顔を上げると、あかりが自分を見ているのが分かる。

手の中のおにぎりのラップを外すと、

樹は一口齧った。

あかりはまだじつと樹いっきを見ている。
何かを待っているようだ。

あかりの真剣で真っ直ぐな視線から目を伏せると、
樹いっきはふつと笑った。

そして目を伏せたまま、

「美味いよ」

樹いっきは言つて、あかりを見る。

パツと光が点るように明るい表情になつて、

あかりはにっこりと笑った。

「良かった」

心の底から嬉しそうな声に、

樹いっきもつられて、小さく笑う。

「樹いっきさまは、そのままでも十分かっこいいですけど」

ふと、あかりがそんな樹いっきを見て言う。

「お笑いになつた方が、何十倍も何百倍も素敵ですよ」

樹いっきは黙つて、あかりを見つめた。

あかりは樹いっきの真っ直ぐな視線に、

照れて目を伏せると、頬を赤くした。

幼馴染たちは食事を終わると、それぞれが持参したカードで遊んだ
り、

ボールを蹴りあつたり、春の陽だまりを楽しんだ。

皆の楽しそうな様子を満足げに眺めていると、

少し鋭い風が吹き渡って、自分の横に座る樹の持っている書類を大きく煽ったのに気がついて、あかりは樹を振り返った。

樹が書類を手に持ったまま、

目に手を当てている。

「どうしました？樹さま」

あかりが樹の顔を覗き込むと、

「いや、単に目にごみが入っただけだ」

樹は、ぼそりと答えた。

あかりは幼いころ、自分が母親にしてもらった事を思い出して、近くに置いてあったミネラルウォーターのペットボトルを手に取る。そして、荷物の中から厚手のタオルを取り出すと、自分の膝に乗せた。

「樹さま、ちょっとここに頭を乗せて下さい」

あかりは言ってタオルを乗せた膝を手で示して言う。

樹は片目を手で押さえたまま、不思議そうにあかりを見た。

「いいですから、こちらに頭を。早く、樹さま」

あかりはうむを言わさぬ声色で言う。

樹は首を傾げながらも、

あかりの言う通り、書類を下に置き、

シートに横になると、あかりの膝の上に自分の頭を乗せた。

あかりは樹が目を押さえている手をそっとどけて、

持っているミネラルウォーターで、ごみの入った方の樹の目を洗った。

「私のお母さんが、よくこうしてくれました」

あかりは言いながら、洗った樹の目を柔らかいハンカチで拭く。目から流れ落ちる冷たい水の感触と、

自分の頭の下、あかりの膝の柔らかい温かさのギャップに、
樹は、不思議な癒しを感じていた。

「少し、そのまま目を閉じていてくださいね。
きつとすぐにごみは出て行きますから」
樹の肩に手をそえて、あかりは言った。

あかりの柔らかい温もりは、
樹の頭と首と肩にまでじんわりと伝わってくる。
陽だまりの暖かさも手伝って、
樹は自分の意識が、バターのように溶け出すのを感じた。
ここ何週間も忘れていたような、気だるさ。
常に張っていた神経がほどけていく。

人にこうして寄りかかったのは、初めてだ。
樹は思った。

ふと、微塵も動かない樹に目を落とし、
あかりは、穏やかな寝息を立てている樹に気がついた。

相当、疲れているのだなど、
あかりは心の中で呟く。

自分の膝の上の、美しい寝顔を見て微笑むと、
風に吹かれて閉じた瞼にかかる樹の前髪を、
あかりはそっと指で払った。

直線の雨

鉛色の空からアスファルトの地面へと、
まるで雨は定規で引いたかのように、真っ直ぐに落ちている。

風は無かったけれど、冷たい雨。

真冬の凍える灰色の雨の降る日だった。

車の窓ガラスに、後から後から雨の水滴はこびりつくけれど、
走るスピードの風に煽られて、水滴は千切れるように後ろへと飛んでいく。

にじむ信号機の赤に家からの送迎の車が止まった時、
7歳の樹は、黒い歩道の隅に何かを見つけた。

「止めて下さい」

少し悩んだものの、樹はドライバーに声をかけた。

冷たい直線の雨は、

車のドアを開けて外に出た幼い樹の肩を、無常むじょうに濡らす。

樹は制服が濡れるのも気にせず、見つけた物へと歩いて近寄った。

ダンボールの箱に入った、みすばらしい子犬。

ふくふくとした茶色の毛皮は、冷たい雨に濡れそぼって黒く変色していた。

怯えたような茶色い丸い瞳が、諦めを湛えつつ樹を見上げる。

その小さい体は冷え切っていて、もう鳴く気力も無くなっていたようだった。

樹は、しばらくその子犬を見下ろしていた。

鉛色の空からの直線の雨は、容赦なく樹と子犬を濡らしていく。

樹は、そっと手を伸ばして濡れそぼった子犬を手に取った。

幼い樹の片手に乗ってしまったような、小さい犬。

子犬は信じられないとでもいうように、

クーンクーンと力を絞って、生きたいと声を上げた。

子犬は温かかった。

冷たい雨に濡れそぼっているのに、

手のひらに伝わってくるその体温は、熱いと言ってもいいくらいだった。

樹は、子犬を胸に抱いて、

車に走り戻った。

初めて、何かを守ってやりたいと思った。

屋敷に戻ると、仕事でニューヨークへ発つ前の両親がいた。

本当は会いたくなかったけれど、

まだ幼い樹には、会わないという選択肢は無かった。

玄関先で母親に迎えられ、手の中の子犬を見られた。

母親が屋敷の奥に走って行き、父親を連れてきた。

そして、二人して樹の手の中の、濡れて汚い小さな命を見た。

「樹、犬は最低10年や15年は生きる」

父親がネクタイを直しながら、片手間に言った。

「お前はその頃には、もう世界中を駆け回っていなければならない。

犬などを飼っている暇はないんだ」

言葉の内容と裏腹な穏やかな口調。

「そうよ、樹。あなたは世界を動かす人間になるの。

捨て犬なんて、あなたのような人間には関わりの無いもの。

もとの場所に戻してらっしゃい」

非情な言葉を、にこやかに母親も言った。

樹は黙って俯いた。

この人達に、例え樹が泣こうが喚こうが、

何を訴えても伝わりはしないということを、もう知っていたからだった。

「分かりました」

樹は小さく答えた。

ドライバーがまた車に戻り、樹も玄関に戻る途中、

樹は小走りに、厨房へと走った。

子犬は離れた廊下に、少しの間置いておいた。

そして、最近使用人として働き始めた波乃を掴まえる。

「お腹が空いて」

樹が言っていると、波乃は驚いたように、

「まあ、ぼっちゃまが珍しい。分かりました。待っててくださいね」

波乃は心得たとばかりに、厨房へ走りこんでいくと、

少しして、小さなおにぎりを二つ作って来た。

ラップに巻いてあるゴマのおにぎり。

「どうぞ、ぼっちゃま」

樹は波乃から、その二つのおにぎりを受け取ると、走って子犬の元へと戻った。

ドライバーが玄関で待っていたから、

樹は廊下の隅で、誰にも見られないようにしながら、

急いで、その子犬にゴマのおにぎりを与えた。

本当なら、まだお乳を飲みたいであろう小さい子犬は、

必死にそのおにぎりを齧った。

生きたい、生きたいと、食べられない米を噛まずに飲み込んでいた。

樹の目から、涙が落ちた。

子犬はあまりに無防備で、いたいけで、小さくて、

一人では生きていけず、保護を必要としていた。

おにぎりを一通り食べると、

子犬は樹を見た。

その瞳は、まるで分かっているよと言っているようだった。

鉛色の空から、アスファルトの地面へと降り注ぐ冬の雨は、まるで定規で引いたかのように、真っ直ぐに落ちていた。

今はもう水溜りと化したダンボールの箱に、
自分の手から、その小さくも熱い体温を持つ子犬を戻すと、
樹は、誓った。

一分でも一秒でも、早く大人になるから。

一分でも一秒でも早く大人になって、
父親と母親なんかには有無は言わずに、
お前を守るような絶対的な力を持つから。

だから、それまでここで待っていて。

冷たい雨は、熱い樹の涙を洗い流した。

最後に見たあの丸い目。
守れなかった、あの無邪気な瞳。

幼い樹は、
それきり泣くのをやめた。

風が吹いた。
暖かい風。

目を覚ます前に、樹はそれが風じゃないことを知った。
自分の前髪を目からどける優しい指。

眠ってしまったのか。

樹は、今自分がどこにいるのかを思い出して、
そして自分の頭の下の方の柔らかいものが、あかりの膝だと思い出して、
自分で呆れた。

無防備にも、ほどがある。

樹は目を開けた。

案の案、あかりが気がついて樹を見下ろした。

「お目覚めですか？」
無邪気な瞳。

それは、あの真っ直ぐな丸い瞳だった。

樹は、直線の雨を思いだした。
そして思った。

今の自分なら、もうあの子犬を一生守ってやれる。

あかりは膝の上から自分を真剣に見上げる樹を、
不思議そうに見ていた。

笑顔の記録

ピクニックも撤収になり、皆が帰り支度をしていると、雪丸があかりに声をかけてきた。

「ねえ、あかりちゃん。樹いっきの小さい頃の写真見る？」
手のひらに乗せたデジカメをあかりに見せている。

「見ます！見ます！」
あかりがはしゃいで言うと、雪丸はデジカメをいじって写真を呼び出している。

「懐かしいのがあるんだ。メモリカードにずっと消さずに取っておいてあるやつ」

雪丸は言いながら、目的のものを見つけるとあかりに差し出した。

カメラの画面に写っているのは、幼い頃の幼馴染たち。

幼稚園くらいだろうか、

お揃いの運動着でそれぞれカメラに向かってポーズを取っている。

薫がふざけて雪丸にのしかかっているのに、雪丸は声を上げているようだ。

明人は澄ました愛良の頭の上に、後ろから分らないように指で角を作っている。

樹いっきは皆のそんな様子を見ながら、指を指して笑っていた。
可愛い笑顔。

「わあ、皆様とっても可愛いらしい。この時から仲がよろしかったんですね」

あかりはにっこりと笑って写真を眺めた。

「樹いっきの笑顔もいいでしょう？」

他人に愛想が無いのは小さいころから同じだけど、

この頃までは、樹いっきも普通に笑ったんだ。でも、ある時を境に、

まるきり笑わなくなっただけね」

雪丸が言うのに、

「ある時って、何があったんでしょね」

あかりが心配そうに言う。

「さあ、詳しい事はわからないんだけど、

ある日を境に急になって感じだったよ。

だから、この樹きの笑顔の写真は貴重なんだ」

雪丸が言う。

あかりは樹きを目で追った。

薫に何か話しかけられて、頷いている。

その横顔は、美しいけれど何の感情も表情も無かった。

樹きさまは、どんな幼少時代を過ごされたのかしら。

その無表情を見て、あかりは思った。

あかりは自分がこの位の年の頃を思い出す。

母親も元気だった。

保育所からの帰り道、大声で歌いながら帰ったり、

お風呂で背中を流し合ったり、寝る前に枕を投げて遊んだり、

思い出せばキリが無いくらい、母親の記憶が蘇る。

片親だったけれど、母親はそれこそ舐めるようにしてあかりを可愛がってくれた。

他の何が足りていなくても、愛だけは溢れるほどあった。

今、もう母親はいないけれど、

それでもあかりが毎日楽しく笑えるのは、

やはり母親が惜しみなくくれた愛があるからだろう。

その愛は母親がいなくなった今も、

あかりの胸の中で、泉のように溢れている。

樹いつきの両親がいつも家を留守にしているのは、昔も同じだったんだろうか。どれだけ寂しい子供時代だったんだろう。

あかりは想像して、胸が痛くなるのだった。

30分ほど山道を辿って薫の別荘に戻ると、今夜開かれる慈善ダンスパーティの準備が進んでいた。使用人達は忙しそうに、会場の準備をしている。飾りつけ、ケータリング、音響のチェック、エトセトラ。かなり、盛大なパーティのようだった。

「あかりちゃん、集合は夜の7時よ。それまで部屋で休んでね。そしてクローゼットの中のドレスを着ること。」

もう仕事はしないでね。あなたは私のお客様なんだから薫に言われて、あかりは小さく頷く。

念を押して言われなければ、あかりは間違いなく、使用人達の手伝いに行っていたところだ。

「ああ！」

雪丸が声を上げた。

「しまった。ピクニックテーブルに、デジカメ忘れてきた！」
瞬間、あかりは雪丸に見せてもらった、あの幼い愛らしい樹いっせの笑顔を思い出す。

「明日取りに行けばいいわよ」

薫が言うと雪丸は肩をすくめた。

「そうだね。もう着替えもしなきゃならないし」

「気合入れて着飾ってよ！募金の額にも影響するんだから」

「了解」

雪丸は薫の勢いに苦笑して敬礼をした。

幼馴染達は、それぞれが与えられた部屋に、夜のパーティーのための準備をしに戻る。

あかりは部屋に戻り、クローゼットの中を見て、どう見ても、どのドレスも自分には身分不相応だとため息をついた。使用人の自分が、お金持ちの子息や令嬢の中に混ざってダンスパーティーなんて、やっぱり気後れがする。

窓の外で日が傾き始めたと思ったら、あつという間に暗くなって、あかりは雨が降り出したのに気がついた。

「雪丸さまのデジカメ」

あかりは窓の外を見て呟いた。

樹いつきのあの幼い笑顔のデータが入っている。
雨に濡れたら、まずいのではないだろうか。

あかりは急いで部屋から出ると、
グラスを磨いた時に、少し話をした薫の家の使用人の白石を探しに
走った。

パーティ会場のボールルーム近くに、白石の黒い使用人の制服姿を
見つけて、

あかりは走り寄る。

「白石さん！」

あかりを見て白石は言った。

「君、聞きましたよ。」

一之瀬家から、薫さまと同じ学校に通っているとか
他の使用人から、あかりの噂話でも聞いたのだろう。

あかりは白石の言葉に曖昧に笑うと、

「あの、お願いがあるのでですけど。」

傘と懐中電灯を貸して頂けないでしょうか」

意外な言葉に、白石は呆気にとられた。

「薫さまは君もダンスパーティに出ると仰っていたそうですよ？
今からどこに行くのですか？」

「昼間裏山にピクニックに皆さんが行ったのですが、

忘れ物をして来てしまって」

あかりが言つと、

「でも、もう暗くなってきたし、山の中はもっと暗いです」
白石が言う。

「大丈夫です、走って取りに行きますから。お願いします！」
あかりの切羽詰った様子に、白石は頷いて玄関へと歩き出した。

檜山家の別荘の玄関のシャンデリアが、煌々と光を灯す。慈善パーティに招待されたお客たちが、高級車を乗りつけ、続々と集まりだしていた。

会場のボールルームでは、生の楽団が、BGMにゆったりとしたワルツを演奏している。

着飾って席に着く客のテーブルに、使用人たちが飲み物を運び、若者と踊れるという楽しい催しに、年配の招待客たちの表情はにこやかだった。

席が着々と埋まっていくのを見て、真つ赤なドレスに身を包んだ薫は満足げだった。

「今年は私たちが優勝ね」

淡いピンクのドレスに身を包んでいる、愛良を振り返る。長い髪は綺麗にカールされ、いつもにも増して愛らしくて上品だ。

雪丸もブルーグレーのタキシードに身を包み、にこやかに顔見知りの客と会話をしている。雪丸を幼く見せるそのボブの髪は、タキシードには映え、いつもよりも雪丸を男らしく見せていた。

明人も今日は気障なクリーム色をしたタキシード。胸のポケットには緋色をしたハンカチを詰めている。つんつんと立たせた髪やピアスはそのままで、

下手するとホストのように見えなくもなかったのだけれど、その育ちの良さが自然と身の振る舞いに出て、いわゆるマダムキラーの、品のあるドンファンといった感じだった。

そして今年の寄付金稼ぎのホープ、樹^{いっき}。

しびしびといった感じだったけれど、薫が言ったようにきちんと正装をしている。

深いパープルのタキシードの胸には、シルバーのハンカチ。

幼馴染達は皆背も高く、すらつとしているのだけれど、樹^{いっき}のこの美しさには、誰もが一目置かざるを得ない。

四分の一のフランス人の血がなせる、色素の薄い茶色の髪と茶色の瞳。

白い肌^いに赤い唇。タキシードを着て佇んでいる姿は、まるで絵に描いた御伽噺の中の人物のように、現実味を持たない美しさだった。

幼い頃から見ているのに、薫は改めて樹^{いっき}の美しさに感嘆した。

美という言葉は、まさしく今夜の樹^{いっき}のためにあるようなものだ。

周りの年配の婦人の視線も、樹^{いっき}に集まっている。

薫はその様子を見て、にんまりと笑顔になった。

「薫、今夜も盛況ね」

ふと、後ろから声をかけられて薫は振り向く。

そこには従姉妹の麗華が、豪華な青いドレスに身を包んで立っていた。

「麗華、今夜は悪いけど、私たちが勝たせて貰うわ」
薫が腕を胸の前に組んで言う。

この毎年の恒例の慈善パーティで、薫と麗華の従姉妹は、友人たちを誘い、寄付金の額集めを競っていたのだった。

「手ごわいわね、確かに」

珍しく樹いっきがいるのを見て、麗華は目を細める。

「でも、こちらにも切り札があるから」

麗華が言った。

「婚約者が来るって言ったたら、参加するっていう返事を頂いてね」
そして自分の後ろを振り返る。

真珠色をしたスリムで上品なドレスに身を包んだ、

すらりとスレンダーな美しい女性が目に入って、薫は息を飲んだ。

樹いっきの許婚の、橘蓉子たちばななづきの姿だった。

前に会った時よりも、一段と美しさを増している。

儂げで潤んでいるような瞳、陶器のような白い肌、

微笑む唇の下の小さいほくろが、上品な色気を醸し出している。

細いのに、その体の曲線は豊かだった。

ここにも御伽噺の住人が飛び出して来てるわ。

薫は感心して、蓉子を見つめた。

樹いっきと二人並んだら、一体どんな感じに見えるんだろう。

それこそ、こんなに似合いの二人はいないに違いない。

「薫さん、ご無沙汰しております」

蓉子が薫に近づいて言う。

薫も頭を下げて、

「蓉子さま、珍しいですわね。こういった遊びに参加して頂けるな

んて」

薫が少し嫌味を混ぜて、でもにこやかに言う。

「久しぶりに樹さまにお会い出来るかと思ひまして。

あの方はつれないから、こうして会いに来なければ会ってくれませんか」

ぬけぬけと樹が来たから来たと言われて、薫は呆れて目をくると回した。

蓉子はまるきり気にせず、樹を見ている。

「私の未来の旦那さまに、ご挨拶に行つて参りますわ」

言つて、蓉子が樹に近寄つて行つたのを見て、

薫は従姉妹の麗華に、ひそひそと言つた。

「ねえ、いつから蓉子さまは樹に興味を持つようになったの？

前は知らん振りしてたのに」

「なんか、前に樹さんが街中で女子生徒と一緒に歩いていたのを、

車で通りかかつて見かけたのがきっかけらしいわよ」

麗華が早口で答える。

「家柄も釣り合つた親同士が決めた婚約だから、

蓉子もまるきり油断してたんじゃない？まさか、樹さんを、

誰かに取られるかもしれないなんて、思いも寄らなかつたんでし

よ」

麗華の言葉に、ほう、と薫は思う。

きつと一緒に歩いてたというのは、あかりのことだろう。

樹は最近、毎日あかりと車を使わずに一緒に学校に通つていると聞く。

「なんか、面白くなつてきたかも」

どうしても昔から蓉子が好きになれない薫は、小さくつぶやいた。

あかりは傘を開いた。

段々強まってくる雨に、一応雨合羽も借りて着ている。

服は一之瀬家の女中の制服に着替えていた。

一応仕事着だし、これなら濡れても屋敷に戻れば着替えもある。

懐中電灯を点ける。

心細い黄色い輪が、暗闇に雨を白く光らせた。

一刻も早く取りに行かなきゃ。

雪丸のデジカメだったけれど、

あかりは、あの樹いつきの幼い笑顔の記録を失いたくなかった。

なんの根拠もないのだけど、何故か、

あの幼い頃の樹いつきの笑顔を失ってしまったら、

もう二度と樹いつきが笑わないのではないかと思えるのだった。

足元に水が跳ね返るのも気にせず、あかりは暗い山へ向かって走り出した。

王子様とお姫様

「樹さま」

蓉子が声をかけると、樹は振り向いた。そして、声の主が誰だか分かると、樹は小さく落胆した。いつも感情を表さない樹のその仕事を、蓉子は見逃さない。

「どなたか、他の方を期待なさっていたのかしら」
プライドが傷ついたのを知られないように、蓉子は、なんとということもなくを装って言った。

「別に」
樹はいつもの無表情に戻って、蓉子に答えた。

「お久しぶりですわね」
樹は蓉子のその言葉に答えず、ボールルームの入り口の扉を見ていた。

一体、あかりはどうしているんだろう。招待客も着々と集まりだし、幼馴染も全て姿を揃えているのに、あかりだけはまだ姿を見せない。もうすぐパーティは始まる。

「樹さま？」

あまりに自分の存在を無視している樹に、

さすがの蓉子も奇立ちを覚える。

「久しぶりに会った、将来の花嫁の感想はどうですか？」

完璧な樹さまに似合うように、日々努力して参りましたのよ？」

蓉子の言葉に、樹は蓉子を見て、

「申し訳ないが、あなたが前にどうだったのかも覚えていないので、前との違いが分からないのです」

抑揚のない声で言った。

蓉子は小さく笑った。

「樹さまらしいですね」

樹は、蓉子を見なかった。

「今夜は、私はチャリティーを募る立場にもありますが、寄付をする方にも参加させて頂こうと思っっています。なので、樹さま、私と一曲踊って下さいませね」

蓉子が言う。

「あなたがダンスに興味があったとは」

樹は、蓉子を見ないで言った。

「ダンスに興味があるのでは無いのです。」

樹さま、あなたに興味が湧いてきたのですよ」

蓉子は少し声を大きくして言った。

「近い将来、夫婦になる間柄なので、

もっとお互いに、お互いを知る努力をしなければ」

樹はちらりと、そんな蓉子を見た。

蓉子は続ける。

「婚約者同士が顔を合わせていて、一緒に踊らないのも、変だと風評が立ちます。なので、その辺りはご考慮下さいませね。好むと好まざると」

最後の言葉は、八つ当たりのように言い捨てて、
蓉子は、樹いっぎの側を離れた。

しかし、蓉子は思う。

もっと人当たりが良ければ、樹いっぎは、

どれだけ素晴らしい婚約者になるだろうか。

あの麗しい見目、家柄、その計り知れない才能。

でも、天才はこうした偏った部分があるのは、
しょうがないのかもしれない。

蓉子は思っていた。

樹いっぎは、最上の家柄に生まれた天才だ。

その上あんなに美しいのだ。

他の細かいことは、容赦しなければいけないのかもしれない。

しかし、もう今までのようにはいかない。

蓉子は思った。

お互いの親が、お互いを添い遂げる相手だと定めた時から、
それまでは、蓉子は安心していた。

樹いっぎは、異性に対して興味も無かったようだし、
自分も同じようなものだったし。

しかし。

あの光景を見てからは、

蓉子の中で樹いっぎに対する考えは変わっていた。

蓉子は、衝撃だったあの光景を思い出す。

送迎の車の中から、たまたま見かけた光景だった。

樹が、同じ学院の制服を着ているけれど、
冴えないちびで、平凡な女と街で一緒にいた。

黒髪のポニーテール、機嫌が良さそうに、
にこにここと屈託なく微笑んでいる顔は、なんだか無性に蓉子の癩に
障った。

樹が、その冴えない女の顔を覗き込んで、
じっと見つめていた。

そして、言葉に耳を傾ける仕草。

唇の端に浮かんでいた小さい笑み。

一体、あの平凡な女は誰だったのだろうか。

「樹さまに相応しいのは、私だわ。」

他の誰でもない」

蓉子は呟いて、ボールルームの入り口をじっと見つめている、
樹を見ている。

「山って、こんなに暗いものなの？」

勢い良く、昏間通ってきた私道の山道に入ったはいいけれど、懐中電灯の明かりはほとんど足元だけを照らすのが精一杯で、あかりは、ほとんど手探りで歩いているようなものだった。外灯はひとつもない。

それでも、樹こいつのあの幼い笑顔がこの雨に濡れて、このたった今にも消えてしまいかもしれないと思うと、焦りがあかりの足を速める。

傘を折りたたみ、杖のようにして道を探りながら、あかりは歩いていった。

木々の上に降る雨は、大きいしずくに固まって、びしゃりとあかりの体に落ちてくる。

ざわざわと風にうごめく黒い木々の影が、何かの生き物に見えて、あかりは怯えた。

「正体みたり、枯れ尾花よ。怖いと思う心がそう見せるだけなんだから」

あかりは強気に声に出して言う。

道は上りであかりの息も上がり気味だ。

雨合羽の中は汗ばんできている。

「もう少し、もう少し!」

あかりは明るく声に出しながら、道を歩き続けた。

ようやく暗いながらも、開けた場所に出て、

懐中電灯の光を最大限に利用し、

そこが昏間、幼馴染達とピクニックをした場所だと分かる、

あかりはピクニックテーブルを探した。

暗闇にかすかにテーブルの影を見つけると、あかりは走って近寄る。

「あつた！」

懐中電灯の明かりに、テーブルの上の雪丸のデジカメが鈍く銀色に光って、

あかりは素早く手に取った。

デジカメは雨に濡れそぼっている。

あかりは合羽の下の濡れていない自分の服にデジカメをこすり付けて、

水を拭き取った。

データは大丈夫だろうか。

あかりは杖代わりに使っていた傘を開いてさすと、
雨をよけてデジカメのスイッチを押してみる。

途端、眩しいほどの白い光がデジカメの画面から溢れる。

「良かった」

あかりは画面に写真が映るのを見て、ほっと息をついた。

樹の幼いあの笑顔が、手の中に無事にある。

あかりはにつこり笑顔で、画面の幼い樹を見た。

「いつか、樹さまが、

またこんな風に笑えるようになればいいのに。

私で何かお手伝い出来る事があるなら、誠心誠意お手伝いしよう」

あかりは小さく呟くと、大きく頷いた。

樹はあかりの恩人でもあり、大事なご主人なのだ。

デジカメを合羽の中の胸の内ポケットにしまうと、

傘を畳んで再び杖代わりにして、あかりは来た道を戻り始めた。

遠くに薫の別荘の明かりが見え出したという時に、
あかりは大きく転んだ。

黒い地面に全身をついてしまう。

胸の内ポケットのデジカメだけを意識して、
後は無防備に転んだせいだった。

「あーあ」

びしょびしょになった体は、暗がりではどんな様子かも分からなかった。

「制服汚れちゃったかも」

情けなく呟きながらも、あかりはよいしょと起き上がって歩き続ける。

もう合羽も役目をなしていないくらい、あかりは全身濡れそぼっていた。

「でも、デジカメが無事だったし」

あかりは再び笑顔になった。

「制服は手洗えばいいわ」

薫の別荘の玄関口は、煌々と明かりがともされ、

入り口には正装をした使用人が、ベルボーイの仕事をしている。

中に入っていく招待客達も、みな着飾っていた。

あかりは玄関から漏れてくる明かりに自分の姿を見下ろして、

とてもじゃないけど、その玄関から出入り出来る格好ではないと思
った。

「裏口って、どこなんだろう」

あかりは玄関口から離れるようにして、

薫の別荘の建物の周りを歩き出す。

ふと、音楽が聞こえだしてあかりは耳を澄ました。
どうやら生の楽団のようだ。

ダンスパーティーはもう始まっているのだろう。

あかりは今の自分の立場も忘れて、思わず音楽のする方へと歩き出した。

一際明るい光が漏れている窓がいくつかあって、

あかりは吸い付けられるように、その内のひとつの窓に近寄った。

レースのカーテンの向こうに、広い部屋が見える。

昨晚、ダンスの練習をしたボールルームだ。

違うのは、たくさんの人がその部屋にいることだった。

真ん中のダンススペースの周りには、

たくさんテーブルが囲むように並べられていて、

招待されたのであろう、お金持ちらしく着飾った年配の男女が、

中央で踊っている人たちを、笑顔で眺めている。

テーブルの合間を、使用人たちが忙しそうに給仕をしていた。

あかりは窓の外から、踊っている人たちを眺めた。

曲はゆったりとしたクイックステップ。

弦楽器の演奏が最高にロマンティックだった。

たくさん踊っている二人組みの中に、
愛良もいる、薫もいた。そして明人、雪丸が目につく。
それぞれが、慈善の寄付を約束した相手なのだろう。
皆年配の人達と、手に手を取って踊っている。

また席から立ち上がって、
ダンススペースに歩いていくペアがいるのに気がつくとき、
それは樹だった。
樹は、他の年配の相手と踊っている幼馴染と違って、
まるで目を見張るような美しい若い女性の手を取っている。
でも踊り始める前に、その若く美しい女性も、
チャリティーと書かれている箱に何かを入れていたので、
やはり慈善のダンスなのだろう。

しかし、それにしても目を見張るような美しい二人だった。
樹の深いパープルのタキシードは、
その茶色の髪と白い肌に、これ以上はないというくらい似合っ
た。
真珠色をした上品なドレスを着ている相手の女性も、
儂げな美女で、二人はまるで御伽噺の中の王子とお姫様にしか見え
なかった。

この世に、こんなに美しい二人がいるなんて。

あかりは純粹に、樹と相手の女性の美に、
感嘆して、窓の外からため息をついていた。
自分の濡れそぼった髪から、泥水が滴っているのも忘れてしまっ
ていた。

そして、二人は優雅に踊りだす。

王子はお姫様の腰に手を回し、もう片方の手でリードする手を握る。お姫様は美しく微笑み、王子の肩に手を置き何かを囁いていた。王子とお姫様が踊ると、すぐそばのペアは体がぶつからないように、場所を空けるために振り返って、二人に見とれて足を止めてしまうのだった。

曲がワルツになる。

あかりはうっとりとして、樹いじと相手の女性が踊るのを見ていた。

お似合いのお二人。

たった今、恋が芽生えたりするのかしら。

心の中で呟きながら、あかりは何とも言えない、寂しいような悲しいような気持ちになるのを覚えた。

いつか、樹いじさまがご結婚されたら、

ご子息なりご令嬢なりのお世話が出来るといいな。
ばあや、なんて呼ばれたりして。

わざと心の中で明るく呟くのとだけけれど、

あかりは何故か、気持ちがふさぐのを感じていた。

王子様に憧れる気持ちは分かるけど。

あかりは転んだ時の泥がついている自分の手を見下ろした。

私は女中Aなんだから。

中に入れる裏口を探そうと、ボールルームから目をそらして、くるりと体の向きを変えたとき、すぐ足元の下が段になっていたのを忘れて、

あかりは思い切り体のバランスを崩した。

足がすべり、体が後ろ向きに倒れる。

手が覗き見ていた窓に当たり、そして窓は鍵がかかっていなかったのか、

あかりの体重を受けると、素直に部屋の内側にその扉を開いた。

あかりが倒れた勢いで、バーン！と大きな音をたて、

ボールルームのテラスの窓が開く。

あかりは泥まみれの体で中へと倒れ込んだ。

あたりから、騒然とした声上がる。

磨きこまれたフローリングの床に思い切り背中を打って、しばらくあかりは動けずにいたのだった。

どす黒い感情

「痛たたた」

打った背中痛さに顔をしかめるものの、はっとして目を開けて辺りを見回すと、

あかりは、真っ青になった。

泥と雨で濡れている体でフローリングの床に転がっている自分の周りでは、

綺麗に着飾って踊っていた招待客達がダンスを中断して、何事かとあかりを見下ろしている。

「す、すみません！」

あかりは叫ぶように言うつと慌てて立ち上がった、

そしてドジなことに、自分の着ている合羽の裾を踏んでしまって、また転んだ。

近くにいた年配の婦人の綺麗な水色のドレスに、濡れたあかりの手が当たってしまう。

年配の婦人は小さい悲鳴を上げてドレスの裾をつかみ、そして眉をひそめて、泥だらけで濡れそぼっているあかりを見た。

あかりはその婦人の嫌悪の表情に傷ついて、俯きながらもう一度立ち上がる。

「申し訳ありませんでした」

その婦人に頭を深く下げて、あかりはうな垂れながら、入ってしまった窓から、部屋の外に出ようと体の向きを変えた。

「あかりちゃん！」

部屋のどこかで薫の声がする。

あかりは振り向いたのだけれど、薫がどこにいるのか分からなくて、

また窓に向きなおった。

「あかり」

ふと声がして、あかりはまた振り返る。

樹いつきが自分のタキシードの上着を脱ぎながら、人をかき分けてこちらに来るところだった。

脱いだ上着をあかりの頭から被せる。

「私の連れです。大変な失礼をいたしました。」

「どうかお許してください」

樹いつきは、あかりが濡れた手でドレスを触ってしまった婦人の手を取り、両手で持つて膝を折りながら深く頭を下げる。

そして樹いつきが、その美しい顔でその婦人をじっと見つめると、みるみる間にその婦人の頬は紅潮して、笑顔になった。

「いいえ、いいのよ。気になさらないで。後で一曲踊っていただけると嬉しいわ」

「勿論です、マダム。では後ほど」

樹いつきは唇に小さく笑みを浮かべて婦人を見た後、

自分の上着を被せたあかりの背中を抱えて、

人を掻き分けて、広いボールルームの中を突っ切った。

「一体、何をやっていたんだ。どうしてこんな格好をしている」

樹いつきが自分の体を抱えながら呟くように、でも苛立つて言う。

「申し訳ありません、でも、樹いつきさま。」

私、わざと乱入しようとしたわけではなくて、

窓に鍵がかかっていなくて、こけて押したら開いてしまっ

しどもどろに説明しようとするあかりを連れて、パーティ会場を出ると、

樹いつきは、薫からあかりに与えられている部屋に向かった。

そして部屋に入り、バスルームに大またで歩いて行くと、

タオルを手にとってきて、あかりに差し出した。

被せた上着を恐れ入って自分の体から外し、手持ち無沙汰に持っていて、

びっしょりと頭から濡れているあかりを見ると、

樹は手を止める。

まるでフラッシュのように、その頭の中を雨の映像がよぎった。

心細く見上げる目。

今ならば、守ってやれた小さな存在。

もう二度と、同じ事は繰り返さない。

樹は小さくため息をつくど、

あかりに近寄って自分の上着を受け取り、

あかりの合羽を脱がせて、タオルで濡れた髪を拭いてやる。

「あの、自分で出来ますから」

あかりは恐縮して、樹からタオルを奪うようにして受け取った。

「一体、何をしていたんだ。どうしてこんなにびっしょりに濡れて

いるんだ」

樹がもう一度、繰り返す。

「雪丸さまの」

あかりは受け取ったタオルで制服を拭いながら口を開く。

「雪丸？」

樹が目を細めた。

「いえ、あの」

怒られたような気がして、あかりはおどおどしてしまふ。

最近、樹は雰囲気が変わってきたような気がする。

前はあかりのやる事、言う事に、もっと反応が無かったように思っているのに、

最近はどうして、ストレートに感情が返ってくるように思っている。

「雪丸さまが昼間お忘れになったデジカメを、山に取りに行ってみました。」

暗くて雨が降っていたので、転んでこんな有様になってしまつてあかりは顔を伏せてもう一度、樹いつきに頭を下げる。

「私の姿が汚れていて、玄関からはとも入れないから、

裏口を探そうとしていたのですが、途中で皆さんが、

楽しそうにダンスをされているところに通りかかったものですか

「ら

上目遣いで樹いつきを見ながら、

「見とれていたら、こけて部屋の中へ転がり込んでしまったというわけです」

あかりは肩をすくめて、小さくなりながら言った。

「何で、雪丸のデジカメなんか」

あかりを見ずに、樹いつきは言う。

「だって、この雨で駄目になってしまひそうでしたから」

あかりは言った。

「あいつはデジカメなんか、いくらでも持つているだろう。」

別に一つ二つ壊れたところで、何の不自由も無い。

何故、お前がこんな事までして、

雪丸のデジカメを取りに行かなきゃいけないんだ」

自分を見ないで言う樹いつきに、あかりは小さく首を傾げながらも、

「だって、ただのデジカメと違いますもの」

あかりは言った。

樹いつきの中で、

また今まで感じたこともないような感情が渦巻いていた。

雪丸の名前があかりの口から出てきた時には、
どす黒い何かが、自分の胸に生まれたような気がして、
自分で戸惑った。

あかりの顔を見られないほど、動揺していた。
どうしてこんな気持ちになるのだろう。

雪丸は幼いころからの、唯一無二の幼馴染だ。
かけがいの無い存在はずなのに、

あかりの口からその名前を聞いた瞬間は、
雪丸が疎ましくさえ思った。

どこかやはり、自分は体の具合が悪いのだろうか。
真剣に、医者にかかることを樹いっせは考えていた。

「見てください」

あかりが言いながら、自分の胸の内ポケットから銀色のデジカメを
取り出して、

樹いっせに言った。

「これが何で特別なのか」

昼間見せてもらったあの幼馴染の写真を呼び出して、樹いっせに見せる。
「懐かしいですか？」

幼稚舎の揃いの運動着で、それぞれカメラに向かってポーズを取っ
ている。

薫がふざけて雪丸にのしかかっているのに、雪丸は声を上げ、
明人は澄ました愛良の頭の上に、後ろから分らないように指で角
を作っている。

幼い自分は、皆のそんな様子を見ながら、指をさして満面で笑って
いた。

その写真を見た後、無邪気に自分を見るあかりの顔。

「この樹さまの笑顔、雪丸さまはおっしゃってました。

もう今はこんな風に樹さまは笑わないから、

とても貴重な写真なんだって。私はこの樹さまの笑顔が、

雨に濡れて消えてしまうのが、とても嫌だったんです。

だって樹さまが、またこうして笑えるようになるまでは、

どうしても失いたくなくて」

明るく言うあかりに、樹はただ黙っていた。

「この写真は証拠なんです。樹さまが、心から満面の笑顔で笑えるという。」

だから、私はこれからずっと、いつかまたこうして、

樹さまが笑える日が来るように、お手伝いをしていくつもりです」

あかりの真っ直ぐな視線から目をそらして、

樹は小さく首を振った。

さっきまでの雪丸へのどす黒い思いは、

たった今のあかりの言葉で消えてしまった。

不思議だった。

あかりは、樹の幼い頃の笑顔の記録を失いたくなくて、

暗い山へとずぶ濡れになって、デジカメを取りに行ったのだ。

俺の幼いころの笑顔を失いたくなかった。

その理由で。

「今からでも遅くはない。用意をしてパーティー会場へ来い。

待っている」

樹は言うど、あかりをちらりと振り返り、

自分のタキシードの上着を手に取ると、あかりの部屋を出て行った。

あかりはぼかんとする。

まさか、あんなに醜態を晒した自分に、
着替えてあの場に来いと言ったのだろうか。

あかりは大きくため息をついた。

樹^{いつき}さまの考えていることは、
想像するのが難しい。

自分は凡才で、樹^{いっし}は、
天才だからしょうがないのだろうか。

でも、あかりの主人だ。

言われた事には従わなければいけない。

住まわせてもらって、学校にまで行かせて貰っているのだから。

あかりはシャワーを浴びてから、着替えることにした。

でも、やはり、身分の高い子息、令嬢、

そして、お金持ちばかりの招待客が集まっている、

あのボールルームを思い返すと、

とても気が重くて、バスルームのノブをつかむ手は、
まるで鉛のようだった。

スイングワルツ

あかりはシャワーを浴びて髪の毛を乾かし、
下着になって部屋のクローゼットの前に戻ると、
改めて、中にかかっている美しいドレス達を眺めた。

どう考えてもこの鮮やかな色合いの、
フリルやレースで美しくデザインされているドレスを、
着ている自分が想像出来ない。

何度もクローゼットの中を見て、ようやく一番地味目な紺色のドレスを見つけると、

あかりはそれを手に取った。

紺色に銀系の刺繍が美しいけれど、フリルやレースは最小限だった。
上にエプロンをつけてその豪華な刺繍を隠してしまえば、女中服に見えなくもない。

そして、靴はクローゼットの中に用意されていた中でも、
一番低めのヒールを選ぶ。

洗って下ろしている肩より少し長い黒髪は、
簡単に両耳の上をピンで止めるだけにした。

髪の毛を上手にアップする方法も分からないし、
髪いつきに従って、少しだけボールルームに顔を出せばいいのだろうか、
これで十分だと、あかりは思った。

所詮、自分は女中なのだし。

部屋を出て、ボールルームへと向かう。

まだまだパーティは盛況で、生の楽団の音楽は途切れる事は無かつ

た。

激しく出入りしている使用人たちに隠れるようにしながら、あかりはボールルームの中を覗いた。

中央のダンスフロアでは、たくさんペアが踊っている。

樹いつきを始め、幼馴染の顔も見えた。

あかりはこっそりとボールルームの中に入ると、部屋の壁に近い端の方のテーブルに、空き席があるのを見つけて、そこに腰掛ける。

そして、遠目になるけれど、

樹いつきや他の幼馴染達が踊る姿を眺めていた。

真っ赤なドレスに身を包んだ薫。

いつものボーイッシュなショートヘアは、

今日はドレスに映えて、情熱的な女性らしく見せていた。

長い黒髪を今日は綺麗にカールさせている愛良。

淡いピンクのドレスが、乙女チックな愛らしさを醸しだしている。踊っている年配の相手に、優しく微笑んでいる。

「愛良さま、今日は一段と可愛いらしいわ」

あかりは感心して、呟いた。

ブルーグレーのタキシードに身を包んでいる雪丸は、

普段はそのボブの髪型のせい、中性的な感じがするのだけれど、踊っている相手をリードしている今日の様子は、まるで印象が違った。

紳士然として、とても素敵だった。

もともと樹いっせきの幼馴染の男性陣は、
背が高くスタイルがいい。
だから、こうしてきっちりとしたタキシードなどという格好をする
と、
とても見栄えがする。

クリーム色のタキシードを着ているつんつんヘアの明人は、
ようやく一人の相手が終わったと思ったら、
また直ぐに相手候補が手を上げたのに、天を仰いでいる。
きっともう何人もと踊っているのだろう。
勘弁して欲しいという明人のあからさまな態度も、
そのあっけらかんとした性格のせいか、
嫌味にならないようで、誘った相手は全く懲りずに明人の手を自分
から取ってしまう。
そしてまた明人はしぶしぶ、踊り始めるのだった。

あかりはその幼馴染達の様子を見て、ぷつと小さく吹き出した。
人気者は大変だ。

樹いっせきの姿を再び探すと、
今はもう誰とも踊らずに壁際に一人立って、
じっとボールルームの入り口を見ているのに気がつく。
見ていると次から次へとダンスの申し込みはあるようなのに、
樹いっせきは断っている様子だ。
どうしたんだろうと思いつながら、
さっきの失態が頭をよぎって、

この会場になっている、大きな部屋の反対側にいる樹いつきに向かつて、あかりは人ごみを掻き分けて歩いていく勇氣は、今は無かった。でも、もう少ししたら、挨拶に行かねばと思う。

ふとあかりは、自分の目の前の席に座るかなり年を召した、いわゆるお爺さんというのが相應しい、年配の男性がいるのに気がついた。

左右には、畏まって座っている部下なのだろうか若い男性もいる。

そのお爺さんは、小さい体に黒いタキシードを着ていた。

その後ろ姿は、頭は禿げてつるつる、

小さい体は痩せていて、服はブカブカだった。

ボールルームの音楽は、今はまたワルツ。

自分の前に座るそのお爺さんが、曲に合わせて足を小さく動かしているのに、

あかりは微笑んだ。

踊りたいんだろうか。

そんな事を思っていたら、

ふとその老人があかりを振り向いた。

目が合う。

じろりとあかりを見る強い目線、岩のように大きい鼻と、

一文字に結ばれている大きい唇。

頑固そうなお爺さんと、あかりは思った。

「不細工な娘だの」

その老人はあかりを見て、はっきりとした言葉で言った。
両隣に座る部下のような男性二人が、ひそかに色めき立つ。
振り返ってあかりを見る目で、

「どうか、お気になさらないように」と、あかりに言っていた。
あかりは、ふっと笑った。

そして、老人に目を戻して、

「ええ、良く言われます」

あかりはあっけらかんと、答えた。

「地味で、なんの取り柄も無い。鼻は低いし、目は丸いだけ、
見てもなんの印象も残らない顔だし、体は女として何の魅力もな
い造作だ」

渋い表情で、その老人はまだ続ける。

「服装も取立てて褒める要素もない。

そんなお前がどうして、こんな金持ちのチャリティーパーティの
ような、

華やかな場所にいるんだ」

苦虫を潰したように言って、その老人は口を閉じた。

そして、何か文句があったら言ってみよ、くらしいの睨み。

あかりは思わず、噴出して笑った。

そのあかりの様子に老人を始め、両隣の付き添いの男性たちもぎよ
っとする。

「そっくり！びっくりした！」

あかりは言って、またひとしきり笑う。

「ごめんなさい、いえね。前に母親と住んでいたアパートの管理人
さんが、

本当に同じような事を、いつも私に言っていて」

あかりは笑い終わると、老人に向きなおる。

「私は自分が器量が悪いのも、スタイルが悪いのも、貧乏育ちなのも、良く分かっています。

お爺さんが褒めることの無いっておっしゃった、このドレスも借り物ですし、

この華やかな場所は、私には不釣り合いな場所だっていうのも、重々承知です。だって、私は女中ですから。

本当の事なので、だから、別に腹も立ちません」

最後の言葉は、老人の両隣ではらはらしている二人に言った。

そして、あかりは笑った。あのあかり独特の笑み。

誰をも魅了する微笑み。

それを見た、老人の顔色が変わる。

「いつもいつも、意地悪な事ばかり言っていた管理人さんだったけど」

あかりは目を伏せて、柔らかな笑みを浮かべた。

「私の唯一の肉親の母親が死んだ時、一番に私のところへ駆けつけてくれたのは、

その管理人さんだったんです。そして、一緒に一晩、泣いてくれました」

あかりは顔を上げて、老人を見る。

「だからそれ以来、悪気のなくて口が悪い人ってのは、本当は心の温かい人なんだって、私は思っています。

きつとお爺さん、あなたもそうですね」

あかりがにっこり笑って言うと、老人はうるたえて目を伏せた。

老人は目を伏せたまま、でもあかりから体を逸らすことなく、そのままいる。

両隣の付き添いの男たちも、戸惑っていた。

「踊らないんですか」

あかりは小さく言った。

「さつき、足だけ踊ってましたよ？」

あかりが微笑んで言うつと、

「わしの知っているボールルームダンスは」

その老人が顔を上げて、あかりを真つ直ぐ見て言った。

「特殊で変わっているのじゃ。だからこういうパーティでは、

わしの相手を出来るものに出会った事がない」

あかりは驚いて聞く。

「どんなダンスなんですか？」

「若い頃、わしはずつとオーストラリアにおつてな。

そこで覚えたダンスなのじゃ。ニューボーグダンスって呼ばれて

おる」

その老人は寂しそうに言った。

あかりの記憶の中に、母親の言葉が蘇る。

「オーストラリアからのお客さままでね、

何度もいらして下さった方から教わったダンスなのよ」

それは、両手を繋いで踊る社交ダンス。

いわゆる、メジャーな社交ダンスとは少し違う。

ふざけて、夜布団の上で母親に教わり踊ったダンスが、

確か、ニューボーグダンスって言っていなかっただろうか。

皆が同じ決まった形を踊るといふ、少し変わった社交ダンス。

でも楽しいダンスで、

母親とはそればかりを、いつも布団の上で踊っていた。

二人手を取り合つて。

「あの、両手を持って踊るやつですよ？

最初はこんな出だしの」

あかりは覚えている振りを、

椅子から立ち上がったって小さい動作でして見せる。

最初はお互いの左手を繋いでいる状態から、

右手は高く上に振り、向き合ってお互いの手を振りながら前に進む。

両手をお互いに繋ぐことが多いし、今行われているパーティのダン

スとは、

まるきり雰囲気が違う踊りだ。

「それはニューボーグのスイングワルツだ！」

老人が叫ぶように言った。

それまでの頑固な表情はどこかへ消えてしまったようで、

今、あかりを見るその老人の目は、ひとつの事を訴えていた。

「わしと踊ってくれるか？」

やがて、老人はぼそりと呟くように言った。

「もう30年も、この踊りを踊っていない。

懐かしくて、愛しい踊りなんじゃ」

あかりは老人の言葉と思いに打たれ、

さつきかいた赤恥も忘れて、にっこりと笑って頷いていた。

「私のお母さんも、ニューボーグダンス大好きでしたよ」

老人があかりに手を差し出す。

あかりは、その手を取った。

小さくて細い禿げた老人が、地味な装いのあかりをリードして、人ごみを縫って、ゆっくりとボールルームの中央へと歩いていく。その様子を見た全てのものが、動きを止めた。

「海道会長？」

「あの若い地味な女は誰？」

「海道会長が踊るのか？」

「初めてだよな」

「信じられない！あの頑固じじいが踊るなんて！」

ざわざわと、あたりに声上がる。

あかりは手を引かれながらも、辺りの人々の様子が変わったのに、驚いて、どぎまぎしていた。

このおじいちゃん、なんか凄い人なの？

やがて人ごみを抜けて、老人とあかりはフロアの中央に立つ。曲が丁度途切れた。

二人で両手をお互いに握りあう。

「テンポは本来のニューボーグよりもゆっくりだな」
老人が言う。

「そうですね」

あかりも答えて、周りの様子を気にして、

ぎこちなく小さく笑った。

そして、気になっているなら聞いてしまおうと、
あかりは思い立って、

「あの、つかぬことをお聞きしますが」
早口で言った。

「お爺さんは、何か凄い権力者なのですか？」

辺りの様子があまりに違うので「

老人はなんと言う事もなしに、

「わしが凄いのではなくて、周りが大した事がないのじゃ」
にやりと笑って言うと、曲は始まった。

懐柔よりは魅了

音楽が鳴り始める。

「眠れる森の美女」のワルツを軽快にアレンジしてある曲だった。母親がよく気に入ってかけていた。あかりも大好きな曲だ。

左手を老人とつないで立ち、顔を見合わせる。

辺りが騒然としているのも、曲が鳴ったらあまり気にならなくなつた。

お爺さんも30年ぶりなんて言っていたけど、私だつてお母さんと踊つて以来だから、

本当に懐かしいダンスなんだもの。

このダンスの特徴は、男女が片手を繋いだまま、

お互いがまるで鏡のように手と足を上げたりすることだろうか。

普通の社交ダンスは組み合つて、そのまま二人で一緒に動くのだけ
れど、

このダンスは違っていた。あかりの勝手な自分の印象だと、

なんか幼稚園のお遊戯に近いような楽しさがある。

お互いが鏡を見ているかのように、同じ方向の手を振り足を上げ、クルクルと回つたりするのだ。

老人の小さい掛け声で、二人はステップを始めた。

思った以上にスムーズに、あかりと老人は同じステップを踏んでいく。

真横に足を踏み出しながら片手を高く上げる。次は片足を高く、両手を繋いで、繋いだ手を左右に大きく振る。

あかりは母親と狭い畳の部屋で踊ったダンスを思い出した。

げらげらと笑い転げて、二人で踊ったダンス。

「ほら、ここで背中を合わせて！すぐに三回転！」
母親の掛け声を思い出す。

老人とのダンスは、まるで母親と踊っているかのようにだった。

あかりのダンスに老人も何かを思ったのだろう、

いかつい顔ながら、にんまりと笑いながら踊っている。

あかりも口の両端を上げ、満面の笑みを浮かべた。

「楽しいです！」

あかりが言くと、老人は出会った時の相好をまるきり崩した。

「わしもこんなに楽しいのは、久しぶりじゃ」

動きの大きいイレギュラーな踊りなので、

あかり達の側にいる人たちは、自然と二人をよけて足を止めた。

悪いなと思いつながら、人がよけて場所が出来た分、

あかりと老人は遠慮せずに、大きく踊った。

ずっと部屋の入り口を見て、
いつあかりが来るのかと待っていた樹は、
ボールルームの中の雰囲気が変わっている事に気がついて、
中央で奇妙なダンスを踊っている、奇妙なペアがいるのに気がつ
いた。

「あかり・・・？」

背の小さいタキシード姿の老人と踊っている、
地味な紺のドレスを着ている若い女が誰だかわかると、
樹は目を見開いた。

あかりと踊っている老人は、海道グループ総裁の海道忠臣会長だ。
財界を仕切り「ドン」と呼ばれている、気難しくて偏屈な老人だっ
た。

薫は家同士の付き合いのせいで、毎年招待状を出していると言っ
ていたが、
北海道会長は、一度も踊ったことは無いのだと聞いていた。
踊りもせず、寄付もしないのに、
毎年来るのは嫌味だろうかと、前に樹に話していた事があった。
まあ、パーティだけに関わらず、
普段から北海道会長の気難しさは、
あちらこちらで、その逸話はいくらでも見つかっていた。

その北海道会長が、見たことも無いような笑顔を浮かべて踊っている。
あかりの顔を見つめてステップを踏みながら。
樹は驚いた後、目を伏せて小さく笑った。

そう、あかりのあの笑顔に見つめられたら、

どんな偏屈でも、心を動かされる。

自分もその一人だ。

樹は心の中で呟いた。

しかし、今あかりに触れている老人の海道会長にも、あの電流のような痛みが、胸に走っているのだろうか。

そんな事を自分で思ったくせに、樹は不快だった。顔を上げて、海道会長をじっと見つめる。

「ねえねえ、樹」

いつの間にか、真っ赤なドレスを着ている薫が近くに来ていた。

「あかりちゃん、何で海道会長と踊っているの？」

びっくりしている表情で、薫は踊っている海道会長とあかりに目を向けたまま、

樹の肩を叩いて言う。

「俺に聞かれても分からない」

多少いつもより抑揚のある声に、薫は樹の顔を見る。

「あなたも驚いているっていうわけね。しかし、あかりちゃんって」

薫は踊っているあかりに目を戻して、

「予測不能な不思議な子だわ。どうやってあの偏屈じじいを懐柔したのかしら」

しみじみ感心したように言った。

「懐柔じゃない」

樹は、ぼそりと言った。

「魅了だろう」

薫はあかりをじっと見つめる樹を見て、小さく首を振る。

魅了されてるのは、あなたね。

薫の声に出さない言葉。

いつか、辛い事が起こるかもしれない。
薫は美しい幼馴染の横顔を見て思った。

「でも、私はあなたの見方だから」

薫が声に出して言うと、樹いつきは不思議そうに薫を見た。

「見方だから」

もう一度、薫は言う。

樹いつきは、小さく唇の端に笑みを浮かべた。

「そりゃ、心強いな」

その言葉に、薫は目を伏せて肩をすくめて答えた。

幼い頃、樹いつきはこんな笑い方はしなかった。

あかりが、樹いつきに何かを取り戻してくれるのだろうか。
辛い結果になってしまっても。

ただ見守るだけだ。

薫は思っただった。

曲が終わった。

あかりと海道会長は、お互いに手を取り合ったまま、
息を弾ませている。

大きな拍手が起こった。
ボールルーム中の拍手。

海道会長は左手を大きく天に上げて、くるくると回して下に下ると、同時にお辞儀をする。あかりは噴出して、隣で腰を折って普通にお辞儀をした。拍手はますます割れんばかりになった。

「器量は悪いが」

海道会長が言った。

「お前は素晴らしい」

あかりは笑って、

「私のお母さんも、同じことを良く言ってくれてました。

このダンスを教わった母親です」

海道会長の手を、もう一度握って言った。

「ところで、お前はどこの女中なんだ？」

海道会長が聞く。

「一之瀬家です」

あかりが答えると、会長は何か思うことがあったのか、目を細めた。

「ほう。では、これからも遠慮なく会えそうじゃな。

一之瀬樹には、わしも一目置いているからの」

会長は言々と笑った。

「樹さまに・・・」

あかりは呟いて、そしてハツとする。

暢気に会長と踊っていたけれど、

あかりはまだ、樹に挨拶に行っていない。

真っ青になる。

樹は怒っていないだろうか。

「そうそう、確かこれはチャリティーだったのだなあ」

思い出したように言う海道会長は、

向こうの席に座っている自分の部下に目配せをする。

途端に男が飛んできて、会長にペンと小さい冊子をさし出した。

「お前の好きな数字は？」

会長が言う。

必死に樹を目で探していたあかりは、

「名前があかりという三文字なので、3が好きです」

上の空で答える。

「そうか」

会長は言いながら、手に持った冊子にサインをした。

ビリリと一枚破り、チャリティーと書かれている箱にそれを入れた。

「また近いうちに会おう。わしの知っている人間の中には、

お前しか、わしとダンスを踊れる人間はいないのでな」

あかりは気もそぞろに、会長を見てお辞儀をした。

禿げて痩せていて、小さい背で黒いタキシードを着た老人、

海道グループの総裁は、満足げにボールルームを出て行った。

側近が後を追って出て行く。

このパーティの主催の薫が面白そうに、

チャリティーボックスに走り寄る。

「あの偏屈爺さんが、一体いくら募金したのかしら」
薫の呟きは、たった今このボールルームダンス会場にいる全ての人間の呟きだ。

箱の中を探して、薫は一枚の小切手を見つめる。
海道のサイン。

「3,000万！」
薫が叫んだ。

ボールルーム会場に歓声が溢れる。
金額の大きさというよりも、
海道会長を動かしたあかりの凄さに。

辺りの全ての人が、自分を見て拍手をしてくれるのを、
あかりはぎこちなく、心もとなく見て苦笑っていた。

一曲踊っただけで、3000万の寄付。
どれだけ凄い人なんだろうか。
感覚が、今生からずれているとしか思えない。
こんなに不安定な世情の中でも、
チャリティーとはいえ、他愛無い遊びのために、
3000万も、ぼんと払える道楽者もいるのか。

あかりは心の中で呟きながら、
出来たらもう二度と、
あの老人には、会いたくないかもしれないと思った。

拒む理由

あかりは必死で探した樹いつきの姿を見つけると、
そちらに向かつて人ごみを掻き分けて走った。

「樹いつきさま！申し訳ありません」

あかりは言って、樹いつきに頭を下げる。

「真っ先にご挨拶しなきゃいけないのに、

ふと知り合ったようなお爺さんと踊ってしまっ

樹いつきは、ずっとあかりを目で追っていて、

自分に駆け寄ってくる姿も見ていた。

目の前で恐縮して深々と頭を下げるあかりに、樹いつきは小さく笑って、

「興味深い物を見せて貰った。本当にお前は面白い」

言くと、片手を伸ばしてあかりの手を取った。

あかりは顔を上げて、自分の手を取った樹いつきを見る。

樹いつきはあかりを見ずに、自分が取ったあかりの手を見ていた。

何も言わずに、まるであかりの手の感触を味わっているような樹いつきを、
あかりは不思議そうに見る。

「そちら、どちらかしら」

ふと、声がしてあかりは振り向いた。

樹いつきもあかりの手から、その声の主に顔を向ける。

それは、あかりが山から戻って、泥だらけで窓の外からポールルル
ムを見た時、

樹いつきと踊っていた、あの真珠色をしたドレスを着ているスレンダーな
美女、

唇の下のほくろが印象的なあの人だった。

あかりは別に根拠は無いけれど、

何だか咄嗟に、樹の手から自分の手を引き抜いていた。

樹が自分を見るのが分かる。

あかりは何だかどちらの視線にも耐えられなくて、俯いた。

「うちの女中だ」

樹が抑揚の無い声で言った。

その美女は樹から目を離すと、あかりを見た。

「私の名前は橘蓉子。樹さまのフィアンセよ。」

あなたも一之瀬家の使用人なら、私の事を覚えていて頂戴ね」

あかりは言われて、蓉子を見る。

自信に溢れているその表情、美しさ。

あかりは納得がいつて頷いた。

この位の方でなければ、樹さまには不似合いだ。

「あかりと申します。新参者の女中です。」

どうか、よろしくお願いいたします」

あかりは深々と頭を下げて、顔を下に向けたまま後ずさりして、二人から離れようとした。

大分離れて背を向けたあかりの手を、後ろから樹が掴んだのに、あかりは驚いて振り返った。

「蓉子、あなたとはもう踊っただろう」

樹は淡々と言って、蓉子を振り返った。

「一度だけという約束だ」

蓉子は苦笑した。

「樹さま、あなたが誰かにそんなに執着したのを、

初めて見ましたわ。その使用人は、あなたの愛人なのですか？」

あかりは蓉子の言葉に、ぎよっとする。

何を言っているんだろう、この方は。

「あなたの大叔父さまのように、そういう自分と不釣り合いな庶民を自分の物にするのが、

やはり、あなたもお好きなのですか？」

蓉子が続ける。

「まるで捨てられた子犬に情をかけるような、自己満足ですわね」

樹いつきの中で、あの強い雨が蘇いつきる。

すがりつく丸い瞳。無防備で、無力な。

樹いつきは、自分の中に蘇いつきった記憶に、

あかりの手を掴む自分の力が抜けるのを感じた。

「お言葉ですが」

あかりは蓉子に近寄って言った。

その蓉子を見る瞳には何の迷いもなく、真っ直ぐな力がある。

蓉子は少したじろいだ。

「私の母親は、確かに樹いつきさまの大叔父さまと好き合いました。

でも、母親は大叔父さまの物になったわけではありません。

経済的な事と言うなら、その時の母親はちゃんと自分で働いて私を養ってくれました。

甘えているとしたら、今の私です。

今はもう亡き、樹いつきさまの大叔父さまのご好意に、まるきり甘えて

いるのですから。

なじるなら、私をなじってください」

あかりは少しの間、口を閉じて、

「それにもう一つ」

また一歩近づいて蓉子を見て言う。

「捨てられている子犬に情をかけて、何が悪いのですか？

知らん振りして、捨てられた子犬なんてどうでもいいと、

取るに足らないものだど、その小さい命を助けようと一生懸命になつた人に、

自己満足だと言い切れるあなたは、一体誰なのだろうと私は思います。

どんな命同士にも、不釣り合いなんてありません」

強く言いながらも、あかりは目を伏せた。

「女中のくせに、言葉が過ぎました。どうかお許してください」
あかりは頭を深く下げた。

樹いつきの立場がある。

一之瀬家の女中であつても、

その子息の婚約者に、カツとなつたとは言え、

こんなにでしゃばって物を言う使用人が、

許されるとは到底思えない。

あかりはクビを覚悟した。

もともと恵まれすぎていた環境だ。

無くしてしまつても、当たり前だった。

「もういいだろうか？」

樹いつきが言う。

その視線は蓉子に向いていた。

「もう一曲、俺はどうしても踊りたい」
樹は言^いつて、あかりの手を再び掴んだ。

「あなたに、私を拒む事は出来ません」
強い口調ながら、震えを隠せない蓉子の言葉。

「今までは、俺に拒む理由が見つからなかっただけだ」
樹は答^いえた。

あかりは二人の間に起こっている無音の何かに、
少し怯えた。

ボールルームの曲は「the shadow of yours
mile」になる。
今までの曲と感じが違^{ちが}うのは、ラテン系のダンス曲になったからだ
ろう。

それでも慣れていている者たちは、スムーズに踊りを変えていた。
モダンのダンスを、そのままアレンジして曲に合わせるのもリード
側のテクニク。

まさしく、樹は手本の^{てほん}のように、
あかりを導いた。

「樹さま、蓉子さまの元に早く行って差し上げた方が」
あかりは踊っている場合じゃないと、樹を^いつて言^いう。
「あかりは俺と踊るのが嫌か？」

樹は小さく訊いてきた。

「そんなわけないじゃないですか！私が言いたいのはそのじゃなくて」

「俺は、お前と踊りたい。お前と一緒にいたい。今、あかりに触れていたい」

淡々としていて、感情のうねりなどはまるきりないけれど、まるで駄々っ子のような言葉を言う樹に、あかりは驚いた。

「……分かりました」

しぶしぶ頷いて、あかりは樹のダンスのリードに体を任せた。

必要とされること

「しかし、驚きだね」

パーティーが終了し、招待客が全て会場のボールルームから退室して帰ると、

赤いドレス姿の薫が、チャリティーボックスを開けて中身を確認していた。

青いドレスの従姉妹の麗華もやって来て、薫が集計した結果に口を開いた。

「想定外の大穴だったわね」

箱の中に入っているのは、全てがサイン入りの小切手だ。

誰がそのサインの主の相手をしたのか振り分けて、

チャリティーキングがクイーンを決めるのだが、

今年はダントツ、海道会長と踊ったあかりがチャリティークイーンだった。

「完敗よ。来年こそ負けないんだから」

麗華は言つと、薫に手をひらひらと振って会場を出て行った。

薫はため息をついて、さっきまで二人で踊っていた、

樹いつきとあかりに目をやる。

あかりは雪丸と話をしていた。

雪丸が昼間、ピクニックをやっていた場所に忘れてきたと言っていたデジカメを、

あかりが差し出している。

きつとあれを取りに、あかりは雨の降る夜の山に一人で入って行ったのだらう。

雪丸はデジカメをいじって、中に大切だったデータでも入っていたのか、

中身が無事なのを大げさに喜んでいる。

「頭から濡れて、転んで泥だらけになってまで、暗い森に、雪丸のデジカメを取りに行くなんて本当に変わった子。根っから性格の良い人間って本当にいるのね。天使みたいに」

薫は小さく呟いた。

そして、樹のあかりを見ている表情が、いつもと違う気がして、薫は首を傾げた。

樹はあかりと出会ってから、日に日に少しずつ変わっていく。

一体、何が違うのだろう。

あかりを見て目を細める樹を、薫はじっと見た。

そして、気がつく。

樹は他の人を見る時に、目を細める事が多い。癖といってもいいくらいだった。

しかし、いつも目を細めているときには、

まるで視線にひやりと冷たい温度が感じられるくらい、冷静という言葉どおりの、

冷たく静かな視線であった。

今、あかりを目を細めて見ている樹の視線は、温かかった。

他の人が見たらなんともし思わない程度だけれど、いつもの樹の冷たい視線を知っている者ならば、はっきり分かるほどの違いだ。

薫が二人を見ていると雪丸と話を終えて、あかりがこちらにやって来る。

樹も一緒だ。

「薫さま、樹さまは、明日ニューヨークに出発されるそうなので、今夜はもうお部屋にお戻りになるそうです。」

明日一旦、一之瀬の屋敷に戻って、

荷物のご用意をしなければなりませんし、私も早めにお暇頂こうと思っております。

よろしいでしょうか」

「いいもなにも、今日のチャリティーパーティーは、

あかりちゃんのおかげで、大収益よ。これでどれだけの恵まれない人が助かることが。」

雨に濡れてまで雪丸のデジカメ取りに行ったり、あの偏屈じじい相手にしたりして、

今夜は疲れたでしょう？部屋でゆっくり休んでね」

薫が言うと、あかりはあの笑顔でにっこり笑った。

「いえいえ、本当に今日は楽しい一日でした。一生忘れません！」
つられて薫も笑ってしまう。

本当に、この子の笑顔は。

樹は、あかりを見て笑っている薫を見て自分も小さく笑うと、

あかりの背に手を添えて、部屋を出て行こうとした。

「樹、今度はどのくらいニューヨークへ行っているの？」

薫の言葉に、樹は振り向いた。

「一週間だ」

言って歩き出そうとして、樹は足を止めた。

そしてまた、薫を振り返る。

「俺がいない間、あかりを頼む」

あかりも薫も、樹の言葉に驚いた。

薫は大きく息を吐いて、目をくるりと回す。

「そんな言葉、あなたから初めて聞いた。分かっているわよ」
笑顔になって言う。

「樹の大事なあかりちゃんは、
あなたのいない間、ちゃんと守ってあげるわよ」

樹は薫を見て、そしてあかりと一緒に部屋を出て行った。

あかりは、自分の背中に手を添えて歩いている樹を振り返る。

「樹さま、一週間いらっしやらないのですか」

無邪気だけど、寂しそうな口調。

「樹さまのいない一之瀬邸は、きっと火が消えたようになりますね。
寂しいです」

樹の廊下を歩く足が、少しの間止まる。

自分がいなくなって寂しいなどと言われたのは、樹は初めてだった。

自分がいなくて寂しい。それはどういう事なんだろうか。

樹の中に純粹な疑問が生まれている。

自分は、あかりにとってどういう存在なのか。

単なる仕事で雇われている、主人というものではないのか。

そして、普通、仕事で雇われている主人が不在の方が、

雇われているものは気が楽なはずだ。

それは、樹の父親の経営している企業の従業員の全てがそうだからだ。

「樹さま？」

あかりが笑顔で言う。

「お部屋に着きました。どうか、ゆっくり休んで下さいね」

薫に与えられた樹部屋の前、あかりが扉のノブに手をかけている。

樹は我に返って、あかりに頷くと、
あかりに開けられた扉の中に入っていった。

樹が部屋の中に入っていくと、
扉を閉めて、あかりは小さく息を吐いた。
今夜の樹は、雰囲気違った。

「俺は、お前と踊りたい。お前と一緒にいたい。今、あかりに触れていたい」

最後のダンスを踊った時の、樹の言葉を思い出す。

樹さまは、

あんなに自分の感情を即座に言葉にするような人では無かったのに。
一体、何があつたのだろう。

あかりは思った。

樹の部屋の前に佇む。

こうしていても、答えは見つからない。

あかりは自分の部屋へ向かった。

自分の部屋に戻って、あかりはドレスを脱ぎ、
もう一度ざつとシャワーを浴びて、
持ってきていたパジャマに着替える。

白地に太陽の柄が、漫画チックにデザインされているもの。

長袖長ズボン、これはあかりが中学生の頃から愛用しているものだ。

ベッドの上に座って、グラスに入れた冷たい水を飲んで、あかりは大きいため息をついた。空になったグラスをサイドテーブルに置く。

ほーっと息をつく時間。

あかりが自分に戻れる時間だった。時刻は午後11時過ぎ。

あかりは両手を合わせた。毎日、寝る前にする習慣だ。

「今日も本当に経験と感動の日でした。有難うございます。明日も、精一杯生きたいと思います」
誰に言うわけでもなく、独り言だけれど、これはあかりにとっては、大事な儀式だった。

そんな独り言を言っている時、あかりの部屋の扉を誰かがノックした。コンコン。

あかりは固まって、扉を見る。

一体、誰だろうか。

あかりは自分の格好を見下ろして、でも着替える余裕も無かったので、仕方なく、ベッドを降りると扉に近づいた。

「どなたですか？」

扉のこちらから言つと、

「俺だ」

扉の向こうから、樹いっきの声がする。

「樹さま？」

あかりは扉を開けた。

「こんな姿で申し訳ありません」

あかりはパジャマ姿で謝りながら、
でも心配げに樹いっきを見る。

「どうなさつたのですか？」

「この所、良く眠れなくていたんだが、

今夜も同じで、どうしても眠れない」

樹いっきが言う。

やはり部屋着に着替えたのだろうか、

柔らかかそうな、白いコottonの上下の長袖とズボン姿だ。

「別に眠れないのは普通の事かと思つていたんだが、

今日の昼間、お前の膝の上で眠つた時は、

本当に我を忘れて眠れた。俺はお前がいればもしかしたら、

眠れるのかもしれない」

樹いっきは目を伏せて言う。

「俺の部屋に来て、俺が眠るまででいい、

一緒にいてくれるか？」

樹いっきのその言葉には、言葉以外の思いは無いのが、
あかりは分かつた。

樹は単純に眠りたいのだ。

単純に眠りたいのに、眠れないという葛藤とは、
一体どんなものだろう。

さぞかし、辛いだろう。

でも、ベッドに入れば即座に眠れるあかりには、
その苦しみは理解出来なかった。

あかりは目を伏せている樹を見て、その肩に手伸ばした。

「樹さま、それくらいお安い御用ですよ？」

樹が顔を上げる。

「いいのか？」

あかりは樹の思いつめた表情を見て、笑ってしまふ。

「こんな変なパジャマ姿の添い寝で良ければ」

あかりが言つと、樹は目を細めた。

樹の部屋に行った。

あかりはベッドのヘッドボードに自分の背を預け、座っていた。

その自分の膝の上に頭を乗せ、あかりの指を指先で握り、

樹は目を閉じていた。

寝てしまつたら、いつでも部屋を出て良いと、

樹には言われていた。

しかし、あつという間に、

樹は寝てしまつた。

美しい寝顔だった。
樹はすっかり寝入っているのに、
あかりの方が、去りがたかった。

自分の人差し指と中指を、
樹の親指と人差し指が握っている。
こそばゆくも、嬉しいと思う。

人が生きていて、一番喜びを覚えるのは、
誰かに必要とされている瞬間だという。

今この瞬間、確かにあかりは自分が、
樹に必要なだと思われているのを感じて、
幸せだった。

意外な添い寝

「いつてらっしゃいませ」

あかりを始め、一之瀬家の使用人が玄関口で、

樹いつきの乗った車に頭を下げる。

車は空港へと向かって走り出した。

屋敷の門へと去っていく車を見届けて、使用人たちは屋敷の中へ戻った。

あかりは小さく息を吐いて、

自分の部屋に戻ると、学院の制服に急いで着替えて、カバンを持って屋敷を出た。

今朝、目が覚めて、

あかりは自分が今どこにいるのか気がつくと、自分で自分に度肝を抜かれた。

昨夜、樹いつきを寝かしつけた後、

綺麗な寝顔に去りがたくいたら、なんと自分もそのまま眠ってしまったらしく、

それもずうずうしくも、樹いつきの隣に体を伸ばして、

ちやっかりと、隣で同じ毛布をかぶって寝ていたのだ。

樹いつきは、あまり動かないで眠るような静かな寝相だし、

あかりも、寝たままの姿勢で朝まで寝ているような生真面目な寝相

のタイプなので、
樹いつきの体にあかりが自分の足を乗せてしまうような、
不敬な事はしていなかったけれど、
例え仕事として、樹いつきを寝かしつけたとはいえ、
その後、同じベッドに一緒に入って寝てしまうということ自体が不
敬で、
使用人としてあるまじき行為には変わらない。

どうしよう、どうしようど、
目覚めたまま、あかりが固まって動揺していたら、
隣で眠る樹いつきが、ぱちりと目を開けたのだった。

満員電車の中のように、近い距離で樹いつきとあかりの目が合う。
でも満員電車の中ではない。樹いつきのベッドの中だ。

最高潮にどぎまぎと動揺して、何も言えずにいるあかりに、
目覚めた樹いつきは、にっこりと微笑んだ。
「あかりが隣にずっといてくれたのか。だからこんなにぐっすり眠
れたんだ。」

何年ぶりだろう、朝までぐっすりと眠れたのは「
あかりが初めてみるような、樹いつきのにこやかな笑顔だ。
今まで口の端に笑みを浮かべることがあっても、
こうして樹いつきの目までが笑みを浮かべたのは、初めて見た。」

樹いつきは頭の下に手を入れて、改めてあかりの方に体を向ける。

「しかし、不思議なものだな。朝目覚めた時に隣に誰がいるという
のは」

言って、あかりを見た。

「し、し、使用人が、ご主人が朝目覚めた時に、
ベッドの中で、そのお隣にいるなんて、あり得ません！」

あかりはようやく金縛りのような、
自分の驚愕の呪縛から動けるようになると、
慌てて樹のベッドから降りた。

漫画ちつくな太陽柄のパジャマのまま、樹の部屋の扉へと走る。

「本当に申し訳ありませんでした！」

半べそをかいて、あかりが叫びながら扉に手をかけて外に出ようと
すると、

「あかり」

樹が声をかけてくる。

あかりは動きを止めて、恐る恐る樹を振り返った。

「有難う」

樹は頭の下に手を入れたまま、

あかりを見て言った。

その言葉は、なんの屈託もなく、

もちろん怒りなどもない。

あかりは恐縮して、頭を下げて樹の部屋を出たのだった。

これが今朝の、樹がニューヨークに向けて去る前の出来事。

今日は、あかりは久しぶりに、一人での登校だった。

隣に並んで歩く、背の高い樹の存在がないというのが、
こんな寂しいものだったのかと、あかりは思う。

満員電車の中、今日は守ってくれる樹がない事に、
どれだけ自分が恵まれているのかを、再び思い知っていた。
主人に守られる使用人なんて、普通はあり得ないのだ。

「今頃は空港だろうな、樹さま」

あかりは寂しく思いながらも、自分という人間の幸せさをもったいなく感じて、元気を出さなければと、笑顔になった。

学院の校門にたどり着くと、人影が飛びついてきて、あかりはびっくりして悲鳴を上げてしまった。

待ち伏せして、ずっとあかりが来るのを待っていたらしい。

「あかりさん！」

声の主を振り返って、あかりは驚く。

「白石さん！」

隣の公立の高校の制服姿のその人は、薫の別荘でグラスを磨くときに出会った、使用人の、白石亨だった。

「どうしたんですか？どうして、ここに？」

あかりは驚きを抑えて、亨に訊く。

「君にお願いがあったから」

亨は言つて、照れ臭そうに笑顔になった。

「一体、どんなお願いなんでしょう」

明るくも、少し不安な気持ちを感じずに、あかりは亨に訊いていた。

ニューヨーク。

樹は、父親の克己の会社の会議に出席していた。

しかし、じつと黙って会議の様子を見ているだけだった。

樹が参加するようになってから、

役員会議の時、参加者達の態度が緊張のため硬化していると、

社長である樹の父親がいった。

確かにそうだと、樹は思った。

樹がいると、気が抜けないからだろう。

会議室。

細長いテーブルの左右に、社の研究部門の役員達が並んでいる。

総勢20人。

それぞれの主張のための発言が、今は途切れていた。

樹は、父親である社長の克己を見た。

克己が樹に頷く。

たかだか17歳の自分を、ここに集まっている大人は恐れている。
愚かな。

樹は、こういう瞬間を体験する度に、

虚しくなってしまう。

今は単発だけれど、

近い将来、17歳を畏れるようなこんな大人たちを、

ずっとまとめ続けなければいけないのだ。

「トップマネジメントは事業部に独創性が必要だとか、新製品を考
えろとか、

創造性をもっと発揮しろ、などというお説教は絶対にしない方が
いいでしょう。

なぜなら、その開発者達の上に立つあなた方が、それでは少しで
も新しいものを、

同じように考えられるか、ということだからです。

上に立つ者が考えられなくて、部下が出来るでしょうか。

では、どうすれば開発者達は、新しい発案を思いつけるのでしょ

う」

樹は、会議の参加者20人を見回して言った。

「分かる方いませんか？」

樹は、もう一度言う。

誰も手を上げなかった。

「研究者の自分の仕事三分の一を、まるきりその各々の仕事とは関
連の無い、

他の研究目的に当てさせる事です。常に新しい事に目を向けさせ
なければ、

どんなに優秀な研究者であっても、新しい発見は出来ません」

樹はあたりを見回して続けた。

「新しいものを考えなければ、新しいものは見つかりません」

「研究者に、己の専門外の事をさせるのは、

無駄なのでは？」

20人の内の一人が手を上げて、恐る恐る言う。

「創造性の開発を、単なるお題目として考えるのではなく、新しい可能性を追求して、障害にも臨機応変に措置が取れるようなことが、

企業として内臓されていないのであれば、そちらの方が問題だと私は考えますが」

樹は言つて、発言した役員を目を細めて見た。

自分の保身ばかりを考えているか、困難を見ない振りをしてやり過そうとしている輩め。

発言の主は、目を伏せて黙った。

「観念論者はいりません」

樹は、きつぱりと言った。

「今後は実行派の人間を選びます。もちろん、個人的な理論にはなく、

会社の方針に従った実行派ですが」

樹のその発言の後は、誰も何も言うものがいなかった。

こんな会議やミーティングが、一週間続く。

一日目の会議を終えて、ほんのしばらくの自由時間に、

ニューヨークの荒い波動を感じる、雑然とした街を歩きながら、

樹はため息をついた。

今朝目覚めた時の、あの清清しさを忘れられない。
あんな清々とした気持ちは、初めてだった。
あかりが隣にいた。

同じ毛布をかぶり、同じ朝のぬくもりの中に。

あかりは、なんて特別な存在なんだろう。

あかりがいる限り、毎日ぐっすりと思えると思うと、
それだけで、樹いっきの心は軽くなる。

例え、このニューヨークでどれだけ不眠になろうと。

あるカップルが、ガラスのウィンドウを二人で眺めている。

ふと目に付いて、樹いっきは足を止めた。

それは宝飾店だった。

アクセサリーの店。

樹いっきは少し足を止めて、そして店の中へ入っていった。

自分でも驚いている。

こんな店に、自分が用事があるんだろうか。

指輪、イヤリング、ピアス、ネックレス、ブレスレット、アンクレ
ット。

宝石で美しく作られた装飾品を眺めながら、

いつしか、あかりに似合う物を探している自分に、樹いっきは小さく笑っ

た。

俺が誰かに、何かを贈りたいと思っているなんて。

でも、あかりを思うと、

ピアスや指輪などの宝石の装飾品は、到底似合わないし、もし、贈ったとしても、仕事熱心で謙虚なあかりは、身に着けないだろう。

樹は、ふと目をやったショーケースに、可愛らしい、腕時計があるのに気がつく。

腕時計か。

樹は、心の中で呟いた。

実用的なものなら、あかりも身につけるだろう。

銀色の細いベルト。デジタルな表示ではない文字盤には、小さい宝石をあしらった秒針。

シンプルだけれど、有名なブランドの名前が入っている。

樹は、その時計を包んでもらった。

女ものの時計を購入する樹に、店員が微笑む。

「恋人へのプレゼントですか？」

樹は小さく笑って、その質問には答えず、支払いをした。

ニューヨークにて

蓉子は運転手にスピードを落として道に寄せるように言いつつ、窓から見える光景に首を傾げた。

樹がニューヨークへ行くという情報は、樹の親経由で知っていたので、

蓉子は学校を休んで、樹を追いかけて来ていた。

ダンスパーティーで、冷たく突き放されてから、どうにも腹の虫が収まらない。

親同士の決めた物といえ、自分達は許婚なのだ。

将来の夫になる男に、あんな拒絶をされて黙っている蓉子ではない。

どんな男も、私の事を手に入らない花と焦がれるというのに、私を将来手に入れる男が、私に振り向かないなんて、あり得ないし、絶対許さない。

場所は、樹の父親の会社の本社の近く。

一流ブランドの宝飾店の前だった。

一人で歩いていた樹が、店の中へと入っていく。

樹さまが、何故こんな店に？

蓉子は樹の姿をじつと見つめた。

店内を見ながら、何かを探しているように品物を見ている。

しばらくして、樹はあるものを見て店員を呼ぶと、

ショーケースの中から出させていた。

手にとって眺めている。

「どうやら、腕時計のようだ。」

樹は、購入することにしたらしく、

店員はその時計を持って、レジまで歩き出した。

「どうして、樹さまがこんな宝飾店で、
時計なんか。」

蓉子は首を傾げたまま、樹を睨むようにしてみると、
運転手に出るように告げた。

「えー！私がモデル??」

あかりは、素っ頓狂な声を上げる。

亨は顔の前に両手を合わせて、
あかりを拝む。

「どうしても、君しかイメージが出来ないんだ。」

「どうか、この通りだから」

あかりは困ってしまって、小さくため息をついて亨を見た。

聞くと、亨はカメラに凝っていて、

将来はプロのカメラマンになりたいのだそうだ。

薫の家で使用人をしていたのも、知り合いに紹介されたアルバイト

で、

写真を撮るための機材などの、購入費にするためなのだという。

「でも、私は」

あかりが困ってしまつて、口ごもる。

「君の笑顔を見た時に、ピピピと来たんだ。

君の笑顔の被写体と僕の腕だったら、

このコンテスト良いところまで行けると思うんだ」

亨は両手を合わせたまま、頭も下げる。

ある大企業の宣伝ポスターのイメージ写真を、

一般から公募しているらしい。

若い写真家の発掘を歌っていて、

でも結局は、その大企業の話題作りのためのものなのだと亨は言う。

写真界では初回だという、その新しいコンテストは、

その大企業の若い世代のニューブレインが考えた、

企業宣伝の新しい手段だとも言っていた。

いつまでも頭を上げない亨に、あかりは困ってしまつて、側を通り過ぎる、学院の他の生徒の送迎の車を気にした。

「一回だけですか？モデルになるの」

あかりは渋々言う。

亨はハツと顔をあげて、

「予選一次を、もし通過できたら、

またモデルをお願いしなきゃならないけど、でも、取りあえずは予選だから」

真剣に、あかりを見て言った。

自分の笑った顔なんかで、そういうコンテストの予選を通過するなんて、

どうしても、あかりには考えられない。

「落ちても、恨まないで下さるっっていうのなら」

あかりが言くと、亨は小躍りしてあかりの手を取った。

「有難う！後でまた連絡するよ！いけね！授業に遅れちまう！」
満面の笑顔で、亨が走って去っていく。

あかりは苦笑いをして、校門の中へと歩きだした。

「大企業が、中小企業に比べて、

人材に恵まれているかと言ったら、そういうわけではありません」

樹は言いながら、自分の前に置かれている料理の皿を見た。

ニューヨークでも老舗の和食の店。

いつかあかりが作った、白くて甘いあの寒天のデザートに似た様なものが乗っていて、

樹は箸を伸ばして口に入れる。

落胆としか言えない味がして、樹は小さく息を吐いた。

あかりの作る食べ物、どれも皆、素晴らしく美味しい。

「人材など、釣りの下手か上手かのような差はあれ、確立から見れば、どの企業が抱えている人材も、似たり寄ったりです。」

違いがあるとすれば、その人材をどう使うかなのでしょ

う。樹の言葉に、テーブルを挟んで、

父親の克己と母親の志保は、笑顔を浮かべる。

そして、樹の隣に座る蓉子を見て、頷いて見せるのだった。

「確かに、お前の言う通り、真に役立つ人間というのは少ない。

ただ、そこに気がつけるかどうか、それが人の上に立つ場合に、出来る人間と出来ない人間とでは、大きく違ってくる」

克己が言うと、樹も頷く。

「人材不足を嘆いているもので、

己のマネージメントの力不足に気がついているものは、

どれだけいるでしょうか。少なくとも、今日の会議に出席していた面子には、

そういった謙虚な人間はいませんでしたよ」

樹の言葉に、克己は小さく唸る。

我が息子ながら、天性のその帝王たる素質には、ほとほと感心する。自分と世代交代をして、

樹がトップに立った時、一体この企業はどんな風に化身するのだろう。

克己は親という私情無しに、樹に感嘆していた。

「難しいお仕事のお話ばかり」

蓉子はとうとう口を挟む。

「せっかくの美味しいお食事も、味がちつとも分かりませんわ」
樹は隣に座る蓉子を見て、

「俺は食事をする為に、ニューヨークに来たわけではありません。
そして、どうしてあなたが今、俺の横にいるのかも分からない」
感情の無い声で言った。

「婚約者が同席して、一緒に食事を取っていることに、
どうして、あなたは疑問を抱くのでしょうか」
蓉子は、隣に座って自分を見ている樹をまっすぐに見返して、
はっきりとした口調で言った。

「おいおい、もう少し柔らかく話したらどうだ。
別にお互いは、敵同士でもないのだし」
克己が二人のやり取りを見て、苦笑した。

「もし、この婚約を解消したいと俺が言ったら」
樹は、克己を見て言った。
「父上、あなたはどう思いますか」

高級料亭の四人の食事のテーブルに、沈黙が流れる。

「そんなこと」

真っ先に、蓉子が口を開いた。

「ありませんから、絶対に」
蓉子には「やかに言つと、樹をもう一度正面から見た。
そして、樹の両親に目を戻して言う。

「一言で解消されてしまうような、

そんなに簡単なものではありません。生まれながらの許婚という
関係は」

蓉子は言うど、目の前の料理に戻って食事を続けた。
樹いつきはそんな蓉子を見て、何か言いたげにしながらも、
また無表情に戻って、自分も食事を続けた。

樹いつきの両親が顔を見合わせる。

近々、日本の家に戻ったほうがいいかもしれない。
お互いに、そんな事を思っていた。

感情論

「私達は先に失礼しよう」

克己が、樹と蓉子を見て言う。

フランス人とのハーフの美しい志保も、自分の息子の顔を見て微笑んだ。

「後は若い二人でゆっくりと、お話するといいわ」

克己と志保がテーブルから立ち上がると、

蓉子も立ち上がって、二人に深々とお辞儀をする。

樹は座ったまま、店の窓の外を見ていた。

「喧嘩しないようにね」

志保が、樹に言う。

「喧嘩するほど、親しい間柄ではありませんから」

樹は、母親の志保を見ずに冷静に答えた。

蓉子は、そんな樹を見て唇を噛む。

克己と志保は、二人の様子を見ながら、

高級レストランの個室を出て行った。

「一度、日本の家に様子を見に戻ってみましょうか」

志保が克己に言う。

「私もそう思ったが、でも考えてみれば、

今、樹の中でどういう気持ちが生まれているにしろ、

蓉子さんをこうして、樹を追いかけて来るようになるほど、

積極的にさせたというのは、良い傾向かもしれない」

克己が、笑って言った。

「今までの蓉子さんは、まるで今の樹と同じように、

自分の婚約者に興味が無かったのだからな」

「そんなに楽観的に考えていいものでしょうか」

志保が言った。

「あの樹いっまが、蓉子さんとの婚約を、

解消したいような事を言ったのですよ？」

克己は笑う。

「どんなに賢くても、樹いっまはまだまだ子供だ。

おもちゃと、伴侶との区別がつかないんだろ？」

志保はその言葉に、少し黙った。

「それではあなたにも、おもちゃがあるという訳ですか？

樹いっまとあなたが、違うのは分別だと？」

志保の意外な言葉に、克己はため息をつく。

「我々夫婦の間に、低俗な感情などは必要ないと、

お互いに割り切っているだろう。何を今更言うんだ」

「それでは、おもちゃに対しては、

あなたにも、低俗な感情があるというわけですね」

志保が氷のような冷たい声で言う。

「何が言いたい」

克己が志保を見て言った。

「蓉子さんが、樹いっまと約束どおり一緒になくても、

蓉子さんが、幸せになるかどうか、分からないと言うことですわ」

志保のその言葉を聞いて、克己は大きいため息をついた。

「お前が言う、幸せの定義は何だ。樹いっまと一緒になる相手が、

幸せになれないと、お前は言うのか」

志保は黙る。

ニューヨークを拠点に、多数の支社を持つ大企業の跡取り。

それも普通の跡取りではなく、

天才と賞賛されている、見た目も美形な息子の樹いっまの、

伴侶と約束されたら、それはどんな女にとって、

幸せなのではないのだろうか。

その疑問は、そのまま自分の疑問だ。
自分の結婚の時も、同じような状況だった。
志保は目を伏せた。

金銭的にも、地位や名譽なども、
自分自身の女としての見栄えも何もかも、
全てが完璧なのに。
志保は思う。

例え、仮面夫婦のような、
条件だけで一緒になった夫との間にも、
素晴らしい樹いっきのような、息子も授かったというのに。

何故、私は自分が幸せだと思えないのだろう。

志保はここ何年も探した答えが、まだ見つからなくて、
もどかしく思うのだった。

一体、幸せというものは、
人間の生活の中に起きる、どんな事象を呼ぶための、
呼称なんだろう。

志保は黙って、長い間連れ添ってきた、
隣の克己の顔を見上げた。

「樹さま」

克己と志保が部屋から出て行って、しばらくして蓉子が開く。

「どうして、私との婚約を解消しようなんて、

おっしゃったのですか」

冷静な口調。でも、樹を見るその目は、強い反感の意志を湛えている。

樹は、窓から室内に目を戻して、蓉子を見た。

「あなたは何故、俺と結婚をしたいのですか」
感情の無い言葉を言う。

「私達の婚姻は、お互いに多大なる利益を生みます。

家同士の結びつきが、お互いが経営する企業の発展に、尋常ならぬ貢献をするでしょう」

蓉子は動じずに、樹を真っ直ぐ見て言った。

「家同士などはどうでもいい。

個人の、感情的なものの話です」

樹は、蓉子を見返して言った。

「嫌か、嫌じゃないか。もしくは、やりたいか、やりたくないか。

そんな感情の」

蓉子は樹を見た。

「感情論を表に出して、あなたは何を言いたいのですか。

私の家と婚姻を結べば、それだけで、

多大な利益が、あなたの一族の企業にもあるのですよ？」

樹は目を伏せて、小さく笑った。

「別に、あなたと婚姻を結ばなくても、それと同等の利益など、俺の力で何とでも生み出せます」

樹が真つ直ぐに、蓉子を見る。

「今の俺には、あなたと婚姻を結ぶ理由が見当たらないのですよ」
二人の間に、少しの間沈黙が流れる。

「それは」

蓉子が怒りに震えながら、冷静を装って続ける。

「樹さま、あなたに利害関係なく、

思いを寄せる存在が出来たから、

そんな発想をすと思つていいのでしょうか」

樹は、答えなかった。

「感情つて、何ですか」

蓉子は立ち上がつて、

樹との間のテーブルを手で「ドン」と、叩く。

「あなたの心が変わったきっかけつて、一体どんなものなの？」

あの、ダンスパーティーで、あなたの隣にいたあの女中のためなの

？」

樹は、蓉子を見上げて黙っている。

「あの平凡な庶民の女の何がいいの？私があのだ庶民に負けていると
でも？」

容姿、育つた境遇、知性、私は決して、あなたの女中に、

何にも負けてないわ」

何を言つても黙っている樹に、蓉子は脱力して、

席に座つた。

「確かに、あなたは綺麗だし、家柄も何もかも素晴らしいと思う。

だからこそ、幼い俺は、あなたと結婚しようと思つていた。

でも、今は分かっていることがある」

樹は、蓉子をまっすぐ見た。

「この世の何もかもが、実は自分に起きる事でさえ、
予測不能なものばかりで、成り立っているのが真実だ」
樹は、まるで自分に言い聞かせるように、呟いた。
「今の俺は、女性という存在で、
あなたよりも、どうしようもない衝動を伴って、
欲しいと思う存在がいる。
だから、あなたが俺に愛想を尽かすなら、
きつと今の内だと思う」

「どうして？そんな風にいうの？」
蓉子は、目の端に悔しい涙を浮かべて言う。

「この先も、俺はあなたを愛せないだろうからです」
樹の言葉に、蓉子は固まる。

「愛？」
目に浮かんだ涙を殺しながら、
蓉子は繰り返して呟いた。
そして、声に出して笑う。

「あなたの口から、そんな言葉を聞くななんて思いもしなかった」
樹は、目を伏せた。

「俺も自分でそう思っています」
二人の間に沈黙が流れる。
蓉子は席を立った。

あの女中に樹さまが、愛を感じていると？
笑わせないでほしい。
このままでは済まさない。
絶対に。

「愛」なんて言葉

レストランの個室を、蓉子が出て行く。

樹いつきは一人きりになって、窓の外の景色を見ながら、じっと考え込んでいた。

「愛」なんて言葉、

今まではその意味さえも考えた事がなかったのに。

樹いつきは俯いて、小さく苦笑した。

「この先も、俺はあなたを愛せないだろうからです」と、確かに自分は、蓉子に対して言っていた。

それではまるで、自分はいつかは蓉子を愛そうとして、婚約を結んだということになる。

でも、そんな気は樹いつきには、毛頭無かった。

婚姻などは、一族の利益のためと、嫡子を得るための、形骸的なものに過ぎない。

蓉子を愛そうとして婚約したわけでは、決して無かった。

というか、蓉子を愛するという事など、考えた事も無かったのだ。何故、そんな事を口走ったのだろう。

樹いつきはふと、あかりを思った。

ニューヨークと日本の時差は、14時間。

ここは午後九時。

日本では今頃、学院で授業を受けているころだろうか。

それにしても、一体「愛」とは何なのだろう。

樹は着ているスーツのポケットから、
唇間買った、腕時計の包みを取り出す。
綺麗にラッピングしてあった。

蓉子が言っていたように、確かに蓉子との婚約を取り消したいと思
ったのは、

あかりの存在のせいなのは否めない。

不思議な気分だった。

何故、そんな事を思うのだろう。

確かに、自分はあかりを欲しいと思っている。

いつも傍にその存在を感じていたいし、

出来ることなら、毎晩一緒に同じぬくもりの中で眠りにつきたい。

あの微笑を近くに感じながら。

あかりは、一之瀬家の使用人だ。

樹がそう命じれば、あかりは従うだろう。

この間、一晩一緒に眠ったように。別に何の問題も無い。

それなのに、何故自分は、蓉子をこんなに疎ましく思うのだろう。

蓉子と婚姻を結んだとしても、あかりは変わらず樹の傍にいるだろ
う。

蓉子との婚姻による企業同盟は、一之瀬一族の利益にもなるのだ。
本来ならば疎む必要はないのに。

どうしてなんだろう。

心というものは、本当に不思議なものだ。
自分のものなのに、ままならない。

樹いっせは手の中の小さな包みを見ながら、
首を傾げていた。

「あの、波乃さま」

一之瀬家の仕事が全て終わった午後8時。

あかりは女中頭の波乃を呼び止めて、言い辛そうに上目遣いになる。

あかりの真面目な働き振りと、
その素直で明るい性格にすっかり魅了されている波乃は、
にっこりと笑って、あかりを見た。

「どうしたの？」

「実は、明日の放課後、友人に手伝いを頼まれました、

2、3時間、お暇を頂きたいのですが・・・」
住まわせて貰って食べさせて貰って、その上学校に通わせて貰って
いるのに、

例え数時間とはいえ、仕事を休ませて欲しいなどと、
口に出すのも気が引けて、あかりは小さくなる。

「あら、まあ珍しい」

波乃は驚いて、あかりを見た。

「本当に申し訳ありません。もし、難しいようでしたら、その友人に断りますから」
あかりは頭を下げて、ますます縮こまっている。

本当に、真面目な子だわ。

波乃は改めて、感心していた。

「樹さまも、ニューヨークからまだ帰ってらっしゃらないし、あなただつてたまには、お友達と過ごしたいでしょう？
分かったわ。明日の午後の仕事はお休みでいいから、お友達とゆつくりしてらっしゃい」

波乃は微笑んで言った。

波乃の言葉を聞いて、あかりの顔がぱつと明るくなる。

「有難うございます！手伝いが終わったら直ぐに戻りますから」
あかりは頭を深く下げた。

自分の部屋に戻ろうとして、樹の部屋の前を通りかかる。
あかりは、何ということも無しに足を止めた。

今頃、樹さまは、何をなさってるのかしら。

あかりはそつと扉を開いた。

正面に、いつも樹が座って仕事をしている、大きく重厚なデスクがある。
勿論、今日は樹の姿は無い。

当たり前だけれど、でもいつもある姿がいつもの所にないという事は、
分かっていても、落胆してしまうものなのだと、
あかりは思った。

目をやると、ベッドがある。

キングサイズのベッド。

樹がニューヨークに行く日に、
そこで一緒に眠ってしまった。

「寂しいな」

あかりは呟いた。

まだ樹がニューヨークに行つて、三日目だ。

あと四日は、樹の部屋をこらうして覗いても、
樹の姿は見られない。

あかりは小さく息を吐いた。

でもそんな気持ち打ち消すように、
唇に笑みを浮かべる。

「あと四日経てば、樹さまは戻ってくるんだから」
明るく呟くと、あかりは樹の部屋から出て、
扉を閉めた。

次の日の放課後、あかりは、
亨との待ち合わせ場所に行く。

場所は大きい公園。

学院の制服姿のまま、あかりが出向くと、
目印の場所に亨がいた。

あかりに向かって、手を上げている。

「有難う、本当に嬉しいよ。断られたら、どうしようかと思ってた」
亨も高校の制服姿のままだけれど、
その肩には、異様に大きいバツクを抱えていた。

芝生にシートを敷いて、バツクからたくさんの機材を取り出して、
並べている。

あかりは目を丸くして、その亨の様子を見ているだけだった。

「凄い機材なのね。全部、自分で揃えたの？」

あかりが言つと、
「そうだよ。バイトしてね。僕ね、親に反抗して一人暮らししてる
んだ」

亨の言葉に、あかりはびっくりして、

「一人暮らししてるの？」

言つと、亨は頷いた。

「親の敷いたレールの上を歩きたく無かったから、意地でね」
亨が笑つて言つ。

「偉いなー」

あかりは感心した。

「私なんて、人の好意に甘えっぱなしで、

まるきり自立出来て無いの。亨君を尊敬しちゃっ

しみじみ言うあかりを、亨は笑って見た。

「僕はどうしても、カメラの道に進みたいんだ。

僕にとつては、カメラが、写真が、アイデンティティーだから
亨が呟くように言う。

「え？」

あかりは首を傾げて、良く聞こえなかった亨の言葉を聞き返す。

「いや、何でもない」

亨は今の自分の呟きを消すように、明るくいうと、

「じゃあ、モデルさん、よろしく！」

ごつい一眼レフのカメラを両手に構えて、あかりに向き直った。

笑顔のモデル

「学院の制服のままですけれど、いいんですか？」

あかりは亨が構えるカメラの前で、はにかみながら、戸惑って言う。

「大丈夫、あかりちゃんの写真のアップを、どーんと撮ろうと思ってるから」

亨が明るく言うと、あかりは顔を引きつらせた。

「アップですか」

あかりは、完全に怖気づいている。

亨は笑うと、カメラのファインダーから目を外して、

「ごめん、ごめん。そんな事言われたらびっくりしちゃうよね。

今の言葉は忘れてくれる？」

じゃね、あかりちゃんは、最近の出来事で何が嬉しかった？」

亨があかりに近づいて来て、言った。

地面に敷いたシートに、一緒に腰を下ろそうと、

カメラを持っていない方の手でさす。

あかりは頷いて、亨に言われる通り亨の隣にシートに座る。

「そうですね」

そして言いながら、顎に手を当てて考えた。

「自分の作った料理を、他の人が喜んで食べてくれたのが、

嬉しかったですね」

あかりは思い出したように言う。

「樹さま（きつさま）の幼馴染の方々も、本当に喜んで食べてくださるのですけれど、

あのあまり普段感情をお顔に出さないような、樹さま（きつさま）が、私の作ったものを食べて、美味しいって言って下さったのは、

本当に嬉しかったです」

あかりはいつもの笑顔になった。

亨がすかさず、シャッターを切る。

あかりはびっくりして、亨を見た。

「モデルだと思わなくていいから。僕が瞬間を見つけたらシャッター切るから、

普通に話をしよう。樹さまって、一之瀬樹だよ。

この間の慈善ダンスパーティーで、グラスを磨いていた君を、

迎えに来た、かつこいいけど、ちょっと感じの悪い人」

亨が苦笑して言う。

確かに、あの時の樹は、亨に対して感じが悪かったのは否めない。

「ええ」

あかりは消え入るように頷いた。

「経済界の将来を背負っているエリートだ。君は本当に彼が好きなんだ」

亨が言う。

「尊敬しています。背も高くて見た目も素敵で、まるで王子様みたい。

一緒に学院に通って下さっている時なんて、周りの人が皆振り返るんですよ？

その上、まだ高校生なのに、お父様のお仕事を手伝っているくらい優秀だし、

私みたいな孤児を女中として使って下さっている上に、

学校にも通わせて下さるほど、寛大で」

あかりは笑顔になった。

亨がシャッターを切る。

あかりは亨がシャッターを切ったのに、また小さく驚いて、

その笑顔は苦笑になったけれど、でも、あかりは言葉を続けた。

「樹さまは、神様が私に下さった贈り物です。」

一生使えて、ご恩を返していきたいと思っ
ています」
亨はファインダーから目を外して、あかりを見た。
あかりも亨を見る。

「そっくり気持ちつてさ」
亨があかりを見て言う。

「あかりちゃん、本当は、樹いっきって人に恋をしてるんじゃない？」
あかりは亨の言った言葉が理解できると、

「そんなこと、ありません！」

シートから立ち上がると、叫ぶように言った。

「だって、樹いっきさまには、蓉子さまっていう、

婚約者だっていらっしやるし、私は一之瀬家の女中ですもの、

あくまでも、樹いっきさまはご主人ですし」

あかりは亨を見ずに、早口に言う。

「お二人がご結婚されたら、私は婆やなんて呼ばれて、

お二人のお子さんの面倒を見るんですから」

二人の間に、少しの間沈黙が流れる。

「ごめん、変な事言っつて」

亨が謝った。

あかりは亨を見て、笑顔になる。

でも、力のない笑顔なのが自分でも分かる。

樹いっきさまにお似合いなのは、

蓉子さまのように、美しく、家柄も良い人なのだ。

少なくとも、自分のように愛人の娘で、天涯孤独な女中ではない。

「お腹空きました」
あかりは呟く。

今日の午後の仕事は、波乃が休みをくれている。
もう少し亨と過ごしてもいい時間はあるけれど、
今日はもう、笑顔の写真のモデルにはなれない気分だった。

「分かった、じゃあハンバーガーをご馳走しよう」
亨が明るく言う。

「撮影はいいのですか？」

あかりが言うと、亨は頷いた。

「もう、撮れたから」

亨が持っているカメラを指差して言うと、

あかりは、またあのいつもの笑顔に戻った。

蓉子は、日本に戻ってきていた。

樹いつとの、ニューヨークでの、

あのむしゃくしゃするような会食の後、

蓉子は一之瀬家のあの女中に、見張りをつけていた。

あの女中が、どんな人間なのか知りたかったからだった。

感情を欠如して生まれて来た男のだと、

蓉子は樹いつきと許婚いっけとなった当初から、
ずっと樹いつきのことを、そう思っていた。
だからこそ、別に理性だけで、
彼とは結婚をすればいいと、蓉子も思っていたのだ。

純粹に、家同士のための婚姻。

蓉子とて、今まで誰かを愛したこともないし、
愛せるとも思わなかった。

だからこそ、樹いつきには、
自分と同じ種類の人間だという臭いを感じていて、
樹いつきの存在に、自分という人間を被せて見て、
安堵あんぷしていたのだ。

この世に自分のような人間が、ここにいた、と。

そんな彼が、この間「愛」を口にした。

馬鹿にするなど、蓉子は思う。

あなたは、私と同類なのだ。

愛など必要もないし、愛などいらぬ人間なのだ。

樹いつきの言う「愛」を否定するのは、

蓉子の、自分という人間の存在理由の肯定になる。
それを思い知らせてやろうと、蓉子は思っていた。

もう、明日は樹いっきが日本に帰って来るといふ時、
蓉子は面白い写真を手に入れた。

あの無邪気な笑顔がむかつく、樹いっきの女中と、
見知らぬ隣町の公立の高校の制服を着た男とが、
顔を見合わせて親しそうに、公園でシートに座っている写真だった。
あかりのあのどんな人をも魅了する笑顔が、
隣の男に向けられている。

蓉子は小さく笑った。

この写真を見たら、一体、樹いっきはどんな顔をするのだろうか。

楽しみが出来て、蓉子はわくわくするのだった。

心地いい視線

樹が帰ってくる日、あかりは一目散に学院から帰ると、張り切って、樹の部屋の掃除を始めた。

もともと汚れなど無いような、綺麗な部屋なのだけれど、念入りに、ほこりのひとつもないように磨き上げる。

花を飾って掃除をしめくると、あかりは今度は調理場に走って行った。

「樹さまは、海外に行ってらしたのだから、

和菓子でお迎えしよう」

学院の帰りに、スーパーで購入してきた材料で、羊羹の作成に入る。

寒天系は、あかりの得意とするところ。

夕食の時間にはまだ遠いから、調理場の道具を好きに使わせて貰った。

出来た熱い甘いどろっとした黒い液体を、型に流して、冷蔵庫にしまう。

いつかの牛乳寒天のように、また樹さまは、美味しいって言って下さるだろうか。

空港から一之瀬の屋敷に電話が入る。

あと二時間ほどで樹さまが、お戻りになるとのこと。

女中服になって仕事をしながら、あかりはドキドキと胸が高鳴るのを覚えていた。

一週間ぶりだからだわ。

自分の鼓動に言い訳をする。

亨が「恋なのでは」なんて、変な事を言ったから、妙に意識をしよう。

そりゃ、あんなに素敵な樹さまだもの。

誰だって憧れるに決まってる。

なにも、私だけじゃない。

ほら、最初のころ、学院で私を苛めていた麻里のように。

最近はすっかり静まっているけど、彼女が私を苛めていたのは、

やはり樹さまへの恋心のせい。

単に女中として一緒に暮らしている私への、

勘違い的な、焼きもちのせいだったんだろうし。

再び厨房に行って、冷蔵庫を開けてお手製の羊羹を見ると、程よく固まっていた。

シャワー上がりなどに、ひんやりとした甘い寒天を口に入れるのは、

あかりにとって至福だ。

樹さまにとっても、どうかそうでありますように。

あかりは、冷蔵庫の前で祈っていた。

日本に戻り、空港から家路に向かうリムジンの中で、開いたパソコンに、樹は蓉子からのメールを見つけた。小さく首を左右に振り、樹はため息をつく。

一体、何だっというんだ。

メールを開き、添付されている画像を開く。
樹は、目を見開いた。

学院の制服姿のあかりと、
隣町の公立の高校の制服を着た男が、公園でシートの上に座り、
お互いに、顔を見合わせている写真だった。
あかりはあの笑顔だ。
日付は昨日になっている。

樹の胸に、痛みが走った。
小さく息をついて、その痛みを耐える。

相手の男には見覚えがある。
薫の別荘で立ち働いていた男だと思い出した。
薫の別荘でも、あかりと親しそうにしていた。
虫の好かない奴だ。

けれど、あかりとその男の仲は、
樹にとっては、別に疑うべき価値も無かった。
何故なら、樹は、今夜もあかりと一緒に眠るつもりだったからだ。
樹の部屋で、同じベッドで。
あかりとそんな真似が出来るのは、この世に自分だけしかいないの
だ。
樹は、蓉子からのメールを消去した。

「お帰りなさいませ」
樹のリムジンが屋敷の前に着くと、
迎えに出ていた使用人が、一斉に頭を下げる。

あかりは、他の使用人達と変わらず、玄関先で頭を下げながら、
リムジンから降りる、樹を見ていた。
一週間ぶりの樹の姿。
相変わらず、とても素敵だ。あかりはうつとりと樹を見る。

樹が車から降りて、
誰かを探すかのように、使用人の中に視線を走らせた。
そして、あかりを見つけると、
樹は、微笑んだ。
口の端だけではなく、うつすらとその目も微笑んでいる。
あかりは、自分もつられて満面の笑みになった。

「お帰りなさいませ」
あかりが言う。
樹は、あかりの言葉に小さく頷いた。

屋敷の玄関先の階段を上り、
樹は、あかりに近づく。
「お前に、土産を買ってきた」
あかりを見て、樹は呟くように言う。
「お土産ですか？」
あかりはびっくりして、大きな声で言った。

「もったいないくらい、嬉しいです。チョコレートですか？」
あかりが無邪気に言うのに、
樹はあかりの肩に手を回して、黙って自分の部屋に向かった。

その様子を見ていた他の使用人が、
女中頭の波乃にぼそりと、言う。

「樹ぼつちやまは、あかりちゃんにぞつこんですね」
波乃はたしなめるように、言った若い女中を見る。

そして、自分たち使用人も樹の後について屋敷の中に入ると、
樹があかりをつれて入っていった、部屋の扉を見て、
小さくため息をついた。

あかりは素直で優しく情の深い、とても魅力的な子だ。
だから、両親の愛情もなく一人で寂しく育ったような樹が、
あかりの優しさに惹かれるのは、当たり前のことだろう。
波乃は思った。

けれど、身分が違いすぎる。
樹とあかりは、普通のクラスメートではないのだ。
恋人同士にはなれない。

波乃は、今後樹とあかりの二人を訪れるであろう困難を思うと、
気が重く沈むのだった。

二人きりの部屋に入ると、樹はあかりをさりげなく抱き寄せた。

それはあくまでもさりげない感じで、まるで抱擁というよりは、呼吸だとかのように、普通にして当たり前のような自然な動作だった。

あかりは戸惑いながらも、しばらく樹の胸の中でじっとしている。

「どうかなさったのですか？」

そして、顔を上げると樹を見て、あかりは首を傾げて言った。

「ニューヨークでは、ずっと眠れなかった。お前がいなかったから樹は自分の胸の中のアかりを見て、ぼそりと言った。

「まあ、一週間もですか？」

あかりは驚いて言う。

「いつものことだ」

樹はあかりを自分の胸の中から開放して、デスクの椅子に腰をかけて言った。軽く目を押さえる。

「今、お茶をお入れしますから！」

あかりは言うつと、勢い良く部屋を出て、厨房へ走った。

疲れ切っている樹の様子に、あかりの心が沈む。

何故、まだ17歳なのに、樹はあんなになるほど、仕事をしなければならぬのだろう。

一体、何のために？お金のため？

あかりは納得いかない怒りがわいて来るのを感じながら、

厨房で、茶器と自分の作った羊羹を切って載せた皿をトレイを用意すると、

また樹の部屋へと戻って行った。

いつも紅茶を飲む樹に、今日はあえて緑茶を出す。

あかりの手製の羊羹も一緒につけた。

樹は、あかりを見る。

あかりはにっこりと笑った。

「甘いものは、疲れをとりますから。」

寒天の和菓子は、食欲がなくてもつるんと入りますし」

樹は、白いガラスの皿に乗せられている羊羹を見ると、添えられているフォークを手に取った。

樹が一切れちぎって、口に運ぶのを、

あかりはじつと見つめている。

穴が開くように見つめられながら、羊羹を食べると、

樹は苦笑した。

「どうしました？お口に合いませんでした？」

あかりが焦って、樹の顔を覗き込む。

「いや、美味しいよ」

樹は言うど、あかりの自分を見つめる視線を感じながら、残りの羊羹を食べた。

自分をじつと見つめる人の視線を、

樹は初めて、くすぐったくも心地よく感じた。

あかりはほっとして、またにこやかな笑顔に戻る。

樹は着ているスーツのポケットに、手を伸ばした。

綺麗に包装をしてあるあの腕時計の包みを取り出す。

そして、黙ってあかりに差し出した。

あかりは差し出された包みを見て、

首をかしげて樹を見る。

「土産だ」

樹の言葉に、あかりは改めて包みを見た。

どうみても、海外旅行に行った人から良く貰うようなチョコレート

の箱には見えない。

樹は戸惑っているあかりの手に、その包みを押し付けた。

「気に入るか分からないが」

言って、樹は目を伏せる。

あかりは包みを受け取ると、

「有難うございます」

お礼を言って、樹にお辞儀をした。

「少し、夕食までに横になりたい」

樹があかりを見て言う。

「一緒にいてくれるか？」

「はい、勿論です」

あかりはにっこりと笑った。

相当疲れていたのだろう。

ベッドの枕元に座る自分の膝に頭を乗せた瞬間、

眠りについた樹の美しい顔を見下ろしながら、

あかりは思っていた。

どんなに大人びている樹でも、

その寝顔はまだ少年のものだ。

温かい気持ちに包まれながら、

あかりは茶色い髪が目にかかっているのを、

指で払った。

そして、さつき渡された包みを見る。

樹を起こさないように、

あかりは包みを開け始めた。

「綺麗な時計」

シンプルだけれど、美しいデザインの腕時計にあかりは目を見開く。その小さい文字盤には、あかりでさえ名前を知っているような、一流ブランドの名前が入っている。

「こんな高級なもの、頂けないわ。樹さまいっきが起きたら、

お返ししなきゃ」

あかりは小さくため息をついた。

傷ついた表情

二時間ほど、樹は寝入っていただろうか。

やがて、部屋の扉がノックされて、

あかりは顔を上げた。

「樹さま、お食事でございます」

夕食を運んで来たのだろう、扉の向こうから波乃の声がする。

あかりは膝の上の、まだ眠っている樹を見ると、

あまり大きくない声で「どうぞ」と扉に声をかけた。

扉が開いて、夕食のトレーの乗っているワゴンを押して、

部屋に入ってきた波乃が、

ベッドに座り、自分の膝の上に樹の頭を乗せているあかりを見て、

驚いたように足を止めた。

あかりは波乃に微笑んで、肩を少しすくめた。

樹が物音に気がついたのか、目を開ける。

そして、あかりの顔を見上げて、唇に小さく笑みを浮かべると、部屋に入ってきた波乃に気がついて、ゆっくりと体を起こした。

「波乃、あとはあかりにやってもらおう」

樹が、ベッドから降りて言う。

波乃は一瞬黙って、

「承知いたしました」

樹に頭を下げて、部屋から出て行く。

ちらりとあかりを振り返って、目配せをした。

あかりも小さく頷く。後で事情を聞かせるということなのだろう。

波乃は出て行った。

あかりはベッドから降りると、波乃が置いていったワゴンに近寄って、
樹の夕食の準備を始める。

二時間、ぐっすりと熟睡出来て疲れが取れたのか、
樹は体も軽いようで、
仕事の書類を持ち出して、デスクで眺め始めていた。

「あの、樹さま」

あかりは夕食の支度をしながらも、
さつき受け取った腕時計の包みを、ポケットから取り出すと、
樹に近寄って言った。

「お土産だとさつき頂いた、この綺麗な腕時計なのですけれど、
あかりは言い辛そうに、でもきっぱりと、包みを樹に差し出す。
「世間知らずの私でも、知っている高級なブランドの時計です。
こんな高価な物を、女中の私が頂くわけにはいきません」
書類から顔を上げずに、樹はあかりの言葉を聞いていた。

あかりはどきまぎとしながら、樹がなんて言うのだろうと息を飲んでいる。

せっかくあかりの為に、樹が買って来てくれた気持ちは、
重々嬉しいし有難いけれど、この時計は、一女中が貰うような、代物ではない。

あかりの中で、譲れない一線があった。

「ならば、捨ててくれ」
樹はようやく顔を上げて、あかりを見た。

その表情に、あかりは衝撃を受けていた。

「お前だけのために、買ったものだ。いらぬなら、捨てればいい」
言って、樹は目を伏せた。持っている書類に目を戻すけれど、
書類を読んでいるわけではないのを、あかりは何故か分かっていた。

樹が、傷ついている。

あかりは驚いて、息を飲んでいた。

自分が、樹の買ってきた時計を受け取れないと言った事に、
樹は、深く傷ついているのだ。

いつも表情がなくて、何があっても動じないような天才。
確かに、今まではそうだった。

満面の笑顔なんてものも、見たことがない。

けれど、今あかりはこんなにはつきりと、

樹が、自分の言葉に傷ついている表情を見ていた。

「あの、樹さま。決して、気に入らないとかではなくて、

こんなに素敵な腕時計見たこともないくらい、

本当にびっくりして嬉しいんですけれど」

あかりは必死になって、樹に駆け寄るとひざまずき、
一生懸命言葉をつなぐ。

「どうか、そんなお顔をなさらないで下さい」

あかりは自分が泣きそうになるのを感じた。

自分の言葉が、他の人を傷つけたなんてことは、あかりには初めての事だった。

ふと、樹いっせきが苦笑のように、小さく唇に笑みを浮かべた。

「お前こそ、そんな顔をするな」
樹いっせきが、あかりを見る。

「お前、今にも死にそうだ」

あかりはその言葉を聞いて、樹いっせきの手を握った。

「拙い女中ですけれど、樹いっせきさまを思う気持ちは誰にも負けません。

どうか、殴つてもいいですから、蹴つてもいいですから、私に対して、そんなお顔は二度となさらないで下さい！」

あかりは泣きべそをかきながら、訴えるように言った。

「なら」

樹いっせきが、そんなあかりを見て言う。

「その腕時計を肌身離さず、いつもしてくれるか？」

あかりは言葉を失った。

手の中の、返そうとしていた時計の包みを改めて見る。

「それは、俺がお前のために選んだものだ。そして」
樹いっせきは一瞬黙った後、言葉が続けた。

「今まで生きてきて、俺が初めて誰かのために、自分で買ったものなんだ」

少しの沈黙。

あかりは頷くと、差し出していた時計の包みを自分の胸に抱え直し

た。

樹いつきの自分に対する気持ちが、段々と変わってきている。
鈍いあかりでも、そんな事は感じていた。

けれど、それが嬉しいのか、怖いのか、
というより、結局、自分も愛人の母親と同じ道を辿るのかと、
冷静に思う。

嫌だと思ふ反面、思う。
どうして愛人が駄目なんだろう、とも思う。

好きだと思ふ人が、到底普通には結ばれない人なら、
普通じゃない形でも、一緒にいたいと思うのこそが、
普通ではないか。

でも、やっぱり、
あかりには分からなかった。

第一、樹いつきに対する自分の気持ちが、
自分で分らないのだ。
樹いつきが、自分のひざの上で眠っているのを見ると、
とても温かい気持ちになる。

けれど、そんな気持ちは、何も特別じゃないような気がするし。
そう感じる理由はうまく言えないのだけれど。

ただ。

あかりは思う。

ただ、樹^{いっき}さまに、
嫌われたくない。
それだけは、確かだ。

あかりは心の中で、呟いていた。

子守唄

「波乃さま、本当に別にやましい事も何もなくて、
純粹に、私は樹さまの安眠枕のようなものといいますが、
無害な睡眠薬みたいなものと言いましょうか」

樹の部屋から出てきたのを、
待ち構えていた女中頭の波乃に、あかりは一生懸命に説明をしてい
る。

「別にやましいとは思ってはいないけれど、一応あかりちゃんも、
樹さまも、思春期の年頃なのだから、

同じベッドに一緒にいるというのはどうかしらね」

波乃が冷静に言つと、あかりはうな垂れた。

「確かに、おっしゃる通りです」

波乃は素直に謝るあかりに目を細めて微笑むと、

「そんなに落ち込まないで。樹さまの申し入れなら、

あかりちゃんも断れないのは分かっているし、

確かに樹さまの睡眠障害は昔から問題だったから、

薬を飲まずに眠れるのなら、傍について差し上げてもいいと、

私個人は思うけれどね」

「樹さまは、昔から睡眠障害があったのですか？」

あかりが驚いていうと、

波乃は頷いて、

「お医者様は体には原因がないから、

やはり精神的なストレスだろうっておっしゃってるわ。

あまりに優秀すぎて、ご両親の期待を一身に背負いすぎるのもど

うかと思つわね」

「そうですね」

あかりは俯いて、自分の膝の上で眠る樹いじの青白い顔を思い出した。このままでは、いつか本当に樹いじは体を壊しそうだ。

「私は別に口外もしないし、他の者にもそれとなく言っておくけれど、

ただ、ご両親が屋敷にお戻りになるような時だけは、気をつけてね」

波乃は言つて、あかりの側を離れた。

あかりは深くお辞儀をして、波乃を見送る。

ご両親がいらつしやらない時は、さっきのように、眠る樹いじさまの傍にいて差し上げてもいいって事かしら。

あかりは心の中で思う。

「今夜も一緒に眠ってくれつてさっき頼まれたけれど、

この間みたいに、一晚、樹いじさまのベッドで寝てしまうなんて事は絶対ないように、

今日はちゃんと自分の部屋に帰つて眠るようにしないと。

朝にベッドで一緒にいる光景を見られたら、どんな誤解をされても、

確かに言い訳できないもの」

あかりは呟いていた。

夜9時過ぎには、一日の仕事も終わり、
あかりは自室に戻る。
学校の宿題などをして11時近くになると、
シャワーを浴びて、あの太陽の柄のパジャマに着替えた。
部屋の扉が叩かれる。

あかりが扉を開けると案の定、
そこには白いシルクの部屋着を来た樹いっせがいて、
あかりの顔を見てすぐに口を開いた。

「波乃に何か言われたのか？」
少し長い前髪の間から、
いつもの茶色の瞳が、少し不安そうにあかりを見ている。

「いいえ、特には何も言われていません」
口の両端を上げて、あかりは笑顔になりながら樹いっせを見上げて答えた。

背が高い樹いっせは、あかりを見下ろして少し猫背気味になっている。
樹いっせはあかりの肩に手を置いて、
何か言いたげにあかりから目を伏せ、あかりの肩に置いた自分の手
をじっと見つめた。

「どうかなさったのですか？」
あかりは樹いっせの目を覗き込む。

「今まで、誰かに触れたいとも触れられたいとも思った事は無かつ

た。

「だけど、あかり、お前だけは違う。お前に触れていたいし、触れられたいと思う。」

「こういう気持ちは一体なんなのだろう」

自分の気持ちが理解出来ずに、樹が戸惑っているのが良く分かる。

あかりはふつと笑うと、

「どつという気持ちなんでしょうね、その樹さまのお気持ちって。

きつともしかしたら、ペットに触ると癒されるとか、そんな類の物なのかもしれません。」

でも、私なんかに触ることで、樹さまのお疲れが取れるなら、

いくらでも触ってくださって結構ですよ?。」

言うつと、樹の腕に手を置く。

「樹さま、お疲れなのですから、

もうお部屋でお休みになられた方がいいと思います。」

さあ、行きましょう」

あかりが優しく言うつと、樹は小さく頷いた。

樹の部屋の照明を落とすと、あかりはベッドに上がる。

デスクの明かりを消すと、

樹はベッドにやって来てあかりの隣に横たわり、

ヘッドボードに寄りかかって座る、あかりの手を片手で握った。

「あかり、何か喋ってくれないか。声が聞きたい」

ため息まじりに目を閉じて、樹が呟くように言う。

あかりは少し考えると、

「それでは、昔、私が幼い頃に母親が良く歌ってくれた子守唄を、

私が樹さまに歌って差し上げます。」

歌はあまり上手じゃないですけど、眠気は誘えると思います」

につこり笑って、樹を見て言った。

樹が目を開けてあかりを見る。

「子守唄？」

「はい」

あかりは微笑んだまま頷いた。

「私が幼い頃、同じ布団の中で母親はぎゅっと私を抱きしめてくれるが、」

良く歌ってくれた歌です。

薄い布団だったから、寒くて母親はそうしていたのかもしれないけど、

光景を思い出すと、今でもあかりの胸の中は温かくなる。

貧乏だったけれど、本当に母親はたくさん愛をくれたのだと、しみじみあかりは思っていた。

「樹さまは、子守唄なんてご存知ないですか？」

あかりが無邪気に言うと、樹は真っ直ぐにあかりを見たまま、

「聞いたことも、見たこともない」

表情の無い声で言った。

あかりは少し気まづくなつて、

「眠る時にお父様かお母様に、ぎゅっと抱きしめて貰った事も……？」

慌てたように言うと、樹は黙ったままだった。

前に波乃が、樹は寂しい子供時代を過ごしていたと、そんな事を言っていないかっただらうか。

「分かりました」

あかりはわざと元気に言う。

「あかりが、樹さまを、ぎゅっとして差し上げます。
だから、大丈夫です」

あのあかり独特の唇の両端を上げた笑顔を見ると、
ごそごそとあかりは、樹の側に自分も横たわる。

そして、樹の頭を胸に抱きかかえて、
その上半身を両手で抱きしめた。

樹は目を見開いたものの、
黙ってじっと、あかりにされるがままにしていた。

互いのぬくもりが、
段々溶け合ってひとつになっていくのが分かる。

「温かい」

ため息のように、樹が小さく呟く。

「そうですね」

あかりも呟いた。

やがて、上手ではないけれど心のコもった優しい声で、
あかりは、昔親しんだあの子守唄を歌い始めた。

「守りもいやがる 盆からさきにあ

雪もちらつくし 子も泣くし」

ゆっくりとした切なくも、美しいメロディに、

あかり自身も、懐かしさが心から溢れ出る。

かつて母親から貰った愛を、
樹いつきにそのまま注いでいるような感覚を、
あかりは覚えていた。

「盆がきたとて なにうれしかろ
かたびらはなし 帯はなし

この子よう泣く 守りをばいじる
守りもいちにち やせるやら

はよも行きたや この在所こえて
むこうに見えるは 親のうち

歌を歌い終わると、あかりは樹いつきを抱きしめる手を緩めた。
吐息は規則的になっている。

もう眠ってしまったのかしら。

あかりは樹いつきの顔を覗き込んで、
息を飲んだ。

確かに眠りに入っているのが分かる美しい寝顔の頬に、
一本の涙の筋が出来ていた。

どんなに優秀だろうが、強がっていようが、
きっと樹さまは、ずっと寂しかったのだ。

あかりの目にも、うつすらと涙が浮かぶ。
樹の頬の涙を指でそっとぬぐいながら、
あかりは囁いた。

「私はずっと、樹さまのお傍にいますからね」

そして、もう一度、
あかりは、樹を抱きしめた。

子守唄（後書き）

注 作中の子守唄は「竹田の子守唄」です。

それぞれの思惑

あれから数日が過ぎていた。

あかりは夜は、樹と一緒にベッドに入り、

子守歌を口ずさみながら一緒にいて、樹が寝入ると自室に戻り、

朝は一緒に学院まで登校する。

昼は学院で勉強し、夕方戻ってくると屋敷の仕事をするという毎日だった。

今朝は朝の仕事が押ししてしまい、時間がぎりぎりになってしまった。あかりは超特急で支度を済ませると、学院のカバンを引つつかんで、屋敷の使用人玄関口へと走る。

通用門を出ると、案の定、もう樹がすでに、

あかりを待っていた。

「申し訳ありません、樹さま。お待ちしてしまつて」

制服のブレザーの胸を手で押さえて、呼吸を整えて言うあかりに、樹は、黙って微笑む。

あかりはその樹の微笑みに、

打たれたようになって、見とれた。

今日はいつになく、樹の微笑みは感じが変わっていた。

かつてのあの表情の無い樹の顔からは想像も出来ない、

まるで別人のような、温かいぬくもりのこもった微笑みだった。

なんて優しい笑顔。

今まで、樹さまのこんな笑顔って、
見た事無かった。

自分の胸がどきんと音を立てて、
思わずあかりは樹から目をそらした。

「い、樹さま、最近、夜はゆっくりお休みになれているから、
体調がよろしいようですね」

あかりはそらした目を、慌てて樹に戻す。
何を動揺しているんだろう。

あかりは自分で自分が分からなかった。

「ああ、段々と良くなってきていたが、今日は今までになく体が軽
しい」
樹は言うど、あかりの背中に手を回して歩き出した。

「あかりのおかげだ」

また真っ直ぐにあかりを見て、

今度はさつきよりももっと、近い場所で微笑む樹に、
あかりはどきまぎとして、顔を伏せた。

肩にまわされた樹の手を、妙に意識してしまう。

こうして登校するのは、いつもの事。

樹さまにとっては、私に触ることで、

ペットの癒しみみたいなものを得てるんだから。

あかりは心の中で必死に自分に言い聞かせていた。

そしてふと、あかりはあの夜の樹の涙を思い出す。

少しずつでも、ああして感情のガス抜きをすることも、きっと樹いつきがこうして笑えている、理由なのかもしれないと思う。でも、樹いつきが寝ている間に泣いていたのは、自分だけの中にしまって決して口外しないと、あかりは誓っていた。

いつものように地下鉄の駅を降り、商店街の道を学院へとたどり、樹いつきと他愛もない話をしながら歩いていると、ふと、自分の名前を呼んでいる声ができるのに気がついて、あかりは立ち止まった。

「あかりちゃん!!」
顔をあげると、隣町の高校の制服を着ている亨がこちらに駆けてくるところだった。

「あ、亨さん！」
あかりも答える。

「あのさ、ちょっといいかな！」
樹いつきに遠慮してか、少し離れた場所から亨が言うのにあかりは頷いた。そして、亨の方に歩いていこうとして、自分の肩に手を回している樹いつきの手が、しつかりと自分を押さえているのに気がついた。

「あの、樹いつきさま？」
あかりは樹いつきの手に自分の手を添えて、外すようにそっと促す。

樹いつきは、亨をあの特徴の無い顔で見たまま、しづしづといった感じで、あかりの肩から手を下ろした。

「どうしたんですか？朝から」

あかりは樹いっきを気にしながらも、

亨に近づいて笑いかける。

「この間はモデル有難う。それがさ、コンテストの一次通過したんだ」

亨が弾けんばかりの笑顔になって言う。

「ええ！本当ですか！」

あかりも思わず声が大きくなってしまふ。

「やっぱり、僕のカメラの腕とあかりちゃんの笑顔があつたら、

絶対ものになると思ってたけど、思い込みじゃなかったみたいだよ」

亨の言葉にあかりは照れた。

「私の笑顔は関係なく、亨さんの腕のせいですよ」

「それで、コンテストの二次の課題の写真。またお願いしてもいいかな。

期限は一週間なんだ。悪いね、急で」

亨があかりを拝んで言う。

「波乃さんにお休み貰えるように、頼んでみます」

あかりが笑顔になって言うと、亨はじゃあと手を上げて去って行った。

あかりは亨を見送ると、樹いっきの元に戻る。

「すみません、樹いっきさま。お待たせして」

樹は目を伏せて、あかりを見ない。

「あの、亨さんは薫さんの家の使用人で、

この間の慈善パーティーの時に知り合いになったのですけれど、

カメラマンになるのを目指している方で、この間モデルを頼まれました、

何か不思議と、私の写真がコンテストの一次予選を通過したって、

さつき。

私なんかモデルであり得ないんですけど、

それだけ亨さんの腕がいいってことなんでしょうけど……」

微妙にしどろもどろで、あかりは必死に樹に説明する。

けれど、樹は何も言わなかった。

あかりは不安になって、樹を見上げた。

樹さまの様子がおかしい。

どうしてだろう。

あかりは困ってしまった。

何で、亨のことで樹が不機嫌になるのだろう。

ふと、樹があかりの手を取った。

そして、樹はあかりの左手首にしてある、
自分が贈ったあの綺麗な腕時計に指で触る。

樹はしばらくその時計を見つめて、

小さく唇の端に笑みを浮かべた。

あかりは何だかほっとする。

そして樹がまた歩き出したのに、

あかりも歩調を合わせてついて行った。

やはり、樹はニューヨークのあの一流宝石店で、
婦人物の腕時計を買っていたのだ。

蓉子は提出された報告書を読んで、青ざめた。
一体、誰に買ったというのか。
自分は貰ってはいない。

とすると、思い当たる相手は一人。

確か、あの一之瀬家の使用人は、
樹と同じ学院に通っていると聞いていた。
あの学院に、自分の手となり足となるように使える、
知り合いはいなかっただろうか。

蓉子は座っている自宅のデスクを、指先で神経質に叩きながら、
思いをめぐらした。

そして、父親の系列会社の知り合いの中に、
樹と同じ学年で、
その学院に通っている顔見知りがいるのを思い出して、
蓉子は小さく笑った。

婚約者以外にあんなに高価な贈り物をするなんて、
非常識にもほどがある。
馬鹿にするのもほどほどにして欲しいものだ。

蓉子は心の中で苦々しく呟いた。

以前に蓉子が送った、亨と写っているあかりの写真を添付したメールにも、

樹いつきは何の返事も寄越していなかったのも、
ますます蓉子を苛立たせた。

蓉子は携帯を取り出すと、

系列会社の知り合いの生徒の方ではなく、
その父親の会社にじかに電話をかけた。

意外なギフト

「へえ、樹^{キツ}があかりちゃんのために、

この時計をねえ」

薫があかりから受け取った、綺麗な銀色の時計を見ながら、面白そうに言う。

放課後。

場所は「Beaux Ennui^{ポウ アンニユイ}」の部屋。

「これって、相当高価ですよね。」

やっぱり、使用人の私が、頂けるようなものではないですよ？」
あかりが上目遣いで言う。

耳を出した短髪に、きりつとした二重の目が印象的な、
ボーイツシユな薫が、声を上げて笑う。

側にいた愛良も、薫の手の中を覗き込んで、

「ああ、これね。高くて有名なブランドだけど、

樹^{キツ}は仕事の報酬は、

自分とこのころの企業から、こんなケース買い出来るほど貰ってるらしいから、

まるきり、心配いらないわよ」

愛良は腰までの長い黒髪を指先でいじりながら、なんてことなく言
った。

「そうですね・・・」

お金持ちのお嬢様の二人に言われても、

あかりはやはり、自分には身につかないぜいたく品のよさな気がし

てしようがない。

でも、樹との約束で、この時計は身に着けるようにと言われている。せいぜい壊したり失くしたりしないようにしなければと、あかりは心の中で思っていた。

「そう言えば、男性陣。いらっしやらないんですね」

B・Eの部屋を見回して、あかりは言う。

いつも放課後は、一之瀬家での仕事があるので、

あかりはここには寄らずに、真っ直ぐに学院から帰っているのだけれど、

今日はどうしてもこの時計を、薫と愛良に見せて確認したかったの
で、

寄ってみたのだった。

「ああ、今度、男子だけ球技大会あるじゃない？」

愛良が興味無さそうに言う。

「球技大会？」

あかりは愛良の言葉を繰り返しながら、

なんかそんな事をホームルームで言っていたなあと、思い出す。
クラスの女子生徒がキャアキャア言っていたような。

「確か、第二学年はバスケットなのよね。」

クラス対抗試合の為の、練習始まつてるんじゃないかな」

薫が言った。

「雪丸も明人も、樹も体育館にいるんでしょう。」

きつとたくさんの方女子生徒が、黄色い歓声上げてるわよ」

うんざりとしたように愛良が言うのに、

「え、樹さまがバスケットを？」

あまりに意外で、思わずあかりは叫んでしまった。

いつも無表情に、

デスクで座って仕事をしている樹の姿しか、

思い浮かばないあかりには、

樹がバスケットをしている姿など想像も出来ない。

「あら、樹ってスポーツには縁遠いように思えるけど、

あの身体能力って半端ないのよ？

頭脳と肉体の両方に、あれだけ神様からギフト貰っている人間って少ないでしょうね」

薫はあかりの顔を見て、ふっと笑った。

「見に行く？樹と明人と雪丸が三人揃ってたら、

それこそ、女らが大騒ぎでやかましいけど、

どうやらあかりちゃん、樹を見に行きたいらしいし」

「あかりちゃんが行くなら、私も付き合ってもいいけど」

愛良もあまり気が進まないけれど、しょうがないという風に言った。

「樹が、何か最近、日に日に変わってきてるじゃない？

それが面白いから」

愛良はにやりと笑って、あかりを見て言った。

あかりは愛良の意味深な微笑みに目を伏せるけれど、やはり好奇心には勝てない。

「じゃあ、少しだけ、見学に行っていていいですか？

私この後、お屋敷で仕事がありますから、

長居は出来ないのですけれど」

あかりが言つと、薫と愛良は頷いて立ち上がった。

体育館。

複数のバスケットボールが床にバウンドする音と、靴がフロアリングの床を踏みしめるキュツという音。そして、多数の女子学生の歓声が、わんわんと体育館中に響いている。

中に入ると、いくつかのバスケットコートで、ノースリーブのシャツと、膝丈のパンツのバスケットのユニフォームを着た、

第二学年の男子生徒達が、多数それぞれにボールを追いかけ走っていた。

その練習の光景を見学している女子生徒が、体育館の中で、ぎっしりとコートを取り囲み、黄色い歓声を上げている。

その熱気と迫力に、あかりは気後れしながらも、
樹の姿を探した。

一際、人だかりの多いバスケットコートを見つけると、あかりはそこに近づいていく。

案の定、樹の姿があった。

そして、相手チームには明人と雪丸の姿もある。

ノースリーブのTシャツと膝丈のパンツ姿も見慣れないのに、汗を飛ばしながら、ボールをドリブルして走る樹の姿を見て、あかりの胸は、どきりと音を立てた。

パスを流し、受け取り、瞬時にチームの動きを読み、隙の無い動きをしながら、

でも樹は、独りよがりにならずにチームを助ける動きをしている。樹が普段、他の生徒とコミュニケーションを取っている様子など、あかりは、はつきり言ってみたことがない。

なのに、樹のチームの5人は、まるで昔からのチームのように動いている。バスケット部などではなく、これはあくまでもクラス対抗の球技大会という、

刹那なチームなのに。

その身体能力だけではなく、樹のチームをまとめる動きも、まさしく天才的なのだ、あかりは思った。

たかだか17歳なのに、大企業の幹部らをまとめる能力を持つ天才は、高校の球技大会などをまとめるのは、きつと何てことないんだろう。あかりは心の中で、改めて感嘆していた。

樹がパスをチームメイトに流して、
ゴールに突っ込んでいく。
相手チームの明人と雪丸が追いついて、
樹にぴつたりとディフェンスを被せる。
けれど、樹は、その防御の隙について、
味方から送られてきたボールを上手く受け取ると、
即座にボールをシュートした。

オレンジ色のボールは、
真っ直ぐにゴールに飛んで行き、
リングには触りもしないで、ストンとネットを通過した。
周りを取り囲んでいる女子生徒から、
体育館がビリビリと震えるような、黄色い歓声上がる。
あかりも思わず、歓声を上げて拍手をしていた。

笛が鳴り、練習のゲームが終わったのを審判が告げる。
中にいた10人は、それぞれ動きをやめて、
コートの外へと出た。

「凄い！樹さまに、こんな一面があったなんて」
あかりが、心底感心して言うと、
「樹に、惚れた？」

薫が面白そうに、あかりを見て言った。

「樹いっせきの片思いが、とうとう両思いになるのかしら？」
愛良もあかりを覗き込んで、面白そうに言う。

「あの、私はあくまでも、

一之瀬家の女中です。

樹いっせきさまだって、

私には、ペットみたいな感情しか抱いていらっしやらないですし、
片思いとか、両思いとか、

そういう物とは程遠いですから」

あかりは焦って、でも何となく頬が熱くなるのを感じながら、
一生懸命に二人に訴えた。

薫も愛良も、俯くあかりを微笑んで見ている。

ふと、バスケットコートから出てきた樹いっせきに、

ある一人の女子生徒が駆け寄った。

長い髪をカールさせた可愛い感じの子だ。

その無鉄砲な感じから思うに、

多分、一年生なのだろう。

樹いっせきが、もうどういいうタイプの人間か、

知っている二年生や三年生には、

こんな風に、自爆確実な行動を取る者はいない。

「一之瀬さま、どうかこれを受け取って下さい」
意を決したように、でも震える声で、

その女子生徒は言つと、
樹いつきに、手に持つている袋を差し出している。
何か手作りの物が入つていそうなラッピング。
良く見ると、その手も震えているようだった。

この大勢の視線の中、
こういう行動を起こすというのは、
どれだけの勇気があるだろうか。
あかりは驚いて、その光景を見ていた。

樹いつきは、自分の額の汗を手の甲でぬぐうと、
ちらりと、その女子生徒を見ただけで、
まるきり無視をして、その女子生徒の脇を通り過ぎた。
袋を差し出した、女子生徒が固まる。

あかりは瞬間、物凄くカチンときて、
樹いつきに向かつて、走り出していた。

「樹いつきさま、

男子たるもの、自分に好意を表してくれている女性に、
そんな態度をとっていいものでしょうか」

樹いつきの側にたどり着くと、
あかりは樹いつきを見上げて、早口に言った。

「あかり」

樹いつきは、もう帰つたとばかり思っていたあかりの姿を見て、
嬉しさに、口の端に笑みを浮かべる。

「樹さま、人の好意をまるでそこに無い物かのように、素通りして平気な樹さまを、あかりは好きになれません。想像してください。たった今、樹さまに贈り物をしようとしていた、

あの彼女の気持ちを」

あかりが言う。

樹は、そのあかりの言葉に、顔を上げて、自分が通り過ぎた女子生徒を見た。その女子生徒は、俯いて、今にも泣きそうだった。

「俺にどうしろと？」

樹は小さく呟いて、あかりを見て言う。

「簡単です。プレゼントを受け取って、有難うと笑って差し上げるだけで、きっと、彼女は幸せになるはずです。私が樹さまに、寒天のデザートを作ったものを、樹さまが、美味しいと言って下さったのと一緒です。私はあの時、本当に幸せを感じました。単純な事ですよ？喜んで貰いたいという気持ちに、喜んで貰えたのだと知ること。何よりも、それ以上の幸せは無いのです」

樹はあかりの言葉に、少し考える。

そして、あかりの手をとって、

そこに自分が贈った時計があるのを見て、

樹は、小さく息を吐いた。

あかりという存在は、樹にとって、
今後、自分が生き続けるという事に、
必要不可欠なのだと、樹は思い知った。
単純に、樹は、

自分がすること、あかりに喜んで貰いたかった。

「分かった」

樹は言う、あかりに小さく微笑む。

そして、あかりの手を離し、

今さっき、自分で通り過ぎた女子生徒に近寄って行った。

「悪かった」

樹が声をかけると、

俯いて震えていた女子生徒が、驚いたように顔を上げる。

でも、驚いてそんな樹を見ていたのは、
その女子生徒だけではなかった。

辺りがシーンと静まり返る。
全ての野次馬の女子生徒が、事の成り行きを見ていた。

「俺にくれるの？それ」

樹いつきが声をかけると、

一旦は下げた紙袋を、彼女はもう一度掲げると、
樹いつきに差し出した。

「受け取って下さい」

紙袋を手に取り、樹いつきは呟くように言った。

「有難う」

歓声が上がった。

野次馬的な歓声というよりは、

感動というようなニュアンス。

樹いつきが、ファンという名のどうでもいい誰かから、
何かを貰うのは、初めてだった。

樹いつきは、

周りなど気にせず、真っ直ぐあかりに向かって歩いて来た。

あかりの側に来ると、

手に持った紙袋を開ける。

手作りのクッキーが入っている袋を見つけて、

樹いつきはうんざりとして言った。

「俺は、コックとあかり以外の人間の作った物は食べない」

受け取った袋を、あかりに押し付けながら、
樹いつきが心底、嫌そうに言うのに、
あかりは笑った。

「あかり、もう俺も帰る。一緒に帰るか？」
樹いつきが言う。

「はい」

あかりは、あの独特な唇の両端を上げる、
微笑を浮かべながら答えた。

「ちよつと、薰見た？」

愛良が感嘆して、首を左右に振りながら言った。

「樹いつきが、ファンのプレゼントに有難うだって！
びっくり仰天よ」

薰が答える。

「樹いつき、変わったなあ」

明人が汗を拭きながら、薰と愛良の側に来て言う。

「うん、別人みたいだよ。樹いつきが笑う時、その目も笑ってるんだ。

あかりパワー、凄いよね」

雪丸も笑いながら言った。

体育館を出て行くこうとしている、
樹いつきとあかりの後姿を、

幼馴染四人はつぶやきながら見送っていた。

お互いに何も言わなかったけれど、
どこか手放して喜べないのは、
四人とも一緒だった。

恋人へのキス

「どうして、目を閉じるんですか？」
あかりは苦笑して、亨に訊いている。

写真コンテストの二次の審査のための写真を撮るのに、
あかりは亨に付き合っていた。
場所は近くの公園。

授業の終わった放課後。

樹は、また球技大会の練習で一緒に帰る事が出来なかったのが、
あかりには丁度、都合が良かった。
別にやましいことも無いのだけれど、
そして、別に樹とは主従だけの関係なのだけれど、
何故か、亨の事を樹に話すのは、
気が引けてしよつがなかった。

「次の写真の審査のテーマが、

「恋人へのキス」っていうものなんだ」

亨が言いづらそうに、言う。

「恋人へのキスですって？」

あかりは声をひっくり返して、聞き返す。

亨は頷いた。

「キスつてのは、する時に目を閉じるものだよね？」

亨が言う。

あかりは目を伏せて、

「キスをしたことが無いので、さっぱり」
頬を赤く染めて、呟くように言った。

亨は笑って言った。

「イメージだから、あくまでも。」

でも、思うんだ。あかりちゃんのあの笑顔で、

そっと目を閉じられたら、どんな男もキスしたくなるんじゃない
かって」

あかりはぷつと吹き出した。

「そんな事、絶対ないです」

自信満々で言うあかりに、亨は首を左右に振る。

「イメージ通りの写真を撮ってコンテストに送れば、

絶対に何かしらの結果が出ると思う。」

そうしたらあかりちゃんにも、分かると思うよ」

あかりは言葉を失って亨を見ている。

「騙されたと思って、僕の言うとおりにしてみて」

亨の自信満々の言葉に、あかりは小さく肩をすくめて頷いていた。

藤堂麻里は、悟られないように、

ここ数日、密かにあかりを見張っていた。

蓉子の命令だ。

麻里の親の経営している会社の、親企業のCEOの一人娘。

あかりの腕時計を盗めという指令。

しかし、どうしてなんだろう。

あかりなんかの腕時計を手に入れて、どうするといふのか。麻里にはさっぱり、その理由を想像する事が出来なかった。けれど、指令には従わなければならぬ。それも直接自分に話があつたわけではない。父親経由なのだ。決して、しくじる事の出来ない指令だつた。

ここ数日あかりを見張っていて分かつた事があつた。あかりはトイレに入って手を洗うたびに、必ずその時計を外す。チャンスは数多くあるだろう。

麻里は最もさり気なく、その時計を盗める機会を狙っていた。

悲痛な呟き

それは、樹いっぎの一族が経営する親企業が抱える、歴史はあるけれど低迷しつつある関連企業の古臭いイメージ刷新のため、樹いっぎが自ら考えた企画ではあった。

医療器具の輸入企業という固いイメージを変えたいと、民間からカメラマンの新しい才能を発掘するというような、全く異業種のコラボからなる、

一般公募のコンテストなんてものを導入した、画期的な企画だった。

一次審査には、父であるCEO代理の樹いっぎは関わっていない。けれど、二次審査からは参加することになっていた。

採用された写真が、そのままメディアの電波に乗るということもあったし、

大賞を受賞した者の褒賞の金額も大きい上に、樹いっぎの両親のコネで、

その受賞者はアメリカの著名な写真家に弟子として入門出来るという、

素晴らしい副賞のせいもあって、生半可に他人に審査を依存することも出来ないのだった。

迎えの車に乗って、

導かれるがままに、関連企業の東京支社に向く。

17歳の樹いっぎは、玄関先から全ての社員達に最敬礼で迎えられた。

どう見ても異様な光景だ。

樹は冷静に思う。

何故、自分の周りの大人達は、
17年しか生きていない自分を、こんなに畏れるのか。
生まれついた家柄のせいだろうか。

でも、それだけではない事を樹は感じていた。

ということは、こうした事例を引き起こしている自分が、
結局は、異常なのだろう。

樹は、関連会社の重役室のふかふかの椅子に座り、
目の前に積まれている書類を見る。

普段はその椅子の主であろう重役も、今は樹の脇に立ち、
審査対象の書類を、樹に差し出していた。

樹が頷いて書類の束に手を伸ばすと、
辺りにいた重役や社員達が、部屋を静かに出て行く。

このコンテストは、結局企画から全ての責任は俺だけにあるという
ことを、

この関連会社の者たちは、態度で示しているのだろう。

樹はため息をついた。

だからこそ、ここの体質は昔となんら変わらないのだ。

自分が自分を変えようとしなければ、

他の誰にも、結局は自分を変える事なんて出来ない。

他力本願で叶う願いなど、結局この世には無いのだ。
企業とて、同じこと。

自分が成人をして、本格的にこの企業に関わる日が来るのを想像して、
樹は、げんなりした。

そして、二次審査応募の書類を、

興味無さ気にペラペラとめくっていて、

樹はあるものを見つけて、手の動きを止めた。

一枚の写真。

どこかの公園だろうか。

背景には、木々の緑と家族連れ達が写っている。

青い空と白い雲。

そして、写真の中央に大写しになっている、
笑顔のまま目を閉じたあかりの顔。

唇の両端がくいつと上がっている例の微笑み。
でも、その笑顔の瞳はきつちりと閉じられていた。

樹は驚いて、しばらく手に持ったその写真を見つめる。
そして、このコンテストに関する資料を探して、
テーマを見た。

「恋人とのキス」

樹の胸にさざなみが立つ。

それは、次第に荒れ狂う波に変わっていった。

あかりが、この写真を撮った者に対して、
実際に、こういう表情をしたのだ。

樹いつきの胸に、まるで巨大な鉤爪に握り締められたように、
強い痛みが走った。

「あかり……」

樹いつきは自分が悲痛な声で、あかりの名前を呟いている事には、
気がついていなかった。

あかりは学院のトイレから出ると、
水道の蛇口をひねり、手を洗う。
目の前にある鏡を見上げて自分と目が合うと、
にっこり笑った。

「今日は樹いつきさまは、お仕事で学院はお休みだけれど、
お帰りは早いと伺っているから、手作りの餃子作ってみようかしら。
ら。」

って、樹いつきさま、餃子なんて食べるかしら

無邪気にも、少し不安げに鏡の中の自分に問いかける。

「でもいつも、樹さまはあかりの作った物は嫌がらず食べて下さるから、

きつと大丈夫よね」

あかりは鏡の中の自分にもう一度笑って、持っているタオルハンカチで手を拭くと、

鏡の前の棚に外して置いておいた、腕時計を探した。

置いたはずの場所に、樹から貰った高級な腕時計が無いのに気がつくくと、

あかりは愕然とする。

「うそ」

呟くと、慌てて這いつくばり、

その辺に腕時計が落ちていないか、必死で探す。

でも、腕時計は見つからなかった。

「どうしよう」

あかりはトイレの中で立ち尽くして、呟いた。

とても樹には、失くしたとは言えない高価な時計だ。

一体、時計に何が起きたのだろう。

あかりは呆然と立ち尽くしていた。

無くしたものと無くしつつあるもの

放課後、あかりは学院に残り、
必死で時計を探していた。

確かにトイレで手を洗うために外したように思うものの、
でも、もしかしたら自分の勘違いで他に置いたのかもしれないのだ。
教室、廊下、体育館。

今日一日に自分が歩いた場所のすべてを、もう一度あかりは這いつくばるようにして、
時計を探していた。

でも樹いっせに貰った、
あの美しい銀色の一流ブランドの時計は、見つからなかった。

太陽が傾き日が暮れ、自分の屋敷での仕事に相当の遅刻をしているのを思って、
ようやくあかりは帰路についた。

がっくりと肩は落ち、いつも他人までも誘うような口の端を上げた
笑顔はなく、

その瞳には涙が玉になって浮かんでいた。

どうやって樹いっせに、言い訳をしよう。

心の中で思っても、答えは見つからなくて、
どんだん気持ちは塞いでいく。

一之瀬家の門の前にたどり着くと、
しばらくあかりはその前で佇んでいた。

辺りは次第に暗くなりつつあり、一之瀬家の屋敷には明るい灯りがともりだす。

いつまでこうしていてもしょうがない。

時計をなくしてしまったことを正直に話して、樹いつきに許しを請うしかないのだ。

弁償をして同じものを探して買うようなお金なんか、あかりにはないのだし。

とほとほと使用人口に歩いていき、入り口の扉を開けると、

その正面の壁に、樹いつきが寄りかかって立っていた。

あかりを待っていたのだろうか。

白いシャツと黒いパンツという私服の姿だ。

学院の制服のままのあかりは、驚いて目を見開くとその場に固まった。

樹いつきは黙ってそのまま、あかりを見ずに目を伏せて立っていた。

あかりはその樹いつきの様子に戸惑って、

樹いつきに数歩近寄る。

「樹さま………?」

樹いつきはあかりの声に目を上げると、

あかりを射抜くように真っ直ぐに見た。

時計を無くしてしまっているあかりは、

樹いつきのその真っ直ぐな、あかりの心を覗くような視線に耐えられず、

思わず目を伏せてしまう。

あかりの様子を目を細めて見ていた樹は、
声を絞り出すように言った。

「あかり、話がある」

そのいつもと違う苦しいようなトーンの樹の声に、
あかりは驚いて顔を上げた。

樹とあかりの視線がぶつかり合う。

あかりの心の中をえぐるように見つめる、

見たこともない樹の強い視線に、

あかりは戸惑った。

「…私もお話があります」

あかりもようやく言葉の口から押し出した。

謝るのなら、早いほうがいい。

樹が、あかりの手をつかみ歩き出す。

少し冷たいその手に青ざめながら、

あかりは樹の後をついていった。

樹の部屋に入る。

ボタンと重い音を立てて扉が閉まると、

樹はデスクに歩いていき、引き出しを開けて何かを取り出した。

あかりは入り口で佇んだまま、樹の様子を見つめている。

「これは、あかりだろう？」

樹が、ぼそりと小さい声で呟くように言ってあかりを見る。

それは亨がコンテストの二次予選に出した、あの写真だった。気恥ずかしくも、亨に言われるままに、恋人とキスをするという想定で、カメラに瞳を閉じてみせたものだ。

どうして樹が、この写真を持っているのだ。

あかりは驚いて、何も言えずにいた。

「あかりの恋人なのか？この写真を撮ったやつは」

樹がぼそりと言葉を続ける。

あかりは言葉の意味が分かれると、ハツとして樹を見た。

「あかりはこんな顔をして、他の男を見ることがあるのか？」
再び、消え入るような樹の声。

「違います！それは頼まれてモデルをやっただけの写真で」

あかりは樹に走りよって、デスク越しに言った。

「亨さんは、私の恋人なんかじゃありません！」

樹があかりを見る。

「亨？」

目を細めて自分を見る樹に、あかりは何故かいたたまれなくて、顔を伏せた。

樹がデスクを回って、あかりの側にやって来る。

そして、あかりの腕を掴んだ。

「樹さま？」

あかりは自分の腕を掴む樹の手の力の強さに驚いて、樹を見上げる。

フランス人の血の入っている金に近い茶色の瞳が、
あかりを見下ろしていた。

魅入られるように、あかりは樹を見上げている。

樹の片手が上がり、あかりの頬を包んだ。

次の瞬間、あかりは樹の顔が自分の顔に近づくを感じた。

温かいぬくもりが、自分の唇を塞ぐ。

その温もりが何か分かると、あかりは目を見開いた。

心臓が飛び跳ねるのを感じて、

思わずあかりは樹の胸を手で押しつける。

一体、何が起こったのか。

あかりの拒絶に、樹は傷ついてあかりを見ている。

樹の気持ち痛みほど分かるもの、

あかりはあまりの出来事に何も言えず、

ただ樹をおどおどと見上げるだけだった。

樹がふと手を伸ばして、あかりの手を探る。

そこにあの時計は無かった。

「あかり……」

樹が独り言のように呟く。

あかりは何か言わなければと思いつつ、

舌が口に張り付いてしまったかのように、

何もいえず、ただ青ざめて樹を見ているだけだった。

「何をしてるの？あなた達」

ふと声がして、あかりは飛び上がりそうに驚く。
樹も目を上げて、その声を振り向いた。

いつの間にか、部屋の入り口の扉を開けて側に立ち、
樹とあかりの様子を見ている人物がいた。

「母上」

ぼそりと樹が呟く。

あかりは樹の言葉に息を飲んだ。

普段は外国にしていると聞いていた、樹の母親の志保なのだろうか。
母上と樹と呼ばれた、その美しい中年の女を見ると、
あかりは樹に掴まれている腕から自分の手を引き抜き、
ますます血の気の引いた青ざめた顔を下げて、お辞儀をした。

一体、どの辺りから見ていたのだろうか。

樹が自分に口づけていたのを見られていたのだろうか。

胸の中にぐじゃぐじゃの感情の嵐が起こり、

頭を下げているあかりの瞳から、ぼろりと涙がこぼれていた。

愛というもの

「だから、私は嫌だったのです」

樹の母親の志保が言いながら、入り口から部屋の中に入ってきて、あかりにつかつかと近づいてくる。

「いくら大叔父様の遺言とはいえ、

よその家庭の夫を寝取ったような愛人の娘を家に置くなんて」

フランス人とのハーフ、樹と瓜二つの美貌を持つ志保は、

あかりの側に近寄ると片手を高く上げて振り下ろし、

思い切りあかりの頬を叩いた。

そのあまりに強い力に、あかりの体がよろけて床に倒れる。

「母上！」

樹が叫んで、あかりに走りよった。

床にしゃがみこみ母親の志保を睨みながら、

あかりの体を抱き寄せ立ち上がらせようとすする樹に、

あかりは叩かれた頬を手で押さえて、樹の手を優しく押しつけた。

あかりは自分一人の力でゆっくり立ち上がると、

志保を真っ直ぐに見た後、また再び頭を下げる。

もし、樹が自分に口づけていたのを見られたのだとしたら、何をどう罵られようとも、言い訳は出来ない。

それぐらいのことは自分の立場上、あかりは理解していた。

「申し訳ありませんでした」

あかりははつきりとした口調で、頭を下げたまま謝罪する。

「あかりが悪いわけじゃない！どうしてあかりが謝るんだ。

理由も聞かずに手を上げた母上が、あかりに謝るべきなのではないですか！」

樹はあかりと志保の間に割り入ると、あかりをかばうように背中に隠して、

母親に声を荒げた。

いつも無表情といってもいいほど、

感情を表に出したことの無い樹しか知らない志保は、

自分に向かって声を荒げる樹の様子に、

息を飲んでいた。

自分に瓜二つの美しい一人息子の顔は青ざめ、

樹の茶色い瞳には、

はつきりと、母親である自分への反発心が浮かんでいる。

まさか、樹は本当にこの娘を愛してしまったのか。

大叔父がこの少女の母親を愛したように。

そんな事を思った志保の視界がぐらりと暗くなった。

やはり、大叔父だけではなく、

一人息子の樹も、

こうして自分を、ないがしろに裏切るといつのか。

他の女のために。

そして、それは自分の夫とて同じだった。

志保の体は力を失い、そのまま床の上に崩れ落ちた。

「奥様！」

あかりが叫んで志保に駆け寄る。

「あかり、母上など放っておけ！」

樹いつきが叫ぶように、あかりに言い、

その言葉に、あかりは動きを止めた。

「この方は、樹いつき様のお母様です」

あかりの言葉に、樹いつきが強い調子で言い返す。

「だから、何だっていうんだ！あかりを殴ったんだぞ？」

ちゃんとした理由もなく、自分の感情のままにあかりに手を上げるなんて、

母上と言えども許せない」

樹いつきの苦々しい言葉に、あかりは俯いた。

けれど、すつと体の向きを変えると、

樹いつきに向き直る。

「良く、私の死んだお母さんが言っていた言葉があります」

冷静な口調で、樹いつきの目を見て、あかりは口を開く。

「人の親というものは、偉大だと」

あかりは一旦口を閉じて、樹いつきの顔をじつと見た。

「何故なら、人はどんな人でも生まれて来たときは本当に無防備で、

それこそ、馬などの生まれてすぐに歩くというような、

動物の赤ん坊にも劣る無力な存在です」

あかりの言葉に、樹いつきは黙ってあかりを見る。

「生まれて数年は、他の人の見返りの無い愛が無いと、

人間は赤ん坊から、育つことが出来ません。

だから、今こうして私たちがきちんと育って今があるというのは、その自分ではどうしようも出来ない生まれてきた頃の、他の誰かに無償の愛を注がれ、育てられたということなのです。樹さま、あなたがどうお母様を思われたとしても、今、あなたがこうして私の前にいらっしやるというのは、お母様が守ってくださったからです」

あかりの言葉に、樹は顔を伏せる。そして、小さく呟くように言った。

「母上が、俺に無償の愛？」

そして、小さく笑う。

「そんなもの、感じたことも無いな」

あかりは樹に歩み寄ると、

「じゃあ、誰が小さい樹さまのおしめを換えたのですか？」

小さい声で、でも強く問い詰めた。

「使用人だろう」

樹が、即座に答える。

「その使用人に、樹さまのおしめを換えるように言ったのは、

誰だと思えますか」

あかりの強い口調に、樹は目を伏せた。

「形はどうであれ、

樹さまは、お母様に愛されてるのだと、私は思います。

いいえ、お母様だけじゃない。樹さまがこうしてここにいらっし

やるのは、

お父様にも愛されている。そして、もちろん、神様にも」

あかりは言っと、あの微笑でにっこりと笑った。

二人の間に、温かい沈黙が流れる。

「あかり」

樹は、そっと手を伸ばすとあかりの手を取ろうとした。

しかし、その自分の手首には、あの時計が無いのを再びあかりは思
い出す。

「救急車を呼びます。樹いしづさま、お母様の側について上げてくだ
さい」

あかりは言つと、樹いしづの部屋から駆け出した。

そして、何も無くて頼りない自分の左手首を、
指で触って小さく息を吐いた。

時計の行方

救急車が屋敷に到着して、

樹いっきの母親が使用人に付き添われて病院に運ばれていき、

その救急車の後を追って樹いっきも、運転手が運転する自家用の車で屋敷を出て行くと、

あかりはやはりもう一度、時計を探しに行こうと学院に向かった。

どうしても、学院で時計をなくしたとしか思えないし、

とすれば、どこかにあるはずなのだ。

選りすぐりのお金持ちの生徒たちが通うあの学院で、

いくら高価とはいえ、あかりの腕時計が学院の生徒に盗まれたとは、どうしてもあかりには思えなかった。

時間は夜の8時を回っている。

校門脇の管理棟に駐在している学院の管理人に、

どういう風に懇願すれば、夜の校舎の中へ入れてもらえるだろうと、

あかりは算段しながら、学院に向かう道を急いでいた。

地下鉄を降りて階段を上がり、学院へと続く商店街のアーケードを歩く。

エプロンを外しただけの、使用人の紺のワンピースの自分の姿が、

シヨウウィンドウに映っているのをちらりと眺めて、

ふとそのガラスの向こうに展示されている物に目が行くと、

あかりは足を止めた。

それはリサイクルショップと言えば聞こえがいいけれど、

要は、おしゃれな今時の質屋だった。

その店のシヨウウィンドウに、

あかりが樹に貰った物と、そっくりな腕時計が飾られていたのだ。

「似てる！」

あかりは張り付くようにしてガラス越しに、樹に貰った物と良く似ている、その上品なデザインの銀色の腕時計を凝視した。

この時計を買って何食わない顔をしていたら、きっと樹にも分からないのでは、と心の中で悪魔が囁く。

けれど、その値段札には、

なんと30万円の値札がついていた。

「中古の値段で、30万円」

あかりはガラス越しに絶句する。

どう考えたって、自分には出せない値段だ。

しかし中古で30万円では、一体新品ではいくらだったのか。樹に貰った腕時計は、あかりの想像を遥かに超えた高価な物だった。

どれだけそうしていたらろう、

ふと声をかけられてあかりは我に返った。

「この時計がお気に入りですか？お客様はお目が高いですね。

今日入ったばかりのレアな商品ですよ？」

あかりは声の主を振り返って、

シヨウウィンドウにしがみつくようにしていた自分に気がつくのと、赤面をした。

店の販売員と思しき、初老の男があかりの後ろに立っており、度の厚いメガネの奥から、優しくそうにあかりを見ていた。

優しく声をかけられたせいか、あかりは思わず心の中の言葉を口に出してしまふ。

「私が今日失くしてしまった腕時計と、これがあまりにも似ていた
ものですか」

ガラスの中の時計を指差して、あかりは小さい声で言う。
店の男は首を傾げて、もう一度時計に目を戻した。

「これと似た時計ですか？」

男があかりに目を戻して言う。

あかりは頷いた。

「うーん、きつとお嬢さんが失くされたのは違う物だと思いますよ？」

この時計は日本では売っていない物ですし、

一個一個に6までのシリアルナンバーが入っています。

つまり、この時計は世界で6個しか販売されていない限定品な
のです。

一瞬で売り切れたと、噂では聞いております」

男の言葉に、あかりは一瞬言葉を失った。

それほどの時計だったのか。

「ニューヨークで販売された物なのですか？」

気を取り直して口を開いたあかりの言葉を聞いて、少し男の表情が
変わる。

「おや、良くご存知ですね。これはこのブランド本店だけの販売商
品なのです。」

なので、ニューヨーク本店だけでの販売になります」

「それも、最近発売されたばかりですよね？きつと」

あかりの脳裏に、出張で出向いたニューヨークにあるそのブランド
宝石店で、

樹が、この時計を外人の店員に薦められている様子が幻想として浮
かぶ。

きつと樹であれば、そういう貴重で特別に高価な新製品を購入する
のは、

想像に難しくない。

「良くご存知で。発売から2週間経っておりません」

男は今度は不思議そうな表情になって、あかりを見て言った。

「申し訳ありませんが、

ウィンドウの外に出して見せてもらってもいいでしょうか？」

あかりは懇願するように言った。

店員の男はあかりのその言葉に、唇を閉じて黙る。

「もちろん、欲しい時にはお金を払いますから」

あかりが言っていると、男はほっとしたように頷いて店の中に戻っていくと、

振り向いてあかりにも来るようにと仕草で招いた。

30万円の時計を買うなど、到底無理な事だけれど、

まさか自分の物だと思うから返してくれと、言うことなど出来ない。あかりは複雑な気持ちで、男に招かれるまま店の中へと入って行った。

シヨウウィンドウの中から、その銀色に光る時計を出すと、

店員の男はシルクの布が張ってある台に時計を乗せて、

あかりに差し出した。

近くに見れば見るほど、樹いっせきに貰った時計に見える。

「触ってもいいですか？」

あかりが遠慮がちにいうと、男は小さく頷いた。

細いチェーン、シンプルだけれど小さい宝石の埋められている文字盤。

手首にはめると、しっくりとしたあの重さだった。

腕時計の感触と同時に、樹いっせきの指の感触もあかりの手首に蘇る。

あかりの時計をはめた手首を掴んで撫でる、優しい指の感触。

これだ。

あかりは心の中で呟いた。
これが樹いじつきに貰った時計なのだ。

けれど、どうして学院内で失くしたはずの時計が、
こうして即日いつじつに質屋しちやに売られているのか。

あの学院の生徒が、例え拾った物でも、
こういう質屋しちやに物を売って金を得るような経済状態には、
到底、思えないのだけれど。

でも、今はこの時計に30万円の値札がついているのは、
どうしようもない事実だ。

あかりは自分の手首から時計を外すと、店の男に返した。

「どうも有り難うございました」
言って頭を下げると、あかりは店から出て行く。

自分の後姿を、じっと見つめる店員の男の視線が背中に痛かった。

あかりは店から出ると当初の目的の学院には行かず、
一之瀬家の屋敷に急いで戻った。
そして、真っ直ぐに女中頭の波乃の部屋に向かう。

いきなり30万円貸してくれなどと言ったら、
一体、波乃はどんな顔をするだろうか。

あかりは青ざめた表情で、
でも、波乃の部屋の扉をためらわずにノックをした。

波乱の予感

「一体、何があつたというの？」

あかりの30万円という大金の借金の申し出を聞いた後、波乃がため息をついて言った。

時間は夜の十時を回ったところ。

女中頭としての一日の全ての仕事が終わった後、

くつろぎの時間を波乃が自室で過ごしていたところに、あかりが訪ねて来たのだった。

自室に招きいれながら、あかりの格好はまだ仕事着のままなのにも、波乃は首を傾げる。

「まさか、あなたまだ仕事をしていたわけじゃないわよね？」

波乃の言葉に、あかりは首を左右に振った。

「いいえ、少し出かけておりました」

あかりは目を伏せて小さく言った。

「出かけてたつて、こんな時間に一体どこに？」

ソファに座るように言いながらも、

あかりの元気の無い様子に気がつく、波乃は優しい口調で問いかけた。

「実は」

あかりは目を上げて波乃を真っ直ぐ見ると、意を決したように口を開いた。

「今日、樹さまに頂いた腕時計を、学院で失くしてしまいました」「波乃が驚いたように目を見開く。」

「樹さまに、腕時計を貰っていたの？」

樹^{いつき}があかりに思い入れをしているのは、波乃も気がついていていた。まさか、あかりがその時計をねだったわけではあるまい。あかりに品物を贈るほど、樹^{いつき}の思いが段々と募^もってきていたということなのだろう。

「はい、とても高価なようなので、頂^{いただき}くのをお断りしたのですけれど、

どうしてもと、樹^{いつき}さまがおっしゃって」

あかりの言葉は最後の方は消え入りそうだ。

「身分不相応だと、本当にお断り申し上げたのですけれど」

「樹^{いつき}さまはあかりちゃんが好きだから、

何か贈り物をしたかったのでしょうか」

波乃の意外な言葉に、あかりは顔を上げた。

あかりの殊勝な表情に、波乃は理解していると頷いて見せる。

「樹^{いつき}さまは、私に片時もその腕時計を外さないようにと、おっしゃいました」

あかりの言葉に、波乃は小さく息を吐く。

樹^{いつき}なりの、あかりへの独占欲の現れだろう。

「学院の化粧室で手を洗った時に、

その時計を鏡の前の台に置いたのですけれど、

置き忘れて化粧室を出てしまったのを思い出して急いで戻った時には、

もう腕時計はそこにありませんでした。

どうしても取り戻したかったもので、

洗面台に置いたのは自分の勘違いかと思って、

今夜中に学院に戻って、もう一度ちゃんと学院中を捜そうと思って外出したのですけれど、

向かっている途中で通りかかった、

学院の近くのリサイクルショップのショウウィンドウに、とても似ている時計があったのです。

お店の人に出して見せて頂きましたが、やはり同じ時計だとは思えませんでした」

あかりの言葉に、波乃が続ける。

「そのリサイクルショップにあった瓜二つの腕時計の価格が、30万円っていうことなのね」

波乃の言葉に、あかりは力なく頷く。

「学院の誰かが、あかりちゃんから盗んで売ったのかしら」
波乃が呟く。

「でも、あの学院に通う方々は、皆さん私を除いて名家の子息令嬢でしょうから、

そんな事は絶対に無いと思うのですけれど。

皆さん、お金に困っているはずもないでしょうし。

あの学院で一番貧乏なのは、私に決まっていますから」

あかりが苦笑して言うのに、波乃は真面目な表情を崩さずに言う。

「何も、お金のために盗んだわけでは無いかもしれないわ」

波乃の言葉に、あかりは絶句して波乃を見た。

みるみる不安に青ざめていくあかりの表情に、

波乃は言葉のトーンをわざと明るく変えて続ける。

「ほら、樹さまは、とても美しくて素敵な方でしょう？

きっと、ファンが多いから、

いつも傍にいるあかりちゃんに嫉妬して、意地悪したのかも知れないし」

そう言いながらも、波乃の心の中には、

樹いっせの婚約者の蓉子の存在が浮かんできた。

蓉子の通っている学校は、樹いっせと同じ学院ではないものの、

その親の経済力の息のかかっている生徒は、学院にはたくさんいる

はずだ。

もし婚約者の自分を差し置いて、
樹いつきがあかりに腕時計をプレゼントしたと知ったら、
あのプライドの高い令嬢の事だ、
子分の誰かにあかりの腕時計を盗ませるようなことはやりかねない。

波乃はそこまで想像して、どきりとした。

もし、自分のその仮定が本当だとしたら、

何故、蓉子はその時計を質屋に売ったのか。

もしかしたら、あかりが自分で質屋に、

その腕時計を持っていたと、こじつけるためではないのだろうか。

とんだ言いがかりだとしても、今質屋にその腕時計があるのは事実
なのだ。

そして、あかりが言ったように、あかりが時計を失くした学院には、
質屋に時計を入れて金にしようとするような、金に困っている者は
一人としていない。

波乃は部屋のクローゼットに行くと、扉を開けて中の引き出しを探
った。

そして、封筒を手にしてあかりの元に戻る。

「ここに30万円あるわ。その腕時計を引き出していらつしやい」
あかりは波乃の言葉に目を上げて、目の前に差し出された封筒を見
る。

「必ず、毎月お給料から少しずつお返ししますので」

目に涙を浮かべて言うあかりに、波乃は小さく笑ってみせた。

「でも、もう今夜は遅いから、時計を引き出しに行くのは明日にし
なさい」

波乃が言うと、あかりは表情を曇らせる。

あかりの気持ちは、波乃には手に取るように分かった。この瞬間にも、時計が売れてしまいかもしれないという不安感。

「そんなに高価な時計が、一晩で売れるわけがないわ。

大丈夫よ。明日にしなさい」

波乃は時計を見て、高校生が外を歩く時間ではないのを改めて確認すると、

有無を言わさぬ口調であかりに言い、その手に持っていた封筒を押し付けた。

あかりは波乃から封筒を受け取り、深くお辞儀を言う。

「分かりました、お店には明日行きます。本当に有難うございます」

あかりが自分の部屋から出て行くのを見送りながら、

波乃は大きくため息をついた。

かつて、樹の大叔父があかりの母親を愛し入れ込んだ大騒ぎは、古くから一之瀬家に勤める波乃にも覚えがあった。

あかりの母親と結婚すると主張する大叔父に、

他の親戚一同が猛反対をして一族が決裂しようかというような、

騒動が持ち上がったのだ。

それを収めたのは、大叔父の愛人の娘のあかりの受け入れの示談だった。

大叔父の死後、その約束は執行されているが、

果たして、あの騒動は収まったのだろうかと思ふ。

大叔父とあかりの母親との間に叶わなかった思いが、

樹とあかりの間に持ち越されていると思えないのだ。

ひと波乱ありそうだ。

波乃はもうひとつため息をついて、心の中で呟いていた。

ハプニング

いつもの起床時間よりも三十分早く、
あかりはベッドの上に飛びあがるようにして、起き上がった。

まだ辺りは早朝のせいで薄暗い。

あかりは波乃に借りたお金の封筒を、大事そうに枕の下から取り出して胸に抱えると、

カバンにしまつて、朝の仕事に取り掛かる。

使用人服に着替えて、屋敷の掃除などの全ての自分の持ち場の仕事を終え、

朝食も取らずに自分の部屋に戻り、学院の制服に着替えると、

あかりはカバンを掴んで、波乃が樹いっきの朝食を給仕しているであろう居間へと急ぐ。

時間はまだ7時半にもなっていないかったけれど、

あかりの心はどうにもこうにも早つて、せっかちな行動に出るのも仕方ないのだった。

それにどうしても、今朝は樹いっきと一緒に学院に登校することは出来ない。
い。

学院に行く前にどうしても、あの店で時計を取り戻さなければならぬのだ。

もし登校時間内に店が営業を始めなければ、授業をさぼつても店が開くのを待つつもりだった。

あの時計を取り戻さなければならぬのだ。
どうしても。

樹いっきにどうしたのかと聞かれる前に。

居間へと続く屋敷の廊下を小走りになりながら、ふとあかりは樹の唇のぬくもりを思い出し、口元に手を当てると足を止めた。

そうだ、自分は樹に口づけをされたのだ。

改めて思い出すと、あかりの顔が燃え上がるように赤くなった。その時は、ただ驚いて樹を押しつけた。

何が自分に起こったのか、理解不能だったし、

樹が自分に口づけをしたなどと、信じられなかったからだった。

けれど。

あかりは立ち止まったまま、俯く。

胸が痛かった。

くすぐったいような、切ない痛みを伴うような感情。

今までの人生には、到底感じたことの無い思いだった。

それも当たり前かもしれない。

あかりが異性を思って何かを感じる事自体が、

初めてのことだった。

あかりはしばらく佇む自分にハッと気がつくのと、慌てて歩き出す。

樹を思っいっきてこんな風に心を乱すなんて、使用人としてあるまじきことだわ。

名前も知らないけれど、

でもこういうあかりの気持ち、決して樹いっきに対して抱いてはならない感情なのは、あかりには本能で分かった。

樹いっきの母親の叫ぶような声が蘇る。

「だから私は嫌だったのです。

よその家庭の夫を寝取ったような愛人の娘を家に置くなんて」

あかりは頭を振って、湧き上がったその嫌悪の声を振り切ろうとした。

でも、心はくじけそうになる。

死んだ母親の笑顔が頭に浮かぶ。

けれど、今回ばかりはその笑顔もあかりを鼓舞出来なかった。

自分が樹いっきに口づけされたのは、自分の不本意な事ではあるけれど、事実なのだ。

そして、母親が樹いっきの大叔父に愛されたのも、もともとは不本意な事ではあれ、母親もその気持ちを受け入れた事実がある。

色々考えた挙句、

あかりは一つの結論に達した。

結局、周りに自分の事をどう思われようが、あかりにとってはどうでもいいことだった。そんなのは貧しく生まれた時から、他人には何も期待されずに育てているし、

母子家庭という人の好奇心の的に晒されて生きてきたから、

自分に関係ない人が自分をどう言おうと、別に大人になった今だって、関係ない事だった。

ただ、樹いつきにだけは。

あかりは、血の滲むような気持ちで思う。

プレゼントとして渡された腕時計を、金のために質に入れるような人間だとは、

あかりは樹いつきには、決して思われたくない。

だからこそ、一時も争ってあの時計のもとに向かいたいのだった。

「お早うございます」

あかりは居間の扉を開けると、深々と頭を下げながら挨拶をした。

「あかりちゃん」

波乃の声がする。

あかりが顔をあげると、

大きなテーブルに座って波乃に朝食を給仕されている樹いつきが目に入る。

昨夜は、母親が運ばれた病院の付き添いから樹いつきが戻ってきたのは、深夜だったので、あれ以来あかりと樹いつきは顔を合わせていなかった。

「お早うございます」

改めて、樹の顔を真っ直ぐに見てあかりは言う。

口づけの光景がフラッシュのように蘇ってきて、あかりの頬がまた染まった。

「お早う」

樹の静かな声がする。

母親と言い争った時のものとは違う、いつもの冷静な樹の声に、あかりはほっとして小さく息を吐いた。

「今朝は少し用事がありますので、樹さまよりも先に出かけます。

学院でお会い出来れば嬉しいです」

あかりはぺこりと頭を下げて言うと、そのまま低い姿勢のまま居間の扉から退出した。

樹の声が追いかけてこないのに、あかりはほっとして、屋敷の玄関へと急いで行く。

そして、一気に屋敷から飛び出すと、あの学院近くの商店街へと向かった。

地下鉄を乗り継ぎ、

まだ営業の時間までには早い、商店街の通路をあかりは走った。

そして、目当ての店にたどり着くと、
走ってきたせいで荒い息を整えて、
まだシャツターの閉まっている店の前に、制服のスカートのまま座
り込む。

汗が額から流れるのを、あかりは手の甲で拭った。

どの位待っただろうか。

やがて、ガラガラと音がしてシャツターが開いた。

飛び上がるようにしてあかりは立ち上がると、

店のショーウィンドーに体を向ける。

ガラス越しにあかりの姿を見つけた昨日の店の人物は、
シャツターを開け終えると、店の外に出て来た。

「おや、昨夜のお嬢さん」

のんきな声で言う男に、あかりは食いつくように言う。

「昨夜、ここに飾ってあったあの時計は、あの腕時計はどうしたん
ですかっ？」

あかりの慌てている声色に、店の男はショーウィンドーを振り返る。

「ああ、あの君が言っていた時計かあ」

昨夜、あのあかりの時計があつた場所は空っぽになつていて、
あの繊細なデザインの美しい腕時計はなくなっていた。

「いやね、君が帰ってから直ぐにあの時計を買った人がいてね。

悪く思わないで欲しいよ。現金払いの良客だったんだから」

がっくりとあかりの肩が落ちる。

波乃に言われて、朝になってから店に戻ったものの、あの焦燥感というのはあながち当たっていたのだろうと、あかりは後悔した。

他の誰かに時計を買われてしまうかもしれないという、焦燥感。ああ、昨夜の内に、時計を買いに戻ってきていれば。

「……………そうですか」
あかりは力なく言うと、ふらふらと歩き出した。
カバンの中の、波乃に奇跡的に仮りる事が出来た30万円も、意味がなくなってしまった。

あかりの学院に向かう足取りは、
ひたすら重い。

樹いつきに合わす顔が無かった。

ふと、顔を上げると、
あかりは少し離れた場所に、亨の姿があるのを見つけた。

あの「恋人とのキス」の写真を撮った以来、
亨には会っていなかった。
何気なく、手伝ってしまったあのコンテストの写真が、
あかりと樹いっしょの間に、思いもよらない混乱を起こしてしまったのだ。
決して、それは亨のせいではないのだけれど、
もし、コンテストの結果がまた良いとしても、
もうお手伝いする気になれないあかりなのだった。

けれど、脇を通り過ぎるのに、無視をするわけにもいかない。
歩道の低いフェンスに腰掛けて、
心なしかうな垂れている亨に、あかりは声をかけた。

「亨さん、どうしたんですか？こんな場所で」
あかりの言葉に、亨が顔を上げる。

「あかりちゃん！」
亨は思いもかけない物を見たような、素っ頓狂な声を上げた。
そして、次の瞬間には、また元氣なく、
もとのようにうな垂れた。

「何があつたんですか？」
亨の様子に、あかりは心配になり、
再び親身に声をかける。
亨が力なく顔を上げた。

「実は、あかりちゃんにはまだ言ってなかったけど、

コンテストの二次予選、通ったんだ」

亨の言葉に、あかりは一瞬複雑な思いを感じる。

樹は、あかりと亨の關係に嫉妬しながらも、

亨の実力を重視して、コンテストを通じたということなのだろうか。

樹らしい。

あかりはふっと小さく微笑んだ。

樹は生まれながらに、神様に選ばれた優秀な人間なのだ。

下らない嫉妬から、亨の類まれな才能を潰すような事などしないのだ。

「良かったですね！本当に私も嬉しいです」

あかりは久しぶりに元気な口調が自分に戻って来るのを感じながら、亨に言う。

少しの間は、自分が樹から貰った時計を失くして落ち込んでいるのも、

忘れたくらいだった。

「有難う」

本当に嬉しそうに言った後、

「だけど」

亨がまた俯いて、呟くように言った。

「だけど？」

あかりが心配そうに、繰り返す。

「最終の三次予選に、もう参加出来ないんだ」
亨が言った後、血が出るくらい唇をかみ締めた。

「どうしてですか？」

あかりは驚いて、亨に近寄り顔を覗き込んで言う。

「僕の不注意から、大事なカメラを壊してしまっただ。

カメラがなければ、写真は撮れない」

亨の言葉に、あかりは言葉を失った。

「今まで一生懸命バイトをして、ようやく買ったカメラだったんだ」

しばらく、お互いの間に沈黙が流れる。

「一体、いくらしたんですか？」

あかりはカバンを抱きしめて、亨に訊いた。

「僕ら貧乏学生には、思いもつかない金額だよ」
亨が苦笑して言う。

「いいから、亨さん、言うてみて下さい」

あかりが言うと、亨は黙ってあかりをしばらく見つめた。

あかりは、亨がどんな思いでそのコンテストに向かっているか、
重々知っていた。

自分の人生を賭けているのだ。

それに、亨は信頼出来る人だと、あかりは素直に思う。

もし、もう買い戻すことの出来ない時計のために借りたお金で、亨を助ける事が出来るのなら、それに越したことはないだろう。もうたつた今は、この30万円には意味がないのだ。

亨なら絶対少しづつでも、返してくれるのは確信だ。

「どうしても壊したものと同じ型のカメラが欲しいんだ。値段は、130万」

亨が言う。

あかりは驚いて、目を見開いた。カメラがそんなにするのか。

「ただ、かき集めた資金があるから、不足分は30万くらいなんだ。それでも、三次予選の締め切りは迫っているから、もうどうしようも工面が難しくくて」

亨の言葉に、あかりはおずおずと口を開く。

「亨さん、申し訳ないけれど、」

もうコンテストの応募に協力は出来ないの。それでもいい？」

消え入りそうな声で言うあかりに、亨はふつと微笑む。

「樹いっせさんと、何かあった？」

あかりは目を伏せて、小さく首を振った。

「私はあくまでも、使用人ですから」

「三次予選は、モデルはいらないんだ。

向こうが用意した課題を、

自分のカメラと体だけでその場に出向いて撮影して、

その作品を審査されるといふものなんだ。

だから、もうあかりちゃんとの協力はいらさないんだよ」

亨の言葉に、あかりはほっと息をついた。

「今まで、本当に有難う。」

？ 僕が二次予選を通過出来たのも、あかりちゃんのお陰だよ。

本当に感謝してる」

徹が頭を下げて言うのに、あかりは慌てて首を振る。

「あくまでも、亨さんの実力ですって」

二人はふっと顔を見合わせて笑った。

「じゃあ」

亨が言つて、あかりの前から去ろうとする。

咄嗟に、あかりは亨の腕を掴んだ。

「亨さん、ここに30万円あります」

振り向いた亨が、あかりの言葉に目を見開く。

あかりはカバンの中から、あの封筒を取り出して亨に差し出した。

「勿論、私のお金ではなくて、

人に借りたものなので、絶対に返さないとならないんですけれど、でも、このたった今は私にはもう必要ないんです。

だから、どうか、亨さんのカメラを買ったためのお金に足してください」

途端、亨の顔がぱつと明るくなる。

「本当にいいの？あかりちゃん！」

あかりは大きく頷いた。

「有難う！絶対返すからね！有難う！」

亨は言っと、カメラを買いに行くのか、あつという間に、あかりの元から走り去っていった。

あかりは苦笑して、そのみるみる消えていく後姿を見ていた。

「へえ、あなたが時計を質屋に売ったのって」

ふと声がして、あかりは驚いて後ろを振り返る。

「彼氏に資金援助するためだったんだ」

声の主が誰か分かると、あかりは息を飲んだ。

藤堂麻里が腕組をして、そこに立っていた。

どうやら、亨との会話の一部始終を聞かされていたのだろうか。

「^樹さまが、こんなことを知ったら、どう思うかしらね」

藤堂麻里が小さく笑う。

あかりは固まって、藤堂麻里をただ見ていることしか出来なかった。

絶望的な思い

「藤堂麻里…さん」

あかりは青ざめた表情で、ようやく麻里の名前を口にした。

「亨さんは彼氏なんかじゃありません。

それに、あのお金は時計を売ったお金でもありません。人にちゃんと借りたお金なんです」

あかりは震える声で、でもはつきりと言う。

「あら、そうだったの？でも、あなたは彼氏じゃない人に、あんなに気軽にお金を貸すんだ。それにしても、偶然ね。

昨日、あの店で売っていた時計についていた値段と、あなたが今の彼に貸したお金の金額、30万円が同じなんてね。私、知ってるのよ？あなたが樹さま（いっせ）に買った時計と、質屋で売られていた時計がとっても良く似てたのを」

あかりは驚いて、一瞬言葉を失う。

「どうして、時計の事を知ってるの？

私が失くした時計と、この商店街の質屋に売られていた時計とが似てて、

その金額が30万円だったことも！」

藤堂麻里は答えず、小さく笑っただけだった。

「もしかして、あなたが質屋に売ったの？

私が失くした時計を、あなたが売ったの？」

あかりは藤堂麻里に近づくと、真っ直ぐに目を見て言う。

「さあね」

藤堂麻里がしらっと言うのに、あかりはつかつかって叫んだ。

「どうして？どうして、そんな事をしたの？」

「麻里さん、何をそんなに騒いでいるの？」

ふと、声がする。

「あ、蓉子さま、お早うございます」

麻里が振り返り、その声の主が誰だかわかると、明らかにあかりと話していた声とはトーンを変えて、しとやかに挨拶を口にする。

あかりも声を振り返って、

それが樹いっきの婚約者の蓉子だと気がついて、口を閉じた。

そして、目を見開く。

蓉子の少し後ろ隣に、樹いっきの姿があったからだった。

「樹いっきさまも一緒に来たんですね。」

学校が違うのに、一緒に登校なさるなんて、

さすがご婚約者同士、仲がよろしいですね」

真里がしらじらしい口調で言う。

心なしか、樹いっせの顔が青ざめて見えているのに、
あかりは気がついていた。

「あかりちゃん、彼氏と仲がいいんですよ？

彼氏が困ってたら、ポンとお金貸してあげちゃってて。

30万円ですって。私、普段買い物ばかりしてるから、

自分のお小遣いから、そんなまとまった金額調達出来ないわ」

麻里がしらつと言った。

「なにを言うの！」

あかりがまた叫びだすと、蓉子が口を開いた。

「私も樹いっせさまになら、いくらでもお金なんて貸して差し上げるけど、

昨夜遅くに、衝動買いでこの時計を買ってしまったから、

今すぐっていう訳にはいかないわ。手持ちはなくなってしまった
から」

蓉子が自分の左手首を差し上げて、あかりと麻里に見せる。

あの銀色が上品な、あかりの時計だった。

「わあ、とっても素敵な時計ですね、蓉子さま」

麻里のしらじらしい声。

「中古なのよ？でも、綺麗な時計でしょう？」

「一目ぼれしちゃって」

蓉子もしらじらと言葉を続けて、樹いっせを見た。

「これ、30万円だったの。いくら中古でも安いわよね？」

もしかしたら、あかりさんもこの時計が欲しくて、

お金を工面してたのかしら。じゃなきゃ使用人のあなたが、30万円持ち歩いて、男友達にポンと貸せるはずないものね」

ああ、そうか。
そこで、あかりは悟った。

全て、蓉子が仕組んで、
麻里が実行したのだ。

学院で失くしたあかりの時計を、麻里が手に入れて質屋に売り払い、その質屋に売られた時計を、蓉子が手に入れたというわけだ。

全ては、たった今の茶番を演じるために。

でも、これだけだったら、
あかりに樹いつに対しての挽回の余地はあつたはずだった。

想定外だったのは、亨へお金を貸してしまった事だった。
もし、亨にお金を貸してさえないければ、
波乃に樹いつに対する、30万円を借りた状況説明の応援もして貰えた
だろう。

けれど、亨の壊したカメラ代にと、
波乃から借りたお金を勝手に亨に貸してしまった今は、

樹いつきにどう言い訳を言おうが、信じて貰える根拠は無ない。

波乃も、樹いつきも、

あかりと亨の本当の関係を知らないし、説明のしようがないのだ。

「樹いつきさま」

あかりがかすれた声で声をかける。

樹いつきは悲しそうに、その薄い茶色の瞳であかりを見た。

そして、立ち止まっていた蓉子の脇をすり抜け、

あかりの横もすり抜け、学院に向かって歩き出した。

蓉子と麻里が目配せをしているのも、
もうあかりにはどうでも良かった。

あかりの目から涙が溢れ出る。

やはり、樹いつきの中では、

蓉子と麻里の方に、状況の理解が偏っているのだろう。
しょうがないことだ。

あかりが樹いつきに貰った時計を質屋に売って、
そのお金を亨に渡したと。

ストレートに受け取るとしたら、
本当に酷い話だ。

私は極悪人だ。

あかりは思った。

樹いつきの信頼を失ってしまった。

大好きな、樹いつきの。

蓉子と麻里も、あかりの側から去っていく。
別にどうでも良かった。

あかりはその場にしゃがみこむと、
商店街を通る他の生徒も人も気にすることなく、
膝を抱えて座り込み、声を殺して泣いた。

樹いつきの信頼を決定的に失った以上、
学院はもちろん、もう一之瀬家にも、
自分の居場所はなくなってしまった。

波乃に借りたお金は、
一生かかっても返そう。

でも、もうここから去らなければ。

あかりは血の滲むほど唇をかみしめて、

絶望的に思っていた。

夢の終わり

最初から全て、自分がここにいたのは夢だったのだ。

あかりは学院には向かわず、一之瀬の屋敷に戻ると、裏口から入って自分の部屋に向かった。

他の使用人たちは、自分の仕事に忙しく、いつもはいない時間に戻ってきて、なおかつ、人目を避けるようにしているあかりには、誰も気がつかなかった。

もともと、あかりの母親が一時愛人をしていた、樹^{いっき}の大叔父の好意がなければ、あかりがこの屋敷に住み込むことも無かったし、あんなお金持ちの学院に通うことも無かった。

もちろん、樹^{いっき}と出会う事も無かったし、身寄りのいない自分は、

きっと今頃は普通に、どこかの工場の工員か、スーパーのレジなどをして働いて、

一人でアパートなどに暮らしていただろう。
夢から覚めた今はもう、そのリアルな現実に戻るだけなのだ。

もともと、一之瀬の屋敷に持ってきていた荷物などはほとんど無かった。

使用人の制服も、学院の制服も、
自分のものではないものは全て置いていくつもりだったので、
下着などのわずかな自分の持ち物を集めたら、
わずかポストンバックひとつで事足りてしまった。

借り物の制服などを綺麗にたたみ、
ベッドなどの部屋の備え付けの家具などの中身を、
整理整頓する。

と言っても、もともと綺麗好きなあかりの部屋は、
あまり直すところも無かった。

波乃に残す手紙を書く。

絶対に借りたお金は一生かかっても返すということ。
詳しい事情を知らせることは、
今は出来ない事を許して欲しいという事。

この屋敷に来た初日から、
ずっと世話になっていた波乃と別れる事は、
あかりにとって、本当に寂しいことだった。

あんな大金を貸してくれるほど、
どこの誰とも分からない自分を信頼してくれたのも、
今までの人生では、波乃だけだったかもしれない。
樹いっきの他には。

などという思いが心の中に浮かんで、
あかりの目から、また涙が流れた。

きつと、自惚れではなく、
樹いっきは、
こんな自分でも好いていてくれただろうと思う。

あかりは心の中で呟く。

こづいて思い返すと、
一緒に過ごした日々は短いものだったかもしれない。

でも、樹いっきとの思い出は、
あかりの胸に溢れるくらいに蘇った。

胸に抱えられて馬に乗り、山の中を走り抜けたこと、ダンスパーティーの練習で、一緒にダンスを踊ったこと、あかりの作った寒天を美味しいと言ってくれたこと、あかりが歌う子守唄を聞いて眠るその寝顔を見ながら、一緒にベッドの中で眠ったこと。

どれもが、思い起こせば起こすほど、まるで夢のような出来事だった。

「そうよ、全て夢だったのよ」
あかりは呟いて、にっこりとあの笑顔を浮かべる。
でも、涙は後から後からその瞳から沸いて出ていた。

学院の制服を脱いだ後の着替えは、
この屋敷に来た時に来ていた、地味な紺のワンピースだった。

そう、本当に初めて、
まだ屋敷の使用人になる前に、樹いつきと出会った時にも、
自分は、このワンピースを着ていた。
通りかかの子供の風船が木にひっかかっていたのを、
あかりが木によじ登って取ってやった。

その時、偶然にも、
その木の下を樹が通りかかったのだった。

「あの時、初対面なのに、
樹さまに、パンツ見られちゃったんだっけ。
本当に、樹さま、災難だったろうなー」
鏡に映る自分の懐かしい服装を見ながら、
あかりは泣きながら、また少し笑顔になれる。

そう、思い返せば、
贅沢なくらい、樹には、たくさんのいい思い出を貰ったのだ。

だから、樹を裏切り傷つけてしまった今、
あかりが最後にひとつ、望むとしたら、
一刻も早く、樹には、
樹の感情を煩わせてしまった、自分の事を忘れてもらおう事だ。

もともと、あかりと樹は、
普通に生きていたら、交わる事のない違う世界を生きているのだ。
だからこうして別れが来るといふのは、
間違いが、正されるだけのこと。

こうなると、樹に貰った時計を誰がどうしようかと、
そんな事はもう、本当は最初から関係なかったのかも知れない。

神様の気まぐれな出会いにかけられた、
タイマーが切れただけのことなのだ。

まるで絵画から抜け出てきたような美しい樹は、
家柄も美貌も釣り合いの取れた蓉子と、婚約どおり一緒になるのだ
ろう。

もう二度と会うことは無いにせよ、

世界の経済を動かすような、

世の中のトップを走る世界の住人の樹の消息は、

底辺の庶民のあたりでも、

きっと新聞や雑誌で知ることが出来るだろう。

もう、それだけで十分だ。

あたりは心から思った。

そして、今まで世話になった部屋に対して一礼すると、
ポストンバッグを手に持ちドアを出て行ったのだった。

致命的な不信

樹は学院につくと、教室には向かわず、真っ直ぐにB・Eの部屋へと向かった。

このところ、学院に出向くときには、樹は毎日のように、クラスに出席して授業を受けていた。それはあかりが同じクラスにいたからだ。

あかりが一之瀬家に来るまでは、樹は授業など、ほとんど出た事が無かった。

なので、他のクラスメートと教師も、樹がクラスメートだという事などすっかり忘れていて、二学年までを過ごして来ていたので、ここ最近のように、樹が毎日教室の最後部の席に座り、じつと授業の内容に耳を澄まされている事は、クラスメートにも教師にも、異様な威圧感と緊張感を与えていた。

樹は、天才とも怪物とも呼ばれている、完璧な知能の持ち主なのだ。

その上、日本経済や財界、または政界までも影響のある、大財閥の御曹司でもある。

この学院中の誰一人たりとも、
樹いつきに齒向かえる者などいなかった。

四人の幼馴染と、あかりを除いては。

クラスでは、一時限目の授業が始まっていた。
しかし、今日は樹いつきの姿もなければ、
あかりの姿もない。

クラスメート達はめくばせしていた。
何かあったんだろうか。

でも、別に自分達には関係の無い事だった。
教師の授業をするさまも、見るからにほっとしているようだった。

藤堂麻里も、空いているあかりの席と、
樹いつきの席を振り返っていた。

あかりを嫌ってはいたけれど、

別にここまで陥れるつもりは、
自分には無かった。

あくまでも、蓉子の命令に従ったまでだ。

「もともと、蓉子さまと張り合おうとするのが、
間違いなのよ。樹さまいっきに釣り合う身分でも無いくせに。
悪く思わないでよね」

麻里は呟くと、体を戻して教壇へと向いた。

「おう、樹いっき。こっちに直接来るなんて久しぶりだな！」

ツンツンヘアーの明人が、
樹いっきがB・Eの部屋のドアを開けて入ってきたのを見て、
声をかける。

バイオリンを弾いていた愛良が、腰までのストレートの黒髪を揺ら
して、
驚いて樹いっきを振り返った。

「あら、樹いっき。あかりちゃんと一緒にじゃないの？」

「ねえ、ねえ、僕見ちゃったよ！樹^{いっき}んとこでやってる、写真コンテスト。あかりちゃん、モデルで参加してたでしょう！結構いい線まで行ってたよね？」

女子のようなボブの髪型を揺らして、樹^{いっき}に駆け寄った雪丸は、樹^{いっき}の様子が違うのに気がついて、立ち止まった。雪丸が近くで話しかけても、まるで雪丸のことを見ようともしなかった。

「樹^{いっき}? どうしたの？」

シヨートヘアの薫が、眉をひそめて樹^{いっき}を見て言う。

樹^{いっき}は誰にも答えず、ソファまで歩いていくと、そこに腰をかけて、片手で頭を抱えた。

幼馴染の四人は、お互いに顔を見合わせると、そろそろと樹^{いっき}の側に近寄っていく。

そして、左右に分かれてそれぞれ樹^{いっき}の隣に座った。

俯く樹^{いっき}の美しい顔は、青ざめている。

「ねえ、樹。何かあったの？」

薫が四人を代表して、樹の肩に手を当てて話しかけた。樹は黙ったまま、答えない。

「黙ってたら、いくら幼い頃から一緒にいる私たちでも、何を樹が悩んでいるのか、分からないわよ」

薫の言葉に四人が一斉に頷いて、樹を覗き込んだ。

「いつもこの所、あかりちゃんと一緒に授業受けてるのに、真っ直ぐにここに来てったことは、あかりちゃんのことなの？」
薫の言葉に、樹が顔を上げる。

「そっなのね」
薫が言うと、樹はまた目を伏せた。

「あかりが、俺がやった時計を売って、他の男のために金を作って渡していた」

樹がぼそりと、消え入るような声で言う。
その声に、どうしようもない痛みが込められているのを感じて、薫は驚いた。

樹はあかりを好きだとは分かっていたけれど、いつもの冷静さを失って、ここまでの嫉妬の炎に狂うほどだったとは。

「はい？」

雪丸が素っ頓狂な声を上げる。

「何、何、今のどついう意味？僕、全然分らないんだけど。」

「あかりちゃんが、樹いつきから貰った時計を売ったってこと？」

「私も全然ぴんと来ないわ。もう少し、ちゃんと説明してくれない？」

愛良も言う。

明人は口をあんぐり開けた。

「なわけ、ねえじゃん！あかりちゃんが、樹いつきに貰った時計を売って、お金にして他の男に渡したなんて！」

「この目で見た。三十万円、あの男に渡していた」

「ぼそりと言いつつも、樹いつきは顔を上げて四人を見て言う。

「雪丸が言っていた、あかりをモデルに使っていた、

あの写真コンテストのカメラマンの男だ。

他校の生徒らしい」

「何で、その三十万円が、

樹いつきから貰った時計を売った代金だって分かるの？」

薫かおるが続けて樹いつきに聞く。

「蓉子が同じ時計を持っていた。

この近くの商店街の質屋で売っていたらしい。その値段が三十万円だ、

蓉子が昨夜、買ったというんだ。
そして、あかりはその時計を前の日からしていない。
あかりも否定はしなかった」

四人は顔を見合わせる。

樹は青ざめたまま、幼馴染たちが口を開くのを待った。

「蓉子さんが絡んでるわけね」
愛良が納得したように言う。

「なんだー」
雪丸がほっとしたように言った。
「なら、別に大したことじゃないじゃん」

雪丸の言葉に、樹が目を細めて視線を投げる。
「ちよつと、怒らないでよ」
雪丸が口を尖らせて言った。

「おいおい、樹。冷静になれよ。
って、こんな事言うの初めてだな。
いつも、樹は冷静だから。」

でも、あかりちゃんの事となると話は別なんだな
明人が屈託ない口調で言うと、薫も大きく頷いた。

「嫉妬って怖いわね。樹までも狂わせる」
薫は言うど、樹に向き合った。

「要は、こういうことね。」

樹があかりちゃんに上げた時計を、

あかりちゃんが昨日からしてなかった。

そして、今日はその時計を蓉子さんがつけていて、質屋で買ったと。

そして、あかりちゃんがカメラマンの男の子に、30万円を貸していたと。

これが事実の全てね?」

薫が言つと、樹は頷く。

「じゃあ、何故、樹がこんなに落ち込んでいるのかと言えば、

あかりちゃんが樹に買った時計を質屋に売って、

そのお金をそのカメラマンの男の子に渡していたに違いないと。自分よりも、そのカメラマンの男の子の方が大切なんだろうと思

つたから、

落ち込んでいるってわけね」

薫がずばりと言つのに、樹は目を合わせずにいる。

「確かめたの?」

薫は強い口調で言った。

「あかりちゃんに、樹が思っている事が本当なのかどうか、

確かめたの?」

樹は黙っていた。

「大体が、あかりちゃんが樹に黙って、

買った時計を売り払うような子？

樹は、一緒に暮らしていて、

そんな事くらいも分からないの？

私たちはあかりちゃんとは一緒に暮らしてはいないけれど、
そんな事くらい分かるわよ？」

薫が強い口調のまま言うと、樹は目を上げた。

「あなたの政略結婚相手の婚約者の蓉子さんが、

その時計を持ってたってだけで、

もう誰が何をどう仕組んだのか、分かりそうなものじゃない？

蓉子さんは樹があかりちゃんと仲良くしてるのが、

気に食わなかったんでしょう？

権力に物を言わせれば、蓉子さんの手下なんて、

学院にぞろぞろいるでしょうね。

あかりちゃんの時計を手に入れて、

質屋に売るくらいどうとでもないでしょう。

そんな事、少し考えただけでも分かりそうなものだけど。

頭脳明晰な樹も、嫉妬の神様の前では本当に無力なのね」

薫はため息をついて、樹を見た。

「あかりちゃんがその他校の生徒に貸していた30万円だって、

あかりちゃんの貯金から貸してたのかもしれないじゃない？

確かめもせず、疑うなんて信じられない」

「あかり」

薫の言葉に、樹はあかりの名前を呟くと、

ソファから立ち上がった。

事の成り行きを息を潜めて見ていた、
薫を除く幼馴染たちの表情が和らぐ。

樹はB・Eのドアへと向かって早足で歩き始めた。

「樹！ちゃんと謝るんだよ！」

幼馴染達の声を後ろに聞きながら、
樹は廊下を走る。

授業中の教室までたどり着くと、
構わずに、その扉をがらりと開けた。

教師を始め、クラス中の生徒の視線が樹に集まる。

樹はあかりの姿をクラスの中に探した。
けれど、あかりの席にあかりの姿は無かった。

樹はきびすを返すと学院から出て、
屋敷に戻る道を走り始めた。
途中でタクシーを拾って屋敷に向かう。

意外な時間に戻ってきた樹に、
屋敷の使用人たちは驚いた。

「樹さま！どうなされました？」
口々に言う使用人をどけて、樹はあかりの部屋に向かう。

樹はためらわず、あかりの部屋のドアを開けた。

「あかり！」

声をかけつつ、部屋の中に入る。

けれど、あかりの部屋の中に、
あかりの姿は無かった。

いぶかしげに部屋を見ていた樹は、
普段の様子と、決定的に違うことに気がついて、立ち止まった。

ベッドの上に、
きちんと綺麗にたたまれた学院の制服と、
使用人の制服が並んでいる。

部屋の中を見回すと、何もかもがきちんと整頓されていて、
まるで次の宿泊客を待つ宿の一室のように、
あかりの気配が消えていた。

樹は、クローゼットに歩いていくと、

勢い良く扉を開ける。

そこにはもともとの備品の他には、
何一つ、あかりの私物は置かれていなかった。

「あかり……。どこに行った」

樹は^{いつき}呆然として、あかりの部屋の中に立ち尽くしていた。

失くした行き先

波乃の部屋に退職願いと、

借りたお金を必ず返すという、書置きの手紙を置いて、

あかりはポストンバックをひとつ抱え、

一之瀬家を後にした。

行く当てがあるとしたら、たった一つ。

長年、前に母親と住んでいたアパートに、

もう一度、住まわせてくれるかどうか伺いを立てる事だった。

あかりが生まれた頃から自分の事を知っている大家さんなら、きつと事情を分かってくれるはずだと、あかりは信じていた。

大家というのは、所有しているアパートの家賃収入で暮らしている、一人暮らしの老人だった。

家族の姿を見たことが無かったから、

一人ものだったのだろうか。

口は悪いし、時々は意地悪な爺さんだったりしたけれど、

身寄りが母親だけしかいないあかりを、

あかりの母親が病気で死ぬ前後の辛い時期は、

本当の孫のように接してくれたものだった。

今、樹いっせの元を離れ、

誰かを頼りにするとしたら、

その管理人の顔しかあかりには浮かばなかった。

あかりは祈るような気持ちで、アパートへの道をたどったのだった。

バスに乗り、懐かしい町の景色が見えてくると、あかりの胸が痛んだ。

母親との思い出が、町のあちらこちらの景色に見え隠れしている。

普段は胸の中にしまっていていられる感情が、今日はどうしても押さえ切れなかった。

「お母さん、会いたいな」
バスの手すりにつかまりながら、流れる涙を、あかりは手のひらでこすってこまかした。

母親が亡くなってから樹いっせに会うまでは、ここまででは思わなかったけれど、樹いっせに、もう会えないと思うと、二度と会えない人が二人になってしまった寂しさに、今日ほど、自分が一人きりなのだと思った事は無かった。

樹いつきと同じベッドの中で、
同じぬくもりの中で眠ったあの日々。

その感情をどんな風に言葉にすればいいのか、
あかりには分からなかったけれど、
でも、母親以外に、
自分にあんなに近く感じられる人には、
きつともう会えないに違いないと、あかりは思った。

あれは、奇跡だった。
もう二度と訪れないような。

バスが目的の停留所につき、
あかりはバスを降りた。

そして、自分が育ったアパートへと歩いて行って、
愕然として足を止めた。

「うそ」
あかりは思わず、小さく呟いてしまつた。

あかりが母親と暮らしていたアパートは、
跡形もなくなっていて、今は更地になり、
有料駐車場になっていた。

あまりの出来事に、あかりは立ち尽くしてしまう。

ふと我に返ると、

あかりは通りがかりの人を何人が引き止めて、
ここにあった古いアパートがどうして駐車場になってしまったのか、
この管理人さんがどうなったのか、聞いてみた。

知らないという人が多かったものの、
ある一人の年配の女性が、事情を教えてくれた。

「ああ、ここにあったアパートね。

管理人さんが亡くなってね、

親戚の方がアパートを相続したらしいんだけど、

古かったし、維持も大変だからって壊してしまったらしいわ」

「そうですか…。有難うございました」

あかりは肩を落しながらかも、お礼を言って、
教えてくれた女性を見送った。

当てはなくなっていました。

というか、

もともと、あかりには確かに当てになるものなど無かったのだ。

あかりはアパートの跡地の駐車場に背を向けると、町の繁華街に向かって歩き始めた。

「どこかに、住み込みの仕事とか無いかしら」
呟きながら、あかりは不安げに町を見回した。

飲食店やパチンコ屋などの従業員募集の張り紙を見て、あかりは勇気を出して店の中に入って聞いてみるのだけれど、やはり、あかりの17歳という年齢もネックになって、仕事はなかなか見つからなかった。

町の中を歩き回っているうちに、時間だけがどんどん過ぎていく。

昼を過ぎ、午後遅い時間になると、どこかの高校生たちが下校をし始めて、賑やかに家路を辿った。

あかりは複雑な気持ちで、学校の制服姿の生徒達を見ていた。かつては、あかりも学院の制服を着て、樹と歩きながら、学校から屋敷に帰ったものだった。

ついこの間の事なのに、もうはるか昔の事のように感じられる。

ふと涙腺がまた緩んで、目に涙が溜まるのを感じて、「こらこら！暗くなってる場合じゃないっての。どうにかしなきゃいけないんだから、メソメソしてる場合じゃないでしょう？」

あ、お腹が空いてるから、元気が出ないんだわ」あかりはわざと明るく自分に言い聞かせて、近くにハンバーガーショップがあるのを見つけると、チーズバーガーを買って、その場がかぶりついた。

歩いている人がじろじろ見るので、あかりは歩道と車道の間柵に歩いていくと、歩道からは顔が見えないように背を向けて、柵に腰を掛けてハンバーガーを食べ続ける。

もう涙はどんなに堪えても流れてしまうので、あかりは構うのをやめて、ハンバーガーを食べるのに集中した。

とにかく、お腹が一杯になれば、元気になるに違いないのだ。と、頑なに信じて。

ふと、歩道に背を向けて、
車道に向けてハンバーガーを食べているあかりの前に、
大きな黒塗りの車が、すっと音を立てずに近づき停車した。

あかりはもぐもぐと口を動かしながらも、
自分の前に止まった黒い高級車に、眉をひそめる。

まるでヤクザでも乗っていきそうな、大きな車だ。

あかりは逃げ腰になって、柵から腰を浮かした。

すると、ミラーになって中の見えない車の後部座席の窓がスルスル
と下に下がり、

思いもよらない人が顔を出して、あかりは目を見開いた。

「お前は、あのダンスパーティーでわしと踊った、

一之瀬家の女中じゃないか！こんな所で何をしとるんじゃ？」

高級そうなスーツを着ているものの、

大きな車の後部座席にまるで子供が乗っているかのように小柄で細
くて、

禿げた頭をしている老人が、驚いたようにあかりを見て声をかけた。

「海道会長！」

あかりも驚いて叫んでしまう。

そして、この世にまだ自分の事を気にかけてくれる人がいるのだと

思ったら、
メソメソくらいで済んでいたあかりの涙が、
怒涛の滝のように流れ出してしまった。

海道会長はあかりの涙に驚いて、
車のドアを開けて外に出てくる。

「どうしたんじゃ？一之瀬のボンボンと喧嘩でもしたのか？」
会長が優しく樹いっぎの事を口に出したせいで、
あかりはますます嗚咽が止まらなくなる。

「こりゃ、困ったもんじゃ。まるで、わしが泣かせているみたいじゃないか。」

女中、とりあえず、車に乗れ。話は中でゆっくり聞こう。な？」

あかりが頷くと、

海道会長はあかりの手を引き、あかりは会長の後に従って、
車の中に入って行ったのだった。

樹（いつき）の孤独

あかりが車の後部座席に乗り込むと、
海道会長は、まるで本当の祖父のように、
泣き止まないあかりの手を手のひらで撫でて、
黙ってあかりが泣き止むのを待っていていた。

ひとしきり感情の激流が収まると、
あかりは涙で濡れた顔を手で撫でて、
海道会長に頭を下げる。

「ご迷惑をおかけして、申し訳ありません」
あかりがかすれた声で言うと、
海道会長は目を細めて、

「初めて会った時は、元気の塊にしか見えなかったお前さんが、
こんなにも嘆いているのは、一体何故なんだい？
この爺さんに話してみるか？」

あかりの手を両手でさすりながら、海道会長は言う。

あかりはぼつぼつと、

一之瀬家を出るまでの経過を、海道会長に話した。

「一之瀬家のぼんぼんは、お前さんを失って、
さぞ、痛い経験をするのだろう。
それも、若さゆえの試練だろうが」

海道会長は、自分の禿げた頭をつるりと撫でた。

「人が人を必要とする時には、

実は身分とか、立場とか、育った環境とか、

そんなものは正直、どうでもいい事だな」

海道会長の言葉に、あかりは顔を上げた。

「最後に運命を見方につけるには、

自分の利己的な感情を押し殺して、

相手の事だけを、どれだけ思えたかということなのだな」

少し遠い目をして言う会長に、あかりは唇に笑みを浮かべて言う。

「かつて、本当に愛した人がいらしたのですね」

あかりの言葉に、海道会長は照れくさそうに笑った。

「わしが、若いころにお前さんと会っていたら、

一之瀬のぼんぼんよりも、もっと熱烈なアプローチをしていたぞ？」

会長の冗談めかして言う言葉に、涙を浮かべたままながら、

あかりはにこりと、笑顔になる。

「行くところがあるのかい？」

海道会長は、あかりの目を覗き込んで言った。

あかりは力なく、首を左右に振る。

「よし、ならば、この爺の所に来るといい。

ただし、一之瀬家にも、お前さんの通っていた学校にも、

わしがお前さんを預かっているというのはいまは言うまい。

その方がいいんじゃない？」

海道会長の思いがけない申し出に、あかりは驚いて目を見開くと、

また涙をぼろぼろこぼしながら、深く頭を下げた。

「このご恩は、決して忘れません。一生懸命、使用人として働かせて頂きます」

「お前さんが、うちの使用人になって、毎日その笑顔を見れるというのは、こちらこそ思いもかけない幸運だ。」

一之瀬のぼんぼんには、礼を言うしかないかもな」

あかりの頬をふざけてつまんで、海道会長は快活に笑った。

「樹が血相変えて、あかりちゃんの居所を探している」

つつんへアーにピアスの明人が、

B・Eの部屋に飛び込んで、中にいた幼馴染達に声をかけた。

「どうして？」

ソファに腰掛けていたショートヘアの薫が、

不思議そうに明人に尋ねる。

「時計の件の誤解は、樹はあかりちゃんに謝ったんでしょう？」

「それが、樹が学院に戻ったら、あかりちゃんは来ていなくて、

慌てて屋敷に戻ったら、あかりちゃんは荷物をまとめて姿を消していたんだって」

明人の言葉に、弾いていたバイオリンを放り出すようにして、

長い黒髪の美しい愛良が、明人に詰め寄る。

「あかりちゃん、一体、どこに行ったの？」

明人は首を左右に振った。

「樹も分からないらしい」

「僕、お父様に探してもらえよう頼んでみるよ」
まるで女の子のように色白で、肩までの髪をボブにしている雪丸が、
顔色を変えて、携帯電話を手にする。
雪丸の父親は警視總監なのだ。
警察のコネを使うと言つことなのだろう。

「樹も、やれる事は全て手配したらしい。

後は、あかりちゃんが無事を祈るだけだ」
明人はため息をついて、ソファに腰掛けた。

幼馴染たちは、樹の今の心情を思いやると、
皆押しつぶされそうになるのだった。

あかりに出会うまでは、
樹は自分の感情を殺して生きてきたのを、
幼馴染たちは知っていた。
だから、逆に樹が何かに傷ついたり、
怯えたり、慄いたりすることが無いのを知っていたのだ。

けれど、あかりと暮らすようになってから、
樹の心のバリエードは、日に日に剥がれていく一方だった。

だからこそ、あかりをモデルに写真を撮った、
カメラマンに対する嫉妬などという、シンプルな感情に、
樹は支配されてしまったのだ。

そして、幼馴染たちは知っていた。
本当の意味で、樹いっきの孤独を救えるのは、
自分たちではないと。

あかりにしか、樹いっきの孤独は救えないのだ。

雪丸が携帯電話で父親に、
樹いっきの窮状を伝えている。
そして、自分の愛されている一人息子の立場を利用して、
父親の最大限の権力を行使するように、懇願した。

どうか、あかりが見つかりますように。
でなければ、その内、
樹いっきは壊れるだろう。

B・Eの部屋で、
樹いっきの四人の幼馴染たちは、
祈っていた。

海道会長の屋敷は、

一之瀬の屋敷を上回るお城のような屋敷だった。

車が敷地内に入り、玄関前の車道に止まって降りると、
あかりは目を見開いた。

「なんて、立派なお屋敷」

あかりの呟きに、海道会長は笑う。

「住んでいるのは、わし一人なんだがな。
部屋数だけが多いから、掃除のし甲斐はあると思うぞ。
使用人がいくらいても足りないくらいじゃ」

海道会長は、あかりの肩に手を乗せる。

「掃除もいいがな、ぜび、お前さんには、
わしのダンスの相手もしてもらいたいものだ。」

この屋敷には、シングワルツ専用のボールルームもあるのじゃ
が、

一度も使った事がないのじゃ」

会長の言葉に、あかりはにっこりと微笑んで、

「もったいないですね」

言うと、会長もにっこり微笑んだ。

「そうじゃ、もったいないのじゃ」
二人して、顔を見合わせて笑う。

そして、あかりがまた屋敷を見渡す事に気を取られている隙に、海道会長は影のように控えていた秘書に、そつと耳打ちをした。

「一之瀬家の経営している企業の、ニューヨークの本社に連絡をとって、

事の成り行きを話すように。

そして、問題を起こした女中は、こちらで引き取ると伝える。

親だけで、ぼんぼんには知らせなくていい」

会長が言つと、秘書は頷いて歩き去った。

「若いというだけが取り柄のくせに、

わしの気に入りを泣かせるような男には、

この娘はやらん。どうしても欲しくば、命をかける」

海道会長は呟くと、あかりの後を追って屋敷に向かって歩き始めたのだった。

一週間

「一週間よね」

ボーイッシュな薫が、学院の制服の胸の前で両手を組んで、ソファに座ったまま、B・Eの部屋の入り口を見た。

薫の視線につられて、その部屋に集まっていたいつもの幼馴染達、ツンツンヘアの明人と、黒い腰までの長い髪のアキラも部屋の入り口を見る。

あかりがいなくなり、そして樹いっせが学院に来なくなって、一週間が経っていた。

部屋の隅で携帯で電話をしていた、中性的なボブヘアの雪丸が、皆の所に戻ってきて、首を左右に振る。

「あかりちゃんが、以前にお母さんと一緒に住んでた町を、いなくなったその日に、仕事を探して歩いてきたのまでは、確認が取れているんだけど、

それ以上は、相変わらず新しい情報は無し。

商店街のハンバーガーショップで買い物をしている後から、パタリと足取りが消えているんだ」

四人はため息をついた。

「昨日、樹いしの様子を屋敷に見に行ったけど、まるで取り付く島がないって感じだよ。仕事に集中してて、いくら話しかけても、返事もろくにしないし」
明人が肩をすくめて言う。

「樹いしも樹いしなりに、

あかりちゃんの事は探してるはずよね。

でも、警視総監の雪丸のお父さんの力を借りても見つからないあかりちゃんを、

樹いしに見つけ出すのは難しいわよね」

薫が言いながら、ふと、心配そうに呟いた。

「樹いし、ちゃんと夜眠れてるのかしら。

あかりちゃんが来てからは、良く眠れているって言ってたけれど」

「そういえば、樹いしの顔色最悪だったな」

明人が思い出したように呟くと、

四人の幼馴染は不安げに顔を見合わせるのだった。

かつて、一之瀬家でもその仕事ぶりで、あつという間に、先輩の使用人たちに気に入られたように、海道家の屋敷でも、その真面目で手際の良い仕事ぶりに、あかりはあつという間に、他の使用人達に気に入られていた。

休憩時間には、一之瀬の家でもやっていたように、厨房を借りて簡単なおやつを作り、先輩の使用人たちに差し入れたりもしたので、あかりの事を悪く言うものは、一人もいなかった。

あれから一週間が過ぎ、海道家での住み込みの仕事にも大分慣れてきていた。学院に通うことが無い分、仕事の忙しさも分散出来て、一之瀬の屋敷にいた時よりも、気持ちに余裕が持てるほどだった。

しかし、気持ちに余裕が出てくると、やはり考えてしまうのは、樹いの事じ。

いや、余裕が無かった今までだって、実は一日足りとも、樹いの事を思い出さない日は無かった。

「どづしてるかな、樹いさま」

いつか樹いつきにも作ったことのある、
牛乳寒天の甘いおやつを先輩使用人たちのために切り分けながら、
あかりは呟いた。

日に透けると金色にも見える茶色の髪、
髪と同じ色の伏せ目がちの、切れ長の瞳。
体に入っているフランス人の血がなせる、
白い肌に赤い唇。

樹いつきは、本当に見れば見るほど、
まるで絵画から出てきたかのように美しかった。

脳裏に浮かんだ樹いつきの顔に、
あかりの唇の端に、小さく笑みが浮かぶ。

一緒のベッドで眠ってしまった時、
樹いつきは、あかりの子守唄に涙を流していた。

あかりが傍にいたことで、
安心してぐっすりと眠っていた、樹いつきのあの寝顔を思い出すと、
どうしても、あかりが樹いつきを放り出して来てしまったような気がして、
あかりの胸が痛むのだった。

「でも、樹いつきさまは、最後は私を嫌ってらしたものだ。

そんな風に思うのは、私の勝手な感傷なんだわ」

自分の言葉に、自分で深く傷つきながら、
あかりは目を伏せた。

あかりは樹きに会いたかった。

どうしようもなく。

けれど、もう会うことは出来ないのだ。

涙がまたこぼれそうになるのに、
あかりは目をしばたいて堪えた。

「樹きさま、眠れているのかな……」

大きく息をして、沈んでいく気持ちを振り切って顔を上げ、
あかりは寒天を切り分けた皿を持ち、厨房を出て行った。

照明を落としてある、樹いっせの自室。

唯一、デスクの上を照らしているライトの明かりで、
ずっと根を詰め、読んでいた仕事の書類から目を上げると、
樹いっせは、片手の指で両目を覆った。

時計の針は、午前2時過ぎを指している。

あかりが樹いっせの前から姿を消し、
自分が学院に通う理由がなくなった樹いっせは、
この一週間、こうして自室での仕事だけをこなして、
屋敷からは一步も出なかった。

思いつくありとあらゆる手段で、
樹いっせはあかりを探していた。

けれど、どの報告書も、
全て同じ結果が書いてあり、
あかりがかつて母親と住んでいたという町で見かけられた他は、
その後の足取りはまるきり分からないのだった。

樹は、
もしかしたら、もう二度とあかりには会えないのかもかもしれないと、
そんな絶望を胸に宿しつつあった。

こんなに誰かを欲しいと思ったことは無かった。
あかりが傍にいてくれれば、
何も怖いものは無いと思えてすらいたのに。

あかりは俺を見限って、去ってしまった。
全ては下らない自分の嫉妬心が招いた事だ。
自業自得。
口に出して自分を諫める気にもならないほどの。

樹は両目を手で押さえたまま、
まるで何かに耐えるかのようになり、しばらく身動きせず、
じっとしていた。

あかりが去ってから、

まともに眠れた夜は無かった。

まるで自分の体の一部を失ってしまったかのような喪失感に悩まされ、

ベッドの中に入っても、意識は決して体から離れてくれないのだ。

体の中に、疲れが鉛のように蓄積していて、

樹は、立ち上がるのでさえやっとなっていた。

目から手をははずすと、

樹はデスクの引き出しを開けて、何かを探した。

あかりが来る前には、

良くこつして深夜になるとデスクの引き出しを開けて、

医者から処方されている薬を取り出した。

あかりと一緒に眠ってくれるようになってからは、

まるで存在すら忘れていた薬だった。

一時間でもいい、眠ることが出来れば。

樹は袋を開けて、

白い錠剤を取り出す。

規定の量は、一回一錠だった。

けれど、三日前は二錠でも眠れず、
二日前は、四錠でも眠れなかった。

量はかなり過ぎてしまっけれど、昨夜は六錠飲んだ。
けれど、眠ることは出来なかった。

樹は、残っている錠剤を全て手のひらに乗せた。
何錠あるのだろうか。

20？30？

ざらざらと手のひらの上で動かし、眺めてみる。

これだけの量があつたら、今夜は眠れるだろうか。
あかりがいなくても。

樹は手のひらの薬を全て口に入れると、
水のグラスで一息に飲み干した。

朝、7時。

一之瀬家の女中頭の波乃は、
樹いつきの朝食をワゴンで運んでいた。

あかりがいなくなってから、
樹いつきは自室を出る事がなくなり、
食事の仕事の書類を眺めながら、
食べたくないけれど、食べなければいけないという義務感で、
仕方なく片手間に取るといふ感じになっていた。

もともと口数は少ない樹いつきだったが、
あかりがいなくなっからには、まるで声を失ったかのように、
樹いつきは喋らなかった。

もともと色白のその美しい顔は、
血の気がなくなっって、ますます透けるような白さになり、
まるでいつか消えてしまっうのではないかと思えるような、
儂さを持つようになっっていた。

あかりちゃん、お願い、
戻ってきて。

樹いつきに赤ん坊の頃から使えている波乃は、
あかりがいなくなってから毎日、
心の中で血の滲むように祈っていた。

このままでは、樹いつきさまは。

波乃は樹いつきの部屋の扉をノックした。
しばらく待っても、返事は無い。

寝ているのだろうか。
けれど、今までこの時間で眠っているという事は、
一度も無かった。

波乃は不思議に思いながらも、
部屋の扉をそつと開けた。

部屋の窓のカーテンの隙間から、

朝日が部屋の中にくつつもの筋になって、差し込んでいる。

デスクの上のライトはつけっ放しだった。白々とした人工の光が、朝になった今も、デスクの上の書類を照らし続けていた。

そして、視線を動かして、

波乃は次に自分の見た物が何なのか知ると、小さく悲鳴を上げながら、部屋の中に走りこんだ。

「樹さまっ！！！！」

樹が、デスクのすぐ側の絨毯の上に倒れていた。白いシャツにラフな室内用のパンツという格好は、昨夜夕食を運んだ時と変わらない。

波乃は樹に駆け寄ると、弱々しいながらも、かろうじて呼吸をしているのを確認した。倒れている近くには、小さく吐瀉物がある。

波乃はその中に、溶けきらない白い錠剤が多数あるのを見て、事情を察した。

部屋の入り口に駆けて戻って、
屋敷中に響く声で、波乃は怒鳴る。

「誰か！救急車を呼んで！樹さまいつきがつ！！」

波乃の大声に驚いた使用人の一人が、
慌てて駆け出す。

どうか、神様。
樹さまいつきをお助け下さい。

波乃は一心不乱に祈っていた。

二種類の女

志保はじれじれと重役会議が終わるのを待って、会議室の中から役員たちがぞろぞろと出てくるのを見ると、急いで、扉の中へと入って行った。

ぐるりと周りを囲むように配置されている会議室のデスクの正面に、志保の夫の克己が座り、書類を片手に残っている重役と何やら話している。

志保が部屋に入って来るのを見ると、克己と話をしていた重役は、小さく頭を下げた部屋の外へと出て行った。

志保は、部屋に残る他の重役たちにも軽く視線を流す。すると、個人的に克己と話があるのを察して、全ての者は部屋を去って行った。

「あなた、日本から連絡がありました」

志保が小走りに近くに寄ってきて、

青ざめて言うのを、克己が目を上げて見る。

「どっしたんだ」

「樹きじが、睡眠薬を過多に摂取して、

今朝、病院に運ばれたようです」

志保が克己の手に冷たく血の気の無い手のひらを当てる。

「命に別状はないようですが、もう一人で日本に置いておくのは、限界です。日本における仕事は、

どなたか他の部下の方を送って処理してもらおうようにして、樹はこちらに呼び寄せましょう。」

学院の高等部などはさつさとやめて、こちらの大学に交渉で飛び級させて、

入学させましょう。まだあの子は17歳なんですから、勉強だけしていればいいのです！」

ヒステリックに叫ぶ志保に、克己はため息をついた。

「まだ薬を飲んでいたのか。一時は主治医から薬が必要ない状態まで、

樹の睡眠障害の症状は、改善していたと聞いていたのだが」

志保は克己の言葉に、目を伏せた。

そして、かすれた声で続ける。

「沢あかりが職を辞して、屋敷を出て行ったと連絡がありました。今から一週間前のことだそうですね。」

屋敷の使用人頭の波乃が言うには、あかりが屋敷を出て行ってか

ら、

樹は部屋から一步も出なくなり、食事もおろそかになり、

睡眠もまるで取れていない様子だとのことでした」

志保の言葉に、克己が眉をひそめる。

「一体、どういうことだ？」

「大叔父さまの、愛人の娘が、

樹にちよっかいを出したということでしょう？」

誘惑されて、だまされて、樹はおかしくなっているんだわ！

そんな事もお分かりにならないんですか！

そもそもが身元の怪しい女の娘なんかを、

樹と同じ屋敷に、住ませる方が間違っていたのです！」

叫ぶように訴える妻の志保の言葉に、

克己は自分のあごに手を当てて、少し考え込むと、

あるうことが、小さく唇に笑みを浮かべた。
その克己の表情に、志保は驚いて目を見開いた。

「樹いっせに欲しい女が出来たのか。

あの感情が欠落しているのかと心配していた息子に、
そういう欲があったというのは」

呟くように言って、克己は小さく笑う。

「あなた！」

志保が信じられないという風に叫ぶと、

克己は手に持っている書類に目を戻しながら、

「女のせいで眠れなくなるとは、はなはだ情けないが、
まだあれも若い。これから色々学ぶのだろう。」

沢あかりを探すように手配をする。

何があつて職を辞めたのかは知らないが、
それほど欲しい少女が屋敷に戻れば、

樹いっせも元に戻るだろう」

「どういう意味ですか？あなた」

怒りで声が震えるのをこらえながら、

志保はなんとか言葉を口から押し出す。

「あかりを探し出して、

また樹いっせに近づけるといいますか？

これ以上、樹いっせが泥棒猫に惑わされては……」

克己が両手で、デスクの上を思い切りたたいた。

志保と二人きりの会議室に、

バーンという音が壁を震わせて響き渡る。

志保はびくりと体を震わせた。

「何を感情的になっている。

お前らしくない」

克己の言葉に、志保は息を飲む。

「概して、社会的地位の重責を背負う男には、

二種類の女が必要だ」

克己が冷静に志保を見て言った。

「ひとつは、家柄、社会的名声、財産が釣り合った妻となる女。
社会的な立場でのパートナーだ」

志保は克己が何を言おうとしているのか、

その言葉の続きを想像して、ぞっとなった。

「そして、もうひとつの女は、

男を奮い立たせ、夢中にさせ、行動させるように仕向ける女だ。

家柄も、社会的立場も関係ない。

男に力を与える女だ」

「おっしゃっている意味が良く分かりません」

志保は青ざめて、克己から目をそらして言った。

「志保、お前だって私に嫁いで来た時から、

そんな事は承知だったはずだろう。

家同士の結婚というものは、そういうものだ。

樹いづみと蓉子さんが結婚しても、

同じだろう。家同士の利益を生むための結婚というのは、

得てして、そういうものだ」

「あなたは」

志保は涙のうつつすら浮かんだ目で克己を見た。

「ご自分と同じように、樹いづみにも愛人を持たせるというのですか？」

克己は何も言わずに、まっすぐに志保の目を見た。

そして、口を開く。

「どうして、志保、お前は嘆いているんだ？」

別に誰が愛人を持つのが、お前の生活はなんら変わることはない。

毎日贅沢な暮らしだ。何に不自由するわけでもない。

かえって、裕福ではない愛人たちの方の生活をきちんと面倒をみてやらなければ、

そっちの方が人間としてどうかと思うがな」

志保は克己の言葉を全て聞く前に、

ふらふらと会議室の出口にと歩いて行った。

そうなのだ、昔からこの人は何も変わらないのだ。

いつか、愛してもらえと思っていた嫁いだ頃の幻想は、幻想のまま、現実になることは無かったのだ。

会議室の扉を出る。

志保は後ろ手で閉めながら、人に見られぬよう、流れる涙を手のひらでこすった。

だからこそ、樹いじつきには蓉子だけを見て欲しい。

結婚したら、いつか蓉子を愛しするようになって欲しいのだ。

もう克己には何も期待はしない。

樹いじつきを守るためには、自分で動くしかない。

志保は携帯電話を開くと、日本に向かう航空券の手配をした。

「あの、海道会長は…？」
通りかかる屋敷の使用人仲間に、
あかりは聞いて回っている。

あかりは帰ってきたはずの、
海道会長の姿が見えないのを不思議に思って、
屋敷の中を探していた。
バイク便で到着した速達の荷物が、
ついさつき届き、あかりがそれを受け取っていたのだった。

バイク便で来るほどの荷物だ。
何か緊急なのだろうと気を利かして、
あかりは会長の姿を探していたのだった。

ある一人の古参の男性の使用人が、
海道会長の姿を見かけたといい、
あかりはほっとする。

広い屋敷だ。

片端から見て回ったら、どれだけ時間がかかるか分からないし、すれ違いになっても、それすらも分からないかもしれない。

古参の男性使用人が指差したのは、

今まで一回も行ったことの無い地下への階段だった。

下をのぞき見ても、何があるのか分からない。

「会長が昔作ったボールルームらしいよ」

男性使用人は肩をすくめて、あかりに言うと、

お礼を言うあかりに頷いて見せて、その場から離れていった。

そこで、あかりは思いつく。

確か前に、会長はスイングワルツ専用の部屋が、屋敷にあると言っていた。

その部屋がこの地下にあるのだろうか。

あかりは荷物を小脇に抱えたまま、

そつと階段を降りて行った。

どうやら普段は使われていない居住部分なのだろう。

廊下に明かりもついていない。

どこに明かりをつけるスイッチがあるのかも分からないから、あかりは暗いまま廊下を進んだ。

ふと耳を澄ますと、かすかに音楽が聞こえるような気がして、あかりは足を早めた。

暗い廊下を進むと、確かに音楽は段々大きくなってくる。そして、ある扉の前に来ると、その中から音楽が聞こえているのを知って、あかりは思い切って扉を開けた。

「海道会長？」

会長を呼びながら扉を開けると、眩しい光に、あかりの目が眩む。

目の前に手をかざして、あかりはしばらく自分の目が光に慣れるのを待った。

「おや、あかりじゃないか」

海道会長の声がして、あかりはそっと部屋の中を見回す。

広いフロアリングの部屋の壁際に、たくさんのテーブルや椅子が寄せられていて、

どれもほこり除けの白いシートをかぶっていた。

全体にがらんとした感じなのは、今は使われていないからだろうか。

しかし、天井にはすばらしい巨大なシャンデリアが吊られていて、そこから放たれる煌びやかな光が、部屋中を照らしていた。

スイングワルツの曲が、
天井と壁に埋められたスピーカーから流れている。
その音響の良さはうっとりとするくらい、
四方から立体的に美しく流れていた。

海道会長は軽く音楽に体を揺らしながら、
手に持っている小さな機械を操作しながら、
何やらシャンデリアを見上げて何かをしているようだった。

「バイク便で急ぎの荷物が届いたもので、
お届けにあがりました」

ようやく目が慣れて、部屋の中を見回しているあかりが言うと、
会長は頷く。

「今度、ダンスパーティーを開こうと思っていますな。
あかりのおかげで、わしのパートナーはおるし」
会長が笑っているのに、あかりは会長の側に歩いて行きながら、
笑って答えた。

「そうですよ。私は会長専属のダンサーですから」
荷物を小脇に抱えたまま、くるとその場で回転してみせる。
会長はあかりを見て、快活に笑った。

「しかし、しばらくこの部屋は全く使っていなかったのな。
音響や、シャンデリアの位置の調整などの具合を、
ちよっと見ていたんじゃない」

会長が言っ手に持っている機械のボタンを押している。
すると、天井のシャンデリアは小さい機会音を上げながら、

ゆっくりと上がったたり下がったりをした。

その動作を確認すると、会長はあかりを見て手を差し出す。

「どれ、せつかくお前さんが持って来てくれた荷物を、

見てみるとしよつか」

会長に荷物を手渡した後、ふと、あかりはワルツの曲に混ざって、異質な音がするのに気がついた。

歯が浮くような金属音。

あかりは何事かと、辺りを見回す。

音は段々大きくなってくる。

そして、その音の出所が分かると、

あかりは、目を見開いた。

海道会長も荷物を見るためにかけた老眼鏡に手をやると、その異音に顔を上げる。

「危ない!!!」

あかりは叫ぶと、海道会長の体を思い切り押し飛ばした。

次の瞬間、天井から吊るされている鎖の切れたシャンデリアが、あかりの上に落ちてくる。

両手で頭を押さえるのが、あかりに出来た精一杯だった。

「あかり!!!!!!」

海道会長は、

あかりに床に押し飛ばされて転がりながら、叫んだ。

ガシャガシャーン!と、

もの凄い音を立てて、シャンデリアはあかりの上に落ちた。

「あかり…あかり…」

かすれた声で、取り乱しながら、海道会長は、あかりに近寄る。

クリスタルの破片が、あかりの顔や手足の皮膚を切り裂き、真鍮の重いパイプは、あかりの体に容赦なくのしかかっていた。

部屋の中には、静かなワルツの曲だけが流れ続けている。

目を閉じて意識の無いあかりの頬の血を触ると、海道会長はハッと我に返った。そして、急いで携帯を取り出してボタンを押した。

「屋敷の老朽化のせいで、使用人が怪我をした。わしをかばって、犠牲になったのじゃ！すぐに救急隊を呼べ！金には糸目をつけんつ。優れた医者をかき集めろっ！！！」

いつもの浪々とした声で命令を部下に告げると、海道会長は携帯を投げ捨てて、あかりの側に膝まづいた。

「あかり、あかり、何をしても絶対助けてやるからな」

下手に手を出してはいけないと、シャンデリアを動かすことはしなかったものの、海道会長は、自分の手が傷つくものかまわず、血だらけのあかりの顔から、クリスタルの破片を払いのけながら、血のにじむような声で呟いていた。

感情の行動

俺は、眠れたのだろうか。

意識がふつと浮上してきて、

樹は自分の閉じた目に、白い光が当たっているのを感じた。瞼は重く、上と下の瞼は互いに張り付いたようになっていて、随分長い時間、目を閉じていたのを示していた。

一時間？二時間？

自分が寝た可能性の時間を考えて、

樹は体の脇に置いていた腕を持ち上げ、閉じていても光が眩しい目に当てる。

その時、腕に何かがぶら下がっている違和感に気がつき、樹はそつと目を開けると、それが一体何なのか確かめた。

途端、眩しい天井からの蛍光灯の光が目を刺す。

樹は目を細めながら、目の前に持ってきた自分の腕を見た。

薄いブルーの袖から出ている腕には、

細いチューブがテープでくくりつけられていて、そのチューブは、ベッドの横にぶら下がっている薬の溶液の袋へと繋がっていた。

見上げる天井は、無機質で白々としている。

今、自分がどんな状態なのか、樹は一瞬で悟ると、大きくため息をついて、また目を閉じた。

薬を飲みすぎたのだろう。

確かにあの量では、飲みすぎるのは承知していた。そして、これは初めての事ではなかった。

でも、そんな事はどうでもいいのだ。

薬を飲みすぎてもなんでも、少しでも寝られれば。それだけが、樹にとっては重要なのだった。

しかし、体は相変わらず、鉛のように重い。

薬を大量に飲んでも睡眠を取れるわけではないのなら、もうずっと、目など覚めなくてもいいのに。

樹は目に手を当てたまま、

心の底からそう思っていた。

あかりは神様からのギフトだった。

樹は心の中で血の出るような思いで呟く。

そんなあかりを自分勝手な思いで、傷つけて遠ざけた罰が、
きつとこの後、ずっと眠れずに生きていくことなのかもしれない。
そして、死ぬまで少しずつ生命力が磨耗していく苦しみに耐えなが
ら、
生きていくのだ。

樹は、例えあと数ヶ月しか生きられなくても別に構いはしなかった
が、
あかりに教わったあの平安な眠りを二度と味わえないということ
を
思うと、
そして、この先、もしかしたら、
二度とあかりには会えないのかもしれないと想像することは、
狂おしいくらいに耐え難かった。

人を愛するということは、
こんなにも絶望を孕むのか。
その相手が傍にいないというだけで。

樹は表情の無い唇を小さく歪ませて、

自分を皮肉に笑った。

何もかも、自分のせいなのだ。

唇に浮かべた歪みが消える。

樹は、^{いつき}

ただ、あかりに会いたかった。

そして、もしあかりが自分の元へと戻ってくる事があったなら、
もう二度と自分の傍から離さないのだと、

改めて自分に誓うのだ。

けれど、そんな事を思う事も、

あかりの行方が分からない今、

薬を飲みすぎても生きているという事と同じくらい、

空しい事だった。

^{いつき}個室の病室の扉の外で、人の話す声がして、

樹は目の上から腕を動かすと、扉のほうに目を向けた。

がちやりと音がして扉が開き、
白衣を着た担当の医者が入ってくるのが見える。

「気がつかれましたか」

樹いつきに話しかけながら、問診を始めた。

そして、樹いつきの全てが回復に向かっているのを確認すると、
部屋を出て行く。

そして、医者が出て行くと、

入り口で待っていたらしい、蓉子が入ってくるのが見えた。

紺の清楚なデザインのワンピースを着ている。

その美しい顔は青ざめていて、

今回の樹いつきの入院に、少なからずとも責任を感じている様子なのを、
樹いつきはその表情から見取っていた。

「樹いつきさまー」

ベッドの上で目を開けている樹いつきを見て、

蓉子は目を見開くと、ベッドに駆け寄ってくる。

樹いつきはベッドに背中を起こして寄りかかり、
しかし、表情の無い顔で蓉子を見た。

「あまり、根を詰めてお仕事をされるから」

蓉子は涙ぐんで、樹いつきの手に自分の手を置く。

「もつこんな心配をさせるのはやめて下さい」

樹は抑揚の無い声で言った。

「心配をかけて、申し訳ない」

そして、その茶色の目で真っ直ぐに蓉子を見て言葉を続けた。

「そして、もう一つ、俺はあなたに謝らなければならぬ事がある」
蓉子が不安げに、樹を見る。

「あなたとの婚約を、正式に解消したい」

二人の間に、しばらく沈黙が流れた。

「それは、あなたがあの使用人に贈った時計を、私が質屋から買ったから？」

「それでああなたは怒ってらっしゃるの？」

蓉子の声が震えている。

前も樹は、蓉子との婚約の解消を持ち出していたけれど、

その時とはまるきり樹の決心が違うのを、

蓉子は察していたのだ。

樹は、あの女中、沢あかりを愛しているのだ。

絶望的なほど。

他の女など、誰一人として必要としていない。

「ならば、あの使用人は愛人にすればよろしいのでは？」

財力権力のある殿方の妻になるには、多少の我慢も必要だと、
ずっと幼い頃から教えられてきましたもの。

私なら、平気です」

蓉子はますます青ざめながらも、気丈に言う。
樹はそんな蓉子を、黙ってみているだけだった。

樹の沈黙の視線に耐えられなくなって、
叫ぶように、蓉子が口を開く。

「婚約解消なんて、樹さまのご両親が承知するはずないわ！」

樹は冷静に言った。

「あなたは、俺を好きではないでしょう？」

なら、何故、そんなに俺にこだわるのです。

他にも家柄の良い資産のある子息はたくさんいる。
薬を飲みすぎて死に掛けるような俺なんかよりも、

もつと真つ当な連中が」

蓉子は樹の頬を叩いた。

樹は叩かれた衝動で顔を俯けたまま、

「本当にすまない。あなたには色々迷惑をかけた。

このお詫びはいずれきちんとする」

言うと、小さく頭を下げた。

蓉子は自分の目の端に溜まった涙を指先で拭い去ると、
大きく息を吐いて、口調を変えた。

「樹さま、あなたに子供の頃に出会ってから、
私とあなたはとても似てると思っていました。

家柄、ルックス、もって生まれた人の上に立つための器量、
感情よりも理性で人生をこなしていく価値観。

だからこそ、あなたと婚姻を結びたいと思っていたのに。

でも、もう駄目ね。あなたの価値観が変わってしまったようだが

ら。

私が樹さまを好きかどうかを気にするなんて」

蓉子は小さく首を左右に振った。

「どうか、お大事に。あなたの今後、

しっかり見守らせて頂くわ。富豪の子息が使用人と恋に落ちるなんて、

三流の恋愛小説みたいなお話だけど、まるきり興味が無いわけでもないですから」

蓉子が言うと、樹は顔を上げた。

表情のない顔だったけれど、その茶色の目は蓉子を拒んでいるようには見えなかった。

蓉子は踵を返して、樹の病室を出た。

自分は樹を好きでは無かったのだろうか。

というか、異性を好きになるというのは、
一体どういう気持ちなのか。

幼いころいつか結婚をする相手だと、

引き合わせられてから、

ずっと心の中に樹の存在はどこかにあった。

ただ、恋愛というものも興味が無かったし、

そもそも、他の男性と自由に恋愛出来るような環境でも無かった。

だから、樹に対する気持ちについては、

別に考えた事が無かったのだ。

考えなくても、将来自動的に手に入る夫だったのだから。

あかりが現れるまでは。

蓉子はふと、自分の頬に流れている涙に手をやって、慌ててぬぐった。

初めて樹いっせに会ったとき、
なんて美しい男の子だろうと思った。
フランス人の血を引く、茶色の髪、瞳、
すらりと伸びた手足。
たった10歳の夫候補。

「樹いっせさま、

私は少なくともあなたを嫌いだったわけじゃないわ。
じゃなきゃ、あなたがあの女中に贈った時計を、
細工して、盗むはずないじゃない。

でも、それはあなたの言うような愛では無かったかもしれない。
私がこうして涙を流すのは、

粉々にされた自分のプライドの痛みのせいかも」
蓉子は呟いて、苦笑した。

病院の建物の出口から出ようとした時、
救急車が入ってきて、にわかに蓉子の周りが慌しくなった。

何気なく、病院を去る足を止めて、
たった今運ばれてきた患者の搬入を眺める。

救急車から降ろされた患者が、
キヤスター付の台に乗せられて運ばれていく。
事故だろうか、若い女の患者は血だらけだった。

その患者と入れ違いに建物を去ろうとして、
蓉子は足を止めると、今の患者に見覚えがあったのを思い出して、
驚いて、もう一度振り返った。

あれは、沢あかりだわ！
樹いつきが自分との婚約を白紙に戻した原因の女中。
確か、時計の騒動の後、
仕事を辞して、行方が分からなくなっていたと聞いたのに。

血だらけだったけれど、
どこかで事故に遭って、運ばれてきたのだろうか。

蓉子は持っていたバッグを開けて、
あかりから奪ったあの時計を取り出して眺めた。
そして、あかりが運ばれていった救急搬入口を見る。

育った環境も、価値観も、
自分によく似ていると思った樹が、
あんなにも、あかりを愛するようになった。

もしかしたら、

私もいつか、誰かを愛せる日が来る可能性があるということなのだ
ろうか。

樹があかりを絶望的に愛してしまったように、
自分もいつか、

財産も権力も、何も見返りがなくとも、

誰かを心の底から、欲しいと思える日が来るのだろうか。

心の中で呟いている端から、

即座に否定する自分の理性を殺して、

蓉子は自分の今までの人生の中には、
見出したこともない行動を取った。

感情に従ったのだ。

樹に知らせなければ。

蓉子はくると来た方向を振り返ると、今の急患を追って、
病院の建物に戻って行った。

救急処置室

あかりの担架が救急処置室に運ばれて行った後に、病院の入り口にフルスモークの大きな黒い車が止まった。運転手がドアを開けると、

中から青ざめた表情をしている北海道会長が、複数のスーツ姿の秘書を連れて、病院の中へと急ぐ。

「今いるこの病院の全ての患者よりも、あかりを最優先に処置しろと伝える。

院長には、この間申し出のあった融資の額は、言い値で増やしてやるともな」

北海道会長が言うと、傍について歩く秘書の男が携帯電話を閉じて頷く。

「直々に、院長に申し伝えました。

全力で、あかりさまの治療に取り掛かるといことです」

あかりが運ばれた病院は、日本でも五指に入る高名な大学病院だった。

その医療技術は、世界でもトップレベルと言われている。北海道ホールディングスの息のかかっている病院でもあった。

「あかりを失うことは出来ない、絶対に出来ないのじゃ」
北海道会長は小さく呟くと、処置室へと急いだ。

遺産相続などの利害が絡まない、単なる使用人という立場のあかりが、

命を呈してまで自分を庇った事に、海道会長は驚愕していたのだ。
た。

そして、深く感動もしていた。

海道ホールディングスという、

国内でも売上高で、常にトップ争いをしている企業を一代でここまでにした。

そんな自分の周りにいる人間で、

利害がからまず、単純に自分を思いやつてくれるような人間など、
今までは、この世にはいなかった。

親や子などの、身近な親族がいればまた違ったのかも知れなかった
が、

遠い親戚を除けば、天涯孤独な自分の周りには見当たらなかった。
いや、親や子でさえも、

あかりのように、あの瞬間に自分を庇って、
シャンデリアの下敷きになる者などいないのかもしれない。

あかりが特別なのだ。

そして、その境遇も、自分ととても似ていた。
聞けば、身よりもいなくて、

健気に自立してつましく生きてきた少女だった。

決して、幸多い生活ではなかったろうに、
いつも明るく辺りに光を振りまいていた。

あの誰をも魅了する、あかりの笑顔は、

自分の屋敷であかりが使用人として働くようになってからは、毎日の、海道会長の癒しでもあった。

何としても、失いたくない。

あかりは神からのギフトなのだ。

あかりの為なら、何でもやってやる。

だから、一日も早く元気になるのじゃ。

海道会長は、心底思っていた。

ふと、海道会長は顔を上げて、ある事を思いついた。

それをそのまま、隣にいる秘書に告げる。

感情を表に出さないよう訓練されたはずの秘書の表情が、驚きを隠せずに目を見開いた。

海道会長がじっと見返してくるのを見て、

秘書は気を取り直すと、はっきりと返事をしたのだった。

「了解いたしました」

蓉子はあかりの運ばれて行った先を確認しようと、しばらく担架の後を追いかけて、救急処置室の位置を知ると、樹いつきの病室に向かうために踵を返した。

そして病院の入り口で、数人のスーツ姿の男を引き連れた、小柄な老人を見つけて、蓉子は足を止める。

尋常ならぬ雰囲気で、蓉子の傍を急ぎ足で通り抜け、あかりの担架の運ばれて行った方へと歩いていった。

「海道会長……？」

蓉子はその老人が誰だか分かると、驚いてその名前を口にする。

こんな所で、一体何をしているのだろう。

不思議に思いながらも、

蓉子は樹いつきの病室へと戻って行った。

樹いつきの病室の前に戻り、
蓉子は少し躊躇した。

もし、あかりがこの病院に急患として、
血だらけで運ばれてきたと樹いっきに伝えて、
その後、樹いっきはどうするのだろう。

けれど、それこそが、

蓉子の知りたい事だったのだ。

親の反対を想定しながらも、婚約者としての自分を振り切つてまで、
樹いっきに、あかりを思う気持ちがあるのなら、

蓉子は、見苦しいほど、じたばたする樹いっきが見てみたかった。
いつも、冷静で感情が無いとまで言われた樹いっきが、
あかりに対して、どういう行動を起こすのか。

人を好きになるということは、一体どういふことなのか。

蓉子は樹いっきの病室の扉を開けた。

花束も無い無機質な個室。

白いベッドに、樹いっきは横たわって目を閉じていた。

その手からは管が伸びていて、

ベッドの脇には、スタンドにぶら下がる薬剤の袋があった。

蓉子が部屋の中に入ると、
樹は、薄く目を開けた。

「蓉子……」
樹は意外な声を上げる。

そして、小さく息をつくど、
「どうした？」

先刻、婚約解消を一方的に宣言した罪悪感を、
忍ばすような、かすれた声で樹は言った。

一瞬、蓉子は全てをなかつた事にしたいと思う欲求にとりつかれた。
あかりが来てからの全ての事を。

樹と自分の間には、
親同士が幼いころに決めた、許婚の約束しか無い頃に戻りたかった。
そして、自動的に手に入る夫として、
冷たく樹をあしらえた頃に戻りたかった。
何故なら、もう今から先は、樹は決して自分の物にはならないから
だ。

「あかりちゃんか」
自分の声も樹と同じように、擦れている。
蓉子は唇を噛んで小さい咳払いをすると、
真っ直ぐに樹を見て、次の言葉を口から押し出した。
「この病院に急患として、たった今運ばれて来たわ」

蓉子の言葉を飲み込めないように、樹が首を小さく傾げる。
そして、言葉の意味が分かると、
樹は、ベッドで背中を起こした。

「あかりか？」
樹の血相を変えた剣幕に、蓉子はたじろぎながらも、
小さく頷く。

「どつやら、事故か何かで怪我をしたみたいだったわ。
今、救急処置室に担架で運ばれていったわ」

蓉子の言葉に、
樹は、ベッドから降りようとする。
そして、腕につけられている管が邪魔なのに気がつくと、
樹は管をつかみ、自分の腕から引き剥がした。

ビニールの管が勢い良く抜けた針の後から、
鮮血が飛ぶ。
けれど、樹は、
そんな事はまるで構わなかった。

ブルーの病院用のパジャマのまま、
樹は、裸足の足でベッドから降りる。

「蓉子、あかりはどこにいる？」

薬が点滴されていた右手からは、
針の後から、血が流れ出しているのも構わず、
樹は、蓉子に詰め寄った。

長身の樹を、蓉子は見上げる。
そう言えば、長い付き合いといえども、
こんなにお互いが近くに寄った事は無かった。

フランス人の血が入る、
日本人離れしている美しさの、
樹の必死な茶色の瞳に、
蓉子の心はときめいた。

ああ、私は初めて異性に恋をしたんだわ。

蓉子は、心の中で呟く。

そして、同時に初めての失恋になるのね。

「救急処置室は、この部屋を出たら、

廊下を右に曲がって真っ直ぐの突き当りよ」

蓉子が言うのと、

樹は薬のせいか、辺りにぶつかりながら、

よろよろしながらも、部屋を走って出て行った。

「あかりみたいだな、凡人のどこがいいのよ」

蓉子は、樹の背中に向かって呟く。

「だけど、ちよっと羨ましいわね」

蓉子は苦笑すると、

樹の病室を出て、

振り返らずに、病院の外へと向かう廊下を歩いて行った。

再会

樹は、入院した時に着せられた、
薄い青の手術着のような寝巻きのまま、病院の廊下を急いでいた。
まだ薬が体から抜けきっていないせいで、足元はふらついているし、
点滴を打っていた針を無理やり引き抜いたせいで、
その衣服の袖を汚してひじから先、血の染みが広がっている。

通りすがりの看護師達が、
いぶかしげな顔をして樹を見るのに、
樹は汚れていない方の袖で血に汚れた腕を隠して、
何とかごまかしてやり過ごした。

あかりが、ここにいる！

鉛のように重い体を引きずるようにして急がせながらも、
あかりが怪我をして運ばれてきたと、蓉子から聞いた瞬間から、
樹は、自分の中に気力が舞い戻ってきたのを感じていた。

気力と共に、押し殺していたあかりへの純粋な想いも蘇る。
その感情を、何と呼べばいいのか、
樹はまだ分からなかったけれど、
自分にとってあかりは特別な人間なのだ、しみじみ思い知らされていた。

もう決して、あかりを傷つけないようにしよう。
二度と離れないために。

自分という存在に対しても無関心だった樹が、
こうして他人に固く何かを決意するのは初めてだった。

救急処置室の前に、数人の入院患者には見えない人間がいるのに、
樹は足を止めた。
黒いスーツに身を包んで、
まるでSPのような三人の従者を連れている、
見覚えのある小柄な老人の姿を見ると、樹は目を見開いた。

「海道会長……？」
樹が呟いていると、
海道会長も樹に気がついて、樹を見る。
「おや、一之瀬家のボンじゃないか」
海道会長が言つて、小さく口に笑みを浮かべると、
樹は海道会長に向かって小さくお辞儀をした。

直接はあまり関わった事は無かったけれど、
自分の父親が仕事関係で関わりがあるのは知っていた。

樹の家の事業が、
北海道ホールディングスの傘下に入っているわけではなかったが、
お互いの企業の存在は、常にお互いに影響しあっていた。
簡単に言えば、一之瀬グループと北海道ホールディングスは、
日本で、1、2位を常に争うトップの総合企業なのだ。
海外でも、二つの企業の評価はとても高かった。

「ボン、どうした？まるで入院患者のような格好をしているが」
北海道会長が、不思議そうに樹を見て言う。

「少し体調を崩しまして、入院していました」
樹はぼそりと言うと、なんとなく居心地の悪さを感じて目を伏せた。
北海道会長はじつと樹を見ている。

その視線は、真つ直ぐで遠慮のないものであったけれど、
同時に、まるで樹の事情を全て知っているかのような、
労わりの温かさを含んだものでもあった。

「確かに、ボンの顔色は土のように悪いな。

「そんな顔色で、ふらふら歩いていて大丈夫なのか？」

樹はその言葉には答えず、
北海道会長の向こうに見える、救急処置室の表示がある部屋の扉を見
た。

上には、使用中の赤いランプがついている。

「一之瀬さま！」

看護師が一人、樹のやって来た方から急ぎ足で来るのが見えた。

「駄目です！病室を抜け出しては！点滴も途中で勝手に抜いてしま
つて！」

悲鳴のように言いながら、樹に向かってくる。

病院で一番高価な特別室の患者の樹がいなくなつて、

担当の看護師達の間では大騒ぎになっていたのだった。

ふと、海道会長の後ろの救急処置室の扉が開いて、中から一人、別の看護師が出てきた。

樹はその看護師を見ると、飛びつくようにして、その白衣の腕をつかんだ。

「あかりが、沢あかりがこの部屋の中に運ばれたんですかっ？」

樹が、自分の血で汚れた衣服の袖を隠す事もせずに、必死な形相になって問い詰めている。

常に無表情な樹しか知らなかった海道会長は、その剣幕に驚き、目を見開いて樹の様子を眺めていた。

あかりが一之瀬の屋敷を出たいきさつと、

樹のこの様子を見れば、

あかりと樹の間に何が起こっていたのか、

海道会長には、大体の事が想像することが出来た。

あかりの容態が気になって強張っていた海道会長の頬が、少し緩む。

若いという事は、

それだけで微笑ましくも美しいことだ。

海道会長は心の中で呟いていた。

病室を抜け出した樹いつきを連れ戻しに来た看護師が、樹いつきの側に寄って説得をしようとしているけれど、それをまるきり無視して、樹いつきは処置室から出てきた看護師に迫り続けていた。迫られている看護師は、樹いつきの剣幕に困って、しどろもどろになっている。

「一之瀬のボンよ」

海道会長は、樹いつきに声をかけた。

「処置室の前で、そんなに騒ぐな。」

確かに、今この中で沢あかりが治療を受けている。

治療が終われば会える。少し落ち着くんじゃ」

樹いつきは海道会長を振り向くと、今度は海道会長に詰め寄って、

その長身で小柄な海道会長を見下ろすように聞いた。

「一体、あかりに何があつたんです」

樹いつきの茶色の瞳に射られるように見られて、

海道会長は罪悪感に瞬きをすると、擦れた声で、

でもはつきりと言った。

「あかりはわしをかばって、落ちてきたシャンデリアの下敷きにな

つたんじゃ」

樹いつきが目を見開いて、言葉を失う。

「まだ詳しい容態は分からないが、

落ちてきたシャンデリアは、あかりの足を強く打ったようじゃ。

さっき聞いたところによると、命に別状はないとのこと。

わしも心底ほっとしているところだ。

同じ病院に入院したというのも、何かの縁じゃ。

あかりの処置が終わったら知らせにいくから、病室に戻っていた

らどうじゃ」

樹いつきの側でおろおろとしている看護師を見て、

そして、血で汚れた樹の衣服の袖を見ると、海道会長は言った。

「いえ、俺は」

樹は処置室の前に置かれている、待合用のソファにふらふらと歩いていくと、

そこにどさりと腰を下ろす。

「あかりの顔を見るまでは、ここから動きません」

両手で顔を覆って、樹は自分の膝に頬杖をついた。

誰が見ても、体がしんどいのが見て取れる。

けれど、頑としてそこから動かないという強い意思表示も、同時に見て取れた。

海道会長は小さく息を吐くと、樹の担当の看護師に頷いてみせる。

「病室にはわしが責任を持って戻らせる。心配はいらん」

その言葉に、渋々ながらも樹の担当の看護師は、他の仕事に戻っていった。

海道会長もソファに歩いていくと、樹の隣に腰をかける。

「あかりは、ずっと会長のお宅にお世話になっていたのですか」
樹がぼそりと聞く。

会長は頷いた。

「ボンが、あかりを方々探しているという事は聞いていた。

じゃが、あかりの強い要望だな。居所を知られなくなかったよう

「じゃ」

樹の顔を覗くと、今の言葉にショックを受けたのか、ますます血の気を失って青くなっているその顔色に、海道会長の胸が痛んだ。

若い恋というのは、美しいだけではなく、

平気でその主を痛めつけもするものなのだ。

「じゃが、あかりは決して、ボンを嫌っていたわけでもない。ただ、自分がボンの信用を裏切った形になったのがいたたまれなかったようだ」

海道会長の言葉に、樹いっきは小さく顔を上げる。

「ボンの屋敷から出てきた日、わしの車の中で、あかりはなかなか泣き止まなかった。

いつもは、あんなに明るい太陽のような娘が、慟哭している姿にはびっくりしたよ。」

よっぽど、ボンと離れるのが辛かったんじゃろうな」

海道会長は、樹いっきの肩に手を置いた。

樹いっきは唇をかみ締めると、救急処置室の赤いランプを見上げた。

一之瀬家の調理場で、あかりは得意の牛乳寒天を作っていた。煮だった牛乳が、鍋の中でふつつつと沸いている。

樹いっきの声が聞こえた気がして、

あかりは調理場の入り口を振り返った。

いつかのように、調理場の入り口に寄りかかって、あかりを見ているいる樹いっきがいるような気がして、でも、調理場の入り口には誰もいなかった。

そして、あかりは思い出す。

もう樹いっきには会えない事を。

牛乳寒天を作っても、もう二度と食べては貰えない事を。

一之瀬家の厨房のはずが、途端に、辺りは海道家の厨房へと景色を変える。

手の中の鍋の牛乳がぐらぐらと沸いて、寒天の入れ時だと教えてくれるのだけれど、

あかりの手は動かなかった。

また一筋、涙がこぼれてしまう。

樹いっきが恋しかった。

あかりは慌てて、誰にも見られないように、手の平で涙を拭く。

「一之瀬さま」

誰かが言っているのが聞こえて、あかりは首を左右に振った。

「いいえ、ここは一之瀬家の屋敷ではなくて、海道家の屋敷です。

私は、一之瀬家の使用人ではなくて、海道家の使用人です」

「一之瀬さま」

また声がする。

あかりはまた必死で、さっきと同じ事を繰り返して言うのだった。

「困ったものね、一之瀬さま。この病室から動かないのだから
看護師のひそひそ話が聞こえる。」

「ちゃんと自分の病室のベッドで眠らないのだから、治るものも治
らないわよ」

「仕方がないわ、ほっておきましょう」

「…しかし、この二人は恋人同士なのかしらね」

「ふふ、可愛いわね」

会話はぱたりと閉じた扉の音で途絶えた。

夢…？

あかりはそつと目を開けた。

白い天井が見える。

視線を下ろすと、両足にギブスをしてベッドに寝かされている自分

の姿が目に入った。

どうしてここにいるのか、鈍る頭を凝らして記憶を手繰る。

そして、海道会長の屋敷でシャンデリアの下敷きになった事を思い出した。

どうやら、自分は足を怪我したようだった。

ここは病院の一室らしかった。

海道会長は無事なのだろうか。

ふと、自分のベッドの脇を見て、

あかりは首を傾げた。

自分が着ている入院着と同じものを着た樹いつきが、

ベッドに近づけた椅子に座ったまま、眠っているのだ。

フランス人の血の入っている明るい茶色の前髪が、

美しい寝顔の目にかかっている。

白い肌はいつにも増して白く、青ざめてさえ見えるようだ。

血の色を透かしている唇、

いつものように、うっとりともとれるほど魅力的な樹いつきだった。

「とうとう、幻覚まで見るようになってしまったのかしら」

あかりは擦れる声で呟くと、小さく苦笑した。

そして、自分の幻覚に向かってそっと手を伸ばす。

あかりの指先が前髪に触れたとき、
樹は目を開けた。
あかりは驚いて、伸ばした手を止める。

少しの間、二人はそのまま無言で見つめあった。

「あかり？」
樹が口を開いた。

「あかり」
自分に向かって伸ばされたあかりの手を、
樹が掴む。

「樹…さま…？」
あかりは自分の手を掴む樹の力を、
まだよく飲み込めず、ただ樹の顔を見ているだけだった。

対抗

自分の手を握る樹の、
血の気のない冷たい手のひらの感触はリアルだった。

もしかして、これは夢ではなく、
現実なのだろうか。

でも、行き先すら知らせてもないのに、
怪我をして自分が運ばれた病院に、
こうして、都合よく樹がいるはずもない。

あかりは自分の目の前にいる樹が、
幻なのを見極めようと、数回瞬きをして目を凝らした。

もし、幻なのであれば、
その内、消えてしまうのだろう。
今まで見てきた夢の中の樹のように。

そして、ふと、
あかりは樹の着ている衣服が、
まるで自分のものと一緒になのに気がついて、
首を傾げた。
何故、幻の樹までが、
入院患者のような格好をしているのだろう。

あかりはもう一度、樹をしっかりと見つめた。
そう言えば、樹の美しい顔は、
あかりが一之瀬家にいた頃よりも、ずっとやつれているし、
その顔色は恐ろしく青ざめている。

そして、あかりは、
樹の片方の袖が血に汚れているのを見つけると、
眉をひそめた。

夢にしては、リアル過ぎる。

「樹さま！もしかして、どこか怪我を？」

あかりが青ざめて言うと、

樹はあかりの視線に気がついて、

自分の血で汚れた袖を隠して、肩をすくめた。

「俺の方は大したことはない。体調を少し壊したただけだ。

この血も点滴を勝手に抜いてしまったからついただけで、

何でもないんだ」

「それでは、やはり樹さまも、

この病院に入院されているのですか？」

目の前にいる樹の存在が、

急に現実味を帯びてきて、あかりの胸は鼓動が早くなった。

あかりの真剣な視線に、樹は目を伏せる。

そして、戸惑った後にぼそりと呟くように言った。

「あかりがいなくなつてから、またまるで眠れなくなつてしまつて、それで薬を少し飲みすぎたようだ」

あかりは言葉を失つて樹を見た。

そして恐る恐る聞く。

「薬つて、もしかして、睡眠薬ですか…？」

樹は小さく頷いた。

あかりの目から、みるみる涙があふれて来る。

樹はあかりの涙に驚いて、

慌て言つた。

「俺が眠れないのは、あかりのせいじゃない。

俺が勝手に眠れないだけだ。何も今に始まつたわけじゃない。

あかりがうちに来る前から、俺はずつと眠れなかつたんだ」

「でも、私がお側について差し上げれば、

樹さまは眠れていたのに。

私が勝手に一之瀬の屋敷をお暇したせいで、

樹さまが薬を飲みすぎてしまったのですもの。

やっぱり、私のせいです」

あかりの言葉に、樹はもう一度強く言つた。

「あかりのせいじゃない。だから、あかりが泣く事はないんだ」

樹が言つて、あかりの頬の涙を拭くと、

あかりはその樹の指を、自分の両手で握り締めた。

「でも、良かった」

涙を流しながらも、搾り出すような声であかりが言う。

「樹さまが、こうして無事で」

心からの言葉だつた。

樹の胸が甘く痛んだ。

あかりを力いっぱい抱きしめたい衝動に駆られて、

自分に驚くと、樹は小さく苦笑した。

樹はあかりの手を、

青白い自分の頬に当てた。

「俺よりも、あかりの方が心配だ。

両足を骨折しているらしい。あかり、痛まないか？」

あかりは首を左右に振る。

鎮静剤が効いているのだろうか、痛みは全く感じなかった。

両足の骨折。

ぞっとするような言葉だけれど、

あのまま自分が突き飛ばさずに、

北海道会長がもろにシャンテリアの下敷きになっていたら、

北海道会長は、きっと骨折ぐらいでは済まなかっただろう。

怪我はいつか治るだろうし、

行き場のない自分を助けてくれた北海道会長のためになれたのなら、

本当に良かったと、あかりは心の底から思った。

「俺を許してくれるか？」

ふと、樹があかりの手を頬に当てたまま、

かすれた声で言った。

あかりが目を上げて樹を見ると、

その茶色の瞳には、痛々しいほどの懺悔があった。

何について樹いっきが言っているのか、
あかりはすぐに理解すると、唇に小さく笑みを浮かべて、
首を上下に振った。

「時計の事は、俺の勝手な誤解だった。

嫉妬していたんだ。あかりの写真を撮った奴に」

樹いっきの真摯でストレートな言葉に、あかりは胸を打たれる。

「悪かった」

あかりは言葉を搜しても、何も言えず、
ただ樹いっきの真つ直ぐな視線を受け止めて、
小さく横に首を振るのが精一杯だった。

あかりが一之瀬の屋敷に勤め始めた頃は、
まるで能面のように無表情だった樹いっき。
あかりが去るまでの間には、
大分小さな笑顔を見せたりはしていたけれど、
ここまで、自分の心情を表に出すなんてことは、
以前の樹いっきには無かった。
あかりは改めて、驚いていた。

「怪我が治ったら、また俺のところに戻ってきてくれるだろう？」
不安げな表情を浮かべたまま、樹いっきが言う。

「B・Eの連中も心配している」

樹の言葉に、あかりの脳裏には、

薫、愛良、明人、雪丸の顔が思い浮かんだ。

そんなに長い間通ったわけでもなかったけれど、

B・Eに出会えてからの樹と同じ学院に通えた日々は、
本当に楽しく、愛しい日々だった。

またあの日々に戻ることが許されるのだろうか。

あかりは目じりに新しく浮いた涙を瞬きでこまかすと、
大きく頷いた。

樹がほっとした表情になる。

「会いたかった」

まるで、純真な子供のように言う樹に、

あかりは、あかり特有のあの笑顔でにっこりと笑う。

そして、はつきりとあかりも答えた。

「私も樹さまに、とても会いたかったです」

お互いの視線が優しく交わる。

それには、触れられるような温かい温もりが宿っていた。

ふと、個室になっっているあかりの病室の扉がノックされた。

樹いっせがあかりを見る。

あかりは小さく頷いた。

「どうぞ」

樹いっせが扉に向かつて答えると、扉は静かに開いた。

そこにはSPのように隙の無い、海道会長の秘書の姿があった。後ろには海道会長自身も控えている。

会長はあかりが目覚めているのを見ると、

あかりのベッドに走り寄った。

「あかり、目が覚めたか！」

あかりは慌てて駆け寄ってくる会長に、小さい笑みを浮かべて見せた。

「海道会長には、お怪我無かったですね。本当に良かった」

あかりの言葉に、海道会長は涙を浮かべた。

「わしの代わりに大怪我させてしまった。

必ず元通りに治してやるからな。あかり、痛い思いをさせてしまったのを、

どうか許してくれよ」

海道会長の苦悩の言葉に、

あかりはにこりともう一度微笑む。

「大丈夫です、すぐに治して見せますから」

言っ、あかりがベッドの上でガッツポーズをとるのを見ると、海道会長ほっとして、口元を少しだけ緩めたのだった。

「そつだ、一之瀬のボン」

海道会長がふと、樹いっきに声をかける。

「お前にお客さんだ。」

お前さんがいない病室の前で呆然としておつたのを、つれて来てやった。ご母堂だろう？

普段はアメリカに滞在なさっていると伺っているが、

お前さんが入院したのを心配して、帰国なさったんだろうな」

樹いっきは言われて、会長の言葉を理解すると、

大きいため息をついた。

あかりは緊急処置の後、結局一晩目が覚めず、

樹いっきはその間ずっと、自分の病室を抜けてあかりの側にいた。

自分の入院からは丸一日経つ。

それだけの時間があれば、日本の屋敷からの連絡を受けて、

母親の志保がニューヨークから日本へ来ることは可能だった。

海道会長の秘書が頭を下げて、病室の扉の前から退いている。

コツコツとハイヒールの足音がして、

デザイナーズの上品なスーツを着た、

フランス人と日本人のハーフの、すらりと背の高い美しい婦人が、あかりの病室に入ってきた。

あかりは息を飲む。

この美しい人が、樹さまのお母様！

「ご無沙汰しています、母上」
樹は憮然とした口調で、しかし無表情に言った。

「樹、話があります。外に出ましょう」
よく見ると、樹にとても似ている美しい顔で、
しかし冷たく、ちらりとあかりに視線を流した後、
志保は毅然と樹に言った。

樹はあかりの側から立ち上がる。

「あかり、すぐ戻る」

あかりにはあくまでも優しい口調だったけれど、
母親と言われる人と樹の間に、なにやら不穏な気配を感じて、
あかりは思わず口を開いた。

「樹さま、喧嘩なさっては駄目ですよ？」

この世でたった一人のお母様なんですから」

あかりの言葉に、樹はフツと笑った。

「大丈夫だ」

樹の表情に、あかりもほっとして微笑む。

けれど、くるりとあかりに背を向けた樹の表情は、
また無表情に戻っていた。

遠路はるばるやって来た母親に、何を言われるのか、大体は予想出来ていた。

あかりに出会う前ならば、別にそんな事もどうでもいいと思っただろう。

抗うほどの動機も目的も、自分の人生には見出せなかったから、自分の両親には、今までそれほど反抗したことも無かった。

けれど、もう両親の思惑通りに操り人形のように生きるのは、我慢が出来なかった。

樹の中で、初めて何よりも優先して欲しい物が出来たのだ。他の何を犠牲にしても、手に入れたいもの。

それはあかりだった。

あかりに出会ってから、自分の気持ちが次第に固まるにつれ、樹はすでに行動に出ていた。

蓉子との婚約を解消したことに、対抗出来る言い訳。

樹が黙って病室の外へ出ると、

志保は扉を閉めて、

樹を導きながら、誰もいない方へと病院の廊下を歩き出したのだった。

後悔の予感

人気の無いロビーの片隅まで来ると、
志保は樹に向き直った。

「樹、ニューヨークへ来なさい。

日本の仕事は他の者にやらせます。

もう、あなたは関わらなくていいわ。

それよりも、ニューヨークの大学に入って勉強でもして頂戴。

もう、私の目の届かないところで、

あなたの事で気を揉むのは疲れました」

強い口調で志保が言うのに、

樹は、ふっと小さく笑った。

「あなたも、母親だつていうわけですか。

俺の一体何を、今更そんなに心配してるんです？」

無表情の冷たい口調で、

真っ直ぐ自分を見る樹の視線に、志保はたじろぐ。

志保は直ぐには、次の言葉を見つける事が出来なかった。

「今回の入院も、薬を多少飲みすぎただけです。

別に死のうと思つたわけではないので、心配は無用です」

樹は淡々と続ける。

「ただ、そうですね。母上が懸念されていることのうち、
実際に起こってしまったことが一つあります。」

俺は蓉子との婚約を、正式に本人に断りました」

志保が目を見開いた。

「何ですって？」

樹は黙って、志保を見ている。

「そんなこと、お父様が許すはずないでしょう？」

志保は冷静でいようと思いつつも、

動揺が声に出してしまうのを感じた。

まさか、樹は良家の令嬢よりも、

大叔父の愛人の娘を選んだということなのだろうか。

そんなことは、あり得ない事だった。

あかりのような得体の知れない少女を、

大叔父や、自分の夫のように、愛人として抱えるのならまだ理解が

出来る。

何故なら、樹は庶民ではない。

傘下の企業などを含め、

世界中で従業員3万人を抱える法人の、次期CEOなのだ。

婚姻によって得る利益も、大事な企業戦略だった。

ましてや、蓉子の親の持つ企業は、

自分達の企業の中でも弱い箇所にあたる部門で、

世界で10本の指に入る業績を上げていたのだ。

「許されないような無茶をするほど、俺も子供ではありません」

樹は冷静な口調を保って言う。

「あかりと出会ってしばらくしてから」

樹は言つと、少しの間口を閉じた。

志保の顔色がみるみる青ざめる。

「どうしても、俺は蓉子との結婚が嫌になりました。

別に、蓉子が嫌だと言うわけではなく、

ただ、他にいつも側に欲しいと思う相手が出来たからです。

他には、俺は誰も要らない。

その相手以外は、目障りにさえ思ってしまうんです。

母上、あなたでさえも」

樹は続ける。

志保は樹の言葉に衝撃を受けた。

自分の母親に良くもこんな物言いが出来たと、

心の中で思うけれど、

果たして言い返せるほど、

自分はちゃんとした母親だったろうかと思いかえして、

志保は何も言えないのだった。

樹は、小さい頃から子供らしくなくて、
いつも大人びていた。

こちらの要求と期待には全て答えてくれていたし、

それはまるで機械のように正確な成長だった。

だから、全て大丈夫なのだと思っていたのだ。

自分が母親らしくしなくても。

自分が母親らしくなくても。

何かが間違っていたのかもしれない。

志保はふと思った。

初めて樹が、

自分たち両親に歯向かおうとしているのだ。

「母上と父上が心配なさっているのは、

俺自身のことというよりは、

経営している法人の業績だけだと理解していますので、

その点は、解消してあります。

ずっと伏せていましたが、個人的に動いていました。

来年の春には、香港の通信大手のPCCMの買収が成立する予定です。

これで、蓉子との婚姻解消の穴埋めが出来ると、俺は踏んでいきます」

志保は目の前に立っている自分の息子が、

本当に自分の息子なのか、自信が持てなくなるほど、

母親の自分から、樹いっぎの心が離れてしまっているのを知った。

「そう」

志保は力なく頷くと、

樹いっぎの腕に手を伸ばした。

樹いっぎは避ける事もなく、

志保に腕を握られたままにしている。

「あの子が好きなの？」

志保の言葉に、樹いっぎは黙っている。

「あの子を、愛してるの？」
志保は言くと、樹いっけの顔を見上げた。
いつの間にか、自分の身長などどっくの昔に追い越していて、
そして一人の女を想うような、大人の男になっていた息子。

「正直」

樹いっけは志保の視線から目を逸らして言う。

「愛がどういふ物なのかは、分かりません。

ただ、俺はあかりが欲しい。

いつも、ずっと側にいて欲しいと思っています。

ただ、それだけの単純な気持ちです」

目を合わせずに言う樹いっけに、

志保は目を伏せて小さく微笑んだ。

樹いっけが、

こんなに真っ直ぐに自分の気持ちを話してくれたのは、
初めてだった。

子供は、親がいなくても成長するというのは、
本当だったのだ。

志保は少し寂しく思った。

けれど、それ以上に嬉しかった。

「PCCMの買収が成功したら、

あなたが蓉子さんとの婚約を勝手に解消したとしても、

お父様には何の文句もないでしょう」

その言葉に、樹いっけは志保を見る。

「樹。」

もし、今後、あなたがその一人だけを想う気持ちを、生涯、貫き通せたとしたなら、私はあなたを息子としてだけではなく、

一人の男性として尊敬するでしょう」

志保は言って微笑むと、

樹の頬に手を伸ばした。

「あなたには、いつも学ばされてばかり。

これでは、どちらが親か分からないわね」

樹は自分の頬に当てられた志保の手に、そっと自分の手を重ねた。

「俺は母上に産んでもらって、

感謝しています。

生まれてくれたから、

あかりに出会えた」

志保は息子の顔を微笑んで見上げながらも、あかりという少女が羨ましくてしょうがなかった。このまま、樹と結ばれて幸せになるのが、癪に障る気持ちで一杯だった。

何故、神様は、

樹の出会ったような、

本当の愛を自分にはくれなかったのだろう。そんな事を強く思った。

けれど、その後、

志保はそう思った事を後悔することになる。

母親の自分がひがんだから、

樹いつきの幸せに影が差したのだろうか。

そうだとしたら、自分は本当に最低の母親だと、

後で、血のにじむように後悔することになるのだった。

側にいるための理由

あかりが入院してから、二週間が経っていた。

両足のギブスも軽くて薄いものに交換され、

トイレも車椅子で連れて行ってもらえるようになっていて、

入院したばかりの頃よりは、体の自由が利くようになっていた。

あかりの容態が大分落ち着いてきたので、

樹はB・Eの面々に、

あかりが入院をしている事を告げていた。

「樹こいつから話を聞いたときは、びっくりしたけど」

学院の制服姿、ショートカットヘアのボーイッシュな薫が、ベッドで半身を起こしているあかりの顔を覗き込んで言う。

「思ったよりも、元気そうで良かったわ」

「本当、あかりちゃんの居所が分かったと思ったら、

怪我して重傷だって言うから、もうショック倍増で、

僕、おろおろしちゃったよ」

肩までのボブの髪を揺らしながら、

少女のようなくりくりした丸い目を、ますます丸くして雪丸が言った。

「警視総監やつてる雪丸の親父さんに頼んで、

あかりちゃんの行方を捜してもらったのに、

一向にあかりちゃんの居場所がわからなくて、

不思議だと思っただら、海道会長のところにいたとはね！」

つんつんへアーの明人が、肩をすくめて言う。

「あの海道会長があかりちゃんを隠したら、誰にも見つけれないよな」

「申し訳ありません。皆さんにそんなに心配をおかけしていたとは、

ちっとも思わなかったものですから」

あかりがベッドの上で、申し訳なさそうに、消え入りそうな声で言った。

「ちよつと、あなたたち、

重傷の怪我をしている人に、そんなにポンポン言わなくていいでしょう?」

腰までの長い美しい髪をした愛良が、

花瓶に活けた花を持って病室に戻って来ると、

幼馴染の他の三人をたしなめた。

「あかりちゃんだって、好きで一之瀬の屋敷を出たわけじゃないんだから」

その愛良の言葉を聞いて、

あかりのベッドの脇の椅子に腰をかけ、仕事の書類を見ていた樹の手が止まる。

「って、愛良が一番辛口じゃねえか」

樹の青ざめたその表情を見て、

明人が慌てて、わざとぶざけた口調で言った。

愛良は花瓶をベッド脇のテーブルに置きながら、

小さく肩をすくめて、しまったという風に手に口を当てる。

「俺の軽率な態度のせいで、あかりや皆に迷惑や心配をかけた。

悪いことをしたと思ってる。すまなかった」
樹いつきが掠れた声で言つて、小さく頭を下げた。

薫、愛良、明人、雪丸がお互いに顔を見合わせる。

そして、薫が小さくため息をついて、樹いつきの肩に手を当てた。

「なーんか、樹いつきって変わったな。

あなたが人に謝るのって、初めて見たかも。

まあ、それもあかりちゃんのせいなんだろうね。

確かに、今回は私たちかなり心配したし、気を揉んだけど、

もうこうしてまたお互いに会えたし、あなた達も仲直りできたんだから、

それでいいわよ」

薫の言葉を聞いて、

目を伏せた樹いつきの唇に、

小さく笑みが浮かぶのを見て、薫も小さく笑った。

誰よりも、あかりが見つかって嬉しいのは、
樹いつきなのだ。

あかりがいなくなった時、一体どれだけ自分を責めた事だろう。
もうこれ以上、樹いつきは誰にも責められる理由はない。

薫は樹いつきの気持ちを痛いくらい理解すると、

ポンポンとその肩をたたいた。

あれから、樹いつきは、

自分の治療は三日ほどの入院で終了し、直ぐに退院していた。けれど、あかりの側を離れるつもりはないらしく、学院に通うこともせず、父親に頼まれた仕事をあかりの病室に持ち込み、
一之瀬の屋敷から病院に毎日通って、面会を許される時間のかぎり、あかりの側にいた。

B・Eの幼馴染も、

お見舞いにしては、ずいぶんとゆっくりあかりの病室で過ごしていたけれど、

そろそろ面会の時間が終わる夕方遅い時刻。

あかりに少し疲れている様子も見えるので、

薫は樹いっきを促して、皆で帰ることにした。

「また明日来る」

樹いっきが小さく言うと、あかりは微笑んで頷いた。

「僕たちも、また来るからね！」

幼馴染達が、それぞれあかりに声をかける。

「今日はお見舞い、有難うございました」

あかりはベッドの上で、ぺこりと皆に頭を下げた。

幼馴染五人は、あかりの病室を出ると、それぞれ思い思いに病院の廊下を歩いていく。

「ねえ、樹とあかりちゃんって、何か進展あったの？」

ボブの髪の毛を揺らして、

雪丸がわくわくとした表情で、樹にまとわりついて訊く。

「そうそう、私も前と感じが変わった気がする。」

ただの使用人とご主人っていうよりは、なんかもっとソフトなイメージっていうの？」

愛良がしとやかな、けれど率直な口調で続ける。

「あかりちゃんが変わったわけじゃないわよ。」

樹が変わったのよ」

薫が言うと、明人が両手を挙げて賛同した。

「俺も、俺もそう言おうと思ってた!」

そして、四人は樹の顔をじっと見る。

樹は書類を片手に抱えて、

病院の出口にまっすぐ向いて歩いていたらけれど、

執拗にまとわりつくように歩いて、自分を見つめる幼馴染たちに苦笑した。

「あかりがいなくなった時と、

今と違うことと言えば、思い当たる事が一つある」

抑揚のない、樹のいつもの口調。

「え？何なに？」

雪丸が真っ先に食いついて、樹に聞いた。

「蓉子との婚約を解消した」

樹がなんていうことなく言うのに、

四人の幼馴染達は一瞬黙り込んで、次の瞬間、大きな声を上げた。

「ええ!!!何だつて?」

四人の素っ頓狂な合唱に、通りすがりの看護師が眉をひそめる。慌てて四人は声を潜めると、樹いっせに詰め寄った。

「どうして?何があつたの?」

薫が聞く。

「別に何も無い」

樹いっせが答える。

「蓉子さんと喧嘩したとか?」

愛良が遠慮がちに言う。

樹いっせは小さく笑った。

「もともと、喧嘩するほどの仲じゃない」

「それはそうだけど…」

愛良は信じられないという風に呟いた。

「ということは、あれか?」

その婚約解消の原因は、やっぱりあかりちゃんだつてわけか?」
ツツンヘアアの明人が遠慮なしに聞くと、
それに対して、樹いっせは答えなかった。

「使用人と一之瀬ホールディングスの跡取りの子息の恋。」

まるでロマンス小説のようじゃない!」

愛良が胸に手を当てて、うっとりと言う。

「愛良のバカ。これはロマンス小説みたいなの、

「こ都合主義の簡単な恋愛とは話が違つたよ」

薫は愛良に言うつと、樹いっせに向き直った。

愛良が唇を尖らせる。

「もしかして、樹はあかりちゃんをお嫁さん貰うつもり？
いい？あなたのお嫁さんになるといいうのは、
普通の夫婦になるといいうことじゃないのよ？」

あなたと結婚すれば、妻は社交界に常に顔を出さなきゃならない。
ああいう世界は、学歴、肩書き、出身全てが、
煌びやかな光のもとに露にさらされる場所なの。

着飾って集う人々は、一見優雅に見えるけど、
実は、見栄とはったりだらけ。

自分の利益を少しでも増やそうと、

お互いの腹の中を探り合っているような、

足の引つ張り合いの魑魅魍魎の戦場なのよ？

私や愛良、蓉子さんなんかも、

それに耐え得る教育は小さいころから受けてる。

でも、庶民のあかりちゃんがそんな場所に引きずり出されたら、

どうなると思う？まさか、そこまで想像力がない訳じゃないわよ

ね。樹。

天才って言われている、IQの高いあなたが」

薫の言葉を聞き終わると、樹は薫から目をそらした。

五人の間に、沈黙が流れる。

「俺はただ」

樹が口を開いた。

「あかりにずっと、俺の側にいて欲しいだけだ」

「それは使用人として？」

「なら、蓉子さんと婚約を解消する必要は無かったんじゃないの？」
薫の強い口調に、雪丸と明人が薫の制服の袖を引っ張って、
それくらいにしると、薫に合図をする。

「別に樹を苛めたくて、私はこんな事を言ってるわけじゃない。

ただ、幸せになって欲しいから。」

樹とあかりちゃんには幸せになって欲しいから、

もっと、用意周到にしるって言ってるのよ。」

雪丸と明人の腕を振り払って、薫は樹に詰め寄った。

「あかりちゃんにずっと側にいて欲しいってことは、

お嫁さんにしたいって事でしよう？」

樹は、薫から目をそらしている。

そして、ぼそりと呟いた。

「俺には、まだ分からない」

樹の声は少し震えていた。

もうそれが、十分悲痛な呟きに聞こえた明人と雪丸が、
薫の腕をそれぞれ両方から抱えて腕を組んだ。

「難しい話はそれまでっ！」

明人がおどけたように言う。

「薫、なんかストレス溜まってたんじゃない？」

樹で発散しなくても、うちでビリヤードでもして、

発散しなよ！」

雪丸も薫をなだめるように言った。

「薫は、ご都合主義のロマンス小説を読んだ事があるの？
無いでしょう？」

愛良がフフンと笑って、薫に言う。

「一回読んでみた方がいいかも。私たちだって、
いつかは結婚しなきゃいけないんだし。」

どうせなら、恋愛して結婚したいじゃない？

私はロマンス小説みたいな、

執事とお嬢様の結婚だってありだと思っけど？」

明るい声色で愛良が言って、病院の出口へと小走りに駆けて行った。

「え？愛良って、執事と恋愛してんの？」

明人がぎよっとして言う。

雪丸も目を見開いて明人を見た。

病院の建物の出口で、
それぞれが別れる。

薫は明人と雪丸に、
腕を押さえられて病院の外へ連れ出された事に腹を立てて、
先に歩いて行ってしまった。

「樹」

明人が樹に声をかける。

「俺たちは、樹とあかりちゃんを、

応援してるから。どんな形になろうとも」

その言葉に、雪丸もうんうんと頷く。
樹も、二人に頷いて見せた。

幼馴染が皆、帰って行き、
樹は一人になる。

蓉子との婚約を解消したのは、
果たして、自分ばかりと結婚をしたかったからなのか。

結婚。

蓉子と婚約をしていたとはいえ、
現実的に身近に、この言葉を考えた事は無かったのに、
樹は気がついた。
つまりは、蓉子との結婚をリアルには、
脳裏に描いていなかったという訳なのだろう。
もちろん、幼いころにした婚約だったせいもあるのだろうが。

けれど、樹は、
あかりとの結婚なども、
実は思い浮かべた事は無かった。

あかりを妻にする。

わざと想像してみようとするけれど、

やはり、薫の言った通り、

庶民のあかりに、自分の将来の妻の役目は出来ないかもしれないと思ってしまう。

ならば、俺は一体、

あかりに今後、何を望むというのだろうか。

病院のエントランスで、樹は立ち尽くす。
考えても、何も結論が出なかった。

ただ、一つだけ。

確かなことは、自分の人生からあかりを失いたくない。
それだけだった。

でもどうすれば、

あかりを失わずに済むのか。
樹は必死で考えていた。

あかりの決心

次の朝。

病室の扉がノックされ、
いつも巡回診察してくれる白衣の院長と共に、
今日は海道会長の姿があつて、あかりは驚いた。

「あかり、お早う。具合はどうかね」

心なしか、海道会長の元気がない様子を見て、
あかりは首を傾げつつ、明るく挨拶を返す。

「お早うございます。足以外は、今日もとても元気です」
あかりが言つと、海道会長は小さく頷いた。

入院した時から、ずっとあかりを直々に担当してくれている、
この病院の院長が、言い難そうに口を開く。

「この二週間で、沢さんの怪我の状況を色々調べて参りましたが、
沢さんが再び歩けるまでの治療は、

うちの病院では不可能だという事が分かりました。

一応うちも神経学で、日本では一番の権威ではありますが、
ご期待に答える事が出来なくて申し訳ありません」

淡々とした口調。

あかりはしばらく言われた意味が分からなくて、
曖昧な表情をした。

そして、時間をかけて言われた事の意味を、

理解しようと努力する。

「それはつまり」

あかりは実感の無い口調で訊く。

「私が歩けなくなるといふことでしょうか」

院長はあかりから一旦目をそらすと、

またあかりに目を戻して、小さく頷いた。

「そうですか」

あかりは言うつと、俯いた。

宣言された言葉の意味が、
じわりじわりと、あかりの身に染み込んで来る。
病室に、沈黙が流れた。

「スイスに」

海道会長が慌てた感じで、口を開く。

「神経学世界トップの権威の教授がいる。

今、あかりを診てもらえるように手配中だ。

あかりは、わしが全責任を持って面倒を見る。

だから、何の心配もいらない」

海道会長は言うつと、あかりのベッドの脇に近寄って、
あかりの手を握った。

「スイスに行つて、手術を受ければ、歩けるようになるかもしれん。

まだ、希望はあるのじゃ。

どうか、あかりあまり嘆かないでくれ。

全ては、わしのせいじゃ。

わしが気まぐれに、長い間使つていなかったボールルームで、

舞踏会なんぞ開くことを思いつかなければ、

あかりはわしをかばつて、怪我をする事など無かつたのに」

北海道会長苦しげに言つと、握つたあかりの手に自分の額を押し付けた。

あかりは小さく微笑むと、

北海道会長に握られた自分の手に、力を込めて会長の手を握つた。

「別に、命に関わるわけでもありませんし、

かえつて、一使用人の私が、

北海道会長のご好意に、こうして甘えさせて頂いているのが、

本当に心苦しいくらいです。

いつか、何らかの形でご恩をお返しします。

私の方こそ、本当に有難うございます」

あかりが言つと、北海道会長はあかりを見て涙ぐんだ。

「お前は、本当にいい子だ」

あかりは首を左右に振つた。

「私は何の取り柄もない、平凡な庶民です」

ふと、病室の外に控えていた北海道会長のSPのように隙の無い秘書が、

北海道会長を呼ぶ。

「スイスから連絡が入っています」

海道会長は頷くと、あかりの手をもう一度握り締め、病室を出て行った。

院長もあかりに頭を下げ、出て行く。

秘書が病室のドアを閉めようとした時、あかりは声をかけた。

「あの、秘書さん。お願いがあります」
青ざめているあかりの顔を見て、秘書は小さく頭を下げ、あかりのベッドの側に近寄った。

あかりは秘書に用事を一つ頼んだ。
事情を全て知る秘書は、何も言わず頷いて、病室を出て行った。

歩けなくなる。

それは自分にとってどういう事なのか。
あかりは改めて考えてみる。

もし、自分が歩けなくなるとするなら、
もう二度と、樹いっせの元へは戻れなくなるのだろう。
使用人として働けないのなら、
一之瀬家には、もう戻れない。

そんな事を考えたら、

あかりの胸が引き千切られるように痛んだ。

樹いつきの側には、もう二度と戻れないのだ。

あかりの目から、涙が流れ出す。

フランス人の血が入っている金髪に近い茶色の髪、
茶色の瞳。

血の色を透かした赤い唇。

すらりと高い背、まるで絵画の中から抜け出して来たかのような、
美しい樹いつき。

初めて樹いつきに出会ったあの日、

あかりが通りがかりの子供の風船を取ろうと、

木によじ登ったあの日、

樹いつきは木の下で呆れたように自分を見上げていた。

実はあの日から、

心の中で、あかりは樹いつきに、

ずっと恋焦がれてきた。

こうなつた今、

あかりははつきりと自分の気持ちを知った。

使用人という立場だとしても、

樹いつきの側にいれる事が、

あかりの今までの人生の中での、一番の幸せだったのだ。

どうしようもない身分の違いから、

到底、この淡い恋は実ることは無いと知っていても、
ただ、側にいれるだけで幸せだった。

樹いつきが蓉子と結婚するのを見守る事でさえ、
あかりは樹側なみじにいれるのなら、
心から祝福出来ると思った。
そしていつか、樹いつきの二世の世話を出来るなら、
もしかして、年老いて三世のお世話も出来るなら、
庶民の自分が樹いつきと関わる世界での、
最大の幸福だと思っていた。

でも、もう。

あかりの目から、次から次へと涙が生まれる。
そんな夢も終わってしまった。

歩けない使用人を、誰が雇うだろう。

歩けない乳母に、子供を任せる人なんていやしない。

個室の病室の中、あかりは声を上げて泣いた。

仕事しごとが押しして、今日は樹いつきが病院を訪れるのは、
午後ごごになってしまった。

あかりが好きなプリンを買って、

樹は急いで病院に行く。

あかりの病室のドアを開けると、
見慣れない事をあかりがしているので、
樹は不思議に思いながら、部屋の中へと入って行った。

あかりはベッドの上に半身を起こして、
せっせと裁縫をしていた。

「何をしているんだ？」
樹は言つて、あかりの側に近寄つていく。

「あ、樹さま。お見舞い有難うございます」
あかりはいつもの笑顔で、樹を迎える。

「あかりの好きなプリンを買ってきた。
食べるか？」

樹が言うのに、あかりは笑顔のまま、
「もう少しで終わるので、これを仕上げてしまつてから頂きます」
言つと、手元の裁縫に戻つた。

「何なんだ。それ？」
樹が、不思議そうにあかりの手元を覗き込む。

あかりは、紺の布地を縫つて、
何か人形のようなものを作っていた。

「あかり人形です」

あかりは手元から目を上げて、樹いつきを見て言う。

「あかり人形？」

樹いつきは驚いて、そして小さく笑った。

「何のために、あかり人形を作ってるんだ？」

樹いつきが訊いてくるのに、

あかりは明るく答える。

「樹いつきさまが、良く眠れるようにですよ？」

あかり自身は、今は樹いつきさまのお傍そばについて、

眠るのを見守って差し上げられないですけど、

あかり人形だったら、いつでもどこでも、

樹いつきさまを、お傍そばで見守れますから」

あかりは手元に目を戻すと、最後の仕上げをした。

「このあかり人形が着ているのは、私のワンピースなんです。

樹いつきさまは、初めてお会いした時、

お恥ずかしい事に、木の上でしたけど、

その時に着ていたワンピースなんです」

樹いつきの脳裏なうらに、あの日の木の上のあかりの姿が蘇よみがえる。

あかりの下着を見てしまった日だ。

樹いつきは、あかりには分からない照れ笑いをした。

「すっかり覚えてる。そう言えば、あの時あかりは、

こんな色の服を着てた」

安やすっぽい冴さえない服だと思ったのは、あかりには言わない。

「はい！出来ました！これをどうか受け取って下さい！

そうすれば、今夜から樹さまは、熟睡間違いなしです！
あかりが明るく言って、樹に人形を手渡す。

縫い目も不ぞろいで、

ボタンで出来ている目は愛らしいには程遠かったけれど、
手のひらほどの人形の全身に、

あかりのありつたけの想いが込められているのは、
樹にもはつきり分かった。

きつと、この人形と一緒だったら、
いつもよりも、良く眠れるのは間違いないだろう。

「有難う」

樹は素直に礼を言って、

あかりからその人形を受け取った。

樹が人形を受け取ってくれたのを、

あかりは嬉しそうに見た後、

大きく息をついて、口を開いた。

「樹さまに、お話があります」

樹は人形から目を上げて、

あかりを見る。

今まで聞いたこともない、

まるで何もかも諦めたかのような、
潔いきつぱりとしたあかりの口調。

あかりが樹いっきに何も言わずに、
姿を消した時よりも、

あかりの今の言葉を聞いて、自分に不安が募る事に、
樹いっきは驚いていた。

愛の決別

「樹さまと、

しばらくの間、お別れをしなければならなくなりました」

あかりは少し震えているけれど、はっきりとした口調で言った。

「えっ？」

樹は、手の中のあかり人形から目を上げて、

ベッドの上のあかりを見る。

「この足の怪我が、どうやら大掛かりな手術をすることになるようで、

さきほど、海道会長からスイスの病院へと転院することに決まったと、

言われました」

「スイス…、ああ、そういうえば、神経外科の最高権威がいる」

樹は呟くけれど、それがどうしてお互いの別れになるのか、理解出来なかった。

「いくら仕事中の事故とはいえ、一使用人の私が、海道会長に多大なご負担をかけてしまいます。

なので、もし怪我が治ったとしても、

樹さまの所へ、直ぐには戻ることは出来ません。

働いて尽くして、海道会長にご恩返しなくては私の気が済みませ
ん」

あかりが真つ直ぐに樹を見て言うと、

樹は口を開いた。

「治療費なら、俺が負担してもいい。

そのぐらい、俺自身の個人的な稼ぎはある」

あかりは首を左右に振る。

「一之瀬家を辞した使用人の怪我に、

樹さまが、そんな散財をされる理由がありません。

私は今は、海道家の使用人なのですから」

樹はきつぱりと言うあかりに、

しばらく言葉を失う。

「けれど、あかりは俺にとって」

樹が言葉を押し出すように言うと、

あかりは黙って樹を見た。

樹の次の言葉を待っているように見えた。

でも、それはあかりが決して何かを期待しているような感じではな
く、

投げられているのは、あくまでも冷静な理性の視線だった。

「あかりを失いたくないんだ。

ずっと側にいて欲しい。こんな気持ちは初めてなんだ」

樹は悲壮に言うと、あかりの手を掴んだ。

手を掴まれたまま、あかりは目を伏せる。

「私も樹さまが大好きです。

こんな事にならなければ、

すぐにでも海道家からお暇頂いて、

樹さまの元に戻り、

また使用人としてお仕え出来たのに」

あかりの目から、ぽとりと涙が落ちた。

驚いた樹が、あかりの頬に指を伸ばして、

あかりの涙を拭く。

「治療費は、俺が負担する。」

海道会長には、俺から話すから
今にも病室を出て行きそうな樹に、
あかりは鋭く声をかけた。

「私を樹さまの、愛人になさるつもりなんですか？」
驚いた樹が、あかりを振り返る。

「単なる使用人の怪我、それも他家の仕事中での事故の怪我なのに、
全く関係の無い樹さまが、私を側に置いておきたいからと、
高額なお金を出されるといふのはそういう事じゃないのですか？」

樹は目を見張って、あかりを見た。

愛人？

「樹さまの大叔父様が、

私の母親にされたように、

樹さまも、私を愛人にされるのですか？」

あかりの目から、また涙がひとつ落ちた。

樹はかぶりを振って、早口に言う。

「愛人なんて、俺はそんな風にあかりのことを…」

そこで、樹の言葉が止まった。

愛人ではないなら、一体、

俺はあかりをどう扱おうとしていたのだろうか。

この気持ちだが、単なる使用人などに対するものではないのは、もう重々悟っていた。

けれど、以前薫に責められたように、あかりの事を、自分の婚姻の相手として考えていないのも、事実だった。

薫が言っていたように、自分たちが属している社交界というのは、一般の煌びやかなイメージとは程遠い、お互いの足の引つ張り合い、打算的な様子伺い、有閑な金持ちの、ストレス発散のための場だというのが、本性だったりする。

もし、自分が妻を娶るとしたのなら、妻は必ずそういう場所に、樹いっしゅと出るようになるのだ。もしくは、樹いっしゅが出られない時には、妻が一人でも出向くしかない。

今まで実際に想像はしたことが無かったけれど、一瞬、考えただけであかりには無理だと樹いっしゅは悟った。

こういう差別的な言葉を使うのは、正直、樹いっしゅは自分でも嫌悪なのだけれど、あかりは、あまりにも育った環境、いわゆる家柄、身分が、自分の属する社交界に出るには低すぎるのだ。

社交界のくだらない面々は、身分や家柄だけで、その人物の人格を判断する。特に、有閑な金持ちの夫人達がそういう傾向が顕著だった。

もし、自分が万が一あかりを妻にしても、使用人上がりのあかりは、周りの夫人達に傷つけられ、いつか、潰されてしまふに違いない。

そんな事は、樹は絶対、あかりにはさせたくなかった。

かといって、では、自分はあかりを愛人にするのか。

樹とあかりの間に、沈黙が流れる。

樹が口を開いて、かすれた声で言った。

「あかりは、俺が嫌いか？」

主従という意味ではなく、その…異性として「その言葉に、

樹が示した裏の意味を感じ取ったあかりは、

またぼろりと涙を流した。

「初めて出会った時から、

あの木の上から樹さまをお見かけした時から、

私は、ずっとずっと樹さまの事をお慕いしてました」

「それなら」

樹が言葉を濁して呟くと、

あかりに近寄って、またその手を握る。

「だからこそ」

あかりは涙を一杯ためた目で、樹を見ると、

しっかりとした口調で言った。

「かつて、母と樹さまの大叔父様が、

人目につかずに会っていたような関係ではなく、

正々堂々と、私は、樹さまと一緒にいたいのです」

あかりの言葉に、樹は黙った。

樹にしても、

やはり、同じような気持ちだったのだ。

誰にも干渉されず、

ただ、二人の時間を持ちたいのだ。

なんの非難もしがらみもなく。

それが、理想だった。

「私の足は思ったよりも重傷で、

完治するには、相当の時間がかかりそうです。

その後、海道家に誠心誠意仕えるつもりなので、
しばらく、樹さまにお会いする事も叶わないでしょう」

樹は絶句していた。

何をどうすれば、あかりを失わずに済むのか。
樹には、もう手段が分からなかった。

「でも、やっぱり私は」

あかりの声は、今は泣き声になっている。

「樹さまの元に帰りたいたと、

しばらくの間は叶わなくても、

いつかは戻りたいと思ってしまうのです」

「いつでも戻って来い、あかり。

俺には、お前が必要なんだ」

樹も青ざめた表情で、必死にあかりに訴える。

「でも、愛人はいや！」

あかりは叫ぶように言った。
樹が息を飲む。

しばらくの沈黙の後、

あかりが静かな口調に戻って言う。

「樹さま、ご結婚なさって下さい。

そして、奥様との間に二世を設けて下さい。

そうしたら、私は乳母として一之瀬の家に戻ります」

樹は目を見開いて、あかりを見た。

俺に、他の女と一緒になれと言うのか。

そして、あかりから目をそらす。

あかりを自分の妻には出来ないと思ったさっき思ったのは、自分なのだ。

「結婚をして、子供を作れば、

あかりは戻ってくるのか」

言っている自分の言葉は、

口の中でまるで砂のように違和感を生んでいる。

「はい、お約束します」

あかりは頷くと、樹を見て言った。

「そうしたら、あかりは一生、

俺の側にいるのか」

樹が絶望的な決心で、あかりに訊く。

「はい」

あかりもその樹の視線に真っ直ぐに答えて、
頷いた。

「分かった」

樹は言うど、あかりの手から自分の手を離した。

しばらく、そのまま、

二人はお互いから視線を逸らして黙っている。

「あかり、頼みがある」

ふと、樹いっきが言う。

あかりは顔を上げて、樹いっきを見た。

「どうしました？」

樹いっきはあかりを強い視線で見ると、

「次に、俺とあかりが主人と乳母で再会したら、

もう、俺はあかりには触れられないだろう」

愛人すらも嫌がったあかりが、

自分の子供の乳母になるとしたら、

自分とあかりの関係が、

単なる使用人と主人の關係に終始するのは目に見えている。

それに、結婚相手の妻の手前もあるだろう。

「あかり、口づけしていいか」

樹いっきがぼそりと言った。

瞬間、

いつか、一回だけされた樹いっきの口づけを思い出して、

あかりの頬が染まった。

「恋人へのキス」テーマでの亨の写真のモデルをしていた頃、
樹いっきに口づけをされたのだった。

その時は、戸惑って樹いっきを押しつけたけれど、
決して嫌では無かった。

あかりは小さく頷いた。

樹がベッドの端に浅く腰をかけ、
あかりの首に手を回す。
そして、ゆっくりとあかりの唇に自分の唇を重ねた。

どうして、自分とあかりは結ばれないのだろう。

あかりの唇の柔らかさを感じながら、
樹は、理不尽にも思う。
少なくとも、お互いは好き合っているというのに。

樹の体の奥で、
何かに火がつく。
これが欲望なのか。
樹は冷静に思った。
あかりの首を抱える手に力が入る。
ああ、こんなにも愛しいのに、
どうして、別れなければならぬのだろう。

抱きしめて抱きしめて、
壊したいくらいに、あかりが愛しかった。

樹いつきはそれまでと違う、深い口づけをする。
あかりの体がびくりと動いた。

あかりの体に力が入って強張るけれど、
いつかのように、樹いつきの体を押しつけることはしなかった。

長い間、貪るように確かめあつた後、
二人は離れた。

お互い、息を整えるのに時間がかかる。

樹いつきは俯うつむいていた。

あかりはそんな樹いつきの手をそつと触れる。

「次にお会い出来る日を」

あかりが言つと、樹いつきは顔を上げてあかりを見た。

「とても、楽しみにしています」

あかりの言葉を聞き終ると、

何も言わずに、ふらふらとあかりのベッドの脇から離れ、
樹いつきは、病室を出て行った。

あかりの目から、また涙が流れる。

樹いつきが妻を娶り、

子供まで設けるようになったとしたら、

その時こそ、もう自分の存在の必要性はないだろう。

本当に愛する妻と子供、家族を手にするれば、

今まで孤独だった、

樹いつきの心も癒されるに違いない。

本当の愛に目覚めるだろう。

そうしたら、私のような、

穴埋めの使用人などの愛情は、

樹いつきには不要になるのだ。

それが、愛人にもなれない意気地なしの庶民の自分の、
樹いつきへの、最大の愛の気遣いだった。

あかりは、もう二度と会えないだろう樹いつきを思っ
て、声を殺して、ただ涙を流していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3699r/>

B・E

2011年10月26日01時01分発行